

The
MINISTRY OF HEALING

(ミニストリー・オブ・ヒーリング)

イー・ジー・ホワイ特著

福音社編集部訳

はしがき

世界は病んでいる。人の子らの住むところはどこも苦難に満ちている。どの国も、医学と外科医術の進歩にかかわらず、病気が増えている。結核は幾百万の人々を倒し、悪性の病気が人々を苦しめ、その他の多くの病気が体格をそこない、体力を弱めている。どちらを向いても人々が救いを求めている。

人類が苦痛の重荷でおしつぶされ、病氣のために人の活動がにぶり、力が衰え、寿命が短くなることは、創造主のみこころではない。だが生命を支配するために神が設けられた法則は甚しくふみにじられ、罪は心にはいり、人は生命と健康の本源である神によりたのおことを忘れている。この背反の罰として伴うのが苦痛と病氣と死である。身体を支配する肉体的な法則を理解し、生活の習慣をこうした法則に一致させることが最も重要な義務である。眞の幸福に役立つ多くの要因すなわち楽しい家庭、生活の法則への服従、人間同志の正しい関係などについて、理解する必要がある。

病氣になったら、自然の力と協力して、からだをつくり、健康を回復するのにいろいろな方法を用いることが大切である。

さらにもっと大きな、もっと重要な問題がある。それは初めに人間に生命を与え、人の幸福の永続のためにあらゆる用意をし、今日も人の幸福に関心を持つておられる創造主とわれわれとの関係である。

人生の実際問題に広い経験を持ち、特にまれな洞察力と知識に恵まれた一婦人が、著者として本書の中に、生命とその法則、健康とその必要条件、病気とその治療、魂の病気とギレアデのいやしの香油について、父母、男女、専門家、一般人を問わず、だれでも理解のできる広い知識を提供している。

この本は明瞭で単純な、美しいことばで書かれており、学ぶ者に教訓を、落胆している者に望みを、病める者に励ましを、疲れた者に休息を与えてくれる。過去幾十年にわたって、この本は多くの国々において世界の幾つかの主要な言語で出版を重ね、幾百万の人々に有益な助言を与えてきた。

さらによい道を示し、「受けるよりも与える方がさいわいである」ところの有用な奉仕をする余地のある、よろこびに満ちた、もっと単純でもっと美しい生活を明らかにしてくれるこの書物が、その使命を十分に達成するようというのが、関係者一同の、心からなる願いである。

エレン・G・ホワイト著書刊行会

目次

第一部	真の医事伝道者	
第一章	わたしたちの模範	3
第二章	奉仕の日々	12
第三章	自然および神と共に	29
第四章	信仰による接触	34
第五章	心のいやし	48
第六章	奉仕のために救われる	66
第二部	医者の働き	
第七章	神と人との協力	81

第八章	教育者としての医者・	95
-----	------------	----

第三部 医事伝道者とその働き

第九章	教えといやし・	111
第一〇章	誘惑された者を助ける・	135
第十一章	不節制な人に対する働き・	146
第十二章	失業者や家がない人への助け・	159
第十三章	無力な貧困者・	178
第十四章	富める者に対する働き・	187

第四部 病人の取り扱い

第五章	病室において・	197
第六章	病人のための祈り・	202
第七章	治療法の応用・	212
第八章	精神療法・	218
第九章	自然との接触・	240

第五部 健康の法則

第二〇章 一般衛生・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・247

第二一章 イスラエル民族の衛生・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・253

第二二章 衣服・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・264

第二三章 食事と健康・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・273

第二四章 食物としての肉類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・287

第二五章 極端な食事・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・293

第二六章 刺激物と催眠剤・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・298

第二七章 酒類の売買とその製造販売禁止・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・309

第六部 家庭

第二八章 家庭の奉仕・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・323

第二九章 家庭を築く者・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・329

第三〇章 家庭の選択と準備・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・336

第三一章 母・・・342

第三二章	子 供 ・ ・ ・ ・ ・	349
第三三章	家 庭 の 感 化 ・ ・ ・ ・ ・	358
第三四章	真の教育は伝道者の養成 ・ ・ ・ ・ ・	364

第七部 重要な知識

第三五章	神に関する真の知識 ・ ・ ・ ・ ・	381
第三六章	思索的知識の危険性 ・ ・ ・ ・ ・	403
第三七章	教 育 の 真 偽 ・ ・ ・ ・ ・	420
第三八章	真の知識を求めることの重要性 ・ ・ ・ ・ ・	433
第三九章	神の言葉を通して受ける知識 ・ ・ ・ ・ ・	441

第八部 働き人に必要なこと

第四〇章	日 常 生 活 の 助 け ・ ・ ・ ・ ・	453
第四一章	人 と の 接 触 に ・ ・ ・ ・ ・	467
第四二章	成 長 と 奉 仕 ・ ・ ・ ・ ・	483
第四三章	さらに高度な体験 ・ ・ ・ ・ ・	490

第一部

真の医事伝道者

第一章 わたしたちの模範

わたしたちの主イエス・キリストは人類の必要に応じられるために倦むことのないしもべとしてこの世においでになった。彼は人類のすべての必要に奉仕なさるために、「わたしたちのわずらいを身に受け、わたしたちの病を負」われた(マタイ八ノ一七)。すなわち、病気の重荷とあわれな状態と罪を除くために、キリストはこられたのである。人類を完全に回復することが彼の使命であつた。彼は、健康と平安と完全な品性を与えるためにおいでになったのである。

彼に助けを求めてきた人々の境遇や要求は種々さまざまだったが、助けを受けないで帰つた者はひとりもなかった。人々は、キリストから流れ出るいやしの力のおかげで、からだも頭も心も健康にもらった。

救い主の働きは時間や場所に制限されなかった。彼のあわれみは無限であつた。そのいやしと教えのわざはあまりに大きかつたので、集まって来る群衆を収容できるほどの大きな建物はパレスチナになかつた。ガリラヤの緑の丘、人の行きかう大路、あるいは海辺、あるいは会堂、その他どんなところでも病人のつれてこられる場所が、彼の病院となった。彼は自分の通るすべての町々村々で病人に手を置いておいやしになった。そして、彼の言葉を喜

んで受け入れる人々があると、いつも天父の愛の確証をもって、彼らを慰められた。一日中彼は、ご自分のもとに来る人々に奉仕し、夕には、昼間労働して家族をささえる、わずかの糧を得なければならぬ人々のためにつくされた。イエスは人類救済という大きな重荷を負っておられた。人類の主義や目的に決定的な変化がなければ、すべてのものが滅びてしまうことを知っておられた。これが彼の心の重荷だったが、彼の上に負わされたこの重荷を理解できる者はだれもなかった。またキリストは、子供のときも、青年時代も、そして成人してからもひとりの生活を送られたのであるが、だれでも彼と一しよにいるとき、天国のような感じを受けた。なおキリストは、試練、誘惑にも日々遭遇なされ、悪と接触なされるたびに、自分が祝し救ってやりたいと願っておられた人々の上に、悪の力が働いているのをごらんになった。しかしけっして、負けたり失望したりなさらなかった。

何事にもキリストはご自分の使命のために、みずからの欲望をきびしくおさえられた。彼は父のみこころにすべてを従わせることによって、ご自分の生涯をりっぱなものになされた。少年のころ、イエスがラビの学校にあられるのを母がみつけて、「どうしてこんな事をしてくれたのです」と言うと、彼は答えて、「どうしてお捜しになったのですか。わたしが自分の父の家にいるはずのことを、ご存じなかったのですか」とお答えになった。この答こそ、彼の一生の働きの基調であった（ルカ二四八、四九）。

キリストの一生は絶えざる自己犠牲の一生であった。親切な友人たちが旅びとしての彼のために備えた所以外には、彼の家はこの地上のどこにも見あたらなかった。彼はわたしたちのために最も貧しい生涯を送り、貧しい者や苦しい者の間で生活し、また働くためにおいでになったのである。それほどお尽しになった人々の間にあって彼

は認められず、とうとばれずに生活なされた。

彼はいつも忍耐強く、快活であられたから、病める人々は、彼を生命と平安の使者と称賛した。彼は男や女や、子供や青年の必要をござらんになって、「わたしのものにきなさい」とお招きになった。

彼の伝道生涯においては、説教よりも、病人をいやすために多くの時間が費された。その奇跡は、滅ぼすためではなく、救うためにきたのだとの彼の言葉の真実さを証明している。彼があいになる所では至るところで、彼のいくしき深いことがうわさされた。そして彼がお通りになった場所では、その憐みを受けた人々が健康に喜び、新たに得た力を自分たちで試してみていた。主がなさったみわざを彼らの口から聞くために、その周囲には群衆が集まった。キリストのみ声は多くの者が耳にした最初の声であり、そのみ名は彼らの語った最初の言葉であり、そのみ顔は彼らが見た最初の顔であったが、どうして彼らはイエスを愛し、賛美しないでいられようか。町や都市を通り過ぎていかれるとき、さながら彼は、生命と喜びをまきちらす生きた流れのようであった。

「ゼブルンの地、ナフタリの地、

海に沿う地方、ヨルダンの向こうの地、

異邦人のガリラヤ、

暗黒の中に住んでいる民は大いなる光を見、

死の地、死の陰に住んでいる人々に、

光がのぼった」(マタイ四ノ一五、一六)。

救い主はいやしの働きをなさるたびに、それを人々の頭と心に神の原則を植えつける機会となさった。このことに彼の働きの目的があつた。彼が世的な祝福をお与えになつたのも、人々の心に、その恵みの福音を受けやすくさせるためであつた。

キリストは、ユダヤ王国の教師の中で、最高の地位をお占めになることもできたが、むしろ貧しい人々に福音をのべ伝えることをご自身でえられたのであつた。大路、小路にいる人々に真理の言葉を聞かせるために、彼はここかしこへと行かれた。海べに、山腹に、街路に、会堂に、聖書を説明なさる声がひびいた。また彼は、異邦人にも、この言葉を伝えたいとお考えになつて、宮の外庭でたびたびお教えになつた。

キリストの教えは、学者やパリサイ人による聖書の説明とあまりに異なつていたので、人々の注意をひいた。ラビたちは、伝説や人間の理論をくどくどとのべ、聖書に関して人が教えたり書いたりしたことをしばしば聖句そのものの代りに用いた。しかし、キリストの教えの主題は神のみ言葉であつた。彼は「…と書いてある」「聖書はなんと云つてゐるか」「あなたはどうか読むか」などの簡単明りような言葉で質問者にお答えになつていかれた。そして友にも敵にも興味のおこつた場合には、つねにみ言葉をお示しになつた。彼は明りように力づくよく福音をおのべになつた。そのみ言葉は父祖や預言者たちの教えに光を投げ、聖書は人々にとって新たな啓示となつた。それまで聴衆は、それほどまでに神のみ言葉について深い意義を悟つていなかった。

キリストのような伝道者は、まだ一度も現われたことがなかった。彼は天の王であられたのに、人々のいるところに行つて彼らに接するために、へりくだつて人性をお取りになつた。富める者にも、貧しき者にも、自由な者に

も、縛られた者にも、すべての人にとって契約の使者であるキリストは、救いの音信をたずさえてこられたのである。大治癒者としての名声はパレスチナ全体にひろがった。病人は助けを求めようと、キリストのお通りになるところに来た。また彼のみ言葉を聞き、み手にふれるために、多くの者が熱心に集まってきた。こうして彼は、町から町へ、村から村へ福音をのべ伝え、病人をいやして歩かれたが、それは貧しい人間の姿をした栄光の王だったのである。

彼は、ユダヤの国の大祭においてになって、外面的な儀式に夢中になっている群衆に向かって、天のことを語り、彼らに永遠を思わせるようになさった。すべての者に、彼は知恵の倉から宝をおあたえになった。そうした人々が必ず理解できるように単純な言葉だけお語りになった。彼は独特な方法ですべての悲しむ者や悩む者をお助けになった。彼はやさしく、ていねいなしとかさで罪に悩む人々に奉仕し、いやしと力をお与えになった。

最高の教師であるキリストは、人々が最も親しんでいる事物を通して、彼らの心にふれるように努力なさった。そして真理がいつも最も神聖な思い出や感情と結びつくようにお教えになった。また人々の興味や幸福が同時に、キリストの興味や幸福であることに、みなが感ずくようにお教えになった。彼の教えは単刀直入であり、その例証は適切であり、その言葉は同情深く、明快だったので、聴衆はひきつけられた。彼が貧しい者にお話しになったときの単純さと熱心さは、その一語一語を神聖にした。

キリストはなんと忙しい生活をお送りになったことだろう。毎日、貧しい者や、悲しむ者の伏せ屋を訪れて、絶望した者に希望をお語りになり、悩む者には平安をおあたえになった。彼は恵み深く、やさしく、また、あわれみ

ぶかい心で、悲しみに沈んだ者を元気づけ、嘆く者を慰めてお歩きになった。そして、行くさきざきいたる所で祝福をお与えになった。

彼は貧しい人々のためにお尽しになる一方、金持の人々の心にも接近する方法をお学びになった。このため裕福な教育のあるパリサイ人や、ユダヤの貴族や、ローマの総督にも交際をお求めになった。また、彼らの招待をうけ、宴会にも出席なさりなどして、人々の興味と職業を親しくご存じになると共に彼らに近づいて、不滅の富をお示しになった。

キリストは人間が天から力を受けてはじめて、けがれない生涯が送られるのだということを示すために、この世においでになったのである。そして不屈の忍耐と同情をもって人々を助け、彼らの必要を満たされた。彼はやさしい手をもって人の心から不安や疑惑を一掃し、敵意を愛に、不信を信頼にお変えになった。

彼はみこころにかなう人々に「わたしについてきなさい」と仰せになることができ、そう言われた者は、立つて彼に従った。彼のみ声が発せられると、この世の魅力は打ち破られ、貪欲と野心的な精神は彼らの心から逃げ去った。こうして人々は自由の身となり、救い主に従うために立ち上がった。

兄弟の愛

キリストは、国や階級や信条の相違をお認めにならなかった。学者やパリサイ人は、天の賜物を一国民に限られた特権とし、世界の各地にいる神の他の家族を除外しようとした。しかしキリストは、いつさいの隔ての壁をこわ

すためにおいでになった。彼は、神の憐みと愛の賜物が、空気や光や、また地を爽快にする雨のように、制限されるべきでないことを示すためにおいでになったのである。

キリストの生涯によって、階級に差別のない宗教が確立された。それはユダヤ人も異邦人も自主も奴隷も、同じ兄弟として結びつけ、神の前に平等にする宗教であった。どんな社会政策も、彼の運動に影響を及ぼすことはできなかった。彼は隣人も旅人も、友も敵も区別なさらなかった。彼の心をひきつけるものは、生命の水につえかわく魂であった。

彼は、どんな人間も無価値な者として見過ごしにすることなく、すべての人をいやそうとなさった。そしてどんな人々の間にあっても、その時の事情に適切な教訓をお与えになった。人間同志が示すあらゆる冷淡さや侮辱は、ただ彼に、神および人としてのキリストの同情を彼らが要していることを感じさせるだけであった。彼は最も粗野な絶望的な人々にも、彼らがきずなくけがれなき者となり、神の子らしい品性に到達しうるとの確証を与えて、望みをおこさせようと努力なされた。

彼は、しばしばサタンの自由にされて墮落し、そのわなからぬけ出る力のない人々にお会いになった。このように失望し、病気にかかり、あるいは誘惑され、墮落した人たちに、キリストは、非常にやさしいあわれみの言葉をおかけになったが、それは彼らが最も必要としまだよく理解できる言葉であった。彼はまた魂の敵と一騎打ちをしている人々にもお会いになったが、これらの人々には神の使者たちが味方となり、勝利させてもらえるから確かに勝てる保証なされて、忍耐するように励まされた。

その同情と親切なまじわりは、彼が人間の真価を認めておられることを示したので、彼は取税人の食卓に名誉の客としてお招かれになった。そして人々は自分たちも信頼に足る者になりたいと思った。これらのかわいた心に、キリストのみ言葉は、祝福と生命力を与えた。そこには新たな感情が呼びさまされ、社会から捨てられたこれらの人々に、新たな生命に入ることのできる道が開かれた。

彼はユダヤ人だったが、サマリヤ人と自由にまじわり、ユダヤ国のパリサイ的な習慣を無視なされた。彼はパリサイ人の偏見をおそれず、この軽蔑された人種からもてなしをお受けになった。サマリヤの屋根の下で共に眠り、その手でつくられ、出された食物を共に召しあがった。また彼らの町で教え、できるかぎり親切にしていねいに彼らを扱われた。そして人間的な同情のきずなで、彼らの心をご自分にひきつけると共に、天来の恩恵によってユダヤ人の拒否した救いを、彼らにもたらされたのである。

個人的奉仕

キリストは救いの福音を伝える機会をおろそかなさなかった。サマリヤの女に対する彼の驚くべき言葉を聞かれよ。この女が水をくみにきたとき、彼はヤコブの井戸のかたわらにすわっておられた。そして彼女が驚かずにいらなかったのは、「水を飲ませてください」と仰せになって、その好意をお求めになったことである。彼は冷たい水をお飲みになりたかった。が、同時に、生命の水を彼女に与えようとして、これが糸口にもなればと望まれた。「あなたはユダヤ人でありながら、どうして、サマリヤの女のわたしに飲ませてくれとおっしゃるのですか」

とたずねた。イエスは答えて「もしあなたが神の賜物のことを知り、また、『水を飲ませてくれ』と言った者が、だれであるか知っていたならば、あなたの方から願い出て、その人から生ける水をもらったことであろう―この水を飲む者はだれでも、またかわくであろう。しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」と仰せになった(ヨハネ四ノ一〇、一三、一四)。

このひとりの女に対して、キリストはどんなに大きな興味をお示しになったことだろう。彼の言葉はなんと熱心で雄弁だったことだろう。これらの言葉を聞いて女は水がめをそこにおいて町に行き、知人らに「わたしのしたことなにもかも、言いあてた人がいます。さあ、見にきてごらんさい。もしかしたら、この人がキリストかも知れません」と告げた(ヨハネ四ノ二九)。「この町からきた多くのサマリヤ人は、イエスを信じた」と書かれている。それから後、今日に至るまで、これらのみ言葉が魂の救いのために及ぼした影響をだれが計り得るであろう。

真理を受け入れるように心の開かれている所では、直ちに教えようとして、キリストは待つておられる。彼はみ父を示し、心を読みたもうその神に受け入れられる奉仕をお教えになるのである。彼はこのような人には、たとえをお語りにならない。井戸で女に語られたように、「なんじと語る我はそれなり」と彼らに仰せになるのである。

第二章 奉仕の日々

カペナウムの漁師の家では、ペテロの外姑が「高い熱」を病んで休んでいたので、「人々はさっそく、そのことをイエスに知ら」せた。そこでイエスが「その手にさわられると、熱が」引き、彼女は起きて、イエスとその弟子に仕えた。

このうわさはたちまち広がった。その奇跡は安息日に行われたが、人々はラビを恐れて、日没までいやしてもらいにこなかった。日か暮れると、家や店や市場から、町の人々がイエスの泊まっておられた粗末な家に押し寄せた。病人は担架にかつがれ、つえにすぎり、或は友人にささえられて、よろめきながら救い主の前に集まってきた。

いやし主が明日も彼らの間にいましたもうかどうかはだれにもわからなかったので、人々は次から次へとたえずきてはまた帰って行った。カペナウムにこんな日があったことはかつてなかった。大気は勝利の声と救いの歌声に満ちた。

イエスは最後の病人がいやされるまで、その働きをおやめにならなかった。群衆が去ったのは、夜も既にふけてからで、やっとシモンの家にも静けさが訪れた。長いそうぞうしい一日がすぎて、イエスはお休みになった。しか

し町が眠りに包まれているころ、救い主は「朝はやく、夜の明けるよほど前に、イエスは起きて寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた」(マルコ一ノ三五)。

早朝、ペテロとその友人がイエスのもとにきて、カペナウムの人々がすでにイエスをたずねてきていることをつけた。するとおどろいたことに、彼らはイエスが「わたしは、ほかの町々にも神の国の福音をのべ伝えねばならない。自分はそのためにつかわれたのである」と仰せられるのを聞いた(ルカ四ノ四三)。

カペナウムの町はあまりに興奮していて、キリストの使命の目的が見失われるおそれがあった。イエスは単に奇跡を行う者とか、肉体の病をいやす者として、人々の注意をひくだけでは、満足なさらなかった。彼は、人々の注意を救い主としてのご自分にひきつけようと努力しておられた。人々は、キリストがこの世の国を建てる王としてこられたのだと熱心に信じようとしたが、イエスは彼らの心を世的なものから、霊的なものへと向けるように望まれた。単なる世的の成功はその働きを妨げるのだった。

不注意な群衆の驚きはキリストの心を痛めた。彼のご生涯には、少しも自我の主張ということがなかった。社会が地位や富や、才能に払う敬意は人の子キリストにとっては無縁なものだった。忠節を尽させ他を服従させるために人間の用いる手段は一つも用いられなかった。キリストについては、その降誕の幾世紀も前に預言されていた。「彼は叫ぶことなく、声をあげることなく、その声をちまたに聞えさせず、また傷ついた葦を折ることなく、ほのぐらい灯心を消すことなく、真実をもって道をしめす」(イザヤ書四二ノ二、三)。

パリサイ人は、儀式を綿密に行い、礼拝と慈善行為を誇示して栄譽を得ようとした。また宗教を論争の話題とす

ることによって、宗教に対する熱意を証明した。相反する教派間の論争がそうぞうしく長時間続いたり、学識のある法学博士が怒声をあげて争論している声を街路で耳にするのはめずらしいことではなかった。

イエスの生涯はこうしたすべてのものと非常な相違を示し、その生涯には一度として騒がしい争論も、はでな礼拝も、人に称賛されるための行為も見られなかった。キリストは神の中にかくれ、そのみ子の品性の中には神があらわされていた。彼はこの啓示に人々の心を向けようと望まれた。

義の太陽キリストは、栄光をもって、人々の目をくらませるように、世界に照りいでたのではない。キリストについて「主はあしたの光のように必ず現われいで」と書かれているが、朝の光は静かに、なごやかに地に照り出て、暗きを追いつけて世界を生命へとめざめさせるのである(ホセア書六ノ三)。そのように義の太陽も「その翼にはいやす力をそなえて」のぼったのである(マラキ書四ノ二)。

「わたしの支持するわがしもべ、わたしの喜ぶわが選び人を見よ」(イザヤ書四二ノ一)。「あなたは貧しい者のとりでとなり、乏しい者の悩みのときのとりでとなり、あらしをさける避け所となり、熱さをさける陰となられた」(イザヤ書二五ノ四)。

「天を創造してこれをのべ、地とそれに生ずるものをひらき、その上の民に息を与え、その中を歩む者に霊を与えられる主なる神はこう言われる、『主なるわたしは正義をもってあなたを召した。わたしはあなたの手を取り、あなたを守った。わたしはあなたの民の契約とし、もろもろの国人の光として与え、盲人の目を開き、囚人を地下の獄屋から出し、暗きに座する者を獄屋から出させる』」(イザヤ四二ノ五―七)。

「わたしは目しいを彼らのまだ知らない大路に行かせ、まだ知らない道に導き、暗きをその前に光とし、高低のある所を平らにする。わたしはこれらの事を行って彼らを捨てない」(イザヤ書四二ノ一六)。

「主におかたて新しき歌をうたえ。地の果から主をほめたたえよ。海とそこに満ちるもの、海沿いの国々とそれに住む者とは鳴りどよめ。荒ら野とその中のもろもろの町と、ケダルびとの住むもろの村里は声をあげよ。セラの民は喜びうたえ。山の頂から呼ばわり叫べ。栄光を主に帰し、その誉を海沿いの国々で語り告げよ」(イザヤ書四二ノ一〇ー一二)。

「天よ、歌え、主がこの事をなされたから。地の深き所よ、呼ばわれ。もろもろの山よ、林およびその中のもろもろの木よ、声を放って歌え。主はヤコブをあがない、イスラエルのうちに栄光をあらわされたから」(イザヤ書四四ノ二三)。

彼は「その栄光を現わされた。そして弟子

たちはイエスを信じた」 (ヨハネ二ノ一一)

バプテスマのヨハネは救い主の働きについて失望し、悩みながらも、ヘロデの土牢の中からイエスの行動を見守り待っていたが、自分の弟子ふたりをイエスのもとにやって、「『きたるべきかた』はあなたなのですか。それともほかにだれかを待つべきでしょうか」とたずねた(マタイ一ノ三)。救い主はその弟子の質問にすぐにはお答えにならなかった。イエスがお答えにならないので、不思議に思っ、彼らがたずんでいると病人たちがイエスのもとに集まってきた。大治癒者の声はつんぼの耳をつらぬき、そのひと言葉で、あるいはそのみ手の一ふれで盲

者の目は開け日の光を見、自然のけしきや友の顔や救い主の顔を仰ぐことができた。死の床にある者の耳にそのみ声がひびくと、彼らは健康と活気にみちて起き上がるのだった。悪鬼につかれた者も、キリストのみ言葉に従い、正気にかえり彼を拝した。汚れた人間と、ラビたちに閉めだされていた貧しい農夫や労働者たちも彼の周囲に集まってきたが、イエスは那些人々に永遠の生命のみ言葉をお語りになった。

こうしてヨハネの弟子たちは、これらすべてのことを見聞きしながらその日は終わったが、最後にイエスは彼らをお呼びになり、その見た事、聞いた事をヨハネに告げるようにお命じになり、さらに言葉を加えて、「わたしにまずかない者は、さいわいである」と仰せになった(マタイ一ノ六)。弟子たちはその伝言をヨハネに伝えたが、それだけでヨハネには十分だった。

ヨハネはメシヤに関して、「主なる神の霊がわたしに臨んだ。これは主がわたしに油を注いで、貧しい者に福音をのべ伝えることをゆだね、わたしをつかわして心のいためる者をいやし、捕われ人に放免をつげ、しばられている者に解放を告げ、主の恵みの年と、われわれの神の報復の日とを告げさせ、また、すべての悲しむ者を慰め」とある預言を思い起した(イザヤ書六一ノ一、二)。ナザレのイエスこそ約束されたメシヤであった。その神性の証拠は苦しんでいる人に対する彼の奉仕にあらわれ、その栄光は彼がわたしたちのような低い人間の状態にまでへりくだられたことによって示されたのである。

キリストが行われたことは、彼がメシヤであることを語るばかりでなく、その王国がどんな方法で建設されるかを示した。ヨハネは、エリヤが荒野で「大きな強い風が吹き、山を裂き、岩を砕いた。しかし主は風の中におられ

なかった。風の後地震があったが、地震の中にも主はあらなかった。地震の後に火があったが、火の中にも主はあられず、火の後に小さい声で、預言者にお語りになったときに与えられたのと同じ真理を示された（列王紀上一九ノ一、一二）。

イエスもまた、王位と王国をくつがえしたり、外見的にはでに仕事をなさるのでなく、なさけ深い自己犠牲の生活によって人の心に語り、そのみわざを果さなければならなかった。

神の国は目だつような外観をもって現われるのではない。それは、神のみ言葉の静かな感動や心の中の聖霊の働きや魂とその生命であるキリストとのまじわりによって来るのである。人間の性質がキリストの完全な品性と同じようになるときに、神の国の力の最高のあらわれがみられるのである。

キリストのしもべたちは世の光とならねばならないが、神は、光を輝かすように努力せよとは、命じておられない。神は、おのれのすぐれた善を誇示しようとするうぬぼれた努力をおよこびにはならない。神は信者たちの心が、天の性質でみたされ、そのために、彼らが社会と接するとき心の中にある光が表われるようにと望んでおられる。生活のすべての行動にあらわれた不変の誠実さによって光は輝くのである。

富も地位も、高価な設備や建築物や装飾も、神のみわざの進展になくてならないものではない。また人々の称賛を得たり、虚栄心を満足させるような功績も必要ではない。どんなにりっぱであっても、世俗的なはなやかさは神の前に無価値である。神は目に見える一時的なものよりも、目に見えない永久的なものを尊ばれるのである。前者は後者を表現するときのみ価値がある。最高の芸術品の美しさも心の中に働く聖霊の実である品性の美には比較

にならない。

神がそのみ子をこの世に与えてくださったとき、彼は人間に不朽の富をおさずけになった。その富は、世の初めから人間がたくわえた富もこれに比較すると無に等しいような富である。キリストは永遠の昔からたくわえられていた愛をもってこの世にきたり、人々の前にお立ちになったが、その愛こそわたしたちが彼とつらなることによつて、これを受け、あらわし、人に分け与えねばならない宝である。

神の働きにおいて、人間の努力が有効となるかならぬかは、その働く人の清い信仰の程度いかんによる。すなわち生活を変化させるキリストの恵みの力をあらわすかどうかによるのである。わたしたちは世の人と異なっていない。なぜならば神がご自分の印をわたしたちにおし、ご自身の愛の品性をわたしたちの身にあらわされるからである。救い主は彼の義をもってわたしたちをおおってくださいるのである。

神はその働きに人々をお選びになるとき、財産や、学識や雄弁等をおたずねにならない。ただ「わたしの方法を教えられる程謙そんに生活しているか。そのくちびるにわたしの言葉を語らせることができるか。彼らはわたしを代表するだろうか」とおたずねになる。

神は、その霊を人の心の宮に多く入れることができればそれだけよくその人をお用いになることができる。神が承認される働きは、彼のみ姿を反映する働きである。彼に従う人々は社会に示す信認状として神の永遠に変わらない原則的な性質をもたねばならない。

彼は「そのかいなに小羊をいだき、そのふところに

入れて携えゆき」

(イザヤ書四〇ノ一一)

イエスが町の街路で人々に奉仕しておられると、病気の子や死にそうな幼児を抱いた母親等が彼の御目にとまる所までこようとして群衆をかきわけて来る。青ざめ、疲れ果て、絶望しかけてもなお決意を示している忍耐強いこれらの母親たちを想像されよ。彼らは、苦難の重荷を負って救い主を求めているのである。彼らが雑踏する群衆でおしのけられると、キリストは一步步自分の方から歩みよってそのそばまで行かれる。母親たちの心には希望がわき、イエスの深いあわれみと愛のあらわれたまなざしが自分たちにそそがれているのを見て、彼らの頬にはよろこびの涙がつたわる。

救い主が大勢の中のひとりに向かって「わたしはあなたに何をしてあげようか」と仰せになり、その信頼心をよび起されると、母親は泣きながら「主よわが子をいやしてください」と大きな願いを申し出る。キリストがその腕から幼児を受けとり、お触れになったとたんに病気はいえてしまうのである。青ざめた死の色は去り、生命が血管を流れ、筋肉は力づく。慰めや平安を与える言葉が母親にかけられ、つぎにまた同じように急迫した訴えがなされる。すると、キリストはまた生命を与える彼の力をお用いになり、こうしてすべての者は不思議なことをなさる彼をほめたたえるのだった。

わたしたちはキリストの生涯の偉大さをよく口にする。彼がなされた驚くべきことや行われた奇跡についても語

る。しかし、ささいなことに思われていることに対する彼の関心は、その偉大さを証明するさらに大きい証拠である。

ユダヤ人の中では、頭の上に手をおいて祝福してもらうために子供たちを、ラビの所につれて行くのが習慣だった。しかし、弟子たちは、救い主の働きが重大だからそんなことで手間どることはできないと思ったので、母親たちが小さい子供をイエスに祝していただきたいと思ってきたとき、いやな顔をして彼らを見た。弟子たちはその子供たちがあまり小さいので、イエスに会っても役に立たないし、イエスもおよろびにならないときめてしまったのである。しかし神のみ言葉にしたがって子供たちを教育しようとする母親たちの心労と負担を救い主は理解しておられた。キリストは母親たちの祈りをすでにおききになっておられ、ご自分から彼らをお引き寄せになった。

ある母親はその子連れて、イエスにお会いしようと家を出たが途中で一人の隣人に自分の行く目的を話したので、その人もイエスに、自分の子供を祝していただきたいと望んだ。こうして数人の母親たちが子供たちといっしょにやってきた。その中には乳児期もすぎて小児期や、青年期に達している子供もあつた。母親がその望みをのべると、イエスはその遠慮がちな願いを同情をもっておききになったが、弟子たちがその人々を、どう取り扱うかを見ておられた。そうして、弟子たちがイエスに対して親切なつもりで、その母親たちをいまして追いかえすのをごらんになったとき、弟子たちの誤りを示して、「幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国である」(マルコ一〇ノ一四)。それから子供たちを腕に抱いて手をおき、その人々の求めてきた祝福をお与えになった。

第2章 奉仕の日々

母親たちは慰められ、キリストの言葉で力づけられ、祝福されて各々の家に帰って行った。そして新たな快活さをもってその重荷を負い、希望に満ちて子供らのために働くように励まされた。

もしこのわずかな人々の後生涯がわれわれの前に展開されたならば、きっと母親たちが、その日の光景を子供たちに想起させ、救い主のやさしいお言葉をくりかえして聞かせているのを見られるだろう。またその子供たちが、後生においてこれらのみ言葉をおぼえていたためにエホバに救われたもののために定められた道から、迷わぬように、幾度か守られたのを見るだろう。

今日もキリストは、昔人々の間で生活なさったときと同じやさしい救い主である。ユダヤの国でその腕に幼児を抱かれたときのように、今も母親たちを助けてくださる。わたしたちの家庭の子供たちも昔の子供たちと同様に彼の御血によって買われたものなのである。

イエスは母親ひとりびとりの心の重荷を知っておられる。貧困と難儀と戦った母を持たれた彼は苦勞するすべての母親に同情してくださる。カナン人の女の憂いを除くために遠い道をお歩きになったキリストは、今日の母親のためにも、それだけのことをしてくださる。ナインのやもめにそのひとり息子をかえし、十字架上で苦しみながらも、ご自分の母をおぼえておられた彼は今日もなお母親の悲しみに心を動かされるのである。悲しいときや困ったときにはいつもキリストが慰めであり、助け手である。

母親はそのなやみをイエスに持って行きなさい。そこには、子供の世話をするのに、十分に助けとなる恵みの力がみいだされる。救い主の足もとに、自分の重荷をおろしたいと思うすべての母親のために門はひらかれている。

「幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい」と仰せになったキリストは、今でも幼児を祝福してもらうために連れて来るように母親たちを招いておられる。

イエスは、ご自分のもとに連れてこられた子供たちの中に、彼らが将来成人して彼の恵みの嗣子となり、その王国の民となる者のあるのをごらんになった。またその中のある者は、キリストのために殉教者となることをご存じだった。キリストは、世俗的に賢くかたくなな心をもっている大部分のおとなたちよりもこれらの子供たちの方がよるこんで、キリストのお話を聞き、救い主としてイエスを信ずることを知っておられた。彼は、子供たちを教えるときには子供たちと同じ立場に立ってお教えになった。天の王である彼は、子供たちの質問に答え、たいせつな教訓を子供たちに理解できるようにやさしくお教えになった。イエスは彼らの心に真理の種をまかれたが、それは後に芽生えて、永遠の生命にいたる実を結んだ。

子供たちが自分のもとに来るのをとどめるなとイエスが弟子たちに仰せられたとき、彼はその言葉を各時代の信者に向かって、仰せになったのである。すなわちそれは教会の役員や牧師や働き人やすべてのクリスチャンに向かって言われたのである。イエスは子供たちをご自分の方へひきよせておられるのであって、もしおとなたちがじゃまさえしなければ子供たちはわたしの方にくるのであると仰せになりたいかのように、「わたしの所に来るままにしておきなさい」とわたしたちに命じておられるのである。

キリストに似ていない品性によって、イエスについて誤った印象を人々に与えないようになさい。わたしたちの冷淡さや荒々しさによって、子供たちがイエスに近づけないようにしてはならない。あの人がいっしょなら天国は

楽しいところではなくなると子供たちに感じさせるようなことがあってはならない。宗教は子供たちにはわからないものであるかのように語ったり、あるいは子供の時代にキリストを信ずることなどは予期していないかのようにふるまってはならない。またキリスト教が暗い宗教であり、救い主を信ずるようになると、人生の楽しいものをみなすてなければならないというような、誤った印象を与えてはならない。

聖霊が子供の心に働くときはその働きに協力なさい。救い主が彼らを呼んでおられることを教え、まだ元気で若いうちに神にその身をささげるならば、それ以上に神をお喜ばせることはないということを話してきかせなさい。

親としての責任

救い主はご自分の血でお買いになった人々を、かぎりないやさしさをもってかえりみてくださるのである。彼らはキリストの愛の要求する者である。キリストは言いつくせない愛情をもって、彼らをこらんになる。キリストは最もよくしつけられた子供や愛らしい子供だけでなく、遺伝や、あるいはないがしろにされたためによくない性質を持つにいたった子供たちにも、心をおひかれになるのである。多くの親たちは、自分の子供のそうした性質に自分がどれほど責任があるかを理解していない。自分たちがそういう子供にしまったのに、その誤りの多い子供を取り扱うのにやさしさもなければ知恵もないのである。しかしイエスは、あわれみをもってこれらの子供たちをこらんになり、原因から結果をたどってお考えになる。

クリスチャンの働き人はキリストの代理となってこれらの誤りや過失の多い子供たちを救い主にひきよせること

ができる。知恵と気転で子供たちを自分の心に結びつけ、勇気と望みを与え「神の国はこのような者の国である」とその子供たちについて言われるほど、その品性がキリストの恵みによつて変化するのを見ることが出来る。

五つの小さいパンが、群衆を養う

キリストが海辺で教えておられた間、キリストと弟子たちの所へ一日中人々がむらがり集まってきた。彼らは、単純で、明りようで、心にちようどギレアデの乳膏のように感じられるキリストのいつくしみ深い言葉に耳を傾けた。神であるキリストのみ手にいやされて、病人は健康になり瀕死の者は、生気をとり戻した。その日は彼らにとつて地上が天国になったように感じられ、人々は食事をしてから、どのくらい時がたったか気がつかなかった。

日は西に沈んで行くのに、人々はまだまだたずんでいた。ついに弟子たちは、キリストの所にきて、人々をもつ歸した方がよろしいでしょうとイエスにすすめた。彼らの多くは遠くからきていて、朝から何も食べていなかった。食物を買おうと思えば周囲の町や村で買うことができたろう。しかしイエスは彼らに「食物をやりなさい」と仰せになった。それからピリポに向かつて「どこからパンを買ってきて、この人々に食べさせようか」とおっしゃった。ピリポは並いる人々を上からながめて、この大衆に、食物を与えることはいかに也不可能だと思ったので、各自がわずかずつ食しても二百デナリのパンでは足りませんと答えた。

イエスは群衆の中にどれほどの食物があるかとおたずねになった。するとアンデレが、「ここに、大麦のパン五つと、さかな二ひきとを持っている子供がいます。しかし、こんなに大ぜいの人では、それが何になりましょう」

と答えた（ヨハネ六ノ九）。イエスはそれを持って来るようにお命じになり、人々を草の上にすわらせるようにと弟子たちに仰せになった。その通りにすると、キリストは食物をとり、「天を仰いでそれを祝福し、パンをさいて弟子たちに渡された。弟子たちはそれを群衆に与えた。みんなの者は食べて満腹した。パンくずの残りを集めると、十二のかごにいっぱいになった」（マタイ一四ノ一九）。

キリストが群衆を養われたのは神の力の奇跡によるものではあったが、しかしお与えになった食物はいかにも質素だった。それはガリラヤの漁師の常食であった魚と大麦のパンにすぎなかった。

キリストは、その人々のためにぜいたくな食物をお供えになることもおできになったが、単に食欲をみたすために食物を供えたのでは、人々に益となるような教訓とはならなかった。この奇跡を通してキリストは単純の教訓を教えたいとお望みになったのである。もし今日人間が、単純な習慣を保ち、最初アダムとエバがしたように、自然の法則に調和して生活するならば、人類家族の必要を満たすのに十分な食物があるはずである。しかし利己心と食欲の放縦は一方には過剰をきたし、他方には欠乏を生じさせて、罪と悲慘を招いた。

イエスはぜいたくを求める人々の欲望を満たして、ご自分に人々をひきつけようとはなさらなかった。興奮の長い一日がすぎた後に、疲労し飢えた大群衆にとって単純な食物は、生活上の一般必要を満たしてくださる神のみ力とそのやさしい保護の確証であった。救い主は彼に従う者にこの世でぜいたくな生活をさせてやるとは約束なさらなかった。かえって貧困にかこまれるかも知れないのである。しかしその必要はみたと、キリストのみ言葉は保証している。また、この世のものよりもよい彼ご自身の臨在によって、永続性のあるなぐさめを約束していただく

さるのである。

群衆が養われた後、なおたくさんのお食物が残っていた。イエスは弟子に「すこしでもおだにならないように、パンくずのあまりを集めなさい」と命じられたが、これらのお言葉はかごに食物を入れること以上に意義を持っていた。その教訓は二重である。何一つおだにしてはならないのである。われわれはこの世の利点をのがしてはならない。人間に益となるようなことは何でもおろそかにしてはならないのである。世の飢えた人々の必要を満たすようなものは、すべて集めなさい。また同様な注意深さで、わたしたちは、心の要求を満たすために天からの食物を大切にしなければならぬ。わたしたちは神のすべてのみ言葉によって生きなければならぬのである。神が仰せになった事は何一つ失ってはならない。わたしたちの永遠の救いに関する一つのみ言葉でも、おろそかにすべきではない。一言もおなしく地に落ちてはならないのである。

このパンの奇跡は神にたよることを教える。キリストが五千人を養われたとき、食物は手近になかった。一見してキリストのお用いになれるものは何もないように見えた。しかもキリストは、女や子供を除いて五千人の人々と荒野におられたのである。彼が自分に従ってそこへ来るように群衆をお招きになったのではない。ただキリストと共に居りたい熱心さで人々は招待も命令もなしにきたのだった。しかし一日中その教えを聞いて、人々が飢え疲れしていることをイエスはご承知だった。彼らは家からは遠く離れており、夜は迫っていた。また多くは食物を買う金銭をもっていなかった。彼らのために荒野で四十日断食されたキリストは、その人々を空腹のままに家におかえしにはならなかった。

神の御摂理によって、イエスはそのような立場に置かれたのであるから、彼は必要を満たすものを与えられるように天父にお頼りになった。わたしたちは困難な立場に立たされたときに、神に頼らねばならない。あらゆる危機に当って、わたしたちは無限の資源を支配される神に助けを求めるべきである。

この奇跡において、キリストは、父から受けて弟子たちに与え、弟子たちは人々に、人々は互に分け与えた。そのようにキリストと結合するすべてのものは、生命のパンをキリストから受け、他の人々に与えるのである。キリストの弟子は、キリストと人々をつなぐために任命された器である。

彼らに「食物をやりなさい」との救い主のご命令を聞いたとき、弟子たちの心の中には、あらゆる困難が考えられた。「わたしたちは村々に行つて、食物を買ひましようか」と弟子たちはたずねたが、キリストは何と仰せになったろうか。それは「食物をやりなさい」であった。弟子たちはあるだけのものをイエスの所に持ってきたが、キリストは、それを食べなさいとは仰せにならなかった。人々に供するように弟子たちにお命じになったのである。食物はキリストのみ手の中で増し加わり、キリストに差し出された弟子たちの手は必ず満たされた。わずかな食物がすべての人に十分に足りたのである。群衆に食を与えて後、神の備えてくださったという食物を弟子たちはイエスと共にいただいた。

我々は貧しい人や無知な苦しむ人々を見ては幾度落胆するだろう。そうして自分たちの弱い力と乏しい資源がこのひどい欠乏を満たすのに何になるうと思うのである。もっと才能のある人が働きを指導するのを待とうか。あるいはまたある組織によってこの働きがなされるのを待とうか。しかしキリストは彼らに「食物をやりなさい」と仰

せになる。物資、時間、才能を使用なさい。あなたの大麦のパンをイエスの所に持って行きなさい。

あなたの資源は幾千人の人を養うに足りなくても、ひとり養うに足りるかも知れない。そしてキリストのみ手の中で、それは多くの人々を養うかも知らないのである。弟子たちのように自分にあるものをささげなさい。キリストは、その贈り物を増し加えてくださる。率直に、単純に信頼するとき、彼はこれにむくいられるのである。そうして乏しく見えた食物も豊かなご馳走となる。

「少ししかまかない者は、少ししか刈り取らず、豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる。…神はあなたがたにあらゆる恵みを豊かに与え、あなたがたをつねにすべてのことに満ち足らせ、すべての良いわざに富ませる力のあるかたなのである。

『彼は貧しい人たちに散らして与えた。その義は永遠に続くであろう』と書いてあるとおりである。種まく人に種と食べるためのパンとを備えてくださるかたは、あなたがたにも種を備え、それをふやし、そしてあなたがたの義の実を増してくださるのである。こうしてあなたがたはすべてのことに豊かになって、惜しみなく施し」(コリント第二・九ノ六―一)。

第二章 自然および神と共に

救い主の地上生活は、自然や神とのまじわりの生活であつた。そして力強い生活の秘訣を、このまじわりによってわたしたちにお示しになつたのである。

イエスは熱心で忠実な働き手であつた。彼ほど重い責任を負つた人間はまだかつてなかつたし、世の悲しみや罪のあれほど重い荷を負つたものもない。人間の益のために自己がやせおとろえるほどの熱意をもって努力したものは他になかつた。しかもキリストはいつも健康だつた。靈的にも肉体的にも、キリストは「きずも、しみもない」燔祭の小羊によつて、代表されてあられた（ペテロ第一・一ノ一九）。キリストは、すべての人間が神の律法に服従することによつて到達するように神が計画された靈肉の模範であつた。

人々は、イエスをながめて、そのみ顔に天来の憐憫と力の意識が混合しているのを見た。彼は靈的な生命の雲囲氣に包まれておられるようだった。その態度は静かでもつたいぶるところがなく、秘められてはいても全くかくしきれない力を人に感じさせた。

彼が伝道をしてあられた間、ずるく偽善的な人々が、彼の生命を求めて絶えずあとをつけていた。スパイは何かキリストに不利になるような機会をねらつては、つねに彼の行く先々でそのお言葉に注意していた。ユダヤ人の中

でも最も鋭い頭脳を持って最高の教育をうけた人々が、イエスと論争して彼を敗北させようとしたが、一度も勝つたことはなかった。かえってガリラヤの謙そんな教師によつて狼狽させられ、赤面させられて争いの場から退くのだった。キリストの教えには、人がまだ知ったことのない新鮮さと力があつたのでその敵でさえも「この人の語るように語つた者は、これまでにありませんでした」と言わずにおれなかった(ヨハネ七ノ四六)。

貧しい生活を送られたイエスの小児期は、墮落した時代の不自然な習慣によつて汚されなかった。大工の仕事台で働き、家庭生活の重荷を負い、服従と労働の教訓を学びながら、キリストは自然界の中で楽しみを見いだし、自然の神秘を理解しようと求めては知識を増して行かれた。彼は神のみ言葉を研究されたが、一番幸福なときは、働き場から離れて野にゆき、静かな谷間で瞑想したり、山腹や森の木々の間で神とまじわることでできるときだった。早朝どこか人の居ない所で、瞑想したり聖書をしらべたり、あるいは祈りをしておられることがよくあつた。また歌いながら、朝の光を迎え、感謝の歌で働く時間を愉快にし、働きに疲れた人や、失望した人に天来の喜びをお与えになつた。

伝道中もイエスは多くの時間を屋外で過ごされた。ここかしこへの彼の旅は、徒歩で行かれ、その教えの多くは戸外でなされた。弟子たちを教育なさるのにもしばしばそうぞうしい町から退いて静かな野に行かれたが、それは教えようと望まれた単純さとか、信仰とか、自己放棄の教訓と調和するからであつた。十二人が弟子として召され、また山上の垂訓が与えられたのは、ガリラヤ湖からあまり遠くないある山腹の木陰であつた。

キリストは緑したたる丘や、湖畔で青空を上に見ながら人々を自分の周囲に集めることが好きだった。ご自

身の創造したものにかこまれた所で彼は人々の思いを人工的なものから自然のものにむけることができた。自然界の生長発育によって、彼の王国の原理が示された。人間が神のものである山を見上げ、そのみ手の驚くべきみわざをながめるならば、きよい真理のとうとい教訓を学ぶことができる。こうして神なる教師の教えは、自然の事物によって後日想起させられ、知能は向上し、心は休息を見いだすはずであった。

イエスと共に働いていた弟子たちが、各々自分の家庭に帰って休むようにと主は、彼らをしばらく働きから解放なさることがよくあったが、イエスをみ働きから離そうとしてもむだだった。終日キリストは自分の所に来る人々に奉仕し、夕方あるいは早朝、天父とまじわるために、山の聖所に行かれた。

キリストはたえない働きとラビの敵意や偽りの教えとの戦いによって、全く疲れはて、彼の母や兄弟また弟子たちでさえも彼の生命が犠牲になりはしないかとおそれた。しかし、骨の折れる一日の終りに幾時間もの祈りをしてお帰りになるとき、そのみ顔には平安があり、新たな元氣と生命力が彼の全身にみなぎっているのに弟子たちは気づいた。彼は毎朝幾時間もひとりで神とまじわっては、天の光を人々にもたらされた。

休息の一時

イエスが弟子たちに人々から離れてしばらく休むがよいとお命じになったのは、弟子たちが最初の伝道旅行から帰った直後のことだった。弟子たちが福音の使者として成功した喜びに満たされて帰ってきたとき、バプテスマのヨハネがヘロデに殺されたという知らせが届き、彼らはひどい悲しみと失望におそわれた。イエスは、ヨハネを獄

中に放っておいて死なせることは弟子たちの信仰をきびしく試みるものであることをご存じだった。キリストは、あわれみ深いやさしさをもって、弟子たちの悲しそうな涙にぬれた顔をごらんになった。そして「さあ、あなたたちは、人を避けて寂しい所へ行つて、しばらく休むがよい」と仰せになったとき、彼ご自身の目にも声にも涙があった（マルコ六ノ三一）。

ガリラヤ湖の北端ベテスダの近くに、春の新緑で美しい静かな地方があり、これがイエスと弟子たちにありがたい休みの場を提供していた。彼らは船で湖水を渡つてこの場所に向かった。そこで弟子たちは、雑踏する群衆から離れて休み、パリサイ人の非難や攻撃によつてじゃまもされずに彼らはキリストのみ言葉を聞くことができた。そして主とまじわつてしばらくの時を楽しみたいと望んだのだった。

イエスがただ愛する者たちとだけで過ごされたのはつかのまだったが、そのしばらくのひとときが、彼らにとつてはどれほどとうとかつたことだろう。彼らは福音の働きについて語りあい、自分たちの働きによつて、人々の心をもつと効果的に動かすことができることなどを話しあつた。イエスが真理の宝を示されると弟子たちは、神の力によつて活気づき希望と勇気を吹きこまれた。

しかしまもなく、群衆は再びキリストを捜し求めてきた。いつもの休息の場所に行かれたものと推定して人々はキリストのあとを追つた。そこでただ一時的にでも休息を得ようとなさつたその希望もくずれてしまつたが、このよき羊飼はその清い情深いみ心の奥底に、ただこれらの落ち着かないかわいた魂に対する愛と憐憫よりほか何もお感じにならなかつた。終日キリストは人々の必要に応じて奉仕し、夕べには各自家に帰つて休むようにおかえしになった。

他を益するために全く献身した生活を送られた救い主は、たえまない活動や人間の必要に応ずることから離れて、天父と何のさまたげもなくまじわる必要を感じられた。自分についてきた群衆が去ると、キリストは山に行つてただ神とのみまじわり、これらの罪深く貧しく苦しんでいる人々のためにその魂をそそぎだして祈られるのだった。

「収穫は多いが、働き人が少ない」とイエスが弟子たちにおっしゃったとき、彼は休む間もなく苦勞して働かねばならないと仰せられたのではない。彼は、「収穫の主に願つて、その収穫のために働き人を送り出すようにしてもらいなさい」と命じられた(マタイ九ノ三八)。今日働きにつかれたキリストの働き人たちに向かつて、最初の弟子たちに仰せられたのと同じように、キリストは「あなたがたは、人を避けて……しばらく休むがよい」とあわれみ深い言葉をおかけになるのである。

神に訓練されている者はすべて自分自身の心や自然や神とまじわる静かな時が必要である。彼らはこの世やその習慣や行動と調和しない生活をなすべきであつて、神のみ旨を知るには個人的な経験が必要とする。わたしたちは各自その心に、神がお語りになつてゐるのをきかねばならない。他のすべての声が静まって神の前でわたしたちが静かに待つとき、心の静けさは神のみ声をいつそう明りように聞えさせてくれる。神は「静まって、わたしこそ神であることを知れ」とお命じになる(詩篇四六ノ一〇)。神のためになすすべての働きには、これが有効な準備となる。こうして心を新たにした者は、忙しい人々の間にあつてもまた、人生のはげしい活動の中にあつても、光と平安の雰囲気にかこまれる。そうして体力も精神力も、新たな力を増し加えられる。その生活はよいかおりを放ち、人々の心を感動させる神の力を表わすのである。

第四章 信仰による接触

「み衣にさわりさえすれば、なおしていただけるだろう」(マタイ九ノ二一)。この言葉を語ったのは十二年間もわずらい、そのために自分の生涯を重荷にしていたあわれなひとりの婦人であった。彼女はすべての資産を医者や治療に費したあげく、回復の見込みがないと宣告された。しかし大治療者イエスのことをきいて、その希望が再び甦ったのである。そして「もしキリストとお話ができるくらいの所まで近よることができさえしたら、いやされるかも知れない」と思った。

キリストは、娘をいやしてくださいと頼みにきたユダヤのラビ、ヤイロの家に行かれる途上だった。「わたしの幼いむすめが死にかかっています。どうぞ、その子がおつて助かりますように、おいでになって、手を置いてやってください」(マルコ五ノ二三)、との悲しみにくだかれた嘆願は、やさしい同情深いキリストのみ心に触れ、キリストはただちに宰といっしょに彼の家に向かわれた。

群衆がキリストのまわりにおし寄せて来るので、みんなは徐々にしか進めなかった。救い主は群衆の中をお通りになって、病気の婦人の立っている所に近づいて来られた。女は幾度かキリストに近よううとして努力はしたが、

むだった。しかし今や彼女に好機がおとずれた。ただ彼女はキリストにどう話しかけてよいかわからず、またそのおそい歩みをさまたげたくはなかった。しかしキリストのみ衣にふれるといやされるということをきいていたので、自分がある唯一の機会をのがすのを恐れて、彼女は「み衣にでもさわれば、なおしていただけるだろう」と言いながら前に進んだ。

キリストは彼女の心のすべての思いをご存じだったので、彼女が立っていた所に自分から近寄って来られた。キリストはその女の大きな必要をみとめて、彼女が信仰を働かせるのを助けられた。

キリストが行き過ぎようとなさったとき、彼女は手をのばしてやっとそのみ衣のすそにふれた。そのとたんに彼女は自分がいやされたことを知った。その一触には彼女の命がけの信仰が集中されていたので、直ちに彼女の痛みも病弱も消えてしまった。その瞬間彼女は、ちょうど電流がからだのすみずみまで通ったかのように感じ、完全な健康を感じたのである。「病気がなおったことを、その身に感じた」(マルコ五ノ二九)。

感謝にあふれたこの女は、長い十二年間医者がしたことよりも多くのことを、その一触で自分にしてくださった大治癒者に自分の感謝を表現したいと思ったが、その勇気がなかった。心に感謝しながら群衆の中から退こうとしたとき、突然イエスは立ち止り、周囲をのぞき込んで、「わたしの着物にさわったのはだれか」とたずねられた。ペテロはおどろいてイエスを見上げ、「先生、群衆があなたを取り囲んで、ひしめき合っているのです」と答えた(ルカ八ノ四五)。

イエスは「だれかがわたしにさわった。力がわたしから出て行ったのを感じたのだ」と仰せになった(ルカ八ノ

四六。イエスは信仰の接触と不注意な群衆の偶然の接触とを区別なすることができた。だれかが深い目的をもってキリストに触れ、そして答えられたのであった。

キリストはご自分が知りたいために、その質問をおかけになったのではない。人々や弟子たちやその女にお教えるになるためであった。病人に希望を起させようとお望みになったのである。いやす力を与えたのは信仰だということを示そうとお望みになったのである。その女の信頼心を一言もなくみすごしにすべきではなかった。彼女の感謝の告白によって、神に栄光が帰せられねばならなかったのである。キリストは、彼女の信仰の行為をお喜びになったことを理解させたいとお望みになった。イエスは、祝福を半分うけただけで彼女を帰らせようとは思ひにならなかった。彼女はその苦しみについてイエスがご存じであることを知らないままにすぎ去ってはならなかったし、またキリストの情深い愛や、彼のみもとに来るすべての者を全く救いうる力に対する彼女の信仰をお喜びになっ

ていることを、知らないままであつてはならなかった。

女をごらんになりながら、キリストは、彼にさわったものはだれか、としいておたずねになった。彼女はかくしてもむだなことを知って、ふるえながら前に進み、その足もとにひれふした。感謝の涙にぬれながら、すべての人の前でなぜ自分がイエスのみ衣にふれたか、どんなにすみやかにいやされたかをイエスに告げた。女は、そのみ衣にふれた行為がすぎた行為であったのかとおそれたが、イエスの口からは一言も譴責の言葉はなく、ただおほめの言葉だけが語られた。それは人類のわざわざに同情する気持ちにみちた愛の心から出たものであった。彼は、「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい」と、やさしく仰せになった（ルカ八ノ四八）。こ

の言葉は彼女をどんなに勇気づけたことだろう。失礼なことをしたのではないかという恐怖はとれて、彼女は心から喜ぶことができた。

イエスのまわりにおし寄せていた好奇心にかられた群衆には、生命力はあたえられなかった。信仰をもってキリストに触ったひとりの苦しめる女だけがいやされたのである。そのように、霊的なことにおいても、不注意な接触は、信仰の接触と異なる。キリストを単なる世の救い主として信ずることだけでは、いやしは決してあたえられない。救いにいたる信仰は、ただ福音の真理に同意することではない。真の信仰は、キリストを自分の救い主として受け入れる信仰である。神はそのひとり子をお与えになったが、それはわたしが彼を信ずることによって、「滅びないで、永遠の生命を得るため」である（ヨハネ三ノ一六）。キリストのみ言葉に従ってわたしがキリストの所に行くととき、その救いの恵みを受けるのだということをわたしは信じなければならない。現在生きている生涯も、「わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子を信じる信仰によって、生き」なければならない。

多くの人は信仰を一つの見解として持っているが、人を救う信仰は一つの取引であって、キリストを受け入れる者はこれによって、神との契約関係に入るのである。生きた信仰があれば、人は元気を増し、全き信頼心を持ち、これによって魂はキリストの恵みを通して力強い勝利者となるのである。

信仰は死よりも有力な勝利者である。もし病人に大治癒者たるイエスを信仰によって見させることができるなら、不思議な結果がみられるであろう。それはからだに心に生命をもたらすのである。

悪習慣の犠牲となっている人々を導くときは、彼らが急ぎつつある絶望と破滅を示さないでその目をイエスに向

けさせなさい。天の栄光をながめさせなさい。あわれな絶望的に見える人々にこれを示すとき、それは墓のすべての恐怖よりもからだと心の救いのために効果がある。

「ただ神のあわれみによって、再生の洗いを受け」

(テトス三ノ五)

百卒長のしもべは中風で床に就いていた。ローマ人の中では、しもべと言えば、どれいであって、市場で売買され、しばしば虐待され残酷な取り扱いをされていたが、この百卒長はそのしもべをやさしい気持で愛し、その回復を心から願っていた。彼は、イエスがそのしもべをおいやりになれると信じていた。彼は救い主を見たことはなかったが、人々の話をきいて信仰を持つ気持になったのである。ユダヤ人の形式主義にもかかわらず、このローマ人は、彼らの宗教が、自分の宗教よりもすぐれていることを悟っていた。すでに彼は征服者と被征服者との間をへだてていた国民的な偏見や憎悪という壁を打破した。彼は神の礼拝に対して敬意を表し、その礼拝者として、ユダヤ人に親切を示してきた。彼は、人からきいたキリストの教えの中に、自分の心の要求を満たすものをみいだしたのである。彼の中にあつたすべての霊的なものが、救い主のみ言葉に感応した。しかし自分はイエスに近づく価値がないと思つた彼は、自分のしもべをいやしてくださるようにイエスをお願いしてもらいたいとユダヤの長老たちに頼んだのである。

長老たちは事情をイエスにお話しして、「あの人は、そうしていただくねうちがございます。わたしたちの国民

を愛し、わたしたちのために会堂を建ててくれたのです」といって、そのしもべをいやしてくださるように熱心におすすめた（ルカ七ノ四、五）。

しかし百卒長の家に行く途中で、イエスはこの士官自身から「主よ、どうぞ、ご足労くださいませように。わたしの屋根の下にあなたをお入れする資格は、わたしにはございません」との伝言をお受けになった。

それでも救い主は歩みをつづけられたので、今度は百卒長が自分で、その断りを言うために出てきて、「それですから、自分でお迎えにあがるねうちさえないと思っていたのです。ただ、お言葉をください。そして、わたしのしもべをなおしてください。わたしも権威の下に服している者ですが、わたしの下にも兵卒がいまして、ひとりの者に『行け』と言えば行き、ほかの者に『こい』と言えばきますし、また、しもべに『これをせよ』と言えば、してくれるのです」（ルカ七ノ七、八）。

「わたしはローマの権力を代表し、わたしの兵卒はわたしの権威を最高のものと認めています。そのようにあなたは無限の神の力を代表し、すべての被造物は、あなたのお言葉に従います。あなたは病に退くようにお命じになる事ができ、病はすみやかにあなたのお言葉に従います。ただお言葉を出してさえくだされば、わたしのしもべは直るのです。」

キリストは『『あなたの信じたとおりになるように』と言われた。すると、ちょうどその時に、しもべはいやされた』（マタイ八ノ一三）。ユダヤの長老たちは、百卒長が「わが国びと」に示した行為のために、彼をキリストの前に賞賛したのである。「わたしたちのために会堂を建ててくれたので、そうしていただくねうちがございます」

と、彼らは言った。けれども百卒長は自分のことを「わたしはねうちさえないのです」と言っている。それでも彼は、イエスに助けを求めることを恐れなかった。かれは自分の善に頼らず、救い主のあわれみに頼ったのである。彼の唯一の論証は、自分の大きな必要だけであつた。

これと同じようにすべての人間が、キリストに行くことができる。「わたしたちの行つた義のわざによってではなく、ただ神のあわれみによって、再生の洗いを受け」（テトス三ノ五）。あなたは自分が罪びとだから神から祝福を受ける望みがないとでもお思いになるだろうか。キリストは罪びとを救うためにこの世においでになったのだということ覚えなさい。自分自身を神に推薦するようなものは何もない。わたしたちがいつも訴えることのできる願いは、キリストのあがないの力を必要としている自分の完全に無力な状態である。わたしたちは、自己信頼の念をいっさい捨てて、カルバリーの十字架をながめ、「わが手には何も価値あるものをもたず、ただ、なんじの十字架にすぎただけである」と言うことができる。

「信ずる者には、どんな事でもできる」（マルコ九ノ二三）。わたしたちを天とつなぎ、暗黒の力に抵抗することができるようにするものは信仰である。すべての悪い素質にうち勝ち、どんなに強い誘惑にも抵抗する方法を神はキリストによってお備えになった。しかし多くの人は、自分が信仰がないような気持がするので、キリストから離れている。こういう人々は、無力、無価値なままで、情深い救い主のあわれみに全く頼りなさい。自分を見ないでキリストを見なさい。人の間で生活なさったとき、病をいやし、悪鬼を追い出されたキリストは、今も同じ力強いあがない主である。だからキリストの御約束を命の木の葉のようにつかみなさい。「わたしに来る者を決して拒み

はしない」(ヨハネ六ノ三七)。キリストの所に行くときに、キリストがお約束なさったのだから、自分を受け入れてくださると信じなさい。そうするときに、あなたは決して滅びることはない。

「しかし、まだ罪びとであったとき、わたしたちのためにキリストが死んでくださったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである」(ローマ五ノ八)。

「もし、神がわたしたちの味方であるなら、だれがわたしたちに敵し得ようか。ご自身のみ子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡された方が、どうして、み子のみならず万物をも賜わらないことがあるうか」(ローマ八ノ三一、三二)。

「わたしは確信する。死も生も、天使も支配者も、現在のもも将来のもも、力あるものも、高いものも深いものも、その他どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのである」(ローマ八ノ三八、三九)。

「み心でしたら、きよめていただけるのですが」

東洋で知られている病気の中で、癩病が一番恐れられていた。これがならないこと、その伝染性、またこれにかかった者に及ぼす恐ろしい結果などのために最も勇敢な人も恐怖に満たされた。ユダヤ人の間では、これは罪の報いとしてみられていたので「打撃」とか「神の指」とか呼ばれていた。深く根をはったような、決して除くことのできない致命的な性質のために、それは罪の象徴としてみられていたのである。儀式の律法によって、癩病人は

けがれたものと呼ばれた。その人の触れるものはすべてけがれ、空気もその息によってけがされた、すでに死んだ人のように、そういう人は人間の住む場所からしめ出されていた。この病氣にかかっている疑いのある者は、祭司にからだをみせなければならなかった。そして祭司は、その人が癩病かどうかを調べて決定するのであった。もしも癩病と宣告されると、その人は家族からひとり離されて、イスラエルの民から断たれ、同じ病氣の人たちとだけで、まじわらねばならなかった。そして王や司でさえも同様に取り扱われた。この恐ろしい病氣にかかった王は、その位を捨てて社会から去らねばならなかった。

癩病人はその友人や親族から離れて、この病氣の呪いを負わねばならなかった。そうして自分の悲運をふれまわり、衣服をさいて、他の人をけがす自分の前からみんなが逃げるように大声を上げて警告せねばならなかった。寂しい追放者たちから出る、「けがれたる者、けがれたる者」という悲しそうな声は、恐怖と嫌悪をもって聞かれた合図であった。

キリストが伝道をなさった地方にはこういう病人がたくさんあったが、イエスのなさったことがその人々の耳に聞えたとき、その中のひとりの心に、信仰が湧きはじめた。もしもイエスの所に行くことさえできれば、なおしていただけるかも知れない。しかしどうしてイエスを見いだすことができよう。永久に人々から隔離された運命にある自分が、そのいやし主にどうしてお目にかかることができよう。もしできたとして、キリストが果して、自分をいやしてくださるだろうか。パリサイ人やあのお医者たちのように、やはり自分を呪って人々のいる所から行ってしまふように警告なさるのではないだろうか。

彼はイエスについて聞かされたことを全部考えてみた。しかし、イエスの助けを求めた者の中で退けられたものはだれもなかった。このあわれな人間は、そこで救い主を見いだそうと決心したのである。都市からしめ出されてはいたが、どこか山道でイエスのお通りになるのに出会うことができるかも知れないし、あるいは郊外で教えていらつしやるときに、お目にかかれるかも知れない。それは非常に困難だったが、これが唯一の望みであった。

遠くに立つてこの癲病人は救い主の口から聞えるわずかの言葉を聞きとる。病人に手をおいていらつしやるのを見、足なえや盲人や中風やいろいろな病気で死にそうな人たちが、健康になって立ち上がり、自分が救われたために神を賛美しているのを彼は見る。彼の信仰は強められた。彼はだんだんと聴衆の方へ近づいて行く。彼は自分が禁じられていたことも、人々の安全ということも、皆が自分を恐れていることも全部忘れてしまつて、ただ、いやされるといううれしい望みだけが、彼の心を行きかいした。

彼は実にいやな様子をしていた。病がひどく彼をむしばみ、その腐ったからだは見るのも恐ろしいほどであった。彼を見るなり、群衆はあどすさりし、恐ろしさのあまり、彼にさわらないように互に先を争つて逃げた。ある者はこの癲病人がイエスに近づかないように防ごうとしたがだめであった。癲病人は人々を見てもいなければ、その声を聞いてもいなかった。人々の嫌悪を表わす様子など、まるで眼中になかった。彼はただ神のみ子を見、死ぬ者に生命を告げるそのみ声だけを聞いていた。

彼は、イエスの所に進みいで、その身をイエスの足もとになげ出して、「主よ、みこころでしたら、きよめていただけるのですが」と言った（マタイ八ノ二）。

するとイエスは、手をかれの上におき「そうしてあげよう、きよくなれ」と言われた。すると癩病人のからだにはたちまち変化が生じた。その血は健康になり、感覚はよみがえり、筋肉はしっかりしてきた。癩病独特の不自然な白いかさだらけの皮膚は消えて、そのはだは幼な子のはだのようになった。

もし祭司たちが、この癩病人がいやされた事実を知るなら、キリストに対する憎しみから、偽りの宣言をするかも知れなかった。イエスは公平な断定のなされることをお望みになった。そこでこの人に、いやされたことをだれにも話さないで、この奇跡のうわさがひろがらないうちに大急ぎでささげ物をもって宮に行きなさいとお命じになった。

祭司はこういうささげ物を受ける前にまず、ささげる人を検査し、全快したことを証明しなければならなかった。ところでこの診察がなされた。そしてこの癩病人に社会から去るように命じた祭司が、彼の回復したことを証明した。いやされた人は自分の家と社会に帰された。彼には健康の恵みが真にとうとく感じられ、男子の壮健を楽しみ、家族のもとに帰ることのできたことを喜んだ。そしてイエスの注意にもかかわらず、自分のいやされた事実をかくすことができず、うれしそうに行きめぐって自分を健康にしてくださいとキリストの力をのべ伝えた。

この人がイエスの所にきたとき、彼は全身癩病をわずらっていた。その致命的な毒は全身にひろがっていた。癩病にさわれば、その人は汚れるので、弟子たちは主がこの癩病人にさわられないようにと、努めた。イエスは、ご自分の手を癩病人にあつけになった。しかしイエスは、なんの汚れも受けられなかった。癩病はきよめられた。人間の力ではきよめることのできない、深く根をはった罪という恐ろしい癩病もこれと同じである。「その頭はこと

ごとく病み、その心は全く弱りはてている。足のうらから頭まで、完全なところがなく、傷と打ち傷と生傷ばかりだ」(イザヤ書一ノ五、六)。しかし人性をおとりになったイエスは、けがれをお受けにならなかった。そのご臨在は罪びとのためにいやす力であつた。その足もとにひれ伏して、「主よ、みこころでしたら、きよめていただけるのですが」と、信じて言う者は、だれでも「そうしてあげよう、きよくなれ」とのお答を聞くであろう。

イエスがおいやしになった例の中には、求めた祝福をすぐには、お与えにならないこともあつた。しかし癩病の場合は願うとすぐに答えられた。わたしたちが世的な祝福を求めて、祈るとき、その祈りの答はおくれるかもしれないし、また求める以外のものをお与えになるかも知れない。しかし罪からの救いを願うときはそうではない。罪からわたしたちをきよめて、ご自分の子供となし、きよい生涯を送ることができるようになってくださるのは神のみこころである。「キリストは、わたしたちの父なる神のみ旨に従い、わたしたちを今の悪の世から救い出そうとして、ご自身をわたしたちの罪のためにささげられたのである」(ガラテヤ一ノ四)。「わたしたちが神に対していっている確信は、こうである。すなわち、わたしたちが何事でも神のみ旨に従って願い求めるなら、神はそれを聞き入れて下さるということである。そして、わたしたちが願い求めることは、なんでも聞き入れてくださるとわかれば、神に願い求めたことは、すでにかなえられたことを、知るのである」(ヨハネ第一・五ノ一四、一五)。

「なんじ心に安きをうべし」

イエスは苦しみなやむ人、望みを失った人、世的な快樂で心の渴望を満たそうとつとめる人々をござらんになって、

みんなイエスによって安息を得るようにお招きになった。

ほねある人々にやさしく、「わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」と、イエスはお命じになっている(マタイー一ノ二九、三〇)。

キリストはこの言葉をお語りになったとき、ひとりびとりの人間に言われたのである。自覚してもしなくても、人はみな疲れ、重荷を負っている。みんなキリストだけが、除いてくださることのできる重荷の下で苦しんでいる。わたしたちが負っている一番大きな重荷は罪の重荷である。もしひとりでこの重荷を負わされるならば、それはわたしたちを押しつぶしてしまふだろう。しかし罪なきキリストが、わたしたちの代りとなってくださったのである。

「主はわれわれすべての者の不義を、彼の上に置かれた」(イザヤ書五三ノ六)。

彼はわれらのとがを負われた。キリストはわれらの肩から荷をとって休ませてくださる。また心労や悲しみの荷も負ってください。キリストは、すべての思いわずらいをまかせるように招いておられる。彼はそのみ胸にわたしたちを抱いてくださるのである。

人類の長兄キリストは、永遠のみくらのそばに立って、救い主として彼を見あげるすべての人間をぐらんになる。彼は、「罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである」(ヘブル四ノ一五)。だから、彼は人間の弱さも、わたしたちたちの要求も、またわたしたちの誘惑の力がどこにあるかも、体験によって知っておられるのである。恐れおののく神の子よ、キリストはあなたを見守っておられる。あなたが

誘惑を受けておられるのならば、キリストはあなたを救ってください。あなたが弱ければ、強くしてください。無知であれば、知識を与えてください。傷つけられたならば、彼はいやしてください。エホバは「もろもろの星の数を定め」しかも「心の打ち砕かれた者をいやし、その傷を包まれる」(詩篇一四七ノ四、三)。

どんな心配ごとや試練があっても、その問題を神の前にうち明けなさい。あなたの精神は忍耐力をもって強められる。困惑や困難からぬけ出る道が、あなたのために開かれる。自分が弱く、力のないことを知れば知るほど、キリストの力によって、もっと強くなるのである。荷が重ければ重いだけ、荷を負ってくださいるお方にこれをまかせて休むことがうれしいのである。

境遇は友と別れさせ、広い海の不安な水がその間に波うつかも知れないが、どんな事情も距離も、わたしたちを救い主から離すことができない。どこにいても、キリストはわたしたちの右に立ち、わたしたちをささえ保ち、擁護し、はげましてくださる。ご自分があがなわれた者に対するキリストの愛は、母が子を愛する愛にもまさって大きい。「彼はわがためにその命を与えたまいしにより、われは彼により頼まん」と言って、その御愛に安んずることとはわたしたちの特権である。

人間の愛は変わるかもしれないが、キリストの愛は変わることを知らない。助けを求めてキリストを呼ぶならば、そのみ手はわたしたちを救うために伸ばされる。

「『山は移り丘は動いても、わがいつくしみはあなたから移ることなく、平安を与えるわが契約は動くことがない』と、あなたをあわれまれる主は言われる」(イザヤ書五四ノ一〇)。

第五章 心のいやし

助けを求めてキリストのところにきた人々の多くは、自分で病気を招いた人たちであったが、それでもイエスは、いやすことを拒まれなかった。イエスから力が出てこれらの人々に入ると、彼らは罪を自覚し、多くの者がその病気と共に心の病もいやされたのである。

カペナウムにいたひとりの中風の人はこういう人間のひとりだった。あの癲病人のように、この中風患者も、回復する望みを全く失っていた。その病気は罪深い生活の結果だったので、その苦しみは悔悟の念によって、いつそう、つらく感じられた。彼はパリサイ人や医者に助けを求めたがむだであった。その人たちは、彼がならないと告げ、彼を罪びととして非難し、神の怒りをうけて死ぬのだと言いわたした。

中風の人は、絶望の淵に沈んだ。しかしそのとき彼はイエスのみわざについて聞いたのである。自分と同じように罪深いあわれな人々がいやされていたので、自分も救い主のところにつれて行ってさえもらえば、きっとなおるのではないかと考え、しかし、自分の病気の原因を考えると、またも望みは失われるのだが、いやされる機会をなげ捨てるわけにはいかなかった。

彼の大きな欲求は罪の重荷から救われることであつた。そのため、イエスにお目にかかつてゆるしの確証を得、天からの平安を得たいとせつに望んだ。このことが、かなえられれば、神のみ旨によつて生きても死んでも満足だと思つた。

もはや彼の衰えたからだは死の徴候を示していて、もうこの上、一分でも猶予できないほどであつた。そこで彼は自分を床のままイエスのところにつれて行ってくれるように、友だちにたのむと、友だちは喜んでこれを引き受けた。しかし救い主が、おられる家の中も周囲も集まつた人であまりこんでいて、この病人とその友だちが、救い主のところに行くことも、あるいはそのみ声の聞える所まで行くことさえもできなかった。イエスはペテロの家で教えておられた。その風習にならつて弟子たちは、イエスのまわりにすわっていた。「ガリラヤやユダヤの方々の村から、またエルサレムからきたパリサイ人や律法学者たちが、そこにすわっていた」(ルカ五ノ一七)。これらの多くの者は、イエスを訴えようとしてスパイとなつてきていたのである。その他、熱心な人、敬けんな人、好奇心にかられた者、信仰のない人など、種々雑多な群衆が集まつていた。そこには異なつた国民や社会のあらゆる階級の人たちがいた。そうして「主の力が働いて、イエスは人々をいやされた」(ルカ五ノ一七)。いのちの霊が集まつた人たちの上をおおっていたが、パリサイ人や学者たちはその臨在に気がつかなかった。彼らは必要感を感じなかつたのでいやしは彼らのためではなかつた。「飢えている者を良いもので飽かせ、富んでいる者を空腹のまま帰らせなさい」(ルカ一ノ五三)。

中風患者を運んできた人々は、幾度となく群衆の中をかき分けて行こうとしたがむだであつた。病人は言うに言

われぬ悲痛な顔をして周囲を見まわしていた。長く待ちわびた助けがこれほど近づいているのに、どうしてその望みを捨てることができよう。そこで彼の提案によって、友人は屋根の上に彼を運び、屋根をこわしてイエスの足もとにつりおろした。

イエスのお話はさえぎられた。救い主は悲しそうな顔をながめ、その人の嘆願するような目が、じっとご自分をみつめているのをごらんになった。イエスはこの苦しむ魂の切望をよく知っておられたのである。彼がまだ家にとときに、その良心に罪を悟らせたのはキリストであった。そうして彼が罪を悔いて、自分をいやしてくださいさるイエスの力を信じたとき、救い主の情は彼の心を祝福してくださいさったのである。イエスは、信仰の最初のかすかな光が成長してキリストが罪びとの唯一の助け主であるという信念に変わって行くのを見守り、イエスの前にこようにする努力と共にさらにその信念が強くなって行くのを見ておられた。キリストご自身が、この苦しむ人をご自分に引き寄せられたのである。そのとき救い主は「子よ、しっかりしなさい。あなたの罪はゆるされたのだ」とおっしゃったが、そのみ言葉はこの人の耳には音楽のように聞えた。

罪の重荷は病めるこの人の心からおろされた。彼は疑うことができない。キリストのみ言葉は、人の心をお読みになる彼の力を表わしている。罪をゆるすキリストの力をだれが否定できよう。望みは絶望に代り、息づまるようないんうつさは喜びと変った。肉体的な痛みは去り、全身が変化した。それ以上彼は何も求めないで、うれしさのあまり言葉もなく、だまって静かに横たわっていた。

多くの人はこの不思議な事件のすべての動きを、息もつかずに興味をもって見ていた。多くの者は、キリストの

み言葉を、自分たちに対する招きと感じた。彼らの心は罪で病身になっていなかっただろうか。そしてこの重荷からのがれたいと熱望していなかっただろうか。

しかしパリサイ人は、群衆に対する自分たちの影響力が失われることを恐れて、「それは神をけがすことだ。神ひとりのほかに、だれが罪をゆるすことができるか」と心の中で言った（マルコ二ノ七）。

イエスはじつと彼らをごらんになったが、パリサイ人は、その視線をつけて臆病にもたじろいだ。イエスは『なぜ、あなたがたは心の中で悪いことを考えているのか。あなたの罪はゆるされた、と言うのと、起きて歩け、と言うのと、どちらがたやすいか。しかし、人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために』—と言い、中風の者にむかって、『起きよ、床を取りあげて家に帰れ』と仰せになった（マタイ九ノ四—六）。

すると担架でイエスの所に運ばれてきた人は青年らしい回復力と力で立ち上がった。そして「彼は起きあがり、すぐに床を取りあげて、みんなの前を出て行ったので、一同は大いに驚き、神をあがめて、『こんな事は、まだ一度も見ることがない』と言った」（マルコ二ノ一二）。

この腐敗が続けていたからだに健康を回復したのは、創造力以外の何ものでもなかった。地の塵から造られた人間に生命を与えた同じみ手が、死んで行く中風の人にも、生命を与えたのである。そしてからだに生命を与えた同じ力は、その心も新しくしたのである。創造の時に「仰せられると、そのようになり、命じられると、堅く立」ったその彼がとがと罪とに死んだ魂に生命をお与えになったのである。肉体のいやしは心を新たにする力の証拠であ

った。キリストは中風の者に立ちて歩めと仰せになったが、「人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるため」だ、とおっしゃった。

中風の人は、キリストによって霊肉のいやしをうけた。彼は肉体の健康を与えられる前に、心の健康を必要としたのである。肉体の病がいやされる前に、キリストは精神をいやし、罪ある心をおきよめにならねばならない。この教訓は見のがしてはならない。今日肉体の病気で苦しんでいる人で、ちよつどあの中風の人のように、「あなたの罪はゆるされた」とのみ言葉を切望している者が幾千人もいる。罪の重荷は、不安と満たされない欲望を伴って、病気の根底となっている。そういう人々は心をいやしてくださる方のところにこなければ助けは得られない。キリストのみが与えてくださることのできる平安は、精神に活力を回復し、からだに健康を与えるのである。

中風の人のいやしによつて人々の受けた影響は、まるで天が開けて、よりよき世界の栄光があらわれたかのようにであった。いやされたこの人が一步一步神を賛美しながら、荷物を軽々とかついで群衆の中を通つて行ったとき、人々は後にさがつて道を開き、畏敬の念にうたれたような顔をしてじつと彼をながめ、「きようは驚くべきことを見た」と互にそつとささやきあつた（ルカ五ノ二六）。

中風患者であつたその人がほんのちよつと前に、自分が乗せられて、ゆっくりかつぎ出されたその担架を軽々とかついで、家へ歸つてきたとき、その家族の喜びは大したものだった。家族の者は、ほとんどその目を疑いながら、喜びの涙にぬれて、周囲に集まつた。彼は血氣盛んな男子の元氣さで家族たちの前に立つた。活気のぬけていた腕は自由に動き、しわのよつた鉛のような色をしていた膚は、今や生き生きとして赤味を帯びていた。彼はしっかりと

とした、らかな足取りで歩いた。喜びと希望が顔中にあらわれ、純潔と平安な表情が罪と苦痛の跡にかわった。その家族からは喜びの感謝がささげられ、神は望みなきものに望みを与え、いためる者に力をお与えになったみ子により誉をお受けになった。この人とその家族は、イエスのために喜んで生命をささげる気になった。そこには信仰を弱める疑惑の念もなく、暗い家庭に光をもたらされたキリストに対する忠誠を傷つけるような不信の念はなかった。

「わが魂よ、主をほめよ。わがうちなるすべてのものよ、その聖なるみ名をほめよ。わが魂よ、主をほめよ。そのすべてのめぐみを心にとめよ。主はあなたのすべての不義をゆるし、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを墓からあがないだし、……こうしてあなたは若返って、わしのように新たになる。主はすべてしえたげられる者のために正義と公正とを行われる……主はわれらの罪にしたがって、われらをあしらわず、われらの不義にしたがって報いられない。……父がその子供をあわれむように、主はおのれを恐れる者をあわれまれる。主はわれらの造られたさまを知り、われらのちりであることを覚えていられるからである」(詩篇一〇三ノ一一―一四)。

「な ありたいのか」

「エルサレムにある羊の門のそばに、ヘブル語でベテスダと呼ばれる池があった。そこには五つの廊があった。その廊の中には、病人、盲人、足なえ、やせ衰えた者などが、大ぜいからだを横たえていた。(彼らは水の動くのを待っていたのである)。」

ある期間、この池の水が動揺したが、これは超自然的な力のためだと一般に信じられており、水が動いたとき、まっさきにはいる者は、どんな病気にかかっているか、いやされるものと信じていた。何千何百という病人がそこに集まり寄ってきた。このため、たいへんなこみようで、水が動いたときには、人々は自分より弱い男女や子供をふみつけながら前へ出るのだった。池のそばまで行けない人もたくさんいた。たとえ池までたどりつくことができても池のふちで、たくさんの人が死んでいった。病人が昼間の暑さや、夜の寒さから守られるために池のまわりには屋根がさしかけてあった。この廊で夜を明かし、来る日も来る日もおなしの望みを抱いて池のはたにはって行く人もあった。

イエスはエルサレムにおられた。そして、ひとりで瞑想と祈りをなさりながら池の所に歩いてこられた。キリストはいやされる唯一の機会と想っているものを見守っているあわれな苦しむ人々をこらになった。そして彼のいやしの力を働かせ、病人を皆なおしたいと切望なさった。しかしその日は安息日だった。たくさんの人が、礼拝のために宮に行くところだったから、そのようないやしのわざはユダヤ人の偏見をおこし、自分の働きを短縮することを知っておられた。

けれども救い主は、ひとりの非常にあわれな人間をこらになった。それは三十八年間、からだのきかない不具の人間だった。その病気は主として彼自身の悪習の結果であり、神の罰とみられていた。孤独で友もなく、神の情からも捨てられたように感じながら、この苦難者は、悲惨な年月をすごしてきた。水が動くと思われると、彼の無力さをあわれんだ人々が彼を廊の所までかついでいってくれるのだった。しかしちょうどよいときに、彼を助けて

水に入れてくれるものはだれもなかった。彼は波紋の立つのを見たが、まだ一度も池のふちから先に出たことがなく、彼よりも強い者が先に水の中に降りていった。それでこのあわれな弱い苦難者は、先を争う利己主義な群衆と競争して勝つことはできなかった。一つの目的に対する絶えざる努力と、その心配や引きつづく失望のために残った体力は急速に消耗していった。

この病人は筵の上に横たわって、ときおり頭を上げ、池をながめていたが、そのとき、やさしい情深い顔が、彼をのぞき、「なおりたいのか」とのみ言葉が彼の注意をひいた。その心に望みがわいた。何かの方法で、自分は助けられるのだと彼は感じた。しかしわきおこった望みの光も、たちまち消滅してしまった。自分が何回池にはいりかけようとしたか、そうして今では水がふたたび動くまで生きる望みもほとんどないのだということを思い出したのである。彼は、ものうげに顔をそむけて「主よ、水が動く時に、わたしを池の中に入れてくれる人がいません。わたしがはいりかけると、ほかの人が先に降りて行くのです」と言った。

するとイエスは、「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」と仰せになった（ヨハネ五ノ八）。彼は新たな望みを感じて、イエスをながめた。そのみ顔の表情、その声の音調は、他の人とはちがっていた。愛と力がそのおからだから発しているように思われた。足なえの信仰はキリストのみ言葉をとらえ、彼は疑わずに、自分の意志を従わせたが、このとき、彼の全身はこれに応じた。

各神経や筋肉が新しい生命で振動し、きかなかった足が丈夫に動くのである。彼はとび上がって、しっかりした自由な足どりで神を賛美し、新たに得た力に喜びながら歩いていった。

イエスはこの中風の人に何も神の助けを約束なさったわけではなかった。この人は、「主よ、もしあなたがわたしをなおしてくださいなら、あなたの言葉に従いましょう」と言うこともできた。彼はいやされる唯一の機会を疑いのために失ったかもしれない。しかし彼はキリストの言葉を信じ、自分がいやされたと信じた。そしてすぐに努力をしたので、神は彼に力を与え、彼は歩こうと志し、そして歩いた。キリストの言葉に従って行動し、いやされたのである。

わたしたちは罪によって神の生命から切り離されている。わたしたちの心は麻痺している。この無力な人が歩けなかったのと同じように、わたしたちも自分自身の力でよい生涯を送ることはできない。多くの人は自分の無力を悟り、神と調和することができるとような精神生活を切望し、これを得ようとして努力している。しかしできないのである。絶望して「わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」と叫ぶ（ローマ七ノ二四）。失望しながらもがいている人々は上を見あげなさい。救い主は、ご自分の血潮であがなわれた者の上に、身をかがめて、言うに言われぬやさしさとあわれみをもって、「なおりたいのか」と仰せになっている。彼は、わたしたちが健康と平安をもって立ちあがるようにお命じになる。いやされたことを感じるまで待つてはならない。救い主のお言葉を信じなさい。あなたの意志をキリストの側に置きなさい。彼に仕えようと決心し、そのお言葉に従って行動するとき、力を受けるのである。どんな悪習慣に染んでいても、また長年ほしいままにした情欲が心身を束縛していても、キリストは救おうと望み、また救うことがおできになるのである。キリストは「罪過と罪とによって死んだ」人に生命をお与えになる（エペソ二ノ一）。弱点や不運、また

罪という鎖でしばられている虜を、自由にしてくださいさるのである。

罪の自覚は生命の泉を毒してしまった。しかしキリストは、「わたしがあなたの罪をとってあげる。わたしはあなたに平安を与える。わたしの血で、わたしはあなたを買ったのだ。あなたはわたしのものだ。わたしの恵みによって、あなたの弱くなった意志を強め、罪に対する苛責の念を取り去ってあげる」と、おっしゃるのである。試験におそわれたとき、心労と困惑に取りかこまれたとき、失望落胆して今や絶望しようとするとき、イエスをながめなさい。あなたを取りかこんでいた暗黒は、彼のご臨在による明るい輝きによって追い払われる。罪があなたの魂と争って勝とうとし、良心を苦しめるとき、救い主を見あげなさい。彼の恵みの力は罪を征服するのに十分である。不安におののく心を感じをもって救い主に向けなさい。あなたの前におかれた望みをつかみなさい。キリストはあなたを、ご自分の家族の子供にしようと待っておられる。彼の力はあなたの弱きを助け、彼は一步一步あなたを導いてくださる。あなたの手を彼の手のうちにおいて導いていただきたい。

キリストは遠くにおられると決して思ってはならない。彼はいつもそば近くにおられる。彼のやさしいご臨在は、あなたを取りかこんでいる。キリストはあなたが彼を見いだすように望んでおられるということを覚えて、彼を求めなさい。キリストは、あなたがただその衣のすそにふれるばかりでなく、たえずまじわりながら、彼と共に歩むことを望んでおられる。

「お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように」

仮庵の祝いがちょうど終ったエルサレムの祭司やラビたちはイエスをおとし入れようとした陰謀が破れ、夕べになって、「人々は各々家に帰って行った。」「イエスはオリブ山に行かれた」（ヨハネ七ノ五三、八ノ一）。

雑踏したそうぞうしい町からのがれ、熱狂した群衆や陰険なラビたちから離れて、イエスは神とだけいることのできる静かなオリブ林の方へお向かいになった。しかし朝早く、彼はまた宮に帰ってこられて、人々が自分のまわりに集まると、すわってお教えになった。

まもなく彼の話は妨げられた。パリサイ人と学者の一群が恐れまどう婦人を引きずりながら、キリストの所にきて律法の第七条を犯したと鋭い声でしきりに訴えたからである。その女の人をイエスの前に突き出して、偽善的ないんぎんなようすで、「先生、この女は姦淫の場でつかまえられました。モーセは律法の中で、こういう女を石で打ち殺せと命じましたが、あなたはどう思いますか」と言った（ヨハネ八ノ四、五）。

彼らは、敬けんな様子をしながら、心の奥にはキリストを殺す深いたくらみを秘めていた。もしもイエスがその女をゆるすなら、モーセの律法を軽蔑すると言われ、また、彼女が死に価すると言えば、ローマ人にだけ属する権力をとるものとして、ローマに訴えられたであろう。

イエスはその光景をごろんになった。はずかしさにふるえている被害者と、人間らしいあわれみさえない冷酷な顔をした高官たちがいた。キリストの純潔で汚れないご精神は、その光景を見せられて、すくんでしまわれた。

彼はその質問が聞えたふりもなさらずに、身をかがめて、じっと地面を見つめ、土の上に字を書き始められた。

訴えた人々は、イエスのお答えになるのがおそいのと、無関心な様子にいらだち、そばによつてきて、無理にイエスの注意をひこうとした。しかし彼らの目がイエスのまなざしに従ってその足もとの舗道の上を見た時、みんなだまってしまった。彼らの前には、自分たちの生涯の罪深い秘密が書かれていたのである。

イエスは立ちあがり、陰謀的な長老たちをじっとごらんになって、「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよい」と、おっしゃった。それからまた、しゃがんで書きつづけられた。

キリストは、モーセの律法を退けず、またローマの権力を犯しもなさらなかった。訴えた人たちは敗北した。今やきよくみせかけていた衣ははがれ、罪深い人間として、無限に純潔なお方の前に立っていたのである。そして彼らは、自分の生涯のかくされた罪悪がみんなの前に暴露することを恐れおののきつつ、頭を垂れて下を見たまま、その獲物を情深い救い主に残して静かに去っていった。

イエスは立って婦人をながめ、「女よ、みんなはどこにいるか。あなたを罰する者はなかったのか」とたずねられた。女が「主よ、だれもごいません」と答えたので、イエスは「わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように」と言われた（ヨハネ八ノ一〇、一一）。

女は恐怖にすくみながら、イエスの前に立っていたが、「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよい」との主のお言葉は彼女にとって死の宣告であった。彼女は救い主を見あげる勇氣もなく、だまって自分の運命を待っていた。しかし驚いたことに、彼女を訴えた人々が、ひと言も言わずに、あわてて去って行く

のを見た。それから、「わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように」との望みの言葉を聞いたのであった。彼女の心はとけ、イエスの足もとにひれ伏して、彼女はありがたさに泣き、悲しみの涙を流して、その罪を告白した。

彼女にとってこれは新しい生涯、すなわち神に献身した純潔と平安な生涯の始まりだった。この墮落した魂を上させることによって、イエスは最も重い肉体の病気をいやすよりも大きな奇跡をなさった。すなわち永遠の死にいたる、霊的な病気をおいやしになったのである。この悔い改めた女はキリストの最も変らない弟子のひとりとなった。彼女はキリストのあわれみによるゆるしに対して、自己犠牲の愛と信仰をもって感謝を表示した。社会はこの誤った女を軽蔑し、嘲笑するだけであったが、罪なきキリストは、彼女の弱さをあわれみ、救いの手をおのべになった。偽善的なパリサイ人が非難しても、イエスは「お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように」とお命じになったのである。

イエスはどの魂の事情もご存じである。罪びとの罪が重ければ重いだけ、救い主を必要とするのである。キリストの神聖な愛と同情心は、敵のわなにかかつて、最も望みのない状態になった者に、まず向けられる。キリストはご自分の血で、人類釈放の証書に署名なさった。

イエスはそれほどの価を払ってあがなった者が、敵の誘惑にもてあそばれるのをお望みにならない。彼はわたしたちが負けて滅びるのを好みにならない。ししの穴でライオンの口をふさぎ、忠実な証人と共に燃ゆる炎の中を歩まれたキリストは、それと同じように喜んで、わたしたちの性質のすべての思いを征服してくださるのである。

今日、彼はあわれみの座に立って、その助けを求める人々の祈りを神にささげておられる。キリストは悔いて泣く者をひとりとして、退けるようなことをなさらない。ゆるしと回復を求めて主のもとに来るすべての者を、惜しみなくゆるしてくださる。キリストは知っておられることを全部人にはお告げにならないが、恐れる魂に勇氣を持つようにお命じになる。望む者は神の力をつかみ、キリストと和らぐことができ、主もまた彼と和らがるのである。イエスは、避け所を求めて来る魂を告発と口論から、救ってくださる。人間も悪天使もこれらの魂を非難することができない。キリストは神であり、また人であるご自分の性質に、彼らを結合させてくださる。その人々は、神のみ座から出る光の中に立ち、罪を負う偉大な御方の側に立つのである。

イエス・キリストの血は、「すべての罪からわたしたちをきよめるのである」(ヨハネ第一・一ノ七)。「だが、神の選ばれた者たちを訴えるのか。神は彼らを義とされるのである。だが、わたしたちを罪に定めるのか。キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなしてくださいるのである」(ローマ八ノ三三、三四)。

「暴君が奪った獲物も救い出される」 (イザヤ書四九ノ二五)

キリストは、風も波もまた悪鬼につかれた人間も絶対に支配する力をもっておられることをお示しになった。あらしを治め、怒濤をおしずめになったキリストは、サタンによって発狂し、圧倒されている者の心に平安をお与えになった。

カペナウムの街道で、イエスが罪の奴隷を解放するご自分の使命について語っておられたとき、恐ろしい叫び声でその話がさえぎられた。群衆の中から一人の狂人がとび出してきて、「ナザレのイエスよ、あなたはわたしたちとなんのかかわりがあるのです。わたしたちを滅ぼしにこられたのですか。あなたがどなたであるか、わかっています。神の聖者です」と叫んだ（マルコーノ二四）。

するとイエスは悪鬼をいましめて、「黙れ、この人から出て行け」と、おっしゃった。「悪霊は彼を人なかに投げ倒し、傷は負わせずに、その人から出て行った」（ルカ四ノ三五）。

この人の病気も自分の生活によって招いたものであった。彼は、罪の快楽に魅惑され、享樂的な生活をしようと思ったのである。不節制と浮薄な生活が、その性質の高尚なものまでを墮落させ、サタンが全く彼を支配していたのである。後悔はおそすぎた。失った人間の資格を取り戻すためには、財産も快楽も犠牲にしてもよいと思ったときには、すでに悪魔の手中につかまれて、どうすることもできなくなっていた。

救い主の前で、彼は自由を願う欲求を覚えいされたが、悪鬼はキリストの力に抵抗した。そしてこの人が、助けを求めてキリストに訴えようとすれば、悪霊は彼の口に言葉を入れ、そこでこの人は恐れ苦しみながら叫んだのである。この悪鬼につかれた人間は、自分を自由にしてくださることのできるお方の前に、いま自分がいることをなかば理解したが、その強いみ手にとこうとすると、他の意志が彼を押え、他の者の言葉が、彼から出てしまうのである。

サタンの力と自由を求めるおのが欲求との戦いは激しいものであった。この悩まされた人は、彼の人間性を破壊

した敵との戦いで、その生命を失わなければならないかのように思えた。しかし救い主は、権威をもって語り、虜を解放してくださった。悪鬼につかれていたこの人は、驚いている人々の前で、冷静な自由さをもって立っていた。彼は喜びの声をあげて、救いのゆえに神を賛美したのである。ついさっきまで、狂気のために光っていた目も、今は知能に輝き、感謝の涙にあふれていた。人々はあつけにとられていたが、やがて口がきけるようになると、「これは、いったい何事か。権威ある新しい教えだ。けがれた霊にさえ命じられると、彼らは従うのだ」と互に語り合ったのである（マルコーノ二七）。

今日、かのカペナウムの狂人と同じように、悪霊の支配下にある者がたくさんいる。自らすすんで神の律法から離れるものはみなサタンの支配下に自分を置くのである。多くの者は、好きなときにそれをやめることができると思つて悪をもてあそぶが、だんだんつり込まれてついに自分よりも強い意志に支配されている自分に気づくようになる。その人はその不思議な力から脱することができない。かくれた罪や強い情欲が、カペナウムの狂人のように、全く無力な虜として、その人をつかんでしまうのである。

しかし、この状態は絶望的ではない。神はわたしたちが承諾しなければ、わたしたちの精神を支配なさらない。各人は自分を支配する力を選ぶのに自由である。キリストに救われることができないほど低く墮落した人はない。この狂人は、祈りの代りに、サタンの言葉しか言うことができなかったが、それでも心の中の語られざる願いが聞かれた。困っている人から出る叫びは、たとえ言葉に出なくても聞かれるのである。神との契約に入ることに同意する者は、サタンの力にまかされたり、自分の性質の弱さのままにほっておかれない。

「勇士が奪った獲物をどうして取りかえすことができようか。暴君がかすめた捕虜をどうして救い出すことができようか。しかし主はこう言われる、『勇士がかすめた捕虜も取りかえされ、暴君が奪った獲物も救い出される。わたしはあなたと争う者と争い、あなたの子らを救うからである』」（イザヤ書四九ノ二四、二五）。

信仰によって心の戸を救い主に開く者に起る変化は、驚くべきものである。

「わたしはあなたに、敵のあらゆる力に

打ち勝つ権威を授けた」

キリストが後になっておつかわしになった七十二人の弟子たちは、十二人の弟子と同様に、その使命の印として、超自然的な力を受けた。仕事が終わったとき、七十二人は喜んで、「主よ、あなたの名によっていただきますと、悪霊までがわたしたちに服従します」と言って帰ってきた。するとイエスは、「わたしはサタンが電光のように天から落ちるのを見た」と仰せになった（ルカ一〇ノ一七、一八）。

そのときからキリストのしもべたちはサタンを征服された敵とみるべきであつた。十字架上で、イエスは彼らのために勝利を得られることになっていた。主は、その勝利をしもべたちが自分のものとして受け入れるように、お望みになった。「わたしはあなたがたに、へびやさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けた。だから、あなたがたに害をおよぼす者はまったく無いであろう」と、彼は仰せになった（ルカ一〇ノ一九）。

聖霊の全能の力は、すべての悔いた魂の防御である。キリストは、悔いて信仰によりキリストの保護を求める者

が敵の支配を受けるようなことにはなされない。サタンが強い者だということは事実だが、天から悪魔を追いおろされた強い救い主がわたしたちに与えられていることを感謝しよう。サタンは、わたしたちがサタンの力を誇張すると喜ぶのである。それよりもイエスのことをわたしたちは語る方がよい。イエスの力と愛を賛美する方がよい。

天にあるみ座をとりかこぶ約束の虹は「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛してくださった。それはみ子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」とこのしえの証言である（ヨハネ三ノ一六）。これは神がその子らを悪魔との戦いにおいて、決して見捨てたまわないことを宇宙に証明している。そのみ位が存続するかぎり、それはわたしたちに力と保護を確証するものである。

第六章 奉仕のために救われる

それはガリラヤ湖においての朝の出来事であった。湖上で、あらしの夜を明かしたのち、イエスと弟子たちは岸につかれた。そのとき、のぼる朝日の光が平和の祝福を与えるかのように、海と陸とを照していた。しかし彼らが岸に足を踏み入れるや、荒れ狂う海よりもひどい光景に出会った。墓場のかげからふたりの狂人が飛び出してきて、今にも自分たちを八つ裂きにしようとする様子でおそいかかってきた。狂人たちのからだには、監禁された所から逃げて来るためにこわした鎖の一部分が下がっていた。その肉は裂け、血が流れて、長いもつれた髪の間から目が光っていて、人間らしい姿は全然なかった。人間というよりはむしろ野獣のように見えた。

弟子たちやいっしょにいた者は恐れまどって逃げたが、じきにイエスが自分たちといっしょにおられないことに気がつき、ふりかえってイエスを捜した。するとイエスは元の所に立っておられる。あらしを静め、すでにサタンに会ってこれに勝利なさったキリストは、これらの悪鬼からもお逃げにならなかった。気持ちが歯ざしりをして、あわをふきながらキリストに迫ったとき、彼は波を静めたその手をお上げになった。すると狂人はそれ以上近くに寄ることができなかった。彼らはキリストの前に立って狂いまわりながらも、イエスに対してどうすることもでき

なかった。

イエスは権威をもってけがれた霊にその人たちから出るようにお命じになった。この不幸な人たちは自分を苦しめている悪鬼から救ってくださることのできるお方が近くにあられることを認識したので、そのあわれみを嘆願するために救い主の足もとにひれ伏した。そして彼らが口を開くと、悪鬼がその人たちを通して語り、「ああ、ナザレのイエスよ、あなたはわたしたちとなんのかかわりがあるのです。わたしたちを滅ぼしにこられたのですか」と叫んだのであった。

悪霊はその獲物を手ばなすように強制された。そこで驚くべき変化が狂人たちに起った。光が彼らの精神を照し、その目は知性に輝いた。長い間サタンの姿のように醜かった容貌も、突然やさしくなり、血に染んだ手も静かになって、これらの人たちは声をあげて神を賛美したのである。

その間に人間のからだから追い出された悪鬼は、ぶたの中に入り、これを追って滅してしまった。ぶた飼いたちは大急ぎで人々にふれまわったので、町中こぞってイエスを見に集まってきた。ふたりの狂人はその地方の恐怖だったが、今この人々は、衣服をつけて正気でイエスの足もとにすわり、そのお言葉に耳を傾け、自分たちをいやしてくださった神のみ名をほめたたえていた。しかしこの驚くべき光景を見た人は喜ばなかった。彼らにとっては、これらのサタンの虜が救われるよりも、ぶたの損失の方が重大なのである。人々は恐れて、イエスのまわりに迫り、自分たちの所から去ってくださるようにイエスに願ったので、イエスはその要求に応じ、直ちに船に乗って対岸へお向かいになった。

いやされた狂人たちの気持はこれとはまるでちがっていた。彼ら救い主といっしょにいたいと望んだ。彼らは、今までの自分たちの生涯を苦しめ、人間の資格を失わせた悪鬼から安全に守られるには、イエスのそばにいればよいと感じていた。イエスが船に乗ろうとなさった時、彼らは主のそば近くについていて、その足もとにひざまずき、イエスのみ言葉が聞けるように、そのそばにおいてくださいと懇願した。しかしイエスは、家に帰って、彼らに自分になさった大いなることを告げるようにとお命じになった。

彼らにはしなければならぬ働きがあった。すなわち異教の家庭に行き、イエスから受けた祝福を告げることであった。救い主から離れることは、彼らにとって、つらいことであった。その異教の同胞と交際するときには、大きな困難に悩まされねばならないだろう。それからまた、長い間、自分たちは社会から離れていたため、この働きにたずさわるには不適當なのではないかなどと考えた。しかしイエスが、彼らの義務を指摘なさると、彼らはただちに従った。

彼らは自分の家族や隣人にイエスについて語っただけでなく、デカポリス中を歩いて、キリストの救いの力を至る所に宣伝し、イエスが悪鬼から自分たちをどんなに救ってくださったかを、説明してまわった。

グラセネの人たちは、イエスを受け入れなかったが、イエスはこの人々がえらんだ暗黒の中に彼らをほっておきにならなかった。イエスに出て行くように命じたとき、人々はイエスのみ言葉を聞いたことがなかったのである。彼らは自分たちが何をこぼんでいるかを知らなかった。だから、イエスはふたりを使って光をお送りになったが、それはその地方の人々が、このふたりの話ならこぼさないことがわかっていたからである。

ぶたを殺すことによって、人々を救い主から退け、その地方に福音がのべ伝えられるのを防ごうとするのがサタンの目的であった。しかしこの事件は、他のどんなことによってもできないほど、その地方の人々を覚せいさせ、イエスに注意を向けさせた。救い主ご自身は退かれたが、イエスがおいやしになった人々が、キリストの力の証人として残った。暗黒の君のなかだちだった者が光を運ぶ者となり、神のみの使者となったのである。イエスがちにデカポリスに行かれたとき、人々はキリストのまわりに押し寄せた。そして三日間というもの、周囲の全地方から幾千人の人々がやってきて、救いの話を聞いた。

このいやされた、ふたりの狂人たちは、キリストがデカポリスの地方に福音をのべ伝えるようにおつかわしになった最初の伝道者であった。ふたりは、ほんのわずかの時間しか、キリストのみ言葉を聞いてはあらず、ただの一回も、キリストの話されるお説教について聞いたことがなかった。彼らは、毎日キリストと一しよにいた弟子たちのように、人々を教えることはできなかった。けれども、自分の知っていること、すなわち救い主の御力について見たこと、聞いたこと、感じたことなどを告げることができた。これは神の恵みで、心に感動を受けたすべての人のできることである。これがわれらの主の求めたもうあかしであり、社会は、これを聞くことができないため、滅びて行っている。

福音は生命のない理論としてではなく、生涯を変化させる生きた力として与えられなければならない。神は人間が、神の恵みによって、キリストのような品性を得、その大きな愛の確証を得て喜ぶことができる事実をあかしするように、しもべたちに望んでおられる。また救いを受け入れようとする者が、皆神のおすこ、娘として、きよい

特権を回復するまで、神は満足なさないことをあかしするように、わたしたちに望んでおられる。

神に最もきらわれるような行いをしてきた者でさえ、喜んで受け入れられる。そして悔い改めるときには、神の霊を与え、不忠な者たちの中につかわして神の情をのべ伝えさせられるのである。墮落してサタンの手先になっていた者でも、キリストの力によって、義の使者とかわり、主が自分たちのために、どれほど大いなることをしてくださったか、また、どれほどあわれんでくださったかを告げるように、おつかわりになるのである。

「わたしはつねにあなたをほめたたえます」

(詩篇七一ノ六)

カペナウムの婦人が信仰の接触によって、いやされたのち、イエスは受けた祝福を認識するように、彼女に望みになった。福音の与える賜物は、ひそかにしまい込んでおいたり、ひとりで楽しむべきものではない。

「『あなたがたはわが証人である』と主は言われる」(イザヤ書四三ノ一二)。神の忠実さについて、わたしたちが告白することは、社会にキリストを表わすために神が選ばれた方法である。わたしたちは古代の聖者によって知らされた神の恵みを認めなければならないが、最も有力なのは自分自身の体験のあかしである。自分の中に神の力が働いていることを表わすとき、わたしたちは神のために証人となるのである。人間は各自、他のすべての人とは異なる生涯を送る。その体験も本質的に他の人とは異なる。神はわたしたちの賛美が、わたしたち自身の個性を表わして神にささげられるように望んでおられる。キリストのような生活を送るとともに神の恵みの栄えを賛

美するとうとい告白は、人々を救うために抵抗できない力となる。

神から受けたすべての恵みをつねに新たに記憶することは自分の益になる。そうすると、信仰が強くなって、だんだん多く求めて受けるようになる。他の人の信仰や経験について読むすべての話よりも、自分自身が神から受けるわずかな祝福の方が、わたしたちをもっとはげますのである。神の恵みを感じ取る人の心は、うるおされた庭園のようになる。その健康はすみやかに栄え、その光は暗きに照り出で、エホバの栄光は彼の上にあらわれる。

「わたしに賜わったものもろの恵みについて、どうして主に報いることができようか。わたしは救いの杯をあげて、主のみ名を呼ぶ。わたしはすべての民の前で、主にわが誓いをつぐなおう」(詩篇一一六ノ二―一四)。

「わたしは生きるかぎり、主にむかって歌い、ながらえる間はわが神をほめ歌おう。どうか、わたしの思いが主に喜ばれるように。わたしは主によって喜ぶ」(詩篇一〇四ノ三三、三四)。

「だれが主の全能のみわざを語り、その誉をことごとく言いあらわすことができようか」(詩篇一〇六ノ二)。

「そのみ名をよび、そのみわざをもろの民のなかに知らせよ。主にむかって歌え、主をほめ歌え、そのすべてのくすしきみわざを語れ」(詩篇一〇五ノ一、二)。「その聖なるみ名を誇れ。主を尋ね求める者の心を喜ばせよ」(詩篇一〇五ノ三)。

「あなたのいつくしみは、いのちにもまさるゆえ、わがくちびるはあなたをほめたたえる。わたしが床の上であなたを思いだし、夜のふけるままにあなたを深く思うとき、わたしの魂は髄とあぶらとをもってもてなされるように飽き足り、わたしの口は喜びのくちびるをもってあなたをほめたたえる。あなたはわたしの助けとなられたゆえ、

わたしはあなたの翼のかげで喜び歌う」（詩篇六三ノ三、五―七）。

「わたしは神に信頼するゆえ、恐れることはありません。人はわたしに何をなし得ましょうか。神よ、わたしがあなたに立てた誓いは果さなければなりません。わたしは感謝の供え物をあなたにささげます。あなたはわたしの魂を死から救い、わたしの足を守って倒れることなく、いのちの光のうちで神の前にわたしを歩ませられたからです」（詩篇五六ノ一―三）。

「イスラエルの聖者よ…：わたしがあなたにむかつてほめ歌うとき、わがくちびるは喜び呼ばわり、あなたがあがなわれたわが魂もまた喜び呼ばわるでしょう。わたしの舌もまたひねもすあなたの義を語るでしょう」（詩篇七一ノ二二―二四）。「あなたはわたしの若いときからのわたしの望み、わたしの頼みです。…：わたしはつねにあなたをほめたたえます」（詩篇七一ノ五、六）。「わたしはあなたの名をよろず代におぼえさせる。このゆえにもろの民は世々かぎりなくあなたをほめたたえるであろう」（詩篇四五ノ一七）。

「ただで受けたのだから、ただで与えるがよい」

（マタイ一〇ノ八）

福音の招待というものは、その範囲を制限して、相手の人が受け入れるならば、わたしたちの名誉になると思われるような特別な少数の人にだけ伝えるべきものではない。使命はすべての人に伝えるべきものである。神が子供たちを祝してくださるのは、彼ら自身のためだけではなく、世界のためである。その恵みをわたしたちにそいで

くださるのは、わたしたちが人にわけ与えることによって、これをふやすためである。

ヤコブの井戸でイエスとお話をしたサマリヤの女は、救い主を見いだすやいなや、他の人々をキリストの所へつれてきた。彼女はキリスト自身の弟子たちよりも有力な伝道者であることを証明した。弟子たちは、サマリヤにはこれが有望な伝道地であるという何のしるしも見なかった。弟子たちは、未来にしなければならぬ大きな働きのことばかり考えていた。そして自分のすぐまわりに刈り入れなければならない収穫があるのを見なかった。しかし弟子たちが軽蔑した婦人によって、町中の人たちがイエスの話をきくようになった。彼女は、ただちにその光を自分の国びとに伝えたのである。

この女はキリストを信ずる実際的な信仰の働きを代表している。すべての真の弟子は伝道者として、神の国に生れたのであって、救い主を知るやいなや、他の人々にもキリストを知らせたいと思う。人を救いきよめる真理は、心の中に秘めおくことができない。生ける水をのむ人は、自分も生命の泉となる、つまり受ける人が与え手となることである。心の中にあるキリストの恵みは砂漠の中の泉のようにわき出てすべての者を生き返らせ、滅びようとする者に生命の水を熱心に求めさせる。こういう働きをすると、単に自分を益するために努力するよりも大きな祝福を受ける。救いのよき音信をひろめるために働くことによって、わたしたちは救い主に近づくのである。

主の恵みを受ける人々について、主は「わたしは彼らおよびわが山の周囲の所々を祝福し、季節にしたがって雨を降らす。これは祝福の雨となる」と仰せになる(エゼキエル書三四ノ二六)。「祭の終りの大事な日に、イエスは立って、叫んで言われた、『だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい。わたしを信じる者は、聖書

に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう』(ヨハネ七ノ三七、三八)。

受ける者は他に与えなければならない。すべての方面から助けを求められている。神は人間が喜んで他の人々に奉仕するように要求しておられる。また、その人々は不死の冠を得なければならない。知らずに滅び行く世界に光を与えなければならない。「あなたがたは、刈入れ時がくるまでには、まだ四か月あると、言っているではないか。しかし、わたしはあなたがたに言う。目をあげて畑を見なさい。はや色づいて刈入れを待っている。刈る者は報酬を受けて、永遠の命に至る実を集めている。まづ者も刈る者も、共に喜ぶためである」(ヨハネ四ノ三五、三六)。

「見よ、わたしは世の終りまで、いつも

あなたがたと共にいるのである」(マタイ二八ノ二〇)

三年間弟子たちはイエスのりっぱな模範を見てきた。毎日キリストと共に歩み、語り、重荷を負って、疲れている者にキリストがおかけになる励ましのお言葉をきき、病める者や、苦しむ者のために、その力のあらわれるのを見てきた。そしてイエスが、弟子たちをあとにして、行かれるときがきたとき、キリストはそのみ名によってキリストの働きを前進させる恵みと力をお与えになった。彼らは愛といやしのキリストの福音の光を広く輝かすはずであった。救い主は、いつも彼らと共にあることを約束なさった。キリストは、目に見える姿で人々の間を歩まれたときよりも、なおいつそう聖霊によって彼らの近くにあらわれるはずであった。

弟子たちがした仕事を、わたしたちもしなければならぬ。クリスチャンは、だれでもみな伝道者でなければな

らない。助けを必要としている人に同情といつくしみをもって奉仕し、無我の熱心さをもって、苦しむ人々のわざわいを軽くするように努力しなければならないのである。

だれでも何かすることを見いだすことができる。キリストのために自分には働き場がないと考える必要はない。救い主はご自分を人類のすべての子供と等しくなさった。わたしたちが天の家族の一員となるためにキリストはこの世の家族の一員となられたのである。キリストは人の子であるから、アダムの子であるすべての子に、娘の兄弟となれる。そのしもべたちは、自分のまわりの滅び行く世界と分離されているかのように思ってはならない。彼らは人類という大家族の一部であって、天は彼らを聖徒たちの兄弟としてみるとともに罪びとの兄弟とみるのである。

幾百万の人類は病氣と無知と罪の中にあって、自分たちに対するキリストの愛をまだ耳にしたことがない。わたしたちの状態とその他の人たちの状態が反対となるなら、わたしたちは、彼らに何をしてもらいたいだろうか。これはみな、わたしたちの力によってできる限り、彼らのためにしなければならないことなのである。審判で、わたしたち各自が立つか倒れるかを定めるところのキリストの生命の法則は、「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりによせよ」である（マタイ七ノ一二）。

教育であれ教養であれ、りっぱな品性あるいはクリスチャンとしての訓練や宗教的体験であっても、すべてそういうものによって他の人よりも特権を与えられているわたしたちは、それほど恵まれていない人々に対して、責任を負わされているのである。わたしたちはできる限りその人々に奉仕しなければならない。もし自分が強ければ、弱い者の手をささえなければならない。

天の父のみ顔をつねに見る輝いたみ使たちは神の小さな子供たちに奉仕することを喜ぶ。天使たちは一番必要とされる所にいつもいて、自我と最もはげしい争いをしている人や、最も失望的な環境にある人のそばでいつも働いている。多くのよくない性格をもった弱い臆病な人々にも、天使たちの特別な保護がある。利己的な人がはざかしい仕事と思うようなこと、すなわち、あらゆる方面に劣った素質をもつ不幸な人々に仕えることが、天よりの罪のない純潔な天使たちの働きである。

イエスは、わたしたちが滅びるようであるなら、天をのぞましい場所とお考えにならなかった。そのため非難嘲笑の生涯や屈辱の死もおいといなく、天の宮廷を後になさった。天の無限の富をお持ちになった彼は、貧しくおなりになったが、それは彼の貧しきにより、わたしたちが富める者となるためであった。わたしたちも彼の歩まれた道に従って行かねばならない。

神の子となる者はそのときから世を救うためにおろされた鎖の一環と自分を考え、イエスのあわれみ深いご計画においてキリストと一つになり、失われた者をたずねて救うために、キリストと共に出て行かなければならない。

多くの人はこの地上でキリストが生活なさった場所を訪問し、キリストが歩まれた道を歩み、キリストがそのほとりでお教えになるのを愛好なさった湖水をながめ、しばしばイエスがその目をお休めになった丘や谷をながめることができたなら、大きな特権だろうと思う。しかしわたしたちはイエスのみ足の跡をたどるために、ナザレやカペナウムやベタニヤに行く必要はない。病床のそばに、貧しいあばらやに、あるいは、大都市の雑踏した狭い裏通りに、そして人の心が慰めを必要としているどこにでも、イエスのみ足跡を見いだすのである。

わたしたちは飢えた者に食を与え、裸の者に着せ、苦しみ悩む者を慰めなければならない。気落ちした者に仕え、望みなき者に希望をおこさせなければならない。

無我の奉仕にあらわされるキリストの愛は、悪人を改めさせるのに剣や法廷よりも力がある。これらのものは、犯罪者を恐怖させるには必要だが、愛のある伝道者は、これ以上のことができるのである。しかられて頑固になつた心も、キリストの愛にはとけることが多い。

伝道者は肉体の病をいやすことができるばかりでなく、罪という癩病から心をきよめてくださることのできる大医師に罪びとを導くことができる、神はそのしもべをおして病人や不運な者、悪霊につかれた者たちが、神のみ声をきくように計画なさっている。働き人をおして、世がまだ知らないほどの慰め主となることをお望みになるのである。

救い主は苦しむ者、悲しむ者、誘われた者に奉仕することのできる教会を建てるために、ご自分のとうとい生命をお与えになった。信者の一団は貧しく無教育で、名もない人々かもしれないが、キリストによって働くとき、家庭において、あるいは社会で、または「越えたさきぎきにまで」（コリント第二・一〇ノ一六）にも、永遠に及ぶような働きをすることができる。

最初の弟子たちに語られたときと同じように、今日のキリストの弟子たちに対しても次の言葉が告げられている。「わたしは天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を…教えよ」（マタイ二八ノ一八、一九）。「全世界に出て行って、すべてのつくられたものに福音をのべ

伝えよ」(マルコ一六ノ一五)。

そしてわたしたちにも「見よわたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(マタイ二八ノ二〇)とのご臨在の約束が与えられている。

今日、好奇心にかられた群衆が、キリストを見、そのお話を聞こうとして野に集まるわけではない。そのみ声はにぎやかな町に聞えない。「ナザレのイエスがお通りなのだ」という叫びは路傍から聞えてこない(ルカ一八ノ三七)。しかし、今日もなおこの言葉は事実である。キリストは人に見られないでわたしたちの町を歩いておられる。情深い言葉をかけに、わたしたちの家を訪れてくださる。彼のみ名によって奉仕したいと思うすべての者に、キリストは協力しようと待っておられる。もしキリストを受け入れさえすれば、彼はわたしたちの中にあっていやし、祝してくださる。「主はこう言われる、『わたしは恵みのときに、あなたに答え、救いの日にあなたを助けた。わたしはあなたを守り、あなたを与えて民の契約とし、国をおこし、荒れすたれた地を嗣業として継がせる。わたしは捕えられた人に『出よ』と言い、暗きにおる者に『あらわれよ』と言う』」(イザヤ書四九ノ八、九)。「よきおとずれを伝え、平和をつげ、よきおとずれを伝え、救いをつげ、シオンに向かつて『あなたの神は王となられた』と言う者の足は山の上にあつて、なんとうるわしいことだろう」(イザヤ書五二ノ七)。「エルサレムの荒れすたれたところよ、声をはなつて共に歌え。主はその民をなぐさめ、エルサレムをあがなわれたからだ。主はその聖なるかみなを、もろもろの国びとの前にあらわされた。地のすべての果ては、われわれの神の救いを見る」(イザヤ書五二ノ九、一〇)。

第二部

医者の働き

第七章 神と人との協力

医者は、いやしの奉仕において、キリストの協力者とならなければならない。救い主は心とからだの両方面に奉仕なさった。彼がお教えになった福音は霊的生命と肉体の回復を与える使命であつた。罪からの救いと病のいやしは連結したものであつて、この同じ働きが、クリスチャンの医者にまかされている。彼はキリストと結合して、人の肉体と霊の要求に応じなければならない。病人のために恵みの使者となり、病めるからだに罪になやむ心に助けを与えなければならない。

キリストは、医療に従事する者の真の頭である。最高の医者であるキリストは、人類の苦しみを除くために働くすべての敬けんな医者 of そばについておられる。医者は、肉体の病をいやすために自然の療法を用いると同時に、心とからだの病をなおすことのできるお方をその患者に示さなければならない。医者は助けになることしかできないが、そのすべてをキリストはなし果される。医者は自然の治療の働きを助けようと努力するが、キリストご自身はいやしの手である。医者は生命を維持しようと努力するが、キリストは生命をお与えになるのである。

いやしの源

救い主は、人間を支持し、いやすために絶えず働いている力を、その奇跡によってあらわされた。自然界の手段

を通して神は毎日、時々刻々にわたしたちの生命を継続させ、増進し、回復するために働いておられる。からだのどの部分でも、傷をつけると、治癒の働きがすぐに始まり、自然の力が健康を回復するために働き始める。しかし、これらのものを通して働いている力は神の力なのである。人が病気からなあるときは神がおいやしになるのである。病気や苦痛や死は神に反する力のわざである。サタンは破壊者であり、神は回復者である。

「わたしは主であって、あなたをいやす者である」とイスラエル人に告げられたみ言葉はからだの健康、心の健康を取り戻す人々にとって、今日も事実である（出エジプト記一五ノ二六）。

すべての人間に神が望みになることは、「愛する者よ。あなたのたましいがいつも恵まれていると同じく、あなたがすべてのことに恵まれ、またすこやかであるようにと、わたしは祈っている」（ヨハネ第三ノ二二）とのみ言葉の中に表現されている。「あなたのすべての不義をゆるし、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを墓からあがないだし、いつくしみと、あわれみとをあなたにこうおらせ」になるのはキリストである（詩篇一〇三ノ三、四）。

病の原因である罪

キリストは病気をおいやしになったとき「もう罪を犯してはいけない。何かもっと悪いことが、あなたの身に起るかも知れないから」と病人の多くに警告なさった（ヨハネ五ノ一四）。こうしてキリストは、彼らが神の律法を犯すことによって病気を招いたのだということ、健康は服従によってのみ保たれるのだということをお教えになった。

医者は患者に、健康を回復するためには神と協力しなければならないことを教えなければならない。医者は、病気が罪の結果であるという事実の認識をますます深めている。そして、自然の法則は十戒のいましめと等しく神聖なものであって、それに従うことによってのみ健康は回復し、維持されるものだということもわかっている。さらにまた、有害な習慣の結果として苦しんでいる多くの者は、健康を回復するために自分たちのできることをするならば健康になれるということも医者は知っている。病人には、その体力、知力、精神力を破壊するすべての行為は罪であること、また人類すべての益のために神が制定なさった法則に服従することによって、健康は確保できるとなどを教えなければならない。

医者が不正な飲食やその他のまちがった習慣によって招いた病気で苦しんでいる患者をみて、そのことを彼に告げないならば、その医者は、その人に害を与えていることになる。酒飲みや、狂人や放縦な生活をしている人々は、みな苦しみは罪の結果であるということをはっきり告げるように医者に訴えているのである。生命の原則を理解する者は、病気の原因をなくしていくように熱心に努力しなければならない。疼痛との絶えざる戦いを見、苦痛をやりわらげるためにたえざる努力をしながら、医者はどうしてだまっていられよう。厳格な節制は病気の治療法だということをお教えしない医者は、情深い医者とは言えない。

生命に関する神の法則

神の律法の道は生命の道であることを明らかにしなければならない。神は自然の法則を制定なさったが、それは

専横的な強制ではない。すべて「してはならない」とある場合、それが肉体的な法則であっても、道徳律であつても、約束が含まれているのである。服従すれば祝福が与えられる。神は決して正しい事を行うように強制なさらないが、わたしたちを悪より救つて良い方へ導こうと努力なさっている。

イスラエルに教えられた法則に注意をしよう。神はイスラエル人の生活習慣に関して明確な訓示をお与えになった。神は、肉体と精神の健康に関する律法をお与えになって、服従するという条件のもとに「主はまたすべての病をあなたから取り去る」と、彼らに約束なさった。「あなたがたはわたしが、きょう、あなたがたに命じるこのすべての言葉を心におさめ」（申命記三二ノ四六）。「それは、これを得る者の命であり、またその全身をすこやかにするからである」（箴言四ノ一二）。

神はキリストという賜物によって、わたしたちが到達できるようにしてくださったその完全の標準に達することを望んでおられる。神はわたしたちが正しい側を選び、天の助け手と相たずさえて、神のみ姿をわたしたちの中に回復させる法則を実行するように招いておられる。神のみ言葉や自然という偉大な書のうちに神は、生命の法則をお示しになった。これらの法則に関する知識をもち、心身に健康を回復するためにこれに服従して彼と協力するのがわたしたちの務である。

健康の福音

人は、ただキリストの恵みを受けることによって、服従の全き祝福を得られるのだということを学ばなければな

らない。神の律法に従う力を人に与えるのは神の恵みである。これが人間に悪習慣の束縛から脱する力を与える。人間を正しい道に歩ませ、たえずその道にすすませることのできる唯一の力がこれなのである。

福音がその純潔さと力をもったまま受け入れられるときに、それは罪によって生じた病気をいやす。義の太陽は「その翼には、いやす力をそなえて」のぼる（マラキ書四ノ二）。この世の与えるものは、失望した心をいやし、精神の平和を与え、憂いを除き、あるいは病気を払いのけることができるとはかぎらない。名声、天才、才能などといったものは、悲しみに満ちた心を喜ばせたり、衰えた生命を回復するためには無力である。魂の内にある神の生命が人間の唯一の望みなのである。

全身に及ぶキリストの御愛が人を活気づける力となるのである。それはすべての重要な部分すなわち脳や心臓や神経にいやす力をもつて触れる。それによって人間の最高のエネルギーが覚せいされ、活動するようになる。これは生命力を破壊するような罪と悲しみ、憂慮や心労から人間を解放する。そして平静さと落ち着きを与える。またそれはこの世の何ものも破壊することのできない喜び、すなわち聖霊による喜び、健康的なまた生命を与える喜びを心の中に植えつける。

「わたしのものにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」との救い主のお言葉は、肉体と精神と霊の病気をいやす処方である。人間は自分のまちがった行為によって苦痛を自ら招いたにしても、キリストはあわれんでごらんになる。彼らはキリストに助けていただくことができる。彼に頼る者のためにキリストは大いなることをしてくださる。

何世紀もの間、罪は人類をつかんでいる手を強め、虚偽と策略によってサタンは神の言葉に解説の暗影をなげて、神の恵みを人間に疑わせてきたが、それでも父の情と愛は、この地上に向けて豊かに流れることをやめていない。もし人間が心の窓を天に向けて開き、神の賜物を感謝するならば、いやしの力は豊かに流れ込むのである。

十分な資格の価値

キリストに喜ばれる共労者となることを望む医者には自分の働きのすべての面に有能な医者になろうと努力する。彼は自分の職業の責任を果すために十分な資格を備えようとして熱心に研究する。知識を増し、技術を高め、識別力を深めようと努力しながら、たえず高い標準に達しようとする。手腕のないへたな仕事をする医者は病人を害するばかりでなく、その同僚の医者に対しても不正なことをしているということを認識しなければならぬ。低い標準の技術と知識に満足する医者は医者としての職業をいやしめるばかりでなく、大医師キリストをはずかしめるのである。

医者の仕事に不適當だということを知ったら、他の職業を選ぶべきである。病人の看護に非常に適していないながら、教育や医者としての資格が足りない人は、医療の働きでもっと地味な働きに携わり、看護人として忠実に奉仕するのがよいであろう。じょうずな医者の下で忍耐強く働くならば、たえず学ぶことができ、知識を得るすべての機会を利用することによって、いつかは医者へのわざをするのに十分な資格がそなえられるようになるかもしれない。若い医者は「神（大医師）」と共に働く者として、神の恵みをいたずらに受け（ず）……このつとめがそしりを招かないために、わたしたちはどんな事にも、人につまずきを与えないようにし、かえって、あらゆる場合に、神の僕

として、自分を人々にあらわすべきである（コリント第二・六ノ―四）。

神のわたしたちに対するみこころは、わたしたちがたえず進歩上達することである。真の医事伝道の医者は、ますます技術をみがく医者である。すぐれた職業的能力をもつ、才能のあるクリスチャンの医者をさがして、他の人を医事伝道者に教育訓練できるような場所で、神の働きに携わるように奨励すべきである。

医者は自分の心に神のみ言葉の光を集めなければならない。彼はたえず神の恵みの中に成長して行かなければならない。医者にとっては、宗教が単に他のいろいろの力の中の一つであってはならない。それは他のすべてを支配する勢力でなければならない。医者は高い、清い動機から行動しなければならない。それは悪に勝つ力をわたしたちに与えるために、その生命をささげられたキリストから出る有力な動機である。

もし医者が自分の職業に有能になろうとして忠実に、勤勉に努力し、キリストの働きに献身し、時間をとって自分を反省するなら、彼の神聖な職業の奥義をつかむ方法を理解する。その人が自分をよく訓練し教育するときに、その感化を受ける範囲内にいるすべての人は、知恵と力の神につらなる者のうける教育や知恵の優秀さを認める。

病室内の助け手である神

医者働きほどキリストと近く交わる必要のある仕事は他にない。医者の仕事を正しく行いたいと思うなら、毎日毎時間クリスチャン生活を送らなければならない。患者の生命は医者の中にある。危険な状態にある患者に与えられたわずか一回の不注意な診断、一枚の誤った処方、あるいは手術に際して一度でもへたに手を動かすなど、

ささいなこのために生命が犠牲にされ、魂が永遠に失われてしまう。なんと厳粛なことであろう。医者が神なる医師の支配下につねにいることは、どんなにたいせつなことであろう。

救い主は知恵と明せきな思考力を求める者を喜んでお助けになる。すべてその判断によって大事が左右される医者ほど知恵と明せきな思考力を必要とする者が他にあるか。生命を長引かせようと努力している者はあらゆる動作を導いていただくために信仰をもつてキリストを仰ぐべきである。救い主はあぶない病人を取り扱う時に技術とこつをお与えになる。

病人を保護する者にすばらしい機会が与えられている。病氣回復のため、患者が神と力を合わせて病氣と戦うのを医者は助けようと努めていることを患者にわからせるべきである。神の律法のとおりに進んでいけば、いつでも神の力の助けを受けることができると思わせるように導かなければならない。

病人や苦しんでいる者は神を愛し敬う医者に対して、いつそう大きな信頼を持ち、その言葉にたよるものである。また、そのような医者のある場所、あるいは、その様な医者の手当に対して安心感をいただくのである。

主イエスを知り、祈りによって病室に主を招くことはクリスチャンの医者の特権である。危険な手術の前には医者は大医師の助けを請うべきである。神はそのきびしい試練を無事に通過させたもうお方であり、すべて苦難の時に神にたよる者にとって確かな避け所であることを病人に確信させなさい。これができない医者は助かる病人もつぎつぎに失ってしまう。痛みのつづきまでをすべて感じたもう情深い救い主に信仰を持たせるような言葉を医者が語り、その人のために神に祈り求めることができたなら、危険状態を脱しうる場合がもっと多くなるであろう。

外科医の手で手術を受けることを、多くの患者がどんなに恐れ、こわごわながら手術に同意しているかは、人の心の中を知っておられる神だけがわかりなのである。患者はその危険を悟っており、医者、医者の技術を信頼している、やはりまちがいがありうることを知っている。しかし、医者が頭をたれて祈り、神の助けを求めているのを見ると信頼の念を起す。感謝と信頼の念が患者の心を開き、そこに神のいやしの力を受け、全身の力は活気づき生きる力が勝利するに至る。

医者にとつても救い主の臨在は力の要素である。仕事の責任と万一のことを考えると医者はよく恐怖に襲われる。不安と恐怖で動揺する手は不器用になる。しかし天の相談相手が自分のかたわらにおられて導き、またさえておられるという確信は平静と勇気を与える。医者の手に触れるキリストの手は、活気と平安と信頼また力をもたらす。危機を無事に通過し回復が明らかになった時、医者はしばらくの間を患者と共に祈りのうちに過ごさなければならぬ。そして、救われた生命のために自己の感謝を表現しなさい。感謝の言葉が患者から医者に語られたとき、その賛美と感謝を神に向けなさい。その生命は天の医者、医者の守りを受けて救われたのだということを患者に告げなさい。そうする医者は、患者が生きたためにたよらねばならないお方、彼に来るすべての者を完全に救うことができるお方に患者を導いているのである。

魂への奉仕

医事伝道の中には魂を求める深い思いが加えられなければならない。医者には福音を伝える牧者と同様に

人間に与えられた最高の責任が委託されている。認識してようがいまいが、医者はいかなる魂をいやす責任を負わされている。

病気や死を取り扱う仕事をしながら、医者は将来の生命という厳粛な事実を忘れていることがあまりに多い。身体の危険を取り除こうと努力するあまり、魂の危険を忘れてしまう。彼らのみている患者が生命を失おうとしているかもしれない。しっかりと握った手からいつの間にか最後の機会が逃げ去っていく。医者はキリストの審判の座においてこの魂と再び会わなければならない。

わたしたちは時にかなった言葉を語らないために、最も尊い祝福を失うことがよくある。気をつけていないと絶好の機会を失ってしまう。病床では信条について語ったり、議論をしてはいけない。信仰をもって来る者をすべて喜んでお救いになる神に病人を向けなさい。生死の間をさまよっている魂を助けるため熱心に優しく努力しなさい。

自分もその避け所に導かれた経験から、キリストが自分の個人的な救い主であることがわかつている医者は、罪に悩み、恐れおののいて助けを求めている魂を取り扱う方法を知っている。そういう医者は「わたしは救われるために、何をすべきでしょうか」という質問に答えられ、あがない主の愛の物語をすることができ、悔い改めと信仰の力の体験を語ることができる。簡単な熱心な言葉で魂の要求を神に祈り求め、また病人にも情深い救い主のあわれみを祈り、そして受けるように勧めることができる。こうして病床で奉仕し、助けや慰めを与えるような言葉を語ろうと努力するとき、主は彼と共にまた彼を通して働かれる。苦しむ者の心が救い主に向けられると、キリストの平安はその心を満たし、霊的な健康が与えられ、それが肉体の健康を回復する神の助けの手となって役立つ。

医者には、病人につきそっていると、その病人の親族友人に伝道をする機会がよくある。激痛一つ防ぐ力が無いのを感じ、苦しむ者の枕頭で見守っているとき、そうした人々は気がやさしくなっている。そして他人に表わさないような悲しみを医者に向かって表現することがある。こういふときこそ、疲れた者や重荷を負う者に「きなさい」とお招きになっているキリストをこのように悲しんでいる人々に示す機会である。しばしばその人たちのために共に祈り、あらゆる苦悩をいやし、すべての悲しみを和らげられる神に、その要求を告げることができる。

神の約束

医者には神のみ言葉の約束に患者の心を向ける尊い機会がある。医者は宝の倉から新しいものと古いものを取り出し、患者が切望している慰めと教訓になる言葉をいろいろと語るべきである。医者は自分の頭を、生き生きとした考えの倉とすべきである。神の約束がよくわかるように医者は神のみ言葉を熱心に研究する必要がある。神のこゝとを教え、病人をいやすときに、キリストがこの地上に伝道されていたとき、お語りになった慰めの言葉を繰り返すことができるようにすべきである。キリストがお働きになったいやしの業や、その優しさや愛について語るべきである。患者の気持を大医師であるキリストに向けることを決して怠ってはならない。

キリストが目に見える姿で人々の間を歩かれていた間、お使いになったのと同じ力がキリストのみ言葉の中にある。そのみ言葉によってイエスは病気をいやし、悪鬼を追い出された。言葉によって海をしずめ、死人をおよみがえらせになった。人々がキリストのみ言葉に力があることをあかしした。神が旧約のあらゆる預言者や教師にお語

りになったように、キリストは神の言葉をお語りになった。聖書全体がキリストを表わすものである。

聖書は単に書かれたものとしてだけでなく、わたしたちに向かって語られた神のみ言葉として受けなければならない。病人がキリストのところに来たとき、キリストは、そのとき助けを求めた者だけを喜んでくれたのではなく、同じ要求同じ信仰をもってキリストに来る各時代の人々をも喜んでくれる。中風の人に向かって「子よ、しっかりしなさい。あなたの罪は許されたのだ」と言われたときも、カペナウムの婦人に向かって「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい」と言われたときも、イエスに助けを求めなければならない他の病人や罪に悩む人々に向かって語られたのであった。

神のみ言葉の約束はみなそうである。それらの約束を通して神はわたしたちひとりひとりに向かって語られ、また、直接にみ声を聞いているかのように語っておられる。これらの約束によってキリストは恵みと力をわたしたちにお与えになる。それは「万国の民をいやす」木の葉である。これを受け入れ、自分のものとするとき、品性の力となり、霊感が与えられ、生命を支持する者となる。こういういやしの力を持った者は他にない。これ以外にどんな者も全身に活力を与え、勇気と信仰を授けることはできない。

恐怖にふるえながら死に近づいている者や、苦難や罪の重荷で疲れている人に、医者には機会あるごとに救い主のみ言葉を語るべきである。聖書の言葉はすべてキリストのみ言葉だからである。

「恐れるな、わたしはあなたをあがなった。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのものだ。あなたが水の中を過ぎるとき、わたしはあなたと共にある。川の中を過ぎるとき、水はあなたの上にあふれることがない。

あなたが火の中を行くとき、焼かれることもなく、炎もあなたに燃えつくことがない。わたしはあなたの神、主である。イスラエルの聖者、あなたの救い主である。…あなたはわが目に尊く、重んぜられるもの、わたしはあなたを愛する」(イザヤ書四三ノ一―四)。「わたしこそ、わたし自身のためにあなたのとがを消す者である。わたしは、あなたの罪を心にとめない」(二五節)。「恐れるな、わたしはあなたと共にある」(五節)。

「父がその子供をあわれむように、主はおのれを恐れる者をあわれまれる。主はわれらの造られたさまを知り、われらのちりであることを覚えていられるからである」(詩篇一〇三ノ一三、一四)。

「ただあなたは自分の罪を認め、あなたの神、主にそむい…たことを言いあらわせ」(エレミヤ書三ノ一三)「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめてくださる」(ヨハネ第一・一ノ九)。

「わたしはあなたのとがを雲のように吹き払い、あなたの罪を霧のように消した。わたしに立ち返れ、わたしはあなたをあがなったから」(イザヤ書四四ノ二二)。

「主は言われる、さあ、われわれは互に論じよう。たといあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ。もし、あなたがたが快く従うなら、地の良き物を食べることができる」(イザヤ書一ノ一八、一九)。

「わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきた」(エレミヤ書三一ノ三)。「あふれる憤りをもって、しばしわが顔を隠したけれども、とこしえのいつくしきをもつ

て、あなたをあわれむ」(イザヤ書五四ノ八)。

「あなたがたは、心を騒がせないがよい」(ヨハネ一四ノ一)。「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな」(ヨハネ一四ノ二七)。

「おのおの風をさける所、暴風雨をのがれる所のようになり、かわいた所にある水の流れのように、疲れた地にある大きな岩の陰のようになる」(イザヤ書三一ノ二)。

「貧しい者と乏しい者とは水を求めても、水がなく、その舌がかわいて焼けているとき、主なるわたしは、彼らに答える、イスラエルの神なるわたしは彼らを捨てることがない」(イザヤ書四一ノ一七)。

「あなたを造り…主はこう言われる。」「わたしは、かわいた地に水を注ぎ、ひからびた地に流れを注ぎ、わが霊をあなたの子らにそそぎ、わが恵みをあなたの子孫に与えるからである」(イザヤ書四四ノ二、三)。

「地の果てなるもろもろの人よ、わたしを仰ぎのぞめ、そうすれば救われる」(イザヤ書四五ノ二二)。

「彼は、わたしたちのわずらいを身に受け、わたしたちの病を負う」(マタイ八ノ一七)。「しかし彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために碎かれたのだ。彼はみずからこらしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ」(イザヤ書五三ノ五)。

第八章 教育者としての医者

眞の医者は教育者であり、直接自分がみている病人ばかりでなく、自分が住んでいる社会に対しても責任を感じる。彼は肉体と精神の健康の保護者として、病気の正しい治療法を教えるだけでなく、生活の正しい習慣を人々に勧め、正しい法則に関する知識を広めるために努力する。

健康の法則に関する教育の必要

健康の法則に関する教育が今日ほど必要な時代は今までなかった。生活をらくにし、便利にすることについてはいろいろな方面で驚くほどの進歩を遂げ、衛生問題や病気の治療に関してもそうであるが、それにもかかわらず、体力、耐久力の減退は憂慮すべきものがある。人間の健康を深く心にかけている人々は皆この問題に注意を払う必要がある。

わたしたちの人工的な文化は健全な法則を破壊する罪悪を助長する。風習や流行は自然に逆らい、それに伴う習慣、不節制のため体力と知力は徐々に減退し、人類に堪え難い重荷を招来している。不節制と犯罪、疫病と悲惨が

至るところに起きている。

多くの人は知らずに健康の法則を犯している。そうした人々には教育が必要であるが、わかっていながら行わない人がもっと多くいる。こういう人々には健康の法則の知識を人間生活の道案内とすることがどんなに重要であるかを深く感じさせなければならない。医者は健康の法則の知識を与え、また、その実行が大切であることを示す機会が多くあるし、正しい教育によって測り知れぬ害を及ぼしている悪事を矯正するのに大いに尽すことができる。

薬品の使用

有毒な薬品をむやみに使うことは多くの病気のもととなり、もっと悪いことの原因となる。病気になってもその原因を調べるのにほねをおることは少ない。ただ苦痛と不便を取り除くことに病人は最も心配する。その結果、実際の性質がほとんどわからない売薬にたよるか、または、自分の不健康な習慣を変えようとは思えないで、自己のまちがったやり方の結果を打ち消すために何らかの治療を医者に求める。そして、すぐ効果がないと、次から次へと薬をためしてみる。こうして、わざわざいが絶えないのである。

薬は病気をなおさないことを人々に教えねばならない。一時的な助けとなることがあるのは確かで、薬を使ったため回復したかのようにみえるが、それは体力の中に毒素を排泄して病気を引き起していた状態をなおすに十分な活力があったからであって、薬品を使用しなくても健康は回復したのである。しかし、たいていの場合は、ただ、病気の性質と所在を変化させるにすぎない。しばしば毒素の影響が一時おさえられたようにみえるが、その結果は

組織に残り、後日、非常な害を及ぼすに至る。

有毒な薬品を使用するため多くの人が終生の病を招き、自然の療法を使えば助かったのに多くの生命が失われていく。いわゆる、治療薬と呼ばれている大多数の薬品に含まれている毒は心身の破滅をきたすような習慣や食欲を作る。特許薬と呼ばれている有名な売薬中の多くのものや医者が処方したある種の薬でさえ飲酒や阿片、モルヒネの習慣の基礎を築く助けとなるが、これは社会にとって非常に恐ろしい災である。

自然力が持つ回復の力

改善への唯一の望みは人々を正しい原則に教育することである。薬に回復力があるのでなく、自然のうちにあることを医者は人々に教えるべきである。病気とは健康の法則を犯した結果起った状態から身体組織を解放しようとする自然の営みである。病気の時にはその原因を確かめねばならない。不健康な状態を変え、まちがった習慣はなおさなければならぬ。そして不純物を排泄し、組織を正常な状態に戻そうとする自然の営みを助けなければならない。

自然療法

新鮮な空気、日光、節制、休養、運動、正しい食事、水の使用、そして神の力にたよること、これが真の療法である。各自が自然のうちにある治療に役立つものを知り、これをどう用いるかを知らなければならない。病気の治

療に関する原理を理解すること、この知識を正しく活用しうる実際の訓練を受けることがたいせつである。

自然療法を用いるには相当の配慮と努力が必要であるため、喜んで実施する人は少ない。自然がもつ治癒と回復の過程は緩徐であつて、忍耐力が欠けている者にはおそくみえる。また、有害な不節制をやめるには犠牲がいる。しかし自然力の働きを拘束しなければ、最後には、自然はじょうずにまた賢明に、その働きを仕遂げることがわかるであろう。自然の法則に忍耐強く服従するものは心身の健康という報いを刈り取るのである。

健康の保持

一般的に健康の保持にはほとんど注意が払われていない。しかし、病気になったときに治療の方法を知るよりも病気を予防する方がはるかに良いのである。生命の法則をよく知り、良心的に従うことは自分自身のためにも、また人類のためにもしなければならない個人の義務である。すべての生物の中で最も驚くべき人体については、だれもがよく知っていないなければならない。さまざまな器官の作用を理解し、全体が健康的に活動するためには各器官が相互依存の関係にあることを理解すべきである。精神が肉体に及ぼす影響、肉体が精神に及ぼす影響をはじめそれを支配している法則を学ばなければならない。

人生の苦闘に備える訓練

健康は偶然手にはいるものではないことを、わたしたちはよく忘れる。健康は法則に服従した結果である。この

ことは競技や体力試験に出場する人が認めている。これらの人々はたいへん注意ぶかく準備をする。彼らは周到な訓練と厳格な修業に従い、肉体的な習慣を一つ一つ注意して調節する。どんな、器官、機能に対しても、それを弱めたり、その働きを妨げるような粗略な取り扱い、やり過ぎ、不注意などは必ず敗北をきたすことを知っている。

人生の戦いに成功するためには、これ以上に細心になることがどんなにたいせつなことであろう。わたしたちは戦いのまねをしているのではない。永遠の結果が決まる戦いをしているのである。ぶつからねばならない、目に見えぬ敵がいる。悪天使は全人類を支配しようと努力している。健康を害することは、身体の元気をなくすばかりでなく、知脳の力や精神力をも弱める傾向がある。たとえ、どんな不健康な習慣にでもふけるならば、いつのまにか正と不正との識別ができにくくなり、従って悪に対する抵抗が一段と困難になる。これは失敗、敗北の危険性を増すことになる。

「競技場で走る者は、みな走りはするが、賞を得る者はひとりだけである」(コリント第一・九ノ二四)。わたしたちが経験しているこの戦いでは正しい原則に服従することによって自己を訓練する者は皆勝つことができる。これらの原則を生活の細部にわたって実行する事はそう重要ではないと考える人がよくある。あまり小さい問題で、関心を払う必要がないと彼らは思うのである。しかし、将来の終局を考えると、わたしたちに関係のあることの中から些細なものは一つもない。すべての行動が人生の勝利か敗北を決定するはかりにかけられる。聖書の中にも、「あなたがたも、賞を得るように走りなさい」と命じられている。

わたしたちの最初の先祖は不節制のためにエデンを失った。それを回復するには人間が考えている以上に、万事

に節制をすることが必要である。

古代ギリシャの競技に出場した選手が守った克己をさして、「しかし、すべて競技をする者は、何ごとにも節制をする。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするが、わたしたちは朽ちない冠を得るためにそうするのである。そこで、わたしは目標のはっきりしないような走り方をせず、空を打つような拳闘はしない。すなわち、自分のからだを打ちたたいて服従させるのである。そうしないと、ほかの人にのべ伝えておきながら、自分は失格者になるかも知れない」と使徒パウロはしるしている（コリント第一・九ノ二五―二七）。

改革の基礎

根本的な真理を明らかに認めることによって改革は進歩する。狭い哲学や冷厳な教義信奉には危険があるが、また同時に、不注意な自由主義にも大きな危険がある。すべて永続性のある改革の基礎は神の律法である。この律法に従う重要性をわれわれは明白、鮮明な言葉で示さなければならない。人々の前にその原則を掲げなければならない。それは神ご自身のように永遠のものであり、動かないものである。

最初の背教の結果起った最大悲惨事の一つとして自制力を失ったことがあげられる。この力が回復されなければ真の進歩はあり得ない。

肉体は知脳や精神が品性向上へと発達するための唯一の媒体である。だから魂の敵は内体の能力をそれぞれ弱らせ、退化させる方向にその誘惑の手をのばす。彼がこれに成功すれば、全身を悪に服従させることになる。より高

い力によって支配されていなければ、わたしたちの生れつきの性質は破壊と死をもたらすに至る傾向があることは確かである。

肉体を服従させなければならない。わたしたちの高潔な能力が支配すべきである。情欲は意志によって統御され、意志は神の支配下になければならない。神の恵みによってきよめられた、りっぱな理性の力が、わたしたちの生涯において支配権を握るべきである。

神の要求を良心に徹底させなければならない。男女ともに自己に勝利し、純潔の必要を感じ、すべて、放らつな食欲や汚れた習慣を捨てる義務があることを自覚しなければならない。彼らはあらゆる心身の能力が神のたまものであり、それらを神の奉仕のために最善の状態に保っておかねばならないことを深く感ずる必要がある。

福音の象徴であつた古代の儀式においては、傷がある燔祭を神の祭壇にささげることはできなかった。キリストを代表する燔祭は無傷でなければならない。神の子はどうあるべきかという例として神のみ言葉はこの事実をさし示している。すなわち、神の子は「神に喜ばれる」「清くて傷のない」「生きた……供え物」でなければならない（ローマ二ノ一、エペソ五ノ二七）。

神の力の必要

神の力がなくては真の改革はなし得られない。先天的あるいは後天的な傾向に対する人間の抵抗は、急流に対する砂の提防のようなものにすぎない。キリストの生命がわたしたちの生涯の活力とならないかぎり、内外から迫つ

て来る誘惑に抵抗できない。

キリストがこの世にあって神の律法を実行なさったのは、人間の魂を墮落させる先天的性癖を完全に克服できたためであった。心身の医師として、キリストは戦う情欲に対して勝利を得させられる。心身が完全な品性をもつことができるように、キリストはあらゆる備えをなさった。

人間がキリストに服従するとき、その精神は律法の支配を受けるようになるが、それはすべての捕虜に自由を与える王の律法である。キリストと一体になることによって人間は自由とされるのである。キリストの意志に従うことは完全な人間の資格を回復することになる。

神に服従するとき、人間は罪の束縛から自由になり、人間的な情欲や衝動から救われる。自己に勝利し、その性癖に打ち勝ち、「もろもろの支配と、権威」また「やみの世の主権者」「天上にいる悪の霊」に勝利する者となるのである（エペソ六ノ一二）。

家庭教育

家庭ほどこの種の教育を必要とするところはなく、また、家庭ほどその効果が上がるところは外にない。両親は習慣や品性の基礎を作る責任がある。改革運動は肉体および精神の健康に対する神の律法の原則を子供に教えることから始めなければならない。神の律法に従うことが世界を破滅へ押し流している罪悪に対する唯一の防御であることを説明なさい。自分たちに対するばかりでなく、その子供に対する両親の責任も明らかにさい。両親はその

子供に服従の模範か、それとも罪の模範かのどちらかを示している。その模範と教育によって家族の運命は定まる。子供は両親が作ったとおりになるものである。

もし両親が自分たちの行為の跡をさかのぼってみることができて、自分たちの教育と模範によって罪の力がどんなに長く続き、また強められたか、これと逆に、正義の力がどんなに長く続き、強められたかがわかったら、きつと今までの方法を変えるにちがいない。多くの人々が迷信や習慣を離れて、生命の神聖な法則に従うであろう。

模 範 の 力

人の家庭にきて奉仕し、病人を枕頭に見守り、その苦痛を除き、死の境から連れもどし、瀕死の病人に望みを与える医者は、他の人にはほとんど与えられていない患者の信用と愛情を勝ち得る。福音の伝道者にさえ、それほど大きい力や広大な感化力は与えられていない。

医者の模範は教えていることと少しも变りのない、正しい方向に対する積極的な力でなければならない。改革の働きは、自制の精神がその生活行動の実例となつてあらわれている男女を必要としている。実行がわたしたちの教える原則に重みをつける。社会は、人間が失った主権を回復し、自己に勝利するため神の力がどんなことをなしうるかを示す実際の実例を必要としている。今の世界が最も必要としているものはキリストのような生涯にあらわされる福音の救いの力を知ることである。

医者は正しい模範による力と励ましを必要としている人とたえず接触している。多くの人は道徳的な力が弱まっ

ているし、また克己に欠け、誘惑に負けやすい。医者はすべて有害な習慣や身を汚す肉欲に自己を勝利させる原則の力を自分自身の生活に表わして初めて、こうした人々を助けることができる。その生活のうちに神の力が働いているのが見られなければならない。もしこのことに失敗すれば、たとえば言葉にどんな力があり、巧みであっても、その感化は有害となる。

自分ももっている誤った習慣によって道徳的に破滅した多くの人々が、医者の助言や治療を求めに来る。彼らは傷つき、弱り、いためられ、自らの愚かさ、勝利をもたらさない無力さを感じている。こうした人は、そのように導いていった思想や感情を持ち続けるようなものを自己の周囲に置いてはならない。清く高尚で上品な雰囲気味わわなければならない。正しい模範を与えるべき人が自ら有害な習慣に捕われ、その感化が他人を誘惑する方向に力を増すようであれば、責任はどんなに恐ろしいものであろう。

医者と禁酒禁煙運動

たばこや酒を飲んで身体も心も破壊した人がおおぜい医者の世話になりにくる。自分の責任に忠実である医者はこうした患者にその苦しみの原因を示さなければならぬ。しかし、もし医者自身が、たばこや酒を飲んでいたら、その言葉にどれだけの価値があるだろう。自分自身の不節制を意識しながら、その患者の生活の欠点を指摘するのには、ちゅうちょしないだろうか。こうしたものを飲みながら、青年に向かって、どうして有害な結果を信じさせることができるか。

自ら卑しい習慣におぼれていながら、どうして医者が純潔と自制の模範として社会に立ち、禁酒禁煙運動の有力な働き手となれよう。その息が酒やたばこのにおいて不快な感じを与えるのに、病人や瀕死の患者のそばで喜ばれるような働きができるだろうか。

麻薬の毒で自分の神経を狂わせ、脳を鈍らせながら、すべれた医者としての信頼にどうして忠実に答えられよう。こつという医者が事態を迅速に識別し、正確に処理するのは全く不可能である。

もし自分の身体を支配する法則を守らず、心身の健全よりも利己的な欲望を満足させる方を選ぶならば、人間の生命の責任を任されることは自分には不適當だと宣言していることにならないだろうか。

働いているうちに起る医者の失望

医者がどんなに技術がうまく、忠実であつても、その経験の中には失望や失敗のように見えることが少なくない。自分が完成しようとしたことも成就できないことがよくある。たとえその患者が健康を回復しても、それがその人にとって、または社会にとって、真の利益にならない場合があるかも知れない。健康を回復する多くの人は、また病気を招く不節制を繰り返すだけである。そして以前と同じように再び気ままな、愚かな習慣におぼれてゆく。こつという人々のためにした医者の働きは骨折り損のように見える。キリストも同じ経験をされたが、それでも彼はひとりの悩める魂のために働くことをやめられなかった。きよめられた十人のらい病人の中でただひとりだけそのたまものを感謝した。しかもその人は、他国人のサマリヤ人であった。キリストはそのひとりのために十人をあな

おしになったのである。もし医者が救い主と同じように成功しないときは、この大医師から教訓を学ぶべきである。キリストについて「彼は衰えず、落胆せず」「彼は自分の魂の苦しみにより、光を見て満足する」としるされている（イザヤ書四二ノ四、五三ノ一）。

たとえただひとりしかキリストの恵みの福音を受け入れなかったとしても、キリストはそのひとりを救うために苦労、屈辱の生活と恥辱的な死をお選びになった。わたしたちの努力によってひとりの人が救われ、向上し、神の宮に輝く者とされたら、喜ぶのが当然ではないだろうか。

医者自身の要求と危険

医者への任務は骨が折れるものである。その働きを最もよく果すには強い身体と元気に満ちた健康とがいる。弱い者や病人は医者への働きにつきものである過激な労働に耐えられない、完全な自制力のない人はあらゆる種類の病気を取り扱う資格を持つことはできない。

医者の生活は睡眠が不足し、食事をとることさえ怠りがちで、社交的楽しみや宗教上の特権も断たれることがしばしばであって、いつも暗影の中にあるかのように見える。苦しみを目にし、無力な人々から助けを求められ、墮落した人々と接触することは医者への心を痛め、人間に対する信用をほとんど無くしてしまう。

疾病と死との戦いのため、全精力が最大限度まで消耗する。こうしたひどい、無理な任務への反応によって人格が最高度に試みられる。そういうときに誘惑が最大の力をふるうに至る。だから、他の職業にたずさわるとんな人

よりも医者の方が自制力を必要とし、純潔な精神と天に足場を持つ必要がある。他の人のためにも、また自分のためにも医者は肉体の法則を無視するわけにはいかない。肉体の習慣に不注意であるならば、道徳的にも不注意となるものである。

唯一の防衛

医者の唯一の安全は、ただ神にのみ基いた堅い決意によつて強められ、高尚にされて、原則にしたがつて行動することである。医者は、道徳的にすぐれたキリストの品性をもって立たねばならない。毎日、時々刻々、医者は目に見えぬ世界から見られているような生活をすべきである。モーセのように「見えないかたを見ているようにして」耐えなければならない。

正義は敬神に基礎を置く。生活がキリストと共に神のうちに隠れているのでなければ、いかなる人も他人の前に純潔な、力強い生活をつねに維持していくことはできない。人間の活動が激しければ激しくなるほど、心は神と近く交わらなければならない。

医者の義務は緊急であり、かつその責任が大きければそれだけ神の力を必要とすることも大きい。永遠の事柄を瞑想するため、世的なことから時間をさかなければならない。彼は侵入してくる浮世を防がねばならない。なぜならこの世が彼を圧倒し、力のみなもとから彼を引き離そうとするからである。どんな人よりも医者は祈りと聖書研究によつて自分を神の保護のうちに置くべきである。魂のうちに神の性質を表わすところの真理と正義と恩恵の原

則をたえず意識し、それを自分のものとしながら生活すべきである。

神のみ言葉を受け入れ、これに服従する程度によって神のみ言葉は行動と品性のすべての面に力を及ぼし、生命を与える。それはあらゆる思想をきよめ、すべての欲求を調節する。神のみ言葉に信頼する者は男らしくなり、強くなる。低級なものをすべて捨てて汚れない雰囲気に入るのである。

人間が神とまじわるとき、異国の墮落した宮殿の中で、ダニエルやヨセフを守った確固不拔の決意がその生涯を清浄無垢にする。その品性の衣には一点の汚れもない。その生活からはキリストの光が輝き、輝く暁の明星は、不変の栄光をもってその上にいつも照るのである。

こういう人は、社会における力の分子となり、罪悪に対する防衛となり、誘惑にかかる者を守り、困難と失望の中に正しい道をさがしている人々をみちびく光となる。

第三部

医事伝道者とその働き

第九章 教えといやし

キリストが最初に十二弟子を伝道の旅につかわされたとき、「行って、『天国が近づいた』とのべ伝えよ。病人をいやし、死人をよみがえらせ、らい病人をきよめ、悪霊を追い出せ。ただで受けたのだから、ただで与えるがよい」とお命じになった（マタイ一〇ノ七、八）。

また、その後につかわされた七十二人にも「どの町へはいつても、…その町にいる病人をいやしてやり、『神の国はあなたがたに近づいた』と言いなさい」と言われた。キリストの臨在と力が弟子たちと共にあったので、「七十二人が喜んで帰ってきて言った、『主よ、あなたの名によつていたしますと、悪霊までがわたしたちに服従します』」と述べた（ルカ一〇ノ八、九、一七）。

キリストの昇天後、同じ働きが継続された。キリスト自ら伝道なさるような光景が繰り返されたのである。「エルサレム付近の町々からも、大ぜいの人々が、病人や汚れた霊に苦しめられている人たちを引き連れて集まってきたが、その全部の者が、ひとり残らずいやすれた」（使徒行伝五ノ一六）。

そして弟子たちは「出て行って、至る所で福音をのべ伝えた。主も彼らと共に働」かれた（マルコ一六ノ二〇）。

「ピリポはサマリヤの町に下って行き、人々にキリストをのべはじめた。群衆は……こぞって彼の語ることに耳を傾けた。汚れた霊につかれた多くの人々からは、その霊が……出て行くし、また、多くの中風をわずらっている者や、足のきかない者がいやされたからである。それでこの町では人々が、たいへんなよろこびかたであつた」(使徒行伝八ノ五―八)。

使徒の働き

ルカによる福音書の著者ルカは医事伝道者であつて、聖書の中で「愛する医者」と呼ばれている(コロサイ四ノ一四)。使徒パウロは医師としての彼の名声を聞き、主が特別な働きを委任された人だと信じてルカを求めた。そして、彼の協力を得、しばらくの間、ルカはつぎつぎとパウロと共に旅行した。しばらくしてパウロはマケドニアのピリピにルカを残して行つたので、そこで彼は数年の間医者として、また福音の教師として働き続けた。医者として病人に仕え、また病める者の上に神のいやしの力が加えられるように祈つた。こうして福音の使命を伝えるために道が開かれた。医者として成功したので、異教の人々の間でキリストをのべ伝える機会が多くなった。わたしたちも弟子たちのように働くことは神の計画である。肉体をいやすことは福音伝道の任務と一つに結びつくものであり、福音の働きの中では、教えることと病をいやすこととは決して分離させてはならない。

弟子たちの働きは福音の知識を広めることであつた。人類に与えられた福音を全世界にのべ伝える仕事が彼らに委託されていた。この働きを弟子たちはその時代の人々に向かつて果した。わずか一代のうちに、この働きは天下

の全国民に宣伝された。

世界に福音を伝えることは神のみ名を持つ人々に神が委託なさった働きである。世の罪と悲慘に対して福音は唯一の中和剤である。神の恵みの言葉を全人類に伝えることが、そのいよしの力を知った者の最初の働きである。

福音の必要

キリストが弟子たちを福音宣伝の使命のもとにつかわされたとき、この世には神や神のみ言葉に対する信仰はほとんどみられなかった。エホバを知っていると称していたユダヤ人の間では、伝説や人間的理論のため、神のみ言葉は退けられていた。利己的な野心やみえを愛する気持、富に対する強欲が人の心を奪っていた。そして、敬神の念がなくなっていたように、人に対する愛情もなくなっていた。人間を支配していた原則は利己心であり、サタンは人類を悲慘と墮落におとし入れ、思うままに働いていた。

サタンの使が人間を占有していた。神の住み家に造られた身体が、悪鬼の住み家となってしまうていた。人の感覚、神経、器官は超自然的な力の影響を受け、最も卑劣な情欲がほしいままに使われた。人間の顔に悪鬼そのものの印が押され、とりついている悪鬼の表情が反映していた。

現在の世界の状態はどうだろう。キリストの時代の伝説やラビの教えのように、今日のいわゆる「高等批評」や、推測が聖書に対する信仰を實際に破壊してはいないだろうか。強欲と野心、それに快樂を愛する心がキリストの時代と同様に今の人々の心をしっかりとつかんでいないだろうか。キリスト教国と称する国で、キリストの教会と自

称しながら、その中にはクリスチヤンの原則によつて動く人がなんと少ないことだろう。実業界、社交界、家庭、さらに宗教界においてさえ、キリストの教えを日常生活の規準とするものが、なんと少ないことか。「正義ははるかに立つ。…正直は、はいることができないからである。…悪を離れる者はかすめ奪われる」(イザヤ書五九ノ一四、一五)。実際、その通りではないだろうか。

全国各地の思慮深い、神をおそれる人がびっくりするような「罪惡の流行」の中に、わたしたちは生活している。このように流行している墮落は、とつてい筆舌につくし得ない。毎日、新しい政争、贈賄事件、詐欺行為が發覺する。また心を痛める暴動、不法、人間の苦痛に対する冷淡、さらに極悪、残忍な人命破壊の話を聞く。また精神病、殺人、自殺も日々に増加していく。サタンの使が人間の間に働いて、人心を迷わし、墮落させ、身体を汚し、破壊しようとして、ますます活動していくのをだれも疑うことができない。

しかも、世界にこつした悪が満ちているのに、福音はあまりにも無関心すぎる態度で宣伝され、人の良心や生活にほとんど感動を与えていない。自分が持っていないものを求めている人は各地にいて、罪に打ち勝つ力、惡の束縛から救い出してくれる力、健康と生命と平和を与える力を待ち望んでいる。一度神のみ言葉の力を知りながら、多くの人が、神の認められていない場所に生活し、しかも神が共におられることを切望している。

世界が千九百年前に必要としたもの、すなわち、キリストの黙示は今日も必要であり、大改革運動が要求されているが、肉体と知能と精神の回復の働きはキリストの恵みによつて初めて完成されるものである。

人の心を感動させるキリストの方法

人の心を動かすにはキリストの方法だけが真の成功をもたらす。人間と交際しておられた間、救い主はその人たちの利益を計られ、同情を示し、その必要を満たして信頼をお受けになった。そして「わたしについてきなさい」とご命令になった。

個人的に努力をして、人々に近づいていくことが必要である。説教に用いる時間を減らし、個人伝道にもっと多くの時間を使うならば、さらに大きな結果をもたらすだろう。貧しい者を助け、病める者を看護し、悲しむ者、親しい人を失った者を慰め、無知な者に教え、経験がない者には助言を与えなければならぬ。わたしたちは泣く者と共に泣き、喜ぶ者と共に喜ぶべきである。納得させる力と祈りの力と神の愛の力が伴うならば、この働きが実を結ばずにおくはずはなく、必ず結ぶのである。

医事伝道事業の目的は、罪に悩む男女に世の罪を除くカルバリーの人を示すことであることを、わたしたちはつねに記憶していなければならない。キリストを見上げることによって彼らは変化し、キリストの姿に似てくる。わたしたちは病める者や苦しむ者を励まし、イエスを見上げるように仕向けなければならない。心身の病から失望している人の前に、たえず大医師であるキリストを置くべきである。肉体の病気も精神の病もいやすことができるキリストをその人々に示しなさい。病弱をあわれみたまうキリストについて知らせ、永遠の生命が得られるようにとご自分の生命をお与えになったキリストの保護の中に自らをまかせるように励まし、キリストの愛を語り、その救

いの力を知らせなさい。

これが医事伝道者の崇高な義務であり、尊い特権であって、個人伝道によってその道がしばしば開かれることがある。神は肉体の苦痛を除くため、わたしたちの努力を通して人の心をお動かしになることがよくある。

医事伝道の働きは福音の開拓事業である。み言葉の宣伝と医事伝道の働きとによって福音はのべ伝えられ、実践されなければならない。

伝道する看護婦の働き

どんな社会においても、神のみ言葉についての説教に耳をかさず、どんな宗教的集会にも出席しない人が大勢いるものである。福音によって彼らを動かそうとするならば、その家庭に持ちこまなければならない。肉体的な要求を満たすことが彼らに近づきうる唯一の道となる場合がある。病める者を看護し、貧しい者の苦難を除く伝道にあたる看護婦は、そういう人と共に祈り、神の言葉を読みきかせ、救い主のことについて語る機会が多い。情欲によって卑しくなった欲望を制御する意志のない、無力な人のために共に祈ることができ、また敗北し、失望した人の生涯に希望の光をもたらすことができる。利己心のない親切な行為に表わされた無我の愛は、こうして苦しむ人にキリストの愛を信じやすくさせるであろう。

多くの人が神を信ぜず、人に対する信頼を失っているが、情深い行為や助力には感謝をする。世俗的な賞賛や報酬の目あてなしにこうした人の家庭にきて、病める者を看護し、飢えた者に食を与え、裸である者に着せ、悲しむ

者を慰め、またキリストの愛とあわれみをやさしく示して、人間の働き人はその使者にすぎないことを表わすとき彼らは、こうしたことから心を動かされる。そして、感謝の念が起ると共に、信仰の火がともされる。さらに神が自分たちを守っておられることを悟り、み言葉が教えられるときに耳を傾ける気持になる。

外国伝道にせよ、国内の伝道にせよ、男女を問わず、すべての伝道者が病人に奉仕することができたら、もっとたやすく大衆に接近することができ、役にたつ機会がますます増大する。異教の地に宣教師として行く婦人は、人に接近してゆく門戸が全部閉ざされているときでさえ、その国の婦人に福音を伝える機会をこうして発見することができる。福音宣伝者はすべて、苦痛を和らげ、病気を除くために役だつ単純な治療法を知っていなければならない。

健康の法則の教授

福音宣伝者は、健康的生活の法則について人に教えることができないならない。病気は至るところに存在しているが、その中の多くは健康の法則に注意しさえすれば予防できたかもしれないものである。現世の生命のためにも、また、きたるべき国における生命のためにも、健康の法則が人間の幸福に意義のあることを人々にわからせる必要がある。創造主がご自身の住む所としてお備えになった人間の身体に対する責任を呼び起す必要がある。自己の身体についても忠実な家司であることを神はお望みになっている。聖書の言葉に含まれている真理を彼らに印象づけなければならない。

「わたしたちは、生ける神の宮である。神がこう仰せになっている、『わたしは彼らの間に住み、かつ出入りをするであろう。そしてわたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となるであろう』」（コリント第二・六ノ一六）。

病気に対する簡単な治療法―有毒な薬品を使用する代りとなる方法について多くの人々に教えなければならぬ。このことは、彼らも喜んで学ぶであろう。食事の改善に関しても大いに教育を必要としている。誤った食事の習慣や不衛生な食物の摂取は、社会を害する不節制、犯罪、悲惨に対しても少なからぬ責任をもっている。

衛生法則を教える場合は、改革の大目的を念頭に置かなければならないが、その目的とは、肉体と知能と精神を最高度に発達させることである。自然の法則は神の律法であって、わたしたちの益のために制定されたものでありこれに服従することによって、この世の生涯では幸福を増進し、きたるべき生命の準備をする助けとなることを説明なさい。

自然界にあらわれている神の愛と恵みを考えるように人々を指導し、人間のからだという驚嘆すべき有機的組織と、それを支配している法則について研究させなさい。神の愛の証拠に気づき、律法の知恵と恵み、またこれに服従する結果を幾分でも悟った者は、自己の義務と責任に対して今までと全然違った見方をするようになる。言い換えれば、衛生法則の遵守を犠牲や克己のように考えず、無限の祝福―事実その通りなのだが―とみるようになる。すべて福音宣伝者は、健康的な生活法則を人々に教えるのが自分に定められた仕事の一部と感じなければならぬ。この働きは非常に必要であって、世界はそのために関われている。

個人の働き

団体の働きをもって個人的な働きの代りにしようとする傾向がどこにでも見られる。人間の知恵には、団結し、一つに集結して大きな教会や機関を建設しようとする傾向がある。大勢の人が慈善事業を各種団体、機関に任せ、自分は社会との接触を避けるため、心はだんだんと冷えてくる。そういう人は自己に没頭し、感受性を失い、神と人に対する愛が絶えてしまう。

キリストは従う者にそれぞれ働きを委任された。それは代理人ではできない働きである。病人や貧しい人々への奉仕、迷った人に福音を伝える仕事は委員会や組織だった慈善事業団体に任せておくべきではない。福音は個人的な責任、個人の努力、その人自身の犠牲を要求する。

「道やかきねのあたりに出て行って、この家がいっぱいになるように、人々を無理やりにいっぱいづつてきなさい」とは、キリストのご命令である（ルカ一四ノ二三）。キリストは人々を、彼らが助けようとしている者の所へ導いて行かれる。

「さすらえる貧しい者を、あなたの家に入れ、裸の者を見てこれに着せ」「病人に手をあげば、いやされる」とも言われている（イザヤ書五八ノ七、マルコ一六ノ一八）。すなわち、直接的接触、個人的奉仕によって福音の祝福は伝えられるべきものである。

全員働き人

神は昔、その民に光をお与えになったとき、一つの階級にだけ限定され、それを通してお働きになったのではない

い。ダニエルはユダの貴族であった。イザヤも王族の生れであった。ダビデは羊飼の少年であり、アモスは牧夫、ゼカリヤはバビロンよりの捕虜、エリシヤは農夫であった。神は自分の代表者として預言者、王族、高貴な人、貧しい人を立て、世に伝えるべき真理をお教えになった。

神の恵みにあずかるすべての者に、主は人のために働く任務をお定めになっている。わたしたちは各自の立場立場において、「ここにわたしがおります。わたしをおつかわしてください」と言わなければならない（イザヤ書六八）。み言葉を伝える伝道者、伝道にあたる看護婦、クリスチャンの医者、商人や農夫、知能的な仕事をする者も、職人である者も、クリスチャンであれば、それぞれすべての者に責任が負わされている。人々に救いの福音を示すのがわたしたちの仕事である。わたしたちがやろうとすることは、すべてこの目的に達する手段でなければならない。

自分に定められた働きをする者は他人に祝福となるばかりでなく、自らも祝福を受ける。義務を立派に果たしたという意識は自分の心に反映し、失望していた者は失望を忘れ、弱かった者は強くなり、無知な者は賢くなり、すべての人が、自分を召されたキリストは、確かな助け手であることを悟るであろう。

養成学校である教会

キリストの教会は人に尽すための組織であって、その標語は奉仕である。教会員は救いの隊長の下で戦うために訓練される兵士である。クリスチャンの伝道者、医者、教師には多くの者が認識している以上に広い働きがある。

彼らは人々に奉仕するばかりでなく、その人々に奉仕することを教えなければならない。また正しい原則を教えるだけでなく、これらの原則を他人に分け与えることができるように聴衆を教育すべきである。実践を伴わぬ真理や人にわけ与えない真理はその生命力を失い、いやす力を失ってしまう。真理の祝福は他人にわけ与えて初めて持続することができるのである。

神に対する奉仕の単調さを打ち破らなければならない。各教会員は主のために何かの方面に従うべきである。ある者は他人ほどできないにしても、世界に広がっている病氣や苦難の流れを押し返すために、自己の最善を尽さなければならぬ。どうして始めるかを教えられさえすれば多くの人は喜んで働く。彼らには教えと励ましが必要である。

すべての教会がクリスチャンの働き人を養成する学校でなければならない。その会員には聖書研究の授け方や安息日学校の組の運営と教授法、貧しい人を助け、病人を看護する最善の方法、悔い改めていない人のために働く方法を教えなければならない。また衛生問題を教える学校や料理学校、あるいはクリスチャン的ないろいろな方面の助けになる働きを教えるクラスが経営されるべきである。そして単に教えるばかりでなく、経験のある教師の下に、実際の仕事をしなければならない。教師が先に立って人々の間で働くならば他の人はそれと協力し、その模範から学ぶのである。一つの模範は多くの言葉にまさる。

神の摂理にしたがって、自分の召されたところで働けるように全員が体力と知能をできる限り発達させるべきである。パウロとアポロがキリストから受けた恵み、すなわち、ふたりを霊的に卓越させ、有名にしたのと同じキリ

ストの恵みが、今日、献身的クリスチャンの伝道者に向かって与えられる。まちがうことのない明るさと力とをもって神の栄光が今の世に示されるために、神の子が知恵と知識を有するように神はお望みになっている。

最も成功する人

神に献身している教育のある働き人は、教育のない働き人よりも多くの方面に奉仕し、さらに大きな仕事ができる。精神が訓練されていることがその人を有利な立場におくのである。しかし、大した才能もなく、広く教育を受けていない人であっても、他の人のために奉仕することができる。神は喜んでご用にたいたいという人間をお用いになるのである。最大で永続的な結果をきたす働きをするのは、必ずしも最も才気あふれた才能家ではない。天の使命を聞いた男女が必要とされているのであって、一番効果的な働き人は「わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい」との召命に応ずる者である（マタイーノ二九）。

必要なのは心からの伝道者である。心に神の感動を受けた人は、神の愛をまだ知らずにいる人に対する熱望で心が満ちている。そして、その状態が自分の苦悩のように深く感じられる。その人は天よりつかわされ、神の靈感を受けた使者として天使が協力できる働きに命がけで出て行く。

神から大きな知的才能を与えられた者がその賜物を利己的に用いるならば、その人はしばらく試練の期間を経た後、自己の意のままに進むように放置される。神からあまり豊かに恵まれないように見え、大きな自信がない者を神は選び、弱い者を強くしてくださる。それは、その人が自分にはできないことでも、神はなさることができると

信頼しているからである。神は真心こめた奉仕を受け入れ、自らその不足を補われる。

主は少ししか学校教育を受ける機会がなかった人を自己の共労者としてよく選ばれたことがある。そういう人は最も勤勉に自分の力を働かせた。主の働きに対する彼らの忠誠心、勤勉、および知識の探求に対して、主はお報いになった。神はその人の涙を見、祈りを聞かれた。バビロンの王宮にとらわれていた者に神の祝福が与えられたように、今日、神の働き人にも恵みと知恵が与えられる。

学校教育に乏しく、社会的地位も低い人がキリストの力によって人の魂を神に導くのに非常な成功をあげることがある。その成功の秘訣は神に対する信頼である。立派な相談相手であり、力に満ちておられる神から日々教えを受けたのである。

こういう働き人を励ますべきである。主は彼らをもっと高い能力のある人々と接触させ、他の人が残した欠陥を補われる。何をしなければならぬかを見抜く力、困っている人を進んで助けること、またその親切な言葉や行いなどによって、他の方法では開くことのできないようなよい働きの道が開かれるのである。困っている人に接近し、また他人の心を動かす言葉の力が、多くのおのいている魂を神に導く。そして、彼らの働きは、他の人もやろうと思えば、できる働きを示している。

より広い生活

他人のための働きに加わることは自己犠牲の熱意を揺り起し、品性を高め強めるものではない。クリスチャンと

自称する多くの人が教会のまじわりを求めながら、自分のことばかりを考えている。彼らは教会のまじわりを求め、牧師の世話を受けたいと思い、盛んな教会の一員となりながら、他人のためにはほとんど何もしないで満足している。こうして、彼らは最も尊い祝福を自分から奪っている。多くの人は楽しい、安逸に流れるような交際を捨てることによって大きな利益を受けるにちがいない。クリスチャン的働きのために力を用うべきところに行く必要がある。そうすれば、そこで責任を負うことを学びうるからである。

非常に密生している樹木はすくすく丈夫に生長しないので、庭師は生長する余裕がある場所に植え変える。大きな教会の多くの教会員にはこれと同じようなことをすれば益になるであろう。活動的なクリスチャンの働きに力を発揮することができる場所に彼らを配置する必要がある。こうした人が他人のために自己を捨てて働かないため、霊的な生命を失い、成長がとまり、無能になっている。どこか他の伝道地に移すならば丈夫になり、活気づくであろう。

しかし、だれもが他人を助ける仕事を始めるためどこか遠い伝道地に招かれるまで待っている必要はない。奉仕の門戸はどこにでも開かれている。わたしたちの周囲にはわたしたちの助けを要する人がいる。寡婦、孤児、病人、死んでゆく人、心を痛めた人、失望した者、無知な者、社会から見捨てられた者が至るところにいる。

近所に住んでいる人のために働くことを自己の特別な義務と感じるべきである。宗教的なことに興味のない人々を最もじょうずに助けうる方法を研究なさい。友人や隣人を訪れるときにその人の現世の幸福と共に霊的な幸福に対する関心を表わしなさい。罪を許したもう救い主、キリストのことを告げなさい。自分の家に隣人を招き、尊い

聖書や、真理を説明する書籍を一しよに読みなさい。賛美と祈りを共にするように招待なさい。こういう小さな集りでもキリストは約束の通りそこに臨在され、人々の心はキリストの恵みによって感動を受けるのである。

教会員はこういう働きをするように自己を教育しなければならない。このことは外国の迷っている魂を救うのと同じほど重要なことである。一部の人は遠国の人について責任を感じているが、本国に居る大多数の人は周囲の尊い魂に対する責任を感じて、その人々の救いのためにも同様に熱心に働くべきである。

多くの者は狭い生涯を送っていることを後悔している。しかし希望するならば、自ら生涯を広くし、力のあるものとすることができる。心と思いと精神をつくしてイエスを愛し、おのれのごとくに隣人を愛する者は、自分の才能や感化を用いる広い伝道地を有するのである。

小さい機会

大きい働きをさがすのに熱心なあまり、小さい機会をのがしてはならない。また一方、小さい働きはりっぱにできるが、大きな仕事に完全に失敗し、失望に陥るかもしれない。要は全力を尽して現在の仕事をすることによって、もっと大きな仕事に対する準備をしてゆくことである。多くの人が実を結ばずに枯れてしまうのは、日常の機会を軽視し、手近な小さい仕事を怠るからである。

人間の助けにたよってはならない。わたしたちの悩みを負い、悲しみをにない、必要を満たすため、神がたてられたキリスト、人間以上のキリストをながめなさい。神をみ言葉のままに信じ、仕事があり次第、それにとりかか

り、断固とした信仰をもって前進なさい。キリストが共に居てくださいという信仰が力を与え、確固不拔の精神を与える。利己心を捨て、ほね惜しみしない努力、そして忍耐強い活動力をもって働きなさい。

多くの者が行くのを遠慮する事情のある好ましくない失望的な伝道地で、自分を犠牲にして働いた人の努力によって著しい変化がもたらされている。人間の力にたよらず、神にたよって忍耐強く、うまずたゆまず働いたため、神の恵みがこの人たちをささえたのである。このようにしてどれほどの善行がなされたかは、この世ではわからないが、その喜ばしい結果は、かの大いなる将来において現われるのである。

自 給 伝 道 者

自給伝道者は多くの場所で成功することができる。使徒パウロが全世界にキリストの知識を広めたのも自給伝道者としてであった。彼はアジアとヨーロッパの大きな都市に毎日福音をのべ伝えながら、自分と共労者をささえるため、職人として仕事をしていた。エペソの長老に対するパウロの別れの言葉は、その働きぶりを物語り、全福音伝道者に尊い教訓を与えている。

「彼らに言った。『わたしは、アジアの地に足を踏み入れた最初の日以来、いつもあなたがたとどんなふうにごしてきたか、よくご存じである。すなわち、…あなたがたの益になることは、公衆の前でも、また家々でも、すべてあますところなく話して聞かせ、また教え、…わたしは、人の金や銀や衣服をほしがったことはない。あなたがた自身が知っているとおり、わたしのこの両手は、自分の生活のためにも、また一緒にいた人たちのために

も、働いてきたのだ。わたしは、あなたがたもこのように働いて、弱い者を助けなければならないこと、また『受けるよりは与える方が、さいわいである』と言われた主イエスの言葉を記憶しているべきことを、万事について教えたのである」(使徒行伝二〇ノ一八、二〇、三三―三五)。

今日、多くの人がこれと同じ自己犠牲の精神にあふれているならば、同じように良い働きが可能である。ふたりまたはふたり以上で伝道の働きに出かけなさい。人々を訪問し、祈り、賛美し、教え、聖書の説明をし、病人に奉仕なさい。ある者は文書伝道者として自らをささえ、その他にもパウロのように何かの手仕事をし、あるいは別の働きをすることができ。自己の無力を認識し、神に謙そんにたよりつつ、その働きを進めてゆくとき、尊い経験が与えられる。主イエスは、こうした人の前にたつてその先に行かれるため、貧富を問わず、人々から好意と助けを受けられるのである。

外国の医事伝道者となるために教育を受けた人々は、働こうとしている場所に猶予することなくおもむき、そこの人々の間で働きを始め、働きながらその国語を学ぶように奨励されなければならない。そうすれば、まもなく神のみ言葉の簡単な真理を教えることができるようになる。

恵みの使者は全世界に必要とされている。暗黒と誤謬の中にある地方や外国の伝道地に行き、同胞の困窮を知り、主のために働くようにクリスチャンの家族が召されている。もし、こういう家族が世界の暗い場所、人々が霊的な暗黒の中に閉ざされている場所に住み、キリストの生命の光を輝かすならば、どんなに尊い働きができることであろう。

その働きは自己犠牲を必要とする。多くの人はいつさいの障害物が取り除かれるのを待ちつつ、自らできる仕事を放置している。そのため、多数の人が望みなく、神もなく死んでいく。ある者は商業上の利益のために、あるいは科学上の知識を得るために、人の居ない地方に思いきつて行き、犠牲や困難に喜んで耐えるが、同じ人間のために福音を必要としている地方に喜んで自分の家族を連れて行く人は実に少ない。

どんな場所に居ようと、また地位や立場にこだわらずに人に接近し、できるだけ彼らを助けるということが真の伝道である。こうした努力によって人の心をとらえることができ、滅びゆく者に接近する門戸を開くのである。

どんな働きをするときでも、キリストと自分が結ばれていること、あがないの大計画に参画していることを覚えなさい。あなたの生涯を通してキリストの愛がいやしと生命をささえる流れとなってあふれるはずである。他の人をキリストの愛の社会に引き入れようと努力するときに、純潔な言葉、無我の奉仕、喜びにあふれた態度によってキリストの恵みの力をあかしなさい。この世の純潔な正しいキリストの代表となりなさい、そうすれば、世の人は、その美しさの中にキリストを見るであろう。

機 転 と 同 情

悪習慣と思う点を攻撃することによって他人を改革しようとしてもあまり効果がない。こういう努力はよく有害無益に終る。キリストはサマリヤの婦人と話をされたとき、ヤコブの井戸をけなす代りに、さらに良いものをあげられた。「もしあなたが神の賜物のことを知り、また『水を飲ませてくれ』と言った者が、だれであるか知ってい

たならば、あなたの方から願い出て、その人から生ける水をもらったことであろう」(ヨハネ四ノ一〇)。キリストは与えようとする宝に話題を向け、婦人が持っているものに勝るものを提供なさった。それは生ける水、すなわち福音の喜びと望みであつた。

これはわたしたちが働くときに用いるべき方法の一例である。わたしたちは人が持っているものよりも良いものを提供しなければならない。それはすべての思いにまさるキリストの平安である。また神の品性の写し、神が人間に望んでおられる状態の表現である神のきよい律法を知らさなければならぬ。天の不滅の栄光は一時的な世の喜び、快樂よりもどれほどすぐれているかを教えなさい。救い主の中に見いだされる自由と休息を人々に告げなさい。

「わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがない」と、キリストは言われた(ヨハネ四ノ一四)。

「世の罪を取り除く神の小羊を見よ」と叫びながら、イエスを高く掲げなさい(ヨハネ一ノ二九)。キリストだけが心の渴望を満たし、魂に平安をお与えになることができる。

改革者は世界の人々の間で最も無我で礼儀正しくなければならぬ。その生活には無私の行為の真の良きところが現われなければならない。礼儀に欠け、他人の無知やわがままに忍耐を失い、軽率な言葉を出し、あるいは不注意な行為をする働き人は人の心の戸を閉ざしてしまうため、決して彼らに接近できない。

露や静かな雨が枯れかかった植木に降り注ぐように、人を過失から救おうとするときは、優しい言葉を語るべきである。神の計画がまず心を動かす。わたしたちは、神が生活を変化さす力をお与えになるのであると信じながら、愛をもって真理を語るべきである。愛より語られた言葉を聖霊が心にお働かせになるのである。

わたしたちは生れながらに自己中心で、自分の意見を通そうとする。しかし、キリストが教えんとお望みになっている教訓を学ぶとき、キリストの性質をもつ者となり、したがってキリストと同じ生涯を送る。キリストのりっぱな模範、泣く者と共に泣き、喜ぶ者と共に喜び、他人の気持ちに自らなられたところの、比類のない優しさが真心からキリストに従うすべての人の性格に深い感化を及ぼすに違いない。そういう人は親切な言葉、行動によって疲れた者の道を平易にしようと努力する。

時にかなった言葉

「主なる神は教えを受けた者の舌をわたしに与えて、疲れた者を言葉をもって助けることを知らせ」（イザヤ書五〇ノ四）。

わたしたちの周囲には悩む人々があり、至るところにそうした人を発見する。こうした苦しんでいる人をさがし出して、時にかなった言葉で心を慰めよう。つねに人を元気づけるような、あわれみの水が流れている川となる。

人と交際するとき、その人の経験の中に人間の目には封ぜられた部分があることを知らなければならぬ。その記憶の中には好奇心にもえた目から嚴重に守られている悲しい歴史があるものである。そこには苦しい境遇に対する長い間のつらい戦いの記録があつて、たぶん、それは家庭生活の中の悩みであろうが、それが勇氣と信賴と信仰を弱めるのである。非常な困難の中に人生の戦いを戦っている人は、ちょっとした愛の行為によって力づけられ、励まされる。こういう人にとっては、真の友人からの力強い助けの手は金や銀よりも尊く、親切な言葉は天使の微

笑のようにうれしいものである。

貧困と戦い、わずかな報酬のためにひどく働かなければならず、しかも生活上の必要の最低しか満たすことができぬ人がたくさんいる。よくなる望みもなく、苦勞、困窮に悩まされ、重荷が非常に強く感じられる。そして苦しみや病気が加わる時、その重荷にもう耐えられなくなる。思いつらい、悩み、どこに助けを求めるかさえ知らない。こうした人の試練、心の痛み、失望に同情しなさい。そうするとき、彼らを助ける道が開かれる。神の約束を彼らに告げ、彼らのため共に祈り、望みをもってその心を励ましなさい。

魂が病み、勇気が衰えたとき、与えられた励ましの言葉、元気づける言葉を救い主はご自分に向かって語られた言葉としてお考えになる。こうして人の心が励まされると、天使は喜んでこれをながめるのである。

神聖な間柄

各時代を通じて神は人の心の中に、お互は神聖な間柄であるという自覚を起させようと努力してこられた。神の共勞者となりなさい。世界に不信頼と離間が満ちているとき、キリストの弟子は天を支配している精神を表わさなければならぬ。

キリストのように語り、キリストのように行動なさい。たえずキリストの品性の美しさを現わし、キリストの教えと人間に対してなされた行為全体の根底である豊かな愛を人々に示しなさい。最も質朴な働き人がキリストと協力するとき、地の果てに響くような震動を起す絃に触れることができ、永遠にメロディーをかなでるのである。

全天は人間の働き人と協力しようと待っている。それは人間がどんな者になれるかということの世界に示すためであり、まさに滅びようとしている人間を救うために神と一体になればどんなことができるかを表わすためである。自己を忘れて心の中に聖霊が働く余地を与え、神に全く献身した生涯を送る者の有用さには限りがない。身も魂も精神も神の働きにささげる者は、皆たえず肉体と知能と霊の力を新たに受ける。天の無尽蔵な資源が自由になるのである。キリストはご自身の霊の息、すなわちご自身の生命をお与えになる。そして聖霊は最高の力をもって頭と心に働く。そのとき、自分の誤った先入観、品性の欠陥、薄い信仰から不可能と思っていた勝利を恵みの力によって獲得できる。

何をも惜しまず、奉仕のために自らをささげる者にはだれでも測り知れぬ結果を生ずる力が与えられる。こういう人のために神は大きな仕事をなさるのである。神は人の心に働き、その結果、この地上においてさえ、将来の約束の成就が生活の上にみられるに至る。

荒ら野と、かわいた地とは楽しみ、

さばくは喜びて花咲き、さふらんのように、

さかんに花咲き、かつ喜び楽しみ、かつ歌う。

これにレバノンの栄えが与えられ、

カルメルおよびシヤロンのうるわしさが与えられる。

彼らは主の栄光を見、われわれの神のうるわしさを見る。

あなたがたは弱った手を強くし、
よろめくひざを健やかにせよ。
心おののく者に言え、強くあれ、
恐れてはならない。

見よ、あなたがたの神…を…

そのとき、めしいの目は開かれ、
耳しいの耳はあけられる。

そのとき、足なえは、しかのように飛び走り、
おしの舌は喜び歌う。

それは荒ら野に水がわきいで、
さばくに川が流れるからである。

焼けた砂は池となり、
かわいた地は水の源となり、

そこに大路があり、

その道は聖なる道となえられる。

汚れた者はこれを通り過ぎることはできない、

愚かなる者はそこに迷い入ることはない。

そこには、ししはあらず、

飢えた獣も、その道にのぼることはなく、

その所でこれに会うことはない。

ただ、あがなわれた者のみ、そこを歩む。

主にあがなわれた者は帰ってきて、

その頭に、とこしえの喜びをいただき、

歌うたいつつ、シオンに来る。

彼らは楽しみと喜びとを得、

悲しみと嘆きとは逃げ去る。

第一〇章 誘惑された者を助ける

キリストがわたしたちを愛してくださるのはわたしたちが最初にキリストを愛したからではない。「まだ罪びとであつたとき」キリストは、わたしたちのために死なれた。キリストはわたしたちが当然受けるべき待遇どおりにわたしたちを取り扱われない。わたしたちの罪はとがめられるのがあたりまえであるが、キリストはそうならない。長い間わたしたちの弱さ、無知、忘恩、わがままを忍耐された。道に迷い、心をかたくなにし、聖なるみ言葉をあろそかにしたにもかかわらず、なおそのみ手はさし伸べられている。

恵みとは受ける価値がない人間に向かって働く神の特性の一つである。わたしたちがそれを求めたのではなく、わたしたちをさがすためにそれが送られたのである。神は恵みを喜んで与えてくださるが、それは、わたしたちにその価値があるからではなく、反対に全く無価値な者であるからである。神のあわれみを要求しうる唯一の資格はわたしたちが非常に欠乏しているということである。

神はイエス・キリストを通じて罪深い、墮落した人類に手をさし伸べて招いておられる。神はすべての者を受け入れ歓迎される。最も罪深い者をおゆるしになることは神の栄えである。神は強大な敵から獲物をとって、虜を救

い、火の中から燃えぐいを取り出される。悲惨のどん底に沈んだ人間に情深い金の鎖をおろし、罪に汚れた、いやしい魂を引き上げられる。

人類を神に連れもどすためにご自分の生命をお与えになったキリストにとつて、人間はみな愛の関心の対称となる。サタンの詐欺や誘惑によって滅ぼされやすい罪深く無力な魂はちょうど羊飼いが自分の羊の群れを守るように守られるのである。

救い主の模範は、誘惑され、過失に陥っている人に対して奉仕をするわたしたちの標準でなければならない。救い主がわたしたちに示されたのと同じ興味、優しさ、忍耐を他の人に表わさなければならぬ。「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」と、キリストは言われている（ヨハネ一三ノ三四）。もしキリストがわたしたちの中に住んでおられるならば、日常接するすべての人にその無我の愛をあらわすはずである。同情や助けを要する男女を見ると、「あの人たちは価値があるだろうか」と問わず、「どうしたらあの人を助けることができるだろうか」と尋ねるだろう。

富める者、貧しい者、高い者、低い者、自由のある人もない人も共に神の財産である。人を救うために自分の生命をお与えになったキリストは人間のひとりびとりに測り知れぬ価値を認めておられる。十字架の奥義と栄光から人間の魂の価値に対するキリストの評価を認識しなければならぬ。そうするとき、どんなに墮落した人でも、冷淡にしたり軽蔑したりするにはあまりに高い価が払われていることを感じ、わたしたちと同じ人間を高く神のみ座にまで導く働きの重要性がわかるであろう。

救い主のたとえ話の中にある失われた銀貨は、塵埃の中にあっただが、やはり一個の銀貨であつた。その価値のためには持ち主はさがしたのである。このように、すべて人間はたとえ罪に墮落していても、神の目には尊いものに見える。貨幣に主権者の銘がしるしてあるように、創造のとき人間にも神の像と名がしるされた。今日、罪の感化によつて傷つけられ、曇りはしているが、こうして記録されたものの跡はひとりびとりに残っている。神はその魂を元通りにし、ご自身の像を正しく清く、書き直そうとしておられる。

同情の不足

キリストとわたしたちを結びつける一番強いきずなであるべきもの、すなわち墮落して、苦しんでいる罪深い人や罪とがに死んだ人々をあわれむという点で、わたしたちはキリストと少しも一致していない。人間同志の不人情はわたしたちの最大の罪である。多くの人はキリストの優しい、偉大な愛を少しも表わさずに、神の正義を示していると思つてゐる。厳格、苛酷に取り扱つてゐる相手が誘惑に苦しんでいることもよくある。サタンは、こういう人と戦つてゐるのであつて、荒々しい不親切な言葉によつて彼らは失望し、誘惑する悪魔の力に負けて、その捕虜となつてしまふ。

人の心を動かす方法

精神を取り扱うのは微妙な問題である。人の心の中を読みとられる神だけが、人を悔い改めに導く方法を知つて

おられる。失われた魂を救うことに成功するのは神の知恵だけである。「わたしはあなたよりもきよいのだ」と思つて、頑固な態度をとることがあるが、どんなに自分の考えが正しく、言葉が真実であつても人の心を動かすことは決してない。教訓や議論の繰り返しは役に立たないが、言葉や行動に表われたキリストの愛は人の心を感動させる。

わたしたちはキリストのような同情をもつと持たなければならない。正しく見える者に対する同情だけでなく、あわれな、悩める、戦いつつある人、しばしば過失に陥り、罪を犯しては悔い、誘惑にあつては失望する人に対する同情が必要である。あわれみ深い大祭司のように人間の弱さを思いやり、それに感じて動かされ、そして人に接しなければならない。

キリストがお呼びになつたのは無頼漢、取税人、罪人、世人に軽蔑されている人であつて、キリストのやさしい同情がこうした人をご自分に引きつけたのである。キリストがお認めにならなかつた階級とは、うぬぼれて他人を見下げていた人々であつた。

「道やかきねのあたりに出て行つて、この家がいつぱいになるように、人々を無理やりにひっぱつてきなさい」とキリストは命令しておられる（ルカ一四ノ二三）。この言葉にしたがつて、遠近を問わず、異教の人々を求めて出て行かなければならない。「取税人も遊び女」も、救い主の招きの声を聞かなければならない。この招きの声はキリストの使者の親切と忍耐を通して、罪の深みに沈んだ魂を引き上げる迫力となる。

クリスチャン精神は、サタンが滅ぼそうとしている人間のために不断の決意と不朽の関心とをもって、ますます

根気強く働かずにはおれなくする。迷っている人を救おうとする強い熱意を、どんなことがあっても冷却させてはならない。

キリストのもとに来るように人に懇願し、力説する精神が聖書全体にどんなに表現されているかに注意なさい。わたしたちは個人的にも公にも、無限に価値のある機会をすべてとらえて説きすすめ、人を救い主に導かなければならない。キリストを見上げ、没我と犠牲のその生涯を受け入れるように全力を尽してすすめなければならぬ。その人がキリストのあらゆるたまものを活用してみ名をあがめ、それによってキリストを喜ばすことを、われわれが期待していることを示さなければならぬ。

希望によって救われる

「わたしたちは、この望みによって救われているのである」(ローマ八ノ二四)。墮落した人に対し、真人間になるのに、もうおそいと思わせてはならない。キリストは確信をもって人を尊敬し、自尊心をお起しになった。最もひどく墮落した人さえも、キリストはていねいに取り扱われた。敵意、墮落した精神、汚れた心に接することはキリストにとって間断ない心の痛みであつたが、敏感な感覚が衝動を受け、洗練された趣味に不快を感じ得られたことをお示しになるような言葉はひと言も口にされなかった。どんな悪い習慣、強い偏見、または高慢な感情に対して、キリストはつねに情深いやさしさをもって接しられた。わたしたちもキリストの精神を持つならば、彼らが自分と同じように試練や苦勞に会い、失敗を重ねては起き上がるうとしてもがき、失望や困難と戦い、同情と助けを

渴望している兄弟同士であると考えよう。そうすれば、その人たちを失望させ、拒絶せずにその心に希望を起させるような態度で接するだろう。このように励まされると、彼らは、「わが敵よ、わたしについて喜ぶな。たとえわたしが倒れるとも起きあがる。たとえわたしが暗やみの中にすわるとも、主はわが光となられる。主はわが訴えを取り上げ、わたしのためにさばきを行われるまで、わたしは主の怒りを負わなければならない。主に対して罪を犯したからである。主はわたしを光に導き出してください。わたしは主の正義を見るであろう」と自信をもって言うことができる（ミカ書七ノ八、九）。

神は「地に住むすべての人をながめられる。

主はすべて彼らの心をつく」られる。

（詩篇三三ノ一四、一五）

誘惑され、過失に陥っている人々に接するときには、「もしか自分自身も誘惑に陥ることがありはしないかと、反省しなさい」の言葉を考えるように神はお命じになっている（ガラテヤ六ノ一）。自己の弱さを感じて初めて他人の弱さに同情するようになる。

「いったい、あなたを偉くしているのは、だれなのか。あなたの持っているもので、もらっていないものがあるか」（コリント第一・四ノ七）。「あなたがたの先生は、ただひとりであって、あなたがたはみな兄弟なのだから」（マタイ二三ノ八）。「それなのに、あなたは、なぜ兄弟をさばくのか。あなたは、なぜ兄弟を軽んじるのか」（ローマー四ノ一〇）。「それゆえ、今後わたしたちは、互にさばき合うことをやめよう。むしろ、あなたがたは、妨げ

となる物や、つまりきとなる物を兄弟の前に置かないことに、決めるがよい」(ローマ一四ノ二三)。

いろいろなまちがいの指摘

過失を指摘されることははずかしいことである。不必要に非難して、さらにつらい思いをさせてはならない。非難されてよくなったことはなく、かえってそのために多くの者は反撥して、良心の声に対して心をかたくなにする。やさしい精神、おだやかな、人をひきつけるような行為は、まちがいを犯している者を救い、多くの罪をおおつとができる。

使徒パウロは、まちがいを戒めなければならなかったが、自分は過失に陥っている者の友であることを示そうとどんなに細心な注意を払ったことであろう。彼は自己の行為の理由を非常に注意深く説明した。彼らの心に苦痛を与えることは自分の心にも苦痛を与えるということを理解させた。そして勝利をめざして戦っている人に信頼と同情を示した。

「わたしは大きな患難と心の憂いの中から、多くの涙をもってあなたがたに書きおくった。それは、あなたがたを悲しませるためではなく、あなたがたに対してあふれるばかりにいただいているわたしの愛を、知ってもらうためであった」(コリント第二・二ノ四)。「そこでたとい、あの手紙であなたがたを悲しませたとしても、わたしはそれを悔いていない……あなたがたを悲しませたのを見て悔いたとしても、今は喜んでいる。それは、あなたがたが悲しんだからではなく、悲しんで悔い改めるに至ったからである。あなたがたがそのように悲しんだのは、神のみ

ここに添ったことであって、わたしたちからはなんの損害も受けなかったのである。神のみところに添った悲しみは、悔いのない救いを得させる悔い改めに導き、この世の悲しみは死をきたらせる。見よ、神のみところに添ったその悲しみが、どんなにか熱情をあなたがたに起させたことか。また、弁明、義憤、恐れ、愛慕、熱意、それから処罰に至らせたことか。あなたがたはあの問題については、すべての点において潔白であることを証明したのである……こういうわけで、わたしたちは慰められたのである」(コリント第二・七ノ八一―三)。

「わたしは、あなたがたに全く信頼することができて、喜んでいる」(コリント第二・七ノ一六)。「わたしはあなたがたを思うたびごとに、わたしの神に感謝し、あなたがた一同のために祈るとき、いつも喜びをもって祈り、あなたがたが最初の日から今日に至るまで、福音にあずかっていることを感謝している。そして、あなたがたのうちの良いわざを始められたかたが、キリスト・イエスの日までにそれを完成してくださるにちがいないと確信している。わたしがあなたがた一同のために、そう考えるのは当然である……あなたがたをみな……わたしの心に深く留めているからである」(ピリピ一ノ三―七)。「だから、わたしの愛ししたっている兄弟たちよ。わたしの喜びであり冠である愛する者たちよ。このように、主にあって堅く立ちなさい」(ピリピ四ノ一)。「なぜなら、あなたがたが主にあって堅く立つてくれるなら、わたしたちはいま生きることになるからである」(テサロニケ第一・三ノ八)。

パウロは「キリスト・イエスにある聖徒」と呼んでこれらの兄弟に手紙を送ったが、それは決して完全な品性を持った人であって書いたものではない。試練に抵抗して戦い、失敗の危険がある人々に書いているのである。パウ

□は彼らの目を「羊の大牧者、わたしたちの主イエスを、死人の中から引きあげられた平和の神」に向けた。そして神が「永遠の契約の血」によって、「イエス・キリストによって、みこころにかなうことをわたしたちにしてください、あなたがたがみおねを行うために、すべての良きものを備えてくださる」ことを保証した（ヘブル一三ノ二〇、二一）。

過失を犯した者がそれに気づいたとき、自尊心を失わせないように注意なさい。冷淡や不信頼によって失望させてはならない。「続くかどうかを見て、それから信頼しよう」と言ってはならない。このような不信頼が誘惑にあっている者を、よくつまずかすのである。

わたしたちは他人の弱さを理解するように努めなければならない。暗黒の鎖につながれてきた人々、決断力も道徳力もない人の心中の試練をほとんど知らない。最も哀れなのは、後悔の念に責められている人間の状態である。こういう人はちょうど打ちのめされ、よろめきつつ、土の中に没して行くようなものである。何一つはつきり見えない。頭はにぶり、どうしていいかわからない。かわいそうに多くの人が誤解され、認められず、悩み苦しみ、失われ、迷っている羊となっている。神をみいだすこともできず、許しと平安を心から切望している。

その心痛を深めるような言葉を一言も発してはならない。罪の生活に疲れ果て、しかもどこに救いを求めるかも知らない人にあわれみ深い救い主を紹介なさい。手をひいて引き上げ、励ましと望みの言葉を物語り、救い主のみに手につかまるように助けなさい。

失望してはならない

わたしたちの努力にすぐ応じない人に会うと、失望してしまう。一筋の望みでもある間はその魂のために力を尽すを決してやめてはならない。尊い魂を軽々しく誘惑者の手に渡してしまうには、あまりに高価な値が自己を犠牲にされたあがない主によって払われている。

わたしたちは誘惑されている人の立場になってみる必要がある。遺伝の力、悪友や環境の影響、悪習慣の力を考えてみなさい。こういう感化の下にあつては、多くの人が墮落するのは不思議ではない。彼らを向上させようとする努力に彼らがなかなか応じないのはあやしむに足りない。

粗野で、あまり望みがないようにみえた人でも、福音を受け入れると、最も忠誠な信者、伝道者となることがある。こういう人は全く墮落しきっていたのではない。外見には、それが見られないが、中に感動しやすい善良な心がある。多くの者は、助け手なしに自力で更生しようと決してしないが、忍耐強い不断の努力によって救うことができるかもしれない。こうした人はやさしい言葉、親切な思いやり、また確実な助けを必要としている。心の中に残っている、かすかな勇気を断ち切ってしまうぬように助言を要する。このような人に接する働き人は以上のことを考慮しなければならない。

あまり長い間墮落していたので、もう少し良い環境の下にあつたならば、到達きたはずのところまでに、この世では及び得ない人がある。しかし、義の太陽の明るい光はその心にさし込むことができ、彼らも神の生命と等し

い生命を持つことができる。彼らの心に向上的な気高い思想を植えつけなさい。罪悪と純潔、暗黒と光の相違を自分の生活を通して明瞭に示しなさい。クリスチャンになるとはどんなことかを、模範によって悟らせるようになさい。キリストは最も罪深い人でも向上させ、神の子と認められる域にまで進め、キリストと共に不滅の遺産を受け継ぐ者とすることができるのである。

神の恵みの奇跡によって、多くの人が有用な生活をするのに適した者とされることができ。彼らは輕蔑され、見捨てられて、全く失望しきっている。彼らは平然として頑固な態度をとるかもしれない。しかし彼らの向上を望みのないものにしていた愚鈍は、聖靈の働きによって消滅してしまうのである。鈍い頭も覺せいするに至り、罪の奴隷が自由の年となる。不道德は消え去り、無知はなくなり、愛によって働く信仰を通して心は純化され、精神は明るくなる。

第一章 不節制な人に対する働き

すべて真の改革は、福音事業の中で重要な位置を占め、人間を新しい、さらにすぐれた高尚な生活へと向上させるものである。特に禁酒運動はクリスチャンの働き人の支持を必要とする。働き人はこの運動に注意を向け、これを活気ある問題とすべきである。至るところで真の節制の法則を示し、禁酒誓約書に署名をする人を求めなければならない。悪習慣にしばられている者のために熱心な努力を払うべきである。

不節制によつて墮落した人のためになさねばならない仕事に至るところにある。教会や宗教機関やいわゆるクリスチャンの家庭の中でも多くの青年が滅亡への道をたどっている。不節制な習慣によつて病気を招き、罪深い気ままな生活を送るために金銭を得ようとする欲望から不正直な行為に陥る。健康も品性も破壊され、神から遠ざかり、社会から捨てられたこれらのあわれな人々は、今の世においても来世においても、望みが絶えたことを感ずるのである。その両親の心は張り裂けるばかりである。こうした誤ちを犯す者はもう絶望だと人はいうが、神はそうお考えにならない。神は、彼らがこのようになった事情を全部ご承知なので、あわれみの心をもつてのぞまれる。また、こういう階級の人々こそ、助けを要するのであるから、決して「だれも自分の魂を心配してくれない」と思わせて

はならない。

不節制の犠牲者の中には、あらゆる階級、あらゆる職業の人間が含まれている。高位高官、すぐれた才能がある人、非常に成功を収めた人が欲望に負け、ついに、誘惑に抵抗する力を完全に失ってしまっている。かつて裕福であつた人が家を失い、友を無くし、苦痛、悲惨、病氣、墮落の中にいるのである。彼らは自制力を失い、助ける者がなければますます深く墮落していく。こういう者にとって放蕩は道德的な罪惡であるばかりでなく、肉体的な病氣をも伴うのである。

不節制な人を助ける場合、キリストがよく実行されたようにその肉体の状態に注意を払わなければならない。健康的な、刺激のない飲食物と、清潔な衣服、身体を清潔にする機会がこうした人には必要である。彼らは、助けとなり、向上に導くクリスチャン的感化に囲まれなければならない。こうした悪習慣の奴隷となつた人が、その鎖を脱しうるように助けることができる場所を各都市ごとに備えるべきである。酒は困つたときの唯一の慰めであると多くの人は思っているが、クリスチャンと名のつている人々が祭司やレビ人のような行いをせず、よきサマリヤ人の模範に従うならば、そうした氣持を起すはずがない。

不節制の虜となつている人のために働く場合には、相手は正氣な人間ではなく、一時的に悪鬼の力に支配されている者とまじわっていることを記憶していなければならない。忍耐強く、がまんし、その外見の見苦しさ、いまわしさを考えず、キリストが贖罪のために死なれたその人の尊い生命のことを考えなさい。酔っぱらいが目をさまし、自己の墮落を感じるとき、その味方であることを示すために全力を尽し、非難の言葉を語ってはならない。非難あ

るいは反感を表現するような行動や表情をしてはならない。たいていの場合このあわれな人は自己をのろうに至る。その人が立ち上げられるように助け、信仰を励ます言葉を語りなさい。その性格の中にある良い特質を強くするように努めなさい。向上する方法を教え、同僚に尊敬されて生きてゆくことができることを示し、神から与えられてそのままになっている才能の価値を自覚するのを助けなさい。

意志は墮落し弱くなっても、キリストによる望みがある。キリストはその心の中にもっと高い衝動と清い欲望を呼び起される。福音の中に示された希望をつかむように励まし、誘惑され、戦っている人の前に聖書を開き、繰り返して神の約束を読みきかせなさい。彼にとってその約束は生命の木の葉となるであろう。感謝の喜びをもってあのきながら、キリストによるあがないの望みをいなくまで忍耐強くその努力を続けなさい。

自分が助けようとしている人を、しつかりつかんでいなければならない。そうでないと勝利は決して得られない。こうした人はたえず悪に誘われるものである。酒を渴望する気持に幾度となく圧倒され、何回となく失敗するかもしれない。しかしそのために努力をやめてはならない。

こうした人はキリストのために生きようと努力することを決心しているのだが、その意志の力が弱いため、責任をもってこうした人を見守る人が注意深く保護していかなければならない。こうした人は男子の面目を失ったものであり、それを取り返さなければならぬ。悪に対する強度の遺伝性と戦わねばならない人が多い。彼らは生れながらに不自然な食欲や肉欲的行動をもっているから、注意深く警戒しなければならない。内外共に善と悪とが主導権を戦い合っている。こうした経験がない人は、食欲の圧倒的な力や気ままな習慣と節制を守ろうとする決意との

間に起る戦いの激しさを知ることができない。何回となくその戦いを重ねなければならないのである。

キリストにひかれる人の中には、食欲と情欲に対する戦いを続ける精神力のない人が多い。しかし、働き人はこの事実に失望してはならない。信仰を捨てるのは墮落のどん底から救われた者だけであろうか。

働き人はひとりで働くのではないことを記憶なさい。奉仕を務とする天の使は、真実の気持を持った神のすべてのおすこ、娘たちと共に働く。またキリストは回復なさる方である。このりっぱな医者ご自身が、自分の忠実な働き人の側に立って、悔い改めた魂に、「子よ、あなたの罪は許された」と仰せになる。

社会から捨てられた人でありながら、福音に示された望みをいだき、天国にはいる者が大勢いるのに反し、大きな特権と大きな光に恵まれながら、これを利用しないで外の暗黒の中にとり残される人も居る。

自力で努力する

悪習慣にとらわれている者に、自力で努力する必要を気づかせなければならない。彼らを向上させるため、他の人が最大の努力を払い、神の恵みが豊かに注がれ、キリストがその心に訴え、天使が奉仕をしても、彼ら自身が自力で戦おうと覚せいしなければすべてがむだになるであろう。まだ青年であったが間もなくイスラエルの王冠を受けるソロモンに対してダビデが最後に言った言葉は、「あなたは強く、男らしくなければならない」であったが、不死の王冠を受ける候補者である人間ひとりびとりに対して、「あなたは強く、男らしくなければならない」という靈感による言葉が語られている（列王紀上二ノ二）。

放縱な生活をしている者が人間らしくなろうと思うならば精神的に大変化が必要であることを感じとるように導かなければならない。神は彼らが覺せいし、罪深い放縱な生活で失った人格、すなわち、神より授けられた人間の資格を、キリストの力によって取り戻すことを要求しておられる。

誘惑の恐ろしい力を知り、放縱な生活に導く欲にひかれ、「わたしは惡に勝てない」と、多くの人が絶望の叫びをあげる。しかし、それはできることであり、また勝たなければならないことであると告げなさい。今までに何回も負けたかもしれないが、しかし、最後までそうとはかぎらない。それは罪の生活習慣によって支配され、道徳力が弱くなっているからである。この人の約束や決心は砂でできた綱のようなものである。約束を破り、誓いを無視したことを知っているため、自分の真実に対する自信は弱まり、神は自分を受け入れ、自分の努力を助けられることはできないと考える。しかし絶望する必要はない。

キリストにたよる者は先天的、また後天的な習慣や癖にとらわれていてはならない。低級な性格にしばられず、いっさいの食欲、情欲を支配すべきである。わたしたちが有限な力で惡と戦うのを神は放置しておかれぬ。惡に対する先天的、後天的な傾向がどうであれ、神が与えようとしておられる力によって、わたしたちは勝利することができるのである。

意志の力

誘惑される者は意志の眞の力を知る必要がある。それは人間の性質の中の支配的な力である。すなわち、決断す

る力、選択する力である。万事が意志の正しい働き方によって左右される。善や純潔に対する欲求はそれ自体正しいものであるが、単なる欲求にとどまるならばなんにもならない。自己の悪癖に勝利しようと希望し、そう望みながら墮落していくものが多い。彼らは自分の意志を神に従わせない。神に仕える道を選ばないのである。

神はわたしたちに選択権をお与えになった。わたしたちのしなければならぬのは、これを働かせることである。人間は自分の心を変え、自分の思想、衝動、愛情を支配することはできない。自分を純潔にし、神のみ業に適するものとすることもできない。しかし、わたしたちは神に仕えることを選び、自分の意志を神にささげることが出来る。そのとき、神はわたしたちの中に働き、神がお喜びになるようにしたいという志を立てさせこれを行わせられる。こうしてわたしたちの性質が、いっさいキリストの支配下におかれるようになる。

意志を正しく働かすことにより人生を一変することができる。自己の意志をキリストに任せることによって、自らを神の力に結合させ、堅く立つために天より力を受ける。弱く動揺しやすい人間の意志を神の全能の力、不動の意志と結合させる者は、すべて純潔で高尚な生活、すなわち、食欲、情欲に勝利する生活を送ることができる。

健康の原則に関する知識

食欲の力と戦っている人々を健康生活の原則について教育しなければならぬ。病的状態を招き、不自然な欲望にふけて健康の法則を犯すことは飲酒の習慣の基礎をきずくものであることを示さなければならない。ただ健康の原則に従って生活することによってのみ、不自然な刺激物に対する渴望から解放される。食欲のきずなを破るた

めに神の力にたよると同時に、神の法律、すなわち、道德律にも肉体の法則にも従い神と協力しなければならない。

職業…自給自足

改革しようと努力している人々には職業を与えなければならない。働ける者には無料で衣食住が手にはいると思わせてはならない。他の人々のためにも、またその人自身のためにも、受けたところと等しいものを返しうる方法を考慮してやるべきである。自給自足に対する努力はすべて奨励なさい。これは自尊心と独立心を高める。心身を有益な働きに用いることは誘惑を防ぐのに重要なことである。

失望、危険

墮落した者のために働いている人が改革の見込みのある人から失望させられることが多い。外部的な面にだけ習慣、行動の変化を見る人が多いが、それは衝動によって感動し、一時的に改めたにすぎないのであって、真の改心をしていない。以前と同様に自己を愛する心をいだき、つまらぬ快樂に対する欲求を捨てず、相変らず放縦な生活を望んでいる。こうした人は品性を形成することをしらず、原則に基いて行動する人としては信賴できない。食欲や情欲を満たすことによって頭脳も霊的な力も低下し、自らを弱くしている。気まぐれで変りやすく、その衝動は肉欲的である。こういう人はしばしば他人に危険を及ぼす。改革した人とみなされ、責任を負わされて、やがて純真な人々を墮落させるような感化を及ぼす地位に置かれる。

真心から改めようと努力している人でも失敗する危険がないとはかぎらない。彼らにはやさしく接すると同時に賢明な方法で接しなければならない。深い墮落より救い出された人をほめ、きげんをとることはその人を破滅におとし入れることがある。また罪の生活の経験を公に発表させることは、語る者にも聞く者にも非常に危険である。悪の場面を考えることは頭も心も腐敗させる。また救われた人に高い地位を与えることはその人にとって有害である。多くは自分の罪深い生涯が自分自身を卓越した者としたと思い込む。評判になるのを喜ぶ気持と自信が強められ、やがてその人の破滅をきたすのである。こういう人は自己信頼を捨て、キリストのあわれみにたよって初めて立つことができる。

救われた者は他人をも助ける

真に改心したことを表わす者には他の人のために働くように励ますべきである。キリストに仕えるためサタンより離れてきた魂の一つとして退けてはならない。神のみたまが熱心にその人に働きかけているのがわかるときには主の働きにつくようにあらゆる励ましを与えなさい。「疑いをいなく人々があれば、彼らをあわれみ」(ユダ二二)、神の知恵にすぐれている人が、助けを必要としている人々を見ると、彼らは真実に悔い改めてはいるが、しかし励ましがなければほとんど望みをつかみ得ないのに気がつく。主は恐れおのき、悔い改めたこれらの人々を喜んで愛の交わりの中に迎える気持を神のしもべの心に起してください。こうした人がしばしば陥った罪が何であったにせよ、またどんなにひどく墮落していたにせよ、悔恨の念をもってキリストにいくならば、キリストは喜んで受

け入れられる。そのとき、キリストのために何かできる仕事をその人に与えなさい。その人がもし、自分の救い出された破滅の穴から他の人も引き上げる働きを希望したら、その機会を与えなさい。霊的な力が得られるように経験のあるクリスチャンとまじわらせ、彼らの手にも心にも主の働きをもっと満たしなさい。

光が心の中にさし込むと、今まで完全に罪の虜にみえた人が、かつて自分らがそうであったと同じ罪びとのために働く有力な働き手となる。キリストを信ずる信仰により、ある者は高い地位の奉仕につき、救霊事業に責任を負わされるに至る。彼らは自己の弱点を悟り、墮落した性質を認識する。また罪の力、悪習慣の力を知っている。そしてキリストの助けなしには勝利が得られないことを自覚し、「わたしの無力な魂をあなたにゆだねます」と、たえず叫ぶのである。

こういう人々は他人を助けることができる。誘惑にあい、試みられ、ほとんど望みを失ったが、愛の使命を聞いて救われた者は、救霊の術を理解することができる。救い主にさがし出され、そのおりに連れもどされたため、キリストへの愛で心が満たされている者は、迷える者をさがす方法を知っている。その人は、罪びとに神の小羊を示すことができる。あますところなく自らを神にささげ、愛の神に受け入れられる。助けを求めてさし出されたその弱い手は握られている。こうした人の奉仕によって多くの放蕩むすこが父のもとに連れ戻される。

誘惑された者の望みであるキリスト

罪の生活から純潔な生活へと立ち上がろうともがく、ひとりひとりのために、「わたしたちを救いうる名は、こ

れを別にしては天下のだれにも与えられていない」唯一の名の中に大きな力の要素が宿っている(使徒行伝四ノ一二)。罪深い性癖から救われるため、平安に満ちた希望を渴望する者には、「わたしのところにきて飲むがよい」とキリストは言われている(ヨハネ七ノ三七)。罪悪に対する唯一の医薬はキリストの恵みと力である。

人間の力でりっぱな決心をたてようとしても無益である。世界中のどんな誓約も悪習慣の力を破れない。神の恵みによって心が新しくされるまでは人間はどんなことにも決して節制しない。わたしたちは一刻でも罪から自分を守ることはできない。時々刻々神にささえられている者である。

真の改革は心のきよめから始まる。キリストの恵みが品性を作り変え、その魂が真に神に通っている時に初めて墮落した人々を救う働きが成功を収める。

キリストは神の律法に完全に服従した生活を送り、それによって全人類に模範を示された。キリストの力と、その教えに従い、わたしたちはキリストが地上ですごされたのと同じ生活を送らなければならない。

墮落した人に対するわたしたちの働きにおいては、神の律法が命ずるところ、および神への忠誠の必要性を心と思いに刻み込まねばならない。神に仕える者と仕えない者との間には明白な相違があることをおこたらず明示なさい。神は愛であるが、その命令を故意に無視する者をお許しになることはできない。神の政府の法令は、もし、人間がそれに不忠実であつたとしたら、その結果をのがれ得ないものである。神を尊ぶ人だけが神より名誉を受けることができる。この世における行動が人の永遠の運命を決定する。人間はまいた種を刈り取らなければならない。原因は結果をもたらす。

完全な服従以外には、神の要求の標準に達することができない。神はその要求を不明瞭にしておかれなかった。人間を神と調和させるために、不必要なものは何一つ命じておられない。わたしたちは罪びとに神の理想の品性を示し、この理想に到達させる唯一の恵みをお持ちになるキリストに彼らを導かなければならない。

救い主は自ら人間の弱さを受け、罪のない生涯を送られたが、それは、人性の弱さのために勝利することができないと人間が恐れるようなことがないためであった。キリストはわたしたちが、「神の性質にあずかる者」となるために地上においでになった。そして、人性が神性と結合するとき、罪を犯さないということをその生涯は物語っている。

救い主は、人間がどうして勝利を得るかを示すために勝利された。キリストは、サタンのすべての誘惑に対して神のみ言葉をもって応じられた。神の約束に信頼なさつて、神の律法に服従する力をお受けになったため誘惑者は勝つことができなかった。一つ一つの試練に対するイエスの答は「…と書いてある」であった。神はわたしたちが悪に抵抗するためにそのみことばをお与えになった。「世にある欲のために滅びることを免れ神の性質にあずかる」ために大いなる尊い約束が与えられている（ペテロ第二・一ノ四）。

誘惑にあっている人には、周囲の事情、自己の弱さ、誘惑の力などに目をおけたりせず、神のみ言葉の力をなめるように教えなさい。その力はすべてわたしたちのものである。詩篇記者は「わたしはあなたにおかつて罪を犯すことのないように、心のうちにみ言葉をたくわえました。」また「あなたのくちびるの言葉によって、わたしは不法な者の道を避けました」と言っている（詩篇一一九ノ一一、一七ノ四）。

言葉によって彼らを励まし、祈りによって彼らを神に引き上げるようになさい。誘惑に負けた多くの人々は、失敗によって恥を受け、神に近づくことはむだであるように考える。しかし、これは、サタンの暗示にかかっているのである。罪を犯したために祈れないように感じるときこそ、祈る必要のあるときであると告げなさい。たとえ恥ずかしくて、自分はつまらない者だと感じてても、その罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるからその罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめてくださるのである。

自分の無力を感じ、救い主の徳に全く信頼する者ほど、無力に見えても、実際は打ち勝ち難い者は他にない。祈りと神のみ言葉の研究と神のたえざる臨在を信ずる信仰により、最も弱い人間も、生けるキリストと共に生きることができ、キリストはその手の中に彼らをささえ、決して離されない。

尊い約束

キリストにたよる者はすべてこの尊い言葉を自分のものとすることができ、こう言うことができる。

「わたしは主を仰ぎ見、

わが救いの神を待つ。

わが神はわたしの願いを聞かれる。

わが敵よ、わたしについて喜ぶな。

たとい、わたしが倒れるとも起きあがる。

たといわたしが暗やみの中にすわるとも、
主はわが光となられる。」

「再びわれわれをあわれみ、
われわれの不義を足で踏みつけられる。

あなたはわれわれのもろもろの罪を
海の深みに投げ入れ。」

(ミカ書七ノ七、八、一九)

神はこう約束されている。

「わたしは人を精金よりも、
オフルのこがねよりも少なくする。」

(イザヤ書一三ノ一二)

「たとい彼らは羊のおりの中にとどまるとも。

はこの翼は、しろがねをもつておおわれ、

その羽は、きらめくこがねをもつておおわれる。」

(詩篇六八ノ一三)

キリストに最も多く許された者がキリストを最も強く愛する者である。最後の日にキリストのみ座に一番近く立つのはこうした人々である。

第二章 失業者や家がない人への助け

世の中には貧しい人の状態を憂慮し、彼らを助ける手段を考えている博愛精神の持ち主がいる。失業者や家がない人が神の摂理にもとづく一般的な祝福を得、神が計画されたとおりに生活を営むことができるように彼らをどうして援助するかということは、多くの人が解答を求めて熱心に努力を払っている問題である。しかし、社会の現状の根底に横たわっているその原因を理解している人は教育家、政治家たちの中でも少ない。政府当局者も貧困、窮乏、犯罪増加の問題を解決することができない。彼らは経済機構をさらに完全な基礎の上におこうとして、おなしの努力を払っている。

もし人が神の言葉の教訓にもっと注意するならば、自分たちが困っているこうした問題の解決を発見するだろう。労働問題や貧困者の救済に関して旧約聖書から多くのことを学ぶことができる。

イスラエル人に対する神の計画

イスラエル人に対する神の計画は各家族が十分に耕作しうる面積がある土地に家を持つことであつた。こうして

有益勤勉な自給自足の生活への手段と動機が与えられた。それ以来、人間が考えたどの考案も、この計画以上に進歩を示したものはなかった。今日現存する貧困と悲惨は、社会がこの計画から離反したことに大いに原因している。

イスラエル人がカナンに定住するにあたり、全員に土地がわけられ、レビ人だけが聖所に奉仕する者としてその平等分配から除外された。各種族は家族数が計算され、各家族はその人数にしたがって財産が分配された。

また一時的に所有物を処分することができても、その子供に与えるべき財産を永久的に売り払うことはできなかった。自分の土地を買いもどすことができるようになればいつでも自由にできたのである。借財は七年ごとに免除され、五十年目、すなわちヨベルの年にはすべての土地が最初の持ち主に返済された。

「地は永代には売ってはならない。地はわたしのものだからである。あなたがたはわたしと共にいる寄留者、また旅びとである。あなたがたの所有としたどのような土地でも、その土地の買いもどしに応じなければならない。あなたの兄弟が落ちぶれてその所有の地を売ったときは、彼の近親者がきて、兄弟の売ったものを買いもどさなければならぬ。たといその人に…それを買いもどすことができるようになったらば…その所有の地に帰ることができる。しかし、もしそれを買ってもどすことができないならば、その売った物はヨベルの年まで買い主の手にあり、ヨベルにはもどされて、その人はその所有の地に帰ることができるであろう」(レビ記二五ノ二二―二八)。

「その五十年目を聖別して、国中のすべての住民に自由をふれ示さなければならない。この年はあなたがたにはヨベルの年であって、あなたがたは、おのおのその所有の地に帰り、おのおのその家族に帰らなければならない」

(レビ記二五ノ一〇)。

こうして各家族はその持ち物が確保され、富豪と貧困の極端を防ぐ予防法が与えられていた。

実 業 訓 練

イスラエル民族の中では、実業教育が義務とみなされていた。父親は必ずこに一定の有益な職業を教えるように命じられていた。イスラエルの最大の人物でも実業につけるように教育を受けた。家政に関する義務の知識は婦人にとって必須とされていた。そして、これらの本務に巧みであるということは、最高の地位にある婦人の誉とされていた。

各種の実業が預言者の学校で教えられ、生徒の多くは労働をして自給していた。

貧困者に対する考慮

しかし、こうした手段も貧困を完全になくさなかった。貧困者が完全になくなるということは神の計画ではなかった。それは品性を発達させるための神の一手段である。「貧しい者はいつまでも国のうちに絶えることがないから、わたしは命じて言う、『あなたは必ず国のうちにいるあなたの兄弟の乏しい者と貧しい者とは、手を開かなければならない』と、神は申されている（申命記一五ノ一一）。

「あなたの神、主が賜わる地で、もしあなたの兄弟で貧しい人がひとりでも、町の内におるならば、その貧しい

兄弟にむかって、心をかたくなにはならない。また手を閉じてはならない。必ず彼に手を開いて、その必要とする物を貸し与え、乏しいのを補わなければならない」(申命記一五ノ七、八)。

「あなたの兄弟がおちぶれ、暮して行けないときは、彼を助け、寄留者または旅びとのようにして、あなたと共に生きながらえさせなければならない」(レビ記二五ノ三五)。

「あなたがたの地の実りを刈り入れるときは、畑のすみずみまで刈りつくしてはならない。またあなたの刈り入れの落ち穂を拾ってはならない」(レビ記一九ノ九)。

「寄留の他国人または孤児のさばきを曲げてはならない。寡婦の着物を質に取ってはならない。…あなたが畑で穀物を刈るとき、もしその一束を畑におき忘れたならば、それを取りに引き返してはならない。それは寄留の他国人と孤児と寡婦に取らせなければならない。…あなたがオリブの実をうち落すときは、ふたたびその枝を捜してはならない。それを寄留の他国人と孤児と寡婦に取らせなければならない。また、ぶどう畑のぶどうを摘み取るときは、その残ったものを、ふたたび捜してはならない。それを他国人と孤児と寡婦に取らせなければならない」

(申命記二四ノ一七—二二)。

惜しみなく与えると、貧しくなってしまうと心配する必要はない。神の律法に従えばその人は必ず栄える。「あなたの神、主はこのことのために、あなたをすべての事業と、手のすべての働きにおいて祝福されるからである」(申命記一五ノ一〇)。「あなたは多くの国びとに貸すようになり、借りることはないであろう。またあなたは多くの国びとを治めるようになり、彼らがあなたを治めることはないであろう」(申命記一五ノ六)。

商 業 の 原 則

神のみ言葉は、他の階級を圧迫し苦しめて一つの階級だけが豊かになる政策を許していない。商業上の取引においては、いっさい相手の側に自らを置き、自分のことだけを考えず、他人のことを考えるように教えられている。自分を益するために他人の不幸を利用し、あるいは他人の弱点や無能力によって自分の利益を求める人は、神のみ言葉の原則も誠命も破るものである。

「寄留の他国人または孤児のさばきを曲げてはならない。寡婦の着物を質に取ってはならない」(申命記二四ノ一七)。「あなたが隣人に物を貸すときは、自分でその家にはいって、質物を取ってはならない。あなたは外に立っていて、借りた人が質物を外にいるあなたのところへ持ち出さなければならぬ。もしその人が貧しい人であるときは、あなたはその質物を留めおいて寝てはならない」(申命記二四ノ一〇―一二)。「もし隣人の上着を質に取るならば、日の入るまでにそれを返さなければならぬ。これは彼の身をおおう、ただ一つの物、彼の膚のための着物だからである。彼は何を着て寝ることができよう。彼がわたしにおかつて叫ぶならば、わたしはこれに聞くであろう。わたしはあわれみ深いからである」(出エジプト記二二ノ二六、二七)。「あなたの隣人に物を売り、また隣人から物を買うときは、互に欺いてはならない」(レビ記二五ノ一四)。

「あなたがたは、さばきにおいて、物差しにおいても、はかりにおいても、ますにおいても、不正を行ってはならない」(レビ記一九ノ三五)。「あなたの袋に大小二種の重り石を入れておいてはならない。あなたの家に大小

二種のますをおいてはならない」(申命記二五ノ一三、一四)。「あなたがたは正しいてんびん、正しいおもり石、正しいエパ、正しいヒンを使わなければならない」(レビ記一九ノ三六)。

「求める者には与え、借りようとする者を断るな」(マタイ五ノ四二)。「悪しき者は物を借りて返すことをしない。しかし正しい人は寛大で、施し与える」(詩篇三七ノ二一)。

「相はかつて、事を定めよ、真昼の中でも、あなたの陰を夜のようにし、さすらい人を隠し、のがれてきた者をわたさず…さすらい人を、あなたのうちにやどらせ…滅ぼす者からのがれさせ」(イザヤ書一六ノ三、四)。

神がイスラエルにお与えになった生活の計画は全人類への実物教訓となるべきものであった。もし、これらの法則が今日実行されていたら、この世界はどんなに違った場所となっていたことであろう。

家がない人々に対する好機

広い自然界には、苦勞をしている人や貧困者たちが自分たちの家を見つけるのに十分広い場所が残っている。自然のふところにはこうした人々を養うのに十分な資源がある。その宝を収穫する勇氣と意志と忍耐のある人にはだれにでも地の深いところに祝福が秘められている。

エデンにおいて神が人にお命じになった仕事である、地を耕作することは多くの人に生計を得させる機会のある分野を開くものである。

「主に信頼して善を行え。そうすればあなたはこの国に住んで、安きを得る」(詩篇三七ノ三・英訳・あなたは

必ず養われる)。

わずかな収入をねらって都市に密集している幾千幾万の人は、この土地耕作によって働くことができない。そのわずかな収入も食物のために費されず、霊と肉とを共に滅ばすものを手に入れるために酒屋の錢箱の中に入れられる場合が多いのである。

多くの人は労働を苦役とみなし、正直な労働をするよりも策略によって生計をたてようとしているが、働かずに生活しようというこの欲望は悲惨と罪惡、犯罪への門戸をほとんど無制限に開くものである。

都市の貧民窟

大都市には動物よりも劣った取り扱いを受け、それ以上に考慮されていない人が多い。悲惨な長屋、その多くは湿気と汚れで悪臭を放つ暗い地下室であるが、その中に雑居している家族のことを考えてごらんさい。こうしたあわれな場所で子供が生れ、成長し、死んでいくのである。神が人間の心を喜ばせ向上させるためにおつくりになった自然界の美をこうした人は少しも見ることはない。ぼろ着物をまとい、半ば飢え、罪惡と墮落の中に生活し、周囲の悲惨と罪の中に品性が形成されていく。子供らが神の名を聞くのは冒瀆的な言葉がかわされるときだけである。汚れたのしりと、のろいの言葉が子供の耳を満たす。酒やたばこの臭気、嘔吐を催す悪臭、道德の腐敗が子供の感覚を墮落させる。こうして多くの人が犯罪者になるように訓練され、彼らを悲惨と墮落の中に放置した社会の敵となるように教育されるのである。

しかし、貧民窟のすべての貧困者がこういう人とはかぎらない。敬けんな人が疾病や災難から、またしばしば他人を利用して生活する者の不正直な策略のために貧困のどん底に落されることもある。正直で善意にみちた多くの人が、実業的な教育に欠けているために貧しくなる。こうした人は無知なために生活の困難と戦うことができない。都会にふらふらと出て行くが、彼らの多くは職が見いだせないばかりか、罪悪に満ちた声や光景に囲まれ、恐ろしい誘惑の対象となる。彼らは、不道德な、墮落した人と共に住み、よくそれと同類視される。このようなひどい状態に陥らないようにするためには、超人間的な努力、すなわち人間以上の力によりすぎるだけである。多くの者は罪を犯すよりむしろ苦難を選んで、高潔を保持しているが、この階級の人には特別に助けと同情と奨励が必要である。

田園の住居

今日、都会に密集している貧困者が地方に家を持つならば生計がたてられるばかりでなく、彼らが現在知らない健康と幸福を発見するであろう。激しい労働、簡単な食物、極端な節約、それにしばしば困難と欠乏にあつたろうが、都会を離れ、都会にある罪悪への誘惑、混乱、犯罪、悲惨、不浄を離れて、いなかの静かな、平安な、清い場所に行くことはすばらしい祝福ではなかるうか。

都会に住み、緑の野を一步も踏んだことなく、くる年もくる年も、きたない中庭、狭い路地、れんが塀、舗道、ほこりと煙で暗くなった空をながめている多くの人が、もし緑の野、森、丘、小川、澄みわたった空、新鮮な、清

いいなかの空気に囲まれた農村地方に連れて行かれたならば、まるで天国のように思うであろう。

人間との接触、人間への依存からすっかり離れ、社会の墮落的主義、習慣、刺激から遠ざかり、自然の中心に近づいて行くのである。神の臨在がさらに現実的なものとなるであろう。多くの人が神にたよることを学び、自然を通じて、神が心に平安と愛を告げられるのを聞き、思いも心も身体もそのいやしの力、生命を与える力に答えるであろう。

実業教育の必要

勤勉で自給する人になろうとすると、助けと励ましと教育を受けなければならない人が非常に多い。社会には貧しい家庭が多く、こうした人を地方に定着させ、生計をたてる方法を学ぶように助けることほどりっぱな伝道の働きはないのである。

こうした助けや教育の必要は都市ばかりとはかぎらない。より良い生活ができそうな可能性がある地方においてさえ、多数の貧困者がいる。地域全体に実業方面、衛生方面の教育が欠けているところが多い。あばら家にわずかな家具と衣類をもって住み、仕事をする道具も書籍もなく、生活の慰安も便宜も教育を受ける方法もなく生活している。悪い遺伝と誤った習慣の結果、虚弱な、奇型的身体をもった、野獣のような人があらわれている。こうした人は根底から教育されなければならない。彼らは不精で怠慢で墮落した生活を送ってきており、正しい習慣に改めるように教育されなければならない。

改良が必要であることをどのような方法で自覚させることができようか。生活の高い理想にどうしてもたら導き得られるか。どうしても立ち上がるように助けられるだろうか。貧困がひろがっていて、そのうえ何かしよつとすると一々反対されるところではどうしてもたらいであるうか。確かにその働きは至難である。人間以外の力に助けられなければ必要な改革はできない。貧しい者と富める者が同情と援助によって密接に結びつけられることは神の計画である。財産があり、能力がある者はその賜物を他人を祝するために用いなければならない。

クリスチャンの農夫の働き

クリスチャンの農夫は、貧困者がその地方に家を持ち、土地を耕作し、農作物がとれるようにする方法を教えることによって真の伝道事業をすることができる。農具の使用法、各種農作物の栽培方法、果樹の植え方、取り扱い方を教えなさい。

土地を耕作しているが、怠慢のために十分な収穫が得られない者が多い。その果樹園は適切に管理されておらず、適当な時期に種子がまかれておらず、また土地は単に表面だけしか耕作されていない。それでいて、不成功に終ると土地が悪いせいにする。よく働けば豊かな収穫が得られる土地を悪くいう偽りのあかしがたてられることがしばしばある。目先だけの計画や、わずかばかりの努力や、最善の方法に関する研究の不足は、改革を非常に必要としている。

喜んで学ぼうとする者にはすべて正しい方法を教えなさい。もし進歩した考案を聞きたくない人がいるならば、

沈黙のうちにそれを教えなさい。自分の土地をりっぱに耕作し、機会あるごとに少しずつ教え、正しい方法がよいことをその収穫に雄弁に物語らせるようになさい。正しく働くならば、その土地にどれだけのことをなしうるかを実証なさい。

工業の施設

貧しい家族が職業を得るために各種の工業施設に注目しなければならない。大工やかじ屋その他各種の有益な仕事を理解している者はみな、無知な人や失業者を教え、助ける責任を感じなければならない。

貧しい人に対する働きにおいては婦人にも男子と同様に多くの仕事がある。じょうずな料理人、家政婦、裁縫師、看護婦等すべての助けが必要とされている。貧しい家の人に料理の仕方、自分の衣類のつくろい方、縫い方、また病人の看護、正しい家事などを教えなさい。少年少女にも何か有益な商業や職業をよく学ばせるべきである。

伝道する家族

伝道する家族は未開墾の土地に住む必要がある。農夫、資本家、建築家、および各種の技術に熟練した人を未開な、荒廃した地に派遣し、その土地を改良し、工業施設を設け、自分のためには質素な家を建て、また隣人を助けるようにすべきである。

神は最も見ばえのしない、醜いものの中に美しいものを置かれて自然の荒れ地、荒れ野を美しくされているが、

わたしたちに要求されているのもこうした働きである。外見は望みがないように見える砂漠も神の庭園のようになりうるのである。

「その日、耳しいは書物の言葉を聞き、目しいの目はその暗やみから見ることができる。柔和な者は主によって新たな喜びを得、人のなかの貧しい者は、イスラエルの聖者によって楽しみを得る」(イザヤ書二九ノ一八、一九)。

自活するように人々を助けよ

実業方面の教育によって貧しい人々を最も効果的に助けることがよくある。働くように教育されていない人は、一般に勤勉、忍耐、経済、克己の習慣がなく、事態を処理する方法を知らない。注意深く、経済的に用いれば、その家族を見苦しくなく、楽にささえるものを、しばしば、不注意と正確な判断力の不足によって浪費してしまう。

「貧しい人の新田は多くの食糧を産する、しかし不正(英訳・判断の不足)によれば押し流される」(箴言一三ノ二二)。

貧しい人に与えても、依頼心を教えることになって、彼らを悪くするかもしれない。こうした与え方は利己主義や無力を助長するものである。それは時おり怠惰と浪費と不節制に至らせる。自ら生計をたてられる人は他人に依頼する権利はない。「社会は自分を生活させる義務がある」ということわざの中には虚偽、詐欺、窃盗の要素が含まれている。社会は自分で働いて生計をたてることができる人を養う義務はない。

真の慈善とは自活できるように人を助けることである。人が家にきて食物をこうならば、飢えたままで帰しては

ならない。その貧困は災難の結果であるかも知れない。しかし、真の慈善とは物品を与えることよりもっと深い意味がある。それは他人の幸福に対して心から関心を持つことである。わたしたちは貧しい者、悩んでいる者が何を必要としているかを理解するように努力し、彼らを最も益するように助けなければならない。そのように考え、時間を費し、個人的努力を払うことは、単に金銭を与えるより、はるかに高価なことである。しかもそれが最も真実な慈善である。

自分が受ける分を働いてとることを学んだ人は、受けたところを最大に使用することを学ぶのは容易である。そして自分にたよることを学び、単に自活できるばかりでなく、他人を助けることができるようになる。その機会をむだにしている人に人生の義務の重要さを教えなさい。聖書の教えは人間を決して怠惰にするものではないことを示しなさい。キリストはつねに勤勉を奨励された。「なぜ、何もしないで、一日中ここに立っていたのか」となまけ者に言われた(マタイ二〇ノ六)。「わたしたちは、わたしをつかわされたかたのわざを、昼の間にしなければならぬ。夜が来る。すると、だれも働けなくなる」(ヨハネ九ノ四)。

実 物 教 訓

福音に従う人に福音が何をなしうるかという証拠を家庭生活や習慣、行動、秩序を通して社会に示すことはすべての人に与えられている特権である。キリストは、わたしたちがどんな者になれるかを示すためにこの世にこられた。キリストに従う者が、生活の各方面において正しい型となるように、キリストは期待しておられる。また神の

働きが実際の事物に表わされるように望んでおられる。

わたしたちの家庭や環境は怠惰、不潔、粗野、混乱に代って、勤勉、清潔、趣味、高尚が生ずるような改善方法を教える実物教訓とならなければならない。わたしたちの生活と模範によって品性や環境の中にある醜いものに気がつくように他人を助け、クリスチャンの礼儀正しさをもって、改善するように励ますことができる。相手に対する関心を表わすとき、その人の力を最もよいみにちを使用する方法を教える機会が発見される。

希望と勇気

わたしたちは勇気と忍耐なしには何もできない。貧しい人、失望している人に希望と励ましの言葉を語り、必要に応じて、困っているときには助け、関心を明らかに証明なさい。多くの特権を与えられた人は、自分らもまだ多くの点でまちがいをすることを覚え、人があやまちを指摘されることは苦しいことであり、また彼らの前には模範とすべき正しい型が掲げられていることを記憶すべきである。親切は非難よりも効果があることを記憶なさい。他人を教えるようにするとき、自分はその人が最高標準に達することを希望しており、また喜んで助けようとしていることを理解させなさい。何か失敗しても、急に叱責してはならない。

単純克己

単純、克己、経済等、貧しい人にとって非常に重要な教訓が必ずかしく思われ、歓迎されないことがよくある。

世間の模範や精神というものはたえず刺激的で自慢、虚栄、わがまま、放縦、怠惰を養成する。こうした悪が多くの人を貧困におとし入れ、さらに多くの人を墮落と悲惨な状態から立ち上げられないようにしている。クリスチャンは、貧しい人がこうした勢力に抵抗するように彼らを励まさなければならぬ。

イエスは謙そんな姿をとってこの地上にこられ、貧しい家にお生れになった。天の主権者、栄光の王、天の万軍の司令官であつたイエスが、へりくだって、人性をとり、しかも貧しい、卑しい生涯をお選びになったのである。貧しい者が持たないような機会はキリストも持つておられなかった。日常の経験の中には労働と困難と貧困があつた。「きつねには穴があり、空の鳥には巢がある。しかし、人の子にはまくらする所がない」と、キリストは仰せになった（ルカ九ノ五八）。

イエスは人の称賛や賛美をお求めにならなかった。軍隊を指揮されなかった彼は地上の王国を統治なさらなかった。社会の富豪や名声のある人のきげんをとることもなさらなかった。また国家の指導者のひとりになる地位を要求なさらなかった。彼は貧しい人々の間に住み、社会の人為的差別を無視された。貴族の出身、財産、才能、学問、地位をも無視された。

彼は天の王子であつたが、学問ある法律家、司、学者、パリサイ人の中から自分の弟子を選ばれなかった。こうした人は自己の知識、その地位を誇っていたため、キリストは見すごされたのである。彼らは伝説や迷信にこりかたまっていた。あらゆる人の心を読みとることがおできになったキリストは、喜んで彼に従おうとした質朴な漁師をお選びになった。彼は取税人や罪びとと共に食し、一般の民衆とまじわられたが、それは彼らと共に卑しくなり、

世俗的になるのではなく、言葉と模範によって正しい原則を彼らに示し、世俗的な、卑賤な状態から引き上げるためであった。

イエスは人間の価値を判断する社会の誤った標準を直そうとされた。彼は貧しい者の立場に立たれたが、それはこの世が貧困に付属させている汚名を貧困から取り除くためであった。神の国の世継ぎである貧しい者を祝し、侮辱、非難を貧困から永遠に取り去られた。そして自分の歩かれた道をわたしたちに示し、「だれでもわたしにいつてきたいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負うてわたしに従ってきなさい」と言われた（ルカ九ノ二三）。

クリスチャンの働き人は、相手の立場にたって人々に接し、彼らを教育して高慢にするのではなく、品性を向上させなければならない。キリストがどのように働き、克己されたかを教え、克己と犠牲の教訓をキリストから学ぶように助け、流行を追って、放縦な生活をしないように教えなさい。人生は自己を楽しませて浪費してしまうにはあまりにも尊く、厳粛で、かつ神聖な責任が大きい。

人生における最も良いもの

人間は人生の真の目的をほとんど理解していない。きらびやかな外観に魅惑されている。世俗的に卓越することを熱心に求め、そのために人生の真の目的が犠牲にされる。人生における最善のもの、すなわち単純、正直、真実、純潔、高潔等は金銭で売買できないものである。それは学者にも無知な者にも、また地位の高い政治家にも貧しい

労働者にも自由に得られる。神は富める者も貧しい者も一様に楽しむことができる喜び、純潔な思想を養い、無私の行動をするときに起る喜び、また同情ある言葉を語り、親切な行いをすることによって生ずる喜びをすべての人のために備えておられるからである。こうした奉仕をする人からはキリストの光が輝きいで、多くの影で暗くなつた人生を明るくする。

神は成功させたもう

貧しい人々を物質的に助けるときは、つねに霊的な必要も心に留めておかなければならない。自分自身の生活によつて救い主の保護の力をあかしし、自己の品性があらゆる人が到達しうる高い標準にあることを示すべきである。簡単な実物教訓の中に福音を教え、日常のあらゆることを品性向上の教訓とするようになさい。

最も弱い、最も目だたない者でも日常くり返している苦勞のうちに神と共に働く者となり、神の臨在とささえの力による慰めを受けることができる。たえず心配し、不必要な心勞によつて自己を疲勞させてはならない。一日一日、こつこつと働き、神の摂理に示された仕事を忠実に果すようになさい。そうすれば、神は確実に守ってください。神はこう言われている。

「何事も思ひわづらつてはならない。ただ、事ごとに感謝をもって祈りと願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。そうすれば、人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思ひとを、キリスト・イエスにあって守るであらう」(ピリピ四ノ六、七)。

神の保護はいつさいの被造物の上に及ぶものである。神はすべてのものを区別なく愛されるが、生涯に最も重い重荷を負わされている人を一番優しくおあわれみになる。神の子は試練と困難にあわなければならないが、社会が与えてくれなくても、神は最も益となるようにすべてを補ってくださることを覚え、快活な精神をもって自分の分を受けるべきである。

謙そんな祈りに答えて、神が力と知恵とを示されるのは、わたしたちが困難な立場にたつときである。祈りをきき、祈りに答えられる神に信頼なさい。どんな危機にも、神ご自身があなたを助けることができるものであることをお示しになるであろう。人間を創造し、驚くべき肉体と知能と霊の力をお授けになった神は、ご自分がお与えになった生命を保持するのに必要なものをお与えにならないはずがない。神の言葉、すなわち生命の木の実をお与えになった神は、困っている神の子に食物を手に入れる知識をさすけずにはおられない。

すきをとり、牛を使う人は、どうしてその知識を得るであろう。銀のごとくにそれを求め、隠れた宝のごとくにそれを尋ねることによってなしうるのである。「これは彼の神が正しく、彼を導き教えられるからである。」「これもまた万軍の主から出ることである。そのはかりごとはかりごとは驚くべく、その知恵はすべれている」(イザヤ書二八ノ二六、二九)。

エデンの園でアダムとエバに庭園を管理する方法を教えられた神は、今日も人々を教えようと望んでおられる。すきを取り、種をまく者にも知恵が備えられており、神に信頼し、服従する者には、進歩の道を開いておられる。神の豊かな恵みのゆえに必要なものは満たされることを信じ、勇敢に前進なさい。

五つのパンと二匹の小魚で群衆を養われた神は、今日もわたしたちに働きの実を与えることがおできになる。ガリラヤの漁師に「網をおろして漁をしてみなさい」と言われ、それに従ったときに網の破れるほどになされた神は、現在でも人間に何を与えようとしておられるかという証拠をこの実例の中に見るように、神の民に望んでおられる。荒ら野の中でイスラエルの民に天よりマナをお与えになった神は、今日もなお生きて、支配され、その民を導き、彼らが召されている働きにつくときに技術と理解とを与えられる。良心的に、勤勉にその義務を果そつと努力する人には知恵をお授けになる。世界を所有なさる神は資源に富み、他人を祝福しようと努めている者をすべてお恵みになる。

わたしたちは信仰をもって天を望み、外見的な失敗に失望することなく、あるいは、時が遅れるなどのために氣落ちすべきではない。忠実な働き人が収穫し、たくわえるために、金銀よりも尊い、豊かな宝を地はそのふところの中に秘めていることを信じ、明るく希望にあふれ、感謝に満ちて働くべきである。山や丘は変り、地は衣のように古くなるが、荒ら野でその民に食を与えられた神の恵みは決して絶えることがない。

第二三章 無力な貧困者

貧しい人が自活できるように、できるだけのことをして助けても、なおわたしたちが同情し、世話をしなければならぬ寡婦、孤児、老人、助け手のない人や病人がいる。こうした人を決してほうっておいてはならない。神がご自分の家司となさった人々のあわれみ、愛、そして優しい保護の手にこうした人々がゆだねられるように神はお定めになった。

信仰の家族

「だから、機会のあるごとに、だれに対しても、とくに信仰の仲間に対して、善を行おうではないか」（ガラテヤ六ノ一）。

教会員の中で困っている人々の世話をする義務をキリストが教会に負わせておられることについては特別な意味がある。キリストは各教会の中に神に属する貧しい者がいることを許されている。こうした人はつねにわたしたちのうちにいるのであって、神は教会員にそうしためんどうをみるよう、個人的な責任を負わせておられる。

真の家族の人々が互に助け合い、病める者を看護し、弱い者をささえ、無知な人に教え、経験のない者を訓練をしていくように、信仰の家族においても貧しい者や無力な者の世話をしなければならない。どんな理由があっても、こうした人々をほうって置いてはならない。

寡婦と孤児

寡婦と孤児は神の特別な保護の対象となる。

「その聖なるすまいにおられる神は、みなしごの父、やもめの保護者である」(詩篇六八ノ五)。

「あなたを造られた者はあなたの夫であって、その名は万軍の主。あなたをあがなわれる者は、イスラエルの聖者であって、全地の神となえられる」(イザヤ書五四ノ五)。

「あなたのみなし子を残せ、わたしがそれを生きながらえさせる。あなたのやもめには、わたしに寄り頼ませよ」(エレミヤ書四九ノ一)。

多くの父親は愛する者たちと別れなければならないとき、その家族をお守りになる神の約束を信じて眠りについたのである。主は寡婦や孤児を養われるが、それは奇跡によって天からマナを降らせたり、からすを送って食を与えたりするのではなく、人の心に奇跡を行い、利己心を追い出し、キリストのような愛の泉をわき上がらせる方法をもって養われるのである。神は悩める者や遺族を尊い委託物として神の信者に預けられるが、こうした人々は、わたしたちの同情をよぶ最も大きな請求権をもっている。

安楽な生活に必要なものが備わっている家庭や、豊かな収穫物で満たされた貯蔵庫や穀物倉、機械機械で織った衣類で一杯になった被服倉庫、それに金銀のたくわえられた倉庫の中に、神はこうした貧しい人々をささえるための物資を備えておられる。わたしたちが神の賜物の水路となるように神は要求なさっている。

父を失った子供を連れた多くの寡婦が勇敢に二重の重荷を負おうと努力し、幼い者を自分のそばにおいて養育するために、過分の労働に身を置くことが多い。子供をしつけ、教育する時間も、生活を明るくするように環境を改善する機会もほとんどない。こういう母親は励ましと同情と实际的な助けを必要とする。

神はわたしたちができるだけのことをして、こうした子供になき父親の保護の補いをせよと命じておられる。傍観して、彼らの過失や問題をひき起すことについてつぶやく代りに、できるだけ助けなさい。働き疲れている母親を助けるように努め、その重荷を軽減なさい。

それとともに、社会には全く両親の指導がなく、クリスチャン的家庭のうちくつろいだ感化に浴さない多数の子供がいるが、クリスチャンはこうしたあわれな子供のために心を開き、家庭を開放すべきである。神が個人的義務として委託されたところを慈善施設にまかせ、社会の同情を期待して放置してはならない。もし、その子供を保護する親類がなければ教会員が彼らのために家庭を用意すべきである。わたしたちを創造なさった神は、わたしたちが家族として相互にまじわるようにお定めになった。子供の性質は、クリスチャンの家庭にある愛の雰囲気の中に最もよい状態に発育するものである。

自分に子供のいない多くの人は、他人の子の世話をしてよい働きができる。愛玩用動物を飼い、ものの言えない動

物に愛情を注ぐよりも、子供の世話をなさい。その子供の品性を神に似たものにまで形成してゆけるのである。人類家族の中で家庭のない者に愛を与え、こうした子供を何人、主の薫陶と訓戒の中に育てられるかをためしなさい。多くの人はこうして自らも恵みを受けるであろう。

老 年 者

老年者もまた家庭という有益な感化が必要である。自分自身の家庭を失った損失は、キリストを信ずる兄弟姉妹の家庭でたいい補われるものである。老人に家庭の興味と仕事を分担するように仕向けると、自分はまだ役にたつという気持を起させる。老人の助けは価値があるということを知らせ、他の人々のために働く仕事はまだあることを感じさせるならば、老人の心に喜びを与え、生活に興味を起させるものである。

頭が白くなり、足どりが弱まって、墓場に近づいていることがわかる老人は、できるだけ友人や親しい者の間から離さぬようにし、よく知っている者、愛する者と共に礼拝をさせ、愛と優しい手をもって保護すべきである。

できるだけどの家族も自分自身の親類のめんどろをみることを特権としなければならない。しかし、それが可能であるときはその仕事は教会のものとなり、義務であるばかりでなく特権として受け入れられる性質のものである。キリストの精神を持つ者はすべて、力のない者や老年者に対して優しい気持を抱く。

こうした無力な人が自分の家庭にいることはキリストと協力してあわれみの働きをし、キリストのような品性を養う貴重な機会である。老人と青年がまじわることは祝福があり、青年は老人の心や生活に光明を与える。生命

力が衰えていく人々は、青年の希望に満ちた精神や快活な性質に接して、そこから力を受ける必要がある。また青年は老年者の知恵や経験から役にたつものを得るであらう。しかし、何よりもまず青年は無我の奉仕を学ばなければならぬ。同情と忍耐と犠牲を必要とする人が存在することは、多くの家庭にとって無限の祝福であり、家庭生活を美しくし、いつそう、りっぱなものにする。そして、神の美を与え、天の不滅の宝に富む者となるキリストの恵みを、老いたる者にも若い者にももたらすのである。

品性の試験

「貧しい人たちはいつもあなたがたといっしょにいるから、したいときにはいつでも、よい事をしやれる」と、キリストは言われた（マルコ一四ノ七）。「父なる神のみまえに清く汚れのない信心とは、困っている孤児や、やもめを見舞い、自らは世の汚れに染まらずに、身を清く保つことにほかならない」（ヤコブ一ノ二七）。

キリストのしもべと称する人々の間に、彼らに依存しなければならぬあわれな者や貧しい者を置いて、キリストは彼らを試みておられる。キリストに属する貧しい人々への愛と奉仕によって、キリストに対するわたしたちの愛の真実性を証明するのである。こうした人々をおろそかにするのは自分がにせの弟子であり、キリストからも、キリストの愛も知らない者であると宣言されることになる。

孤児院

孤児を家庭に入れて育てるためにあらゆることを尽しても、なお他に世話を必要とする者がたくさんいる。その

多くは悪い遺産を受け、見込みのない、見ばえのしない、ひねくれた子供であるが、それでもキリストの血によってあがなわれたものであり、キリストの目にはわたしたちの子供同様に尊く見えるのである。助けの手を伸ばさなければ、無知の中に育ち、罪悪、犯罪の中に押し流されてしまふであろう。こういう子供の多くは、孤児院の働きによって救うことができる。

こつという機関が最大の成功を収めるためにはできる限りクリスチャン家庭の方式に似た経営をしなければならぬ。多数の子供を集め、大きな孤児院を開く代りに、所々に小さいものを建てなさい。また町や大都市の市内や郊外に建てないで、耕作する土地があり、子供が自然と接触することができ、実業的な教育の益を受けることができるいなか建てるべきである。

こつした家の責任者は心の広い、教養のある、無我の精神を持った男女であり、キリストへの愛に基づいて仕事に従い、キリストのために子供を教育する人でなければならない。こつした保護のもとに、家のない、なあざりにされていた多くの子供が有用な社会人となり、キリストの誉となり、さらに進んで、他人を助ける者となるように導かれる。

経 済 ・ 克 己

経済を吝嗇や偏狭と混同して輕蔑する人が多いが、経済は最も物惜しみをしない精神と一致する。実際、節約しなければ人に多く与えることはできない。わたしたちは、与えうるために節約しなければならない。

克己がなければどんな人でも真の慈善を実行できない。ただ単純と克己ときびしい節約の生活によって、初めてキリストの代表者として示された働きを遂行できるのである。高慢や世的な野心を心から捨て、あらゆる働きの面で、キリストの生涯の中に示されている無我の原則が実行されなければならない。わたしたちの家の壁や額や家具に「さすらえる貧しい者を、あなたの家に入れ」という文字が書かれ、たんすには神の書かれた「裸の者に着せ」という言葉が読みとられなければならない。また食堂では豊かな食物を載せた食卓に「飢えた者にあなたのパンをわけ与え」としるされているのを見なければならない。

有益な働きのために多くの門戸が開かれている。わたしたちは、よく与えられた資財の貧弱さを悲観するが、もしクリスチャンが熱心さに徹底していたなら、その資財を千倍に増すことができる。わたしたちの有益な働きを妨げているものは利己主義と放縦である。

単に偶像にすぎぬものや、もっと崇高な目的のためにあてられるべき思想、時間、力を途中で奪ってしまうもののために、なんと多くのものが浪費されていることであろう。高価な家、家具、利己的な快楽や、ぜいたくでしかも不健康な食物、および有害で放縦な生活のためにどれほど多くの金銭が浪費されていることであろう。だれにも益にならぬ贈り物のためどれほどむだづかいがされていることであろう。今日クリスチャンと称する人が、役に立たず、時には有害になることに、誘惑者から人を救うために使う何倍もの金銭を費している。

クリスチャンと称しながらあまり衣服に金を費すため他人を助けるときになると少しも与えることができない人が多い。彼らは、最低の衣服もほとんど買えずにいる人の欠乏には目もくれず、りっぱな装飾品や高価な衣服を、

求めなければならないように考えている。

姉妹方よ、自分の衣服についての方針を聖書に示されている原則に一致させるならば、もっと貧しい姉妹を助けるのに十分な余裕があるであろう。また金銭ばかりでなく時間の余裕も生みだされる。それが最も必要な場合がしばしばある。言葉や機転や技術をもって助けることができる人がたくさんいる。単純でしかも上品な衣服の着方を示しなさい。みすばらしい、不似合いな衣服が他の人の服装とあまりにも差異がはなはだしいため、教会にこない婦人が多い。敏感な心の持ち主は、こうした差異からはずかしさを感じ、不公平な観念を抱くようになり、そのため、多くの者が宗教の存在を疑い、福音に対して心をかたくなにしてしまう。

キリストは「少しでもおだにならないように、パンくずのあまりを集めなさい」と命令しておられる。幾千の人が日々、飢饉、流血、火災、疫病のために滅んでいつている今日、同胞を愛する者は、その益となるように心がけ何一つ、おだにしたり、不必要に使用したりしないのが当然である。

おだに時間を使うことも、おだに考えることも不正である。また自分の利益のためにだけ時を費すことは、その時間をすべて失うことになる。一刻一刻を尊び、これを正しく用いるならば、自分にとつても、社会にとつても、なさねばならないことにすべて時間があるはずである。金銭を費すとき、あるいは時間、体力、機会を使用する場合、すべてクリスチャンは神に指導を仰がなければならない。「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい」(ヤコブ一五)。

与えよ。そうすれば、自分にも与えられるであろう。

「しかし、あなたがたは、敵を愛し、人によくしてやり、また何もあてにしないで貸してやれ。そうすれば受ける報いは大きく、あなたがたはいと高き者の子となるであろう。いと高き者は、恩を知らぬ者にも悪人にも、なさけ深いからである」(ルカ六ノ三五)。

「貧しい者に施す者は物に不足しない、目をおおって見ない人は多くののろいをうける」(箴言二八ノ二七)。

「与えよ。そうすれば、自分にも与えられるであろう。人々はおし入れ、ゆすり入れ、あふれ出るまでに量をよくして、あなたがたのふところに入れてくれるであろう」(ルカ六ノ三八)。

第一四章 富める者に対する働き

ローマの百卒長コルネリオは富豪で、高貴な生れであり、責任の重い、高い地位にあった。彼は異邦人に生れ、成長し、教育されたが、ユダヤ人と接触して真の神を知り、その神を礼拝し、貧しい人をあわれみ、信仰が偽りでないことを示した。「民に数々の施しをなし、絶えず神に祈りを」した（使徒行伝一〇ノ二）。

コルネリオはキリストの生涯とその死によって示された福音については知らなかったが、神は天から直接彼に言葉をたまわり、また彼を訪れて教えよと使徒ペテロに別の使命をお与えになった。コルネリオはユダヤ人の教会に連なっていなかったため、ラビからは異邦人、汚れた者とみられただろうが、神はその心の真実さを読みとられ、このローマの役人に福音を教えようとみ座より使者を送り、地上にある神のしもべと協力をおさせになった。

今日もこのようにして神は下層階級と同様に上流社会にも魂をさがし求めておられる。神がご自分の教会に連なることを望んでおられるコルネリオのような人物がたくさんいる。こつした人は神の民に共鳴しているが、彼らを社会に縛りつけているきずなは堅くて、下層階級の人々と同じ立場をとるには真の勇気が必要である。責任や交際のために非常な危険にある人々の魂に対しては、特別の努力が払われなければならない。

なおざりにされている貧困者に対するわたしたちの義務に関しては多く言われているが、なおざりにされている富者に対しても注意を払うべきではないか。その人はこうした階級は見込みがないと考え、この世の栄華の光に目がくらみ、盲目となり、永遠のことならについて考えない。こうした人々の目を開くために努力しない。幾万の富者が警告もきかずに墓場に眠っている。外見は無関心に見えるが、金持の中には魂の悩みを感じている者が多い。「金錢を好む者は金錢をもって満足しない。富を好む者は富を得て満足しない」(伝道の書五ノ一〇)。黄金に対して「わがたのみと言ったことがあるなら、…上なる神を欺く者である。「まことに人はだれも自分をあがなうことはできない。そのいのちの価を神に払うことはできない。…そのいのちをあがなうには、あまりに価高くて、それを満足に払うことができないからである」(ヨブ記三二ノ二四―二八、詩篇四九ノ七―九)。

富や世俗的名誉は人の心を満足させることはできない。富める者の多くは神よりの確証と精神的希望をせつに望んでいる。目標のない生活の単調さをなくさせるものを求めている。官吏のうちの多数の者が自分の持たないものの必要を感じているが、教会に行く者はほとんどない。それはあまり益がないと思うからで、彼らが聞く教えは心に感動を与えないのである。わたしたちはこういう人々に個人的な訴えをしようではないか。

貧困と罪の犠牲者の中には、かつて裕福であった人がいる。各種の職業、地位にある人が飲酒、肉欲のために世の汚れに染み、誘惑に負けている。こうして墮落した人々が同情と助けを必要とはしているが、まだそこまでは、進んでいないまでも、同じ道に足を踏み入れている人のために何か手段を尽すべきではなからうか。

責任と名声の地位にある多くの人が心身共に破滅に至る習慣におぼれている。福音の伝道者、政治家、著述家、

富豪、天才、また、りっぱな実務能力を持ち、社会に有用な力を持った人が万事に自制をする必要を認めないために恐ろしい危険に陥っている。節制の原則に注目させる必要があるが、それは偏狭なやり方や、または強制的な方法ですることなく人類に対する神の大きなみ心に従ってすべきなのである。もし真の節制の原則がこうして彼らに示されるならば、その価値を認め、心からそれを受け入れる人々が上流階級の中に多く見られるにいたる。

有害な習慣の結果、肉体、知能、精神の力が減少することを彼らに示さなければならない。神より賜わったものの家司としての責任を認識するように彼らを助け、害にしかならぬもののために現在費している費用で彼らがなしている善行を示すようになさい。絶対禁酒の誓約書を提出し、酒、たばこ、その他の欲望のために費す金銭を病人や貧困者の救済および青少年を社会に有益な者に教育するためにささげるように求めなさい。そうした訴えに耳を傾けることを拒む者は多くないであらう。

富める者が特に陥りやすい、もう一つ別の危険があり、そのために医事伝道の分野が開けている。社会的に成功し、一般的な不道德を決して行わない多くの者も富を愛することによって滅びるのである。持ち運ぶのが最もむずかしいのはからの杯ではなく、ふちまで一杯になった杯である。それは最も注意をして平均を保たなければならぬ。不幸や困難は失望と悲嘆を招くが、霊的生命に最も危険なものは繁栄である。

モーセが荒ら野で見た、しばし燃えながら、しかもなくならなかった**しばし**は逆境に苦しむ人を表現している。

主のみ使がその**しばし**の中に居た。このように欠乏と苦悩の中には、わたしたちを慰め、支持するために見えない神の臨在の光が共にあるのである。よく病氣や災難にあった人のために祈りが求められるが、わたしたちの祈りは社

会に繁栄し、勢力を有する人々に最も必要である。

人間が欠乏を感じ、自己の歩みをお導きくださいと、神にたよる謙譲の谷間にいるときは比較的安全であるが、高い塔の上に立っているような人、その地位からみて非常に知恵があるように思われている人は最も危険なのである。そういう人は、神にたよらなければ必ず倒れる。

聖書は人が正直な方法で富を得たのであれば、金持であることを罪としていない。金銭ではなく、金銭を愛する心がすべての悪の根源である。財産を得る力を人間に与えられたのは神であって、神の家司として行動し、自己の富を無我の精神をもって使用する人の手によって、富はその所有者にも、また社会にも祝福となる。しかし、多くの者はこの世の宝に夢中になり、神の要求と他に困っている人がいることに無感覚になっている。自分の富は自分の誇のために用いるべきものだときめ、つぎつぎに家を建て、土地をふやし、贅沢な物で家を満たすのである。しかも、その周囲には悲惨、犯罪、疾病、そして死に遭遇している人がたくさんいる。このように自己奉仕に生きる者は神の性格ではなく、悪魔の性質を自らの中に発達させているのである。

こういう人が福音を必要としており、その目は物質のむなしさから離れ、永遠の富の尊さをながめる方に向けられなければならない。彼らは与えることの喜びと神と共に働く者の幸福を学ばなければならない。

「この世で富んでいる者たちに、命じなさい。高慢にならず、たよりにならない富に望みをあかず、むしろ、わたしたちにすべての物を豊かに備えて楽しませて下さる神に望みをあくように、また、よい行いをし、良いわざに富み、惜しみなく施し、人に分け与えることを喜び、こうして、真のいのちを得るために、未来に備えてよい土台

を自分のために築き上げるように、命じなさい」と主は命じておられる（テモテ第一・六ノ一七―一九）。

裕福でこの世を愛する人、この世を崇拜する人がキリストにひかれていくのはいい加減な偶然的接触によるのではない。こうした人に近づくのは最も至難な場合が多く、失望したり落胆したりしない、伝道精神に燃えた男女の個人的な努力を払わなければならない。

特に上流階級の人々のために働くに適している人がいる。こういう人は彼らの心に触れる方法を知るため、またいい加減なまじわりではなく、個人的努力と生きた信仰によって魂が必要としているものを呼び起し、イエスの中にある真理の知識にまで導くために神に知恵を求むべきである。

上流階級の人の心に触れるためには生活様式や仕事の仕方をその人たちの気むずかしい趣向にあうように変更しなければならないと考える人が多い。裕福そうな外観、りっぱな邸宅、高価な衣服、設備や環境、この世的な習慣に従うこと、流行を追う社会の人為的上品さ、高雅な教養、美しい言葉づかい等は重要なことと思われる。しかし、それは誤りである。こうした世俗的な方法は上流階級の人々の心に触れる神の方法ではない。彼らの心に触れて効果があるものはキリストの福音を矛盾なく無我の精神で示すことである。

アテネの哲学者に直面した使徒パウロの経験はわたしたちの教訓であって、アレオパゴスの法廷の前で福音を宣伝するに際し、パウロは理論には理論、科学には科学、哲学には哲学をもって答えた。聴衆の中で最も博学な者もそれには驚き、口をつぐみ、パウロの言葉に反駁できなかった。しかし、彼の努力は効果が少なく、福音を信ずるよう導かれた者は少数しかなかった。それ以来パウロは別の方法で働いた。複雑な議論や理論の討議を避け、単

純に罪びとの救い主としてキリストを人々に示したのである。その間における働きにつき、パウロはコリントの人に手紙を送っている。

「兄弟たちよ。わたしもまた、あなたがたの所に行ったとき、神のあかしをのべ伝えるのに、すぐれた言葉や知恵を用いなかった。なぜなら、わたしはイエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外のことは、あなたがたの間では何も知るまいと、決心したからである。わたしがあなたがたの所に行ったときには、弱くかつ恐れ、ひどく不安であつた。そして、わたしの言葉もわたしの宣教も、巧みな知恵の言葉によらないで、霊と力との証明によつたのである。それは、あなたがたの信仰が、人の知恵によらないで、神の力によるものとなるためであつた」(「リント第一・二ノ一―五」)。

またローマの人にした書簡の中で、「わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救いを得させる神の力である」と言っている(ローマ一ノ一六)。

上流階級の人々のために働く者は天使が共にいることを覚えて、真の威厳を保つべきである。頭と心の宝庫の中には「…と書いてある」という言葉を満たしておくべきである。記憶という部屋にキリストの尊い言葉をかけ、金銀以上に尊ばなければならない。

キリストは富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしいと言われた。こうした階級のための働きにおいては失望することが多く、いやなことがたくさん起るものである。しかし、神には、いつさいのことが可能であり、金銭を得るために没頭してきた人々の頭に、人間を通してお働きになることができ、

またそのように働いておられる。

真の改心には奇跡が行われなければならないが、その奇跡は今日、認識されていない。この地上の最も偉大な人物をも、不思議を行われる神の力が救い得ないことはない。神と共に働く働き人が、勇敢に、忠実にその義務を果たすならば、神は責任ある地位の人や、知識ある有力な人をも改心させられる。聖霊の力によって、多くの人が神の法則を受け入れるように導かれるだろう。

苦しんでいる人類を助ける神の代表者であるように神が彼らに期待しておられることが明らかにされるとき、多くの人は、これに答えて、貧しい者のために費用を与え、また同情をよせる。彼らの心がこうして利己的な気持ちから引き離されるときにキリストに従う者が多くなるであろう。そして自分を改心に導いた神の使である、その謙遜な伝道者と共に恵みの働きをするに際し、自己の力や財産というタレントをもって喜んで協力するだろう。この世の宝を正しく使用することによって、「盗人も近寄らず、虫も食い破らない天に、尽きることのない宝を」持つことになる（ルカー二ノ三三）。

キリストを信ずるようになると、多くの人は自分と同一階級中の他の人々のために働く働き人となり、神に用いられるようになる。この世がすべてであると思っている人に福音を分け与えるように委任されていることを感じ、時間も財産も神にささげ、才能も感化力も人を救う働きに用いるに至る。

こうした伝道によって、どんなことが成し遂げられてきたかは、この世が終ってはじめてわかるであろう。疑いに悩み、世俗と不安に疲れ果てた魂が、来る者をすべて救おうと切望しておられる大治癒者にどれくらい導かれた

かは永遠に至ってわかるのである。キリストは復活された救い主であり、その翼にはいやしの力がある。

第四部

病人の取り扱い

第一十五章 病室において

病人を看護する者は健康の法則を注意深く守ることの重要性を理解しなければならない。病室ほどの法則に従うことがたいせつな所はない。ここほど付添人の些細なことに対する忠実さが重要な場所はない。重症者の場合、ちよつとした怠慢、患者の特別な要求や危険に対するちよつとした不注意あるいは恐怖や興奮や短気をあらわし、時には同情の欠けた表情をすることによって生死の間に働いているはかりをくるわせ、回復したかもしれない患者を墓に眠らせることがある。

看護婦の実力はその体力によって大いに左右される。健康状態がよければそれだけ病人を看護する緊張に耐えることができ、それだけ義務を果すことができる。病人を看護する者は食餌、清潔、新鮮な空気、運動に特別な注意を払わなければならない。もしその家族が同様な注意を払うならば、彼らに課せられる余分な重荷に耐えることができ、病気を予防する助けとなる。

病気が重く、夜昼、看護婦の世話を必要とするときは少なくとも二名の實力ある看護婦が仕事を分担し、各自が休養と屋外運動の機会が得られるようにしなければならない。これは特に病室に新鮮な空気が十分に得られない場

合に重要なことである。新鮮な空気的重要性を知らなかったために換気が制限されることがあり、患者の生命も看護する者の生命も共に危険にさらされるのである。

もし正しい注意が払われるならば非（接触）伝染病が外の人につづることはない。習慣を正しくし、清潔と、適当な換気によって病室には有害なものがないようにすべきである。そうした状態の下にあれば、病人はずっとなおりやすく、たいいていの場合、看護する者も家族の者もその病気にかからない。

日光・換気・温度

患者を回復させるのに最も有利な状態におこうとすれば病室は広く明るく快活な感じを与え、十分に換気できる所でなければならない。この条件に最もよくなつた部屋を病室として選ぶべきである。多くの家は適切に換気する特別な設備がなく、これを実行することは困難であるが、夜昼を通じて新鮮な空気が流通するように、あらゆる努力を払わなければならない。

病室は、できるかぎり一定の温度を保つようにしなければならない。それには寒暖計を使用すべきである。病人の看護をする者はよく睡眠不足をきたし、病人を看護するために夜間に起され、身体が冷えやすく、また健康に適した温度を正しく判断できないからである。

食事

看護婦の職務中、患者の食事の世話は重要部分を占める。患者が栄養不足に苦しんだり、極度に衰弱することの

ないよう、また弱くなった消化力が酷使されることのないようにする。食物は口にあうように調理してだすように注意しなければならないが、量においても質においても患者の必要に応じるように賢明な判断がなされなければならない。そして食欲の旺盛な、しかも消化器官の機能がもと通りでない回復期においてはことさらに、誤った食事の害は非常に危険である。

付 添 人 の 義 務

看護婦を初めとして病室に出入りする者はすべて快活で冷静で落ち着きが必要である。急激、興奮、混乱などをいっさい避け、戸の開閉に注意し、家の中をすべて静かにしなければならない。熱がある場合、危険期に達したとき、それから熱が下がる時には特別な注意が必要である。このような場合は、常時監視をする必要がある。賢明な、思慮のある看護婦によって適切に看護されたならば生命を保ち得た多くの人が、無知や怠慢や軽率のため、死に至るのである。

病者を訪問すること

病人をたびたび訪問することは誤った親切、まちがった礼儀の観念からくるもので、重症患者を訪問することはいけない。患者が非常に安静を必要としているときに訪問したために生ずる興奮は病人を疲労させるものである。

回復期の患者や慢性疾患にかかっている病人にとっては自分がいねいに覚えられているということを悟ること

は喜びであり、また病気にもよいものである。しかし同情ある伝言や何か小さい贈り物によってその心持を伝えるならば、自ら病室を訪れるよりも害を及ぼす危険がないばかりか、もっと効果的といえる。

病院における看護

看護婦が多数の病人とたえず接する病院でつねに気持よく快活で、すべて言行のうちに思慮深いことをあらわすには大きな努力が必要である。こうした病院では看護婦がその働きを賢明に、またじょうずに果す努力が最も重要であって、彼らは日常のつとめを尽すときに主イエスに仕えていることをたえず思い起さなければならない。

病人に対しては賢明な言葉を用いることである。看護婦は病人に光を与え、苦しむ者を助ける言葉を語れるように日々、聖書を学んでおくべきである。病人が看護を受けている病室には神の使がいるのだから、治療をしている人の周囲の雰囲気は清く、美しいものでなければならない。医者や看護婦はキリストの原則を心にいだき、その生活にキリストの徳をあらわさなければならない。そうすれば言行によって病人を救い主に導くに至るであろう。

クリスチャンの看護婦は病人の健康回復のために治療を施すと同時に患者の心を霊肉のいやし手であるキリストに、気持よく、じょうずに導くものである。折にふれて少しずつ与えた思想は、よい感化をもたらす。年長の看護婦はキリストに病人の注意をひくよい機会をのがしてはならない。霊的のいやしと肉体のいやしをいつでも調和できるように準備しておかなければならない。

いやされたい者は神の律法を犯すことをやめなければならないことを、看護婦は最も親切な、優しい態度で教え

なければならぬ。罪の生活を選ぶのをやめなければならない。神は天の律法を故意に犯し、自ら病と苦痛を招いている者を祝福なさることはできないが、悪を行うことをやめ、善を行うことを学ぶ者には、キリストが聖霊を通していやしの力としてこられる。

神を愛さない者は、つねに心身のためにならないことをする。しかし、今日の悪の社会において神に従って生活することの重要性に目ざめた者はあらゆる悪習慣から喜んで離れるであろう。そして感謝と愛がその心を満たし、キリストは自分の友であることを悟るようになる。多くの場合、病気の回復のためには、このような友を持つていくという認識が最高の治療よりも病人に効果がある。しかし両方面の奉仕が重要であって、両者は相提携していくべきものである。

第一十六章 病人のための祈り

聖書は「失望せずに、つねに祈るべきこと」を教えている（ルカ一八ノ一）。人がほんとうに祈る必要を感じるときというのは力が尽き、自分の手から生命がすべり落ちていくように感ずるときである。健康な者は年々歳々絶えることなく与えられている神の驚くべき恵みをよく忘れてその恵みに対し、神を賛美することをしない。しかし一度病気になる神を思いだす。すなわち、人力が尽きると人間は神の助けの必要を感じるのである。またあわれみ深い神は、真心から神に助けを求める者に顔をそむけたまわない。神は健康のときも病気のときも等しく避けるころである。

「父がその子供をあわれむように、主はおのれを恐れる者をあわれまれる。」

主はわれらの作られたさまを知り、われらのちりであることを覚えていられるからである。」

（詩篇一〇三ノ一三、一四）

「ある者はその罪に汚れた行いによって病み、その不義のゆえに悩んだ。

彼らはすべての食物をきらって、死の門に近づいた。」

（詩篇一〇七ノ一七、一八）

「彼らはその悩みのうちに主に呼ばわったので、主は彼らをその悩みから救い、そのみ言葉をつかわして、彼らをいやし、彼らを滅びから助けだされた。」

(詩篇一〇七ノ一九、二〇)

聖霊が詩篇記者を通じてこれらの言葉を語ったときと少しも変わらず今日も神は病める者に喜んで回復を与えようとしておられる。そしてキリストも地上で伝道されていたときと同じように今もなおあわれみ深い医者である。キリストの中にすべての病をいやす乳香があり、あらゆる病弱から回復する力がある。今日、キリストの弟子たちは昔の弟子たちが祈ったように病人のために祈るべきで、そこに回復がもたらされるのは「信仰による祈りは、病んでいる人を救うからである(ヤコブ五ノ一五)。聖霊の力と、ゆるがぬ信仰の確信を通して神の約束を自分のものとすることができるのである。「病人に手をおけば、いやされる」(マルコ一六ノ一八)。この主の約束は今日もなお使徒の時代と同様信頼できるものであって、神の子の特権を示しており、わたしたちの信仰はその中に含まれているいっさいのものを完全に把握していなければならない。キリストのしもべは神の働きの仲介者であり、キリストは彼らを通していやしの力を働かせようと望んでおられる。病人や、苦しむ者を信仰の腕の中にいだき、神のもとに連れて行くことがわたしたちの仕事である。わたしたちは大治療者を信じるように病人に教えなければならない。

わたしたちが病んでいる人、希望を失った人、悩んでいる人などを神の力にすぎると励ますことを救い主はお望みになっている。信仰と祈りによって病室もベテル(神の家)と変るであろう。医者や看護婦は誤解の余地

がないほど明りように、その言動において、神は滅ぼすためではなく、救うために「この所におられる」と言うことができる。キリストはご自分の優しい愛で医者や看護婦の心を満たし、みずからの臨在を病室にあらわそうと考えておられる。もし病人を看護する者の生活がきよく、キリストが共に病床に行くことができるほどのものであるならば、あわれみ深い救い主がいてくださるという確信を病人に与え、その確信が心身のいやしに大いに役だつのである。

神は祈りをききたもう。キリストは「何事でもわたしの名によって願うならば、わたしはそれをかなえてあげよう」また「もしわたしに仕えようとする人があれば、その人はわたしに従って来るがよい。…その人を父は重んじてくださるであらう」と言われている（ヨハネ一四ノ一四、一二ノ二六）。もし神の言葉に従って生活するならば与えられたすべての尊い約束はみなわたしたちに成就する。わたしたちは神のあわれみを受ける資格はないが、自分を神にささげるとき、神は受け入れてくださる。そして神に従う者のために働き、また、その人々を通じて働かれるのである。

祈りがきかれる条件

神のみ言葉に従って生活するときに初めてわたしたちはその約束の成就を主張できる。詩篇記者は「もしわたしが心に不義をいだいていたならば、主はおききにならないであらう」と言っている（詩篇六六ノ一八）。もし部分的な、心からでない服従であるならば神の約束は果されない。

神のみ言葉の中には病人の回復のための特別な祈りに関して訓戒が与えられているが、こうした祈りは最も厳粛なものであって、慎重な考慮なしに行ってはならない。病人のいやしのための祈りは、信仰の祈りといわれるくらいであるが、単なるみせかけ以上にでない場合が多い。

多くの人は放縦な生活によって、みずから病を招いている。自然の法則に従わず、完全に純潔な生活を送っていない。ある者は飲食、衣服、労働において健康の法則を無視している。また何らかの形で罪悪がその人の精神または肉体を虚弱にする原因となっていることがしばしばある。もしも、こういう人々が健康に恵まれても、その中の多くの者は、神が祈りに答えていやされたのなら、自分は不衛生な習慣を続け、自制もせず誤った食欲をほしきままにしてもよいと考えて、神の自然の法則も、靈的な律法も平気で犯す生活を相変らず続けるであろう。もし神が奇跡を行ってこうした人の健康を回復されるとしたら、神は罪を奨励されることになる。

病気をいやす方として神を見あげるように教えても、不健康な習慣を捨てることを教えなければその働きはむだである。祈りが答えられ、神の祝福を受けるためには悪をやめ、善を行うようにならなければならない。周囲を清潔にし、生活の習慣を改めなければならない。自然的、靈的両方面の神の律法に調和して生活をしなければならない。

罪の告白

健康回復のため祈りを求める人には、自然の法則であれ、靈的な律法であれ、神の律法を犯すことは罪であり、神の祝福を受けるためには罪を告白し、罪を捨てなければならぬことをはっきりと教えなければならない。

聖書は「互に罪を告白しあい、また、いやされるようにお互のために祈りなさい」と命じている（ヤコブ五ノ一六）。祈りを求めている人には次のように告げなさい。「わたしたちは、心の中を読むことはできません。あなたの心の秘密も知ることはできません。それはただ、あなた自身と神様だけが知っていることです。もしあなたが罪を悔い改めるなら、その罪を告白することがあなたの義務です」と。個人的性質の罪は、神と人間の間の唯一の仲保者であるキリストに告白すべきである。「もし、罪を犯す者があれば、父のみもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがあられる」のであるから、いっさいの罪は神にむかって犯されたものであり、キリストを通して神に告白すべきものである（ヨハネ第一・二ノ一）。公になされた罪は、すべて公然と告白しなければならぬし、同僚に対してなした罪はその相手につぐないをすべきである。もし健康を求めている者が他人の悪口を言い、家庭や隣人の間に、または教会内に不和を生ぜしめ、分裂をきたし、軋轢を生ぜしめ、あるいは何か不正な行動によって他人を罪に導いたりしたことがあったならば、その人は神に対し、またその相手の人に対し、そのことを告白しなければならぬ。「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめてくださる」（ヨハネ第一・一ノ九）

過失が改められたとき、わたしたちは聖霊のお示しのままに冷静な信仰をもってその病人の要求を神に訴えることができる。神は各人の名を知っておられ、この地上に神がみ子をおあたえになったのは、ほかならぬその人のためであるかのように各自を心にとめておられる。神の愛は非常に大きく、非常に確実であるから、病人は神に信頼し、喜びを持つように励まさなければならぬ。身体のことを心配するのはかえって身体を弱らせ病気を招く。病

人が陰鬱に打ち勝つならば、回復の見込みが増大する。「主の目は主を恐れる者の上にあり、そのいつくしみを望む者の上にある」からである（詩篇三三ノ一八）。

神のみにまかせること

病人のため祈るときは「わたしたちはどう祈ったらよいかわからない」ことを覚えなければならない（ローマ八ノ二六）。わたしたちが望む祝福が最上のものか否かはわからない。したがって、わたしたちの祈りには次のような気持がなければならない。「主よ、あなたは魂のすべての秘密を知り、これらの人々をよく知っておられます。この人々の仲保者であるイエスは彼らのためにその生命をおさげになりました。彼らに対するイエスの愛はわたしたちが彼らを愛するよりもずっと大きいものです。もし主の栄えとなり、病人の益となるならば、健康が回復するよう、イエスのみ名によってお願い申しあげます。もし回復することがあなたのみ旨でなければ、苦しいときにあなたの恵みが彼らを慰め、そば近くにあなたがおられまして、彼らをささえてくださるよう」にお願い申しあげます」

神は始めから終りまですべてを知り、あらゆる人の心を熟知しておられる。神は魂の中にあるいっさいの秘密を読み、祈ってもらっている人が生き長らえるとき、その上にきたる試練に耐えられるか否かをご存じである。またその人の生涯は彼ら自身にとっても、社会にとっても祝福となるか、それともものろいとなるかを知っておられる。わたしたちが熱心に祈りをささげるとき「しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください」と言わなければならない理由の一つがここにある（ルカ二二ノ四二）。神の知恵と、み旨にすべてをゆだねるという

この言葉を、イエスはゲッセマネの園で「わか父よ、もしできることでしたら、どうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」と懇願されたとき申されたのであった（マタイ二六ノ三九）。神の子、イエスにこの言葉がふさわしいものであったとすれば、有限であり、まちがいを犯す人間の口にはなあさらのことである。

堅実な方法は全知なる天の父に自己の願いを任せ、全き信頼をもってすべてをゆだねることである。神のみこころに従って求めるならば、神はおききあげになるということわたしたちは知っている。それなのに神にゆだねる気持がなく、あまりくどく求めるのはよくない。わたしたちの祈りは命令の形でなく、懇願の形でなければならない。

健康の回復のために神がその力をもって明らかに働きになる場合もあるが、全部の病人がいやされるとはかぎらない。イエスを信じて眠りにつく者も多い。パトモス島でヨハネは『今から後、主にあって死ぬ死人はさいわいである。』（みたまも言う、『しかり、彼らはその労苦を解かれて休み、そのわざは彼らについていく』）と書くように命じられた（黙示録一四ノ一二）。このことからわたしたちは病気が回復しなかったとしても、その人は信仰がなかったと判断してはならないことがわかる。

だれでも自分の祈りが即座に、また直接にこたえられることを望み、そのこたえが遅れたり、期待に反した形であたえられると失望するが、神は賢明、かつ最善なお方で、わたしたちが望むときに、望むように、いつでもこたえるということとはなさらないのである。しかしわたしたちの希望が全部かなえられるよりもっとよい方法をとってくださるのである。わたしたちは神の知恵と愛を信頼できるようにするため、わたしたちの願いを認めたまえと祈るのではなく、神のみ心を知り、それを果すように務めなければならない。自分の要求や興味を神のみここ

ろを考える気持で忘れてしまわなければならない。信仰をためすこうした体験は我々を益し、それによって自分の信仰が真実であり、神のみ言葉の上に堅くたった信仰であるか、それとも事情が変れば動揺し、不安定で変りやすいものかどうか判然するものである。信仰は働かすことによって強くなる。エホバに仕える者のために聖書の中には尊い約束があることを覚え、忍耐を十分に働かせなければならない。

すべての人がこうした原則を理解できるわけではない。神のいやしの恵みを求める人の多くは直ちに祈りがこたえられないと自分の信仰に欠陥があるように思う。したがって病氣のために弱った人には賢明な助言をもって、彼らがよく分別して行動できるように勤めなければならない。病人よりも長く生きのびられるその友人たちに対する義務を無視したり、健康回復のために自然の療法を利用するのを怠ってはならない。

ここにまたよく陥る危険がある。ある者は祈りがこたえられていやされることを信じ、信仰の不足を示すようなことをしてはならないと思って、何もしない。しかし、死ぬと思われたならばその前にきちんとしておきたいと思ういろいろなことを怠ってはならない。臨終に際し、愛する者に語りたいと思っていた励ましの言葉を与えるのを恐れてはならない。

治療の手段、聖書の実例

祈りによっていやされようと求めている者は与えられている治療法を用いるのを怠ってはならない。苦痛を和らげ、健康を回復する自然の働きを助けるために神が備えられた治療法を用いること、神と協力して回復に最も適す

る状態にすることは信仰の否定にはならない。神は生命の法則に関する知識を人間の力で得られるようになさった。この知識はわたしたちが利用するために手の届くところにおかれている。健康回復のためにはあらゆる手段、できるかぎりの好機を利用して自然の法則に調和するように働かなければならない。病人がいやされるようにと祈るとき、神と協力する特権を感謝し、神が備えられた手段が祝福されるように願いつつ、さらに力を入れて働くことができる。

治療法を用いることについては神のみ言葉がこれを認めている。イスラエルの王、ヒゼキヤが病気にかかったとき、神の預言者は死ななければならぬという伝言を王にもたらした。このとき、王は神に呼び求め、神はこのしもべの祈りをきき、その命を十五年のばすという言葉を送られた。この場合、神の一言によってヒゼキヤは直ったはずであったが、「干いちじくのひとかたまりを持ってこさせ、それを腫物につけなさい。そうすればなおるでしょう」という特別な命令が下った（イザヤ書三八ノ二一）。

キリストはあるとき盲人の目に泥を塗り、「シロアム（つかわされた者の意）の池に行って洗いなさい」とお命じになったので「そこで彼は行って洗った。そして見えるようになって、帰って行った」とある（ヨハネ九ノ七）。このいやしはただ大治療者の力によってなされたのであるが、キリストは自然界の簡単な手段を利用された。彼は薬剤による治療を奨励されなかったが、単純な自然の療法を用いることを是認されたのである。

病人がいやされるように祈ったら、その結果のいかんを問わず、神に対する信仰を失わないようにしよう。もし死別しなければならぬときがきたら、神の手がその苦しい杯をわたしたちのくちびるに与えておられることを覚え

て、それを受けよう。しかしもし健康が回復されたならば、いやしの恵みを受けた者は創造主に対して新たな義務を負わされたことを忘れてはならない。十人のらい病人がきよめられた時、ただひとりだけがイエスを見いだし、栄えを帰すために帰ってきた。わたしたちは神のあわれみを感じなかった考えのない九人のようであってはならない。「あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は、上から、光の父から下って来る。父には、変化とか回転の影とかいうものはない」(ヤコブ一ノ一七)。

第一十七章 治療法の応用

病気は原因なしには起らない。健康法則を無視することによって病気にかかる道が開かれ、自ら病気を招くのである。また親の罪の結果に苦しんでいる者が多い。彼らは親の行為については責任がないが、健康法則を犯すことがどんなことが健康法則を守ることがどんなことであるかを知るのは彼らの義務である。そして、親のした悪い習慣を避け、正しい生活を送り、よりよい状態に自らをおかなければならない。

しかし、自己の誤った行為のために苦しむ者の方がさらに多い。飲食、衣服、労働上の習慣から衛生法則を無視する。自然の法則に違反するため必ずその結果が伴ってくる。しかも病気になると、多くはその苦痛の真の原因をたださないで、苦しいことから神に対してつぶやく。しかし、自然の法則の無視から生じた苦痛については神に責任はない。

神は一定の活力をわたしたちに賦与しておられる。また、生命の種々の機能をつかさどるのに適した諸器官をつくり、この器官が共に調和して働くように定めておられる。わたしたちが注意深く生命力を保持し、身体の微妙な器官を正しく働かせるならばその結果健康となるが、もしも活力があまり急速に消耗されると、神経系が当面の消

耗のために、力がたくわえてあるところから借用してきて、一つの器官が損ずると全身が侵されるのである。自然は判然とは抵抗せず、非常な濫用にも耐えるが、ついには覚醒して自分がこうおつてきた虐待の結果を除去しようとして断固とした処置をとるに至る。こうした状態を正そうとする自然の努力が発熱やその他種々な型の病氣となつてあらわれる。

合法的な治療

身体をひどく酷使してついに病氣になったとき、他人はだれひとりとしてできないことを自らなしうることがよくある。まずしなければならないことは病氣の眞の性質を確かめ、それから原因を除くために賢明な努力を払うことである。過労、過食、その他不規則な生活によつて身体の機能の調和が破れてしまったとき、その障害を調節するため有毒な薬を与えて重荷を増してはならない。

食 事 療 法

不節制な食事はよく病氣の原因となる。すべて身体が最も必要としていることは身体の上に課せられた余分な重荷を除去することである。多くの場合、過労した消化器官に休息する機会を与えるため、食事を一、二回抜くことが病人にとって最上の療法となる。頭脳を使う人は数日間果実食をとるのがよい場合が多い。毎期間の絶食後、単純な食物を適度に食すると自然の回復力によつて快方に向かうことがよくある。一、二カ月、節制した食事をとるならば、自製の道は健康への道であることに多くの病人は気づくであろう。

治療法としての休息

働きすぎて病気になる者がいる。こうした人にとっては健康を回復するために休息、心労よりの解放、食事制限がたいせつである。また絶えず働いて室内に閉じこもっているために頭が疲れ、神経過敏になった人は自然界に親しく接し、単純で気楽な生活ができるいなかへ行くことが最上の助けとなる。野や林を散歩し、草花を摘み、小鳥の鳴き声に耳を傾けることが他のどんなことよりも健康回復により効果をもたらす。

水の 使用

健康の時、病気の時を問わず、清水は天より与えられた最高の祝福の一つであり、これを適切に用いるとき健康は増進する。これは人間や動物がのどのかわきをいやすため神がお備えになった飲み物で、これを十分に飲むならば身体のを満たし、病気に抵抗する自然の力を助ける。また外部的に水を使用することは、血液循環を調節する、最も容易でかつ効果的な方法である。冷水浴はすぐれた強壮療法であり、温浴は毛穴を開いて不純物の排泄を助ける。また温浴も微温湯浴も神経を緩和し、血液の循環を平均にする。

しかし、多くの人が水を適切に使用すれば良い結果となることを体験から学んでいないために水を恐れている。このため水治療法の正当な価値が認められず、またそれをじょうずに施すには手がかかるというて喜ばない人が多い。しかし、この問題に無知、無関心であってよいと考えてはならない。苦痛を和らげ、病気を阻止するために水

を利用する方法が多くある。すべての人が簡単な家庭療法に水を使用する方法をよく知っておくべきで、特に母親は家族の健康時や病気のときを問わず、どう取り扱うべきかを知らなければならない。

運動の効果

活動は人間の生存の法則である。身体 of 全器官には各々指定された働きがあり、その働きによって発育し、強くなっていくのである。全器官が正常に活動するときは力と活気が生ずるが、そうでないときには衰弱と死に向かうのである。数週間だけでも片腕を縛っておき、そのあとで解いてみると、その間控え目に使っていた腕よりも弱っていることがわかる。活動させなければ同じことが全筋肉組織に起る。

不活動は病気の有力な原因である。運動は血液の循環を促進し、平均にするが、休止はそれを妨げ、生命や健康に重要な血液中的変化を抑制し、皮膚の働きをも鈍くする。活発な運動によって血液循環が盛んになり、皮膚が健康で肺には清い新鮮な空気が十分供給されているときには不純物が排泄されなくなる。組織がこうした状態になると排泄器官は二重の重荷を負い、その結果病気になるのである。

病人に動かぬことを奨励してはならない。どの部分でもひどく過労させた場合、しばらく絶対安静にすることは大きな病気を予防することになるが、慢性疾患の場合には、すべての動作をやめる必要はめつたにない。

精神労働から身体をこわした者は、疲れるような考えごとをやめ、頭を休めなければならないが知能を働かすことが絶対に危険であると思わせてはならない。多くは自分の状態を実際より悪く考えがちである。こうした精神状

態は回復には不利で、こうした状態を助長してはならない。

牧師、教師、学生、その他精神労働者はひどい精神過労の結果しばしば病気になるが、それは少しも肉体運動をしないためである。こういう人に必要なことは、もっと活動的な生活である。適切な運動を伴った厳格な節制生活を実行するならば、精神肉体ともに活気を増し、あらゆる精神労働者に耐久力を与えることになる。

体力を使い過ぎた人には肉体運動を全然やめるように勧めてはならない。しかし、労働が最も効果的であるためには、組織的で気持のよいものでなければならない。屋外運動が最も良く、その運動は衰弱した器官を使用することによって力づけられるように計画されなければならない。その仕事は心を打ち込んでなすべきもので、手の仕事が多くなる苦痛となってはならない。

病人が注意をひくものを何も持たないで、時間をすごすならば、自分の事に考えを集中し、かつ病的となり、神経がいらだってくる。多くの場合、気分の悪いことばかりを考え、ついに実際よりも自分の症状をずっと悪く思い込み、自分では全く何もできないような気になってしまう。

こうした場合にはすべてよく指導の行きとどいた肉体運動が効果的な治療となり、ある場合には健康回復のためなくてはならないものとなる。手を動かすときには意志がそれに伴うが、こうした病人にとって必要なのはこの意志の覚醒である。意志が眠ってしまうと想像力が異常となり、病気に抵抗できなくなる。

不活動はたいいていの病人にとって一番大きな害になる。有用な軽度の労働は身心を過労させず、かえって病者によい影響を及ぼし、筋肉を強め、循環をよくし、この多忙な社会にあって、自分が全く不必要な人間ではないとい

う満足感を病人に与える。最初はわずかなことしかできないかもしれないが、間もなく体力が増進していくのに気づき、働きの量も、これにともなう増し加えていくことができる。

運動は消化器の機能を健全にし、胃弱な者を助ける。食事直後の過激な勉強、乱暴な運動は消化の働きを妨げるが、食後姿勢を正しくして短距離の散歩をすることは大いに益となる。

運動の重要性については実に多くの言葉が述べられ、また書かれているが、なお運動を怠る人が多く、そのため組織がふさがって肥満し、または過剰な食物を排泄するため精力が尽きて、やせたり弱くなったりする者がいる。肝臓は血液から不純物を除く役目が過重となり、そのために病気になる。

すわることが多い習慣の人は天候が許す限り夏冬を通じて毎日屋外で運動をしなければならない。歩行は馬や車に乗るよりも多くの筋肉を働かせるからよいことである。活発に歩くと、肺は拡張しないではいられないから、肺も健康的に活動させることになる。

こういう運動は健康のためには薬よりもよい場合が多く、医者、患者に海洋旅行や温泉行き、または転地を勤めたりなどするが、ほとんどの場合、病人が食事に節制をし、快活に健康的な運動をすれば病気は回復し、時間も費用も節約できることが多い。

第八章 精神療法

精神と肉体の間には非常に密接な関係があり、一つが侵されると他もそれに伴う。精神状態が健康に及ぼす影響は多くの人が認識しているよりもはるかに大きいのである。人間が苦しむ病気の多くは心の消沈によるものである。悲嘆、憂慮、不満、悔恨、自責、不信こうしたものがいつさい精力を破壊し、衰弱と死を招くようになる。

病気は想像から起ることがあり、想像によって非常に悪化する場合がしばしばある。自分は健康であると思いたえすれば健康でいられるのに一生病身でいる人が多い。多くの人は少しでも空気に身体を当てると病気になると考えているが、そう思いこんでいるために悪い結果になるのである。全然想像から起った病気のために死んでいく者がたくさんいる。

勇気、信仰、希望、同情、愛は健康を増進し、生命を延ばす。満足した気持、快活な精神は肉体を健康にし精神を強める。「心の楽しみは良い薬である」(箴言一七ノ二二)。

病人を治療するには、精神的な影響を見のがしてはならない。正しくこれを用いるとき、その影響は病気と戦う最も有力な一つの武器となる。

他人の精神を支配する

しかし、人を悪に導く最も有力な一種の精神療法がある。いわゆる科学によってあるひとりの人間の精神が他人の精神に支配され、そのため弱者の個性は強者の個性にのまれてしまう。こうして一個の人間が他人の意志によって行動し、その人の思考方向が変り、健康的な刺激が与えられ、患者が病気に抵抗して回復できるのであるといわれている。

その真の性質や傾向を知らず、病人に有益な療法であると信じた人々によってこの療法は採用されてきた。しかし、ここに科学と呼ばれているものは誤った原理に立脚したもので、キリストの性質や精神とは異なり、生命と救いであるキリストに導くものではない。人間の心を自分にひきつけようとする者は真の力の根源から人間を切り離してしまう者である。

どんな人間でも自分の精神や意志を他人の自由に任せ、無抵抗な機械となることは神のみ旨ではない。だれひとり自分の個性を他人の個性の中に埋没させてはならない。またどんな人間であろうと、いやしを与える源として、その人間を見あげてはならない。人間は神にたより、神より与えられた人間の威厳をもつていかなる人間にも支配されず、神によって支配されるべきである。

神は人間をご自分と直接的関係におこうとお望みになっている。神が人間に接しられる場合、必ず人間の個人的責任の原則を認められ、個人的信頼の念を起させ、個人的な指導の必要を印象づけようとなさる。また人間を神と

のまじわりに入れようと望まれているが、それは人間が変えられて神に似るようになるためである。サタンはこの目的をくつがえそうと働き、人間に依頼する気持ちを強めようと努力している。人の心が神から離れたとき、誘惑者はそれを自分の支配下に連行し、人類を支配することができるのである。

人の心が他人の心を支配するというこの理論はサタンが自分を最大の働き手であると紹介し神の教えの代りに人間の哲学を入れるために考え出したものである。クリスチャンと称している人々に受け入れられている誤謬の中でこれほど危険な欺瞞はなく、またこれほど確かに人を神から引き離すものはない。どんなに無害にみえてもこれを患者に行えば回復ではなくてかえって破滅に導くことになる。他人の自由に任せた人間も、それを支配する人間も共に自分のものにしようとするサタンのために道を開くことになる。

悪念を持った男女にこうして与えられた力は恐ろしいものである。他人の弱点や愚行を利用して生活する者にとっては、なんとという機会であろう。なんと多くの人が精神の弱い者や病める者の心を支配し、それによって肉欲、情欲、利欲を満たしていることであろう。

人間が人間を支配するよりもわたしたちが従うべきもっとよいものがある。医者とは、人間ではなく、神を見るように人々を教育しなければならない。心身がいやされるため、人間にたよることを教えないで、きたる者を全く救うことのできるお方に導かなければならない。人間の心をつくられた神は人間の心に何が必要であるかを知っておられる。神だけがいやすことのできるお方である。精神の病氣、肉体の病氣を持つ者はすべて、キリストがいやしをお与えになる方であることを知らなければならない。「わたしが生きるので、あなたがたも生きるからである」

とキリストは言われている（ヨハネ一四一九）。わたしたちが病人に知らさなければならぬのはこの生命であつて、もし彼らがキリストをいやしをお与えになる方であると信じ、キリストと協力し、健康の法則に従い、神をおそれその完全なきよさに至ろうと努力するならば、キリストはご自分の生命をお与えになることを知らさなければならぬ。こうしてキリストを彼らに示すとき、価値のある精力と力を彼らに与えることができる。これは天から来るのであつて、これが身体と精神の眞の療法である。

同 情

精神から生じた病氣を取り扱うには非常な知恵がいる。痛み、悲しみ、失望している心は優しい取り扱いを必要とする。現在直面している家庭の悩みが潰瘍のように魂の真髄までおしびみ、生きる力を衰えさせていることが多い。またときには罪の苛責が身体を消耗させ、精神を動揺させることもある。こういう種類の病人は優しい同情をもつて助けることができる。医者はまず患者の信頼を得てから大治療者に彼らを導くべきである。もし彼らの信仰を眞の医者に向けることができ、キリストが自分の病氣を引き受けられることを信じていることができるならば、心に安心を得、身体が健康となることがよくある。

最上の治療が冷淡で無頓着な態度でなされるよりは、同情と気転とが病人にもっと偉大な効果をもたらすことが多い。医者が無気力な不注意な態度で病床を訪れ、病人を気づかう様子もなく診察し、大した注意を必要としない病人であるかのような印象を言葉や行いの上から与えて、患者が心の中で考えるままにまかせてそこをたち去るな

らば、その医者は全く害を患者に与えたことになる。その冷淡さによって生じさせた疑念や失望はその医者が処方する治療薬の効果を全く無にってしまうことがしばしばある。

身の苦痛から謙そんとなり、意志が弱くなつて、同情と確信の言葉を渴望している者の立場に自分をおくことができたなら、医者は彼らの気持ちをたやすく理解できるであろう。キリストが病人に示された愛と同情が医者の知識と結びつくときにその医者がいることは祝福となる。

正直に患者を取り扱うことは信頼の念を起させ、回復に重要な助けとなる。医者の中には患者の病気の性質や原因を隠すことがりこうなやり方と思つていている者がいる。真実を語つて興奮させ、失望させることを恐れ、回復するだろうという偽りの希望を与える者多く、危険を警告せずに墓にはいらせてしまうことさえある。こうしたことはすべて賢明とは言えない。そうだからと言つて、その危険を患者に全部説明することが必ずしも安全であり、最善の道とはかぎらない。その結果、患者を驚かせ、回復をおそくし、あるいは妨げることさえある。また病気が大部分想像によつて起つていている人にも事実を全部告げ知らせてよいとはかぎらない。こうした病人の多くは理性がなく、自制心を働かせることにも慣れていない。奇異な考えを持ち、自分についてもまた他人に関してもいろいろなまちがつたことを想像するものである。しかし、彼らにとってそれが現実なのであるから看護するものはいつても変らぬ親切、不動の忍耐と気転を示さなければならぬ。もしこうした病人に事実を言つと、怒る者や失望する者もあるであろう。キリストは弟子たちに「わたしには、あなたがたに言つべきことがまだ多くあるが、あなたがたは今それに堪えられない」と言われた（ヨハネ一六ノ一二）。しかし、あらゆる機会を通して事実を語ることがで

きないとしても、欺く必要など少しもないばかりか、そうするのは正しいことではない。医者や看護婦はごまかすようなはずべきことをしてはならない。ごまかす者は神が協力できない立場に自分をおき、また患者の信頼を失うことによって彼らの回復に最も有力な人間的援助を放棄しているのである。

意 志 の 力

意志の力については正当な価値が認められていない。もし意志の力を覚醒させ、正しく働かせるならば全身にエネルギーを与え、健康を支持するりっぱな助けとなるであろう。そしてまた、病氣を取り扱ううえにも力となる。正しい方向に働かせるならば意志は想像を支配し、心身の病氣に抵抗し、打ち勝つ有力な方法となる。意志の力を働かせて自ら正しい生活をするならば患者は回復のために働く医者努力に大いに力を合わすことができる。意志さえあれば健康になれる人が無数にある。神は彼らが病氣であることを望まれず、健康で幸福であるように望んでおられる。彼らは健康になるうと決心しなければならぬ。不快に負けることと不活動な状態に落ち着くことを拒んだだけで病氣に抵抗できることがよくある。苦痛、疼痛を超越し、その体力に応じた有用な仕事に携わらせなさい。こうした仕事や空気と日光を十分に受けることによって衰弱した多くの病人も健康と体力を回復することができる。

治癒に関する聖書の原則

健康を回復し、あるいは維持したいと願う人のため聖書の中に「酒に酔ってはいけない。それは乱行のもてであ

る。むしろみたまに満たされ……なさい」という教訓がある（エペソ五ノ一八）。不自然で不衛生的な刺激物によって生ずる興奮や忘却、低級な食欲や情欲をほしいままにすることによって真のいやしや心身の回復は得られない。病人の中には神も希望もない者がたくさんいる。こうした人は満たされない欲求、病的な情欲、良心の苛責のために苦しみ、この世の生命を失い、かつ来世の望みもないのである。看護する者は、つまらない刺激的なもので患者をよくしようと思つてはならない。こうしたものはこの人々の生涯にはわざわざいであつた。飢えかわいている魂がこの地上に満足を得ようとするかぎり飢えかわきはとまらないであろう。利己的な快樂におぼれる者は欺かれる。陽気な気分を元気とはき違えるが、興奮が去ると感激も終り、不満と失望の中にとり残されるのである。

つねに心の中にある平安、精神の真の休息は唯一の源から出ている。キリストが「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。」わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる」と言われたのはこのことについてであつた（マタイーノ二八、ヨハネー四ノ二七）。この平安とはキリストがご自身から離して別なものとして与えられたものではなく、キリストの中にあるものであつて、わたしたちがキリストを受け入れることによって初めてそれを受けることができる。

キリストは生命の泉である。多くの人に必要なものはキリストをもつと明らかに知ることである。このため天のいやしの力に対して、全身全霊をどのようにおし開くべきかを彼らに忍耐強く親切にしかも熱心に教えなければならぬ。神の愛の光が魂の暗い室を照すとき落ち着きを失つた疲れた状態や不満な気分は去り、満ち足りた喜びが

心に活気を与え、身体に健康と力をもたらすのである。

あらゆる試練のときの助け

わたしたちは苦難の世界に生きており、天の家郷へ行く道には絶えず艱難、試練、悲嘆がわたしたちを待っている。しかし、たえず苦難を予想して生涯の重荷を倍にしている人が多い。災難や失望に会うとすべてがだめになってしまうように考え、自分はだれよりも一番運が悪く、必ず貧窮に陥ると思いこむ。こうして自ら不幸を招き周囲の者をみな憂鬱にする。生きていくことそのものが重荷となるのであるが、そうなる必要はない。この考え方を変えるには決定的な努力がいるが可能である。この世の喜びも来世の喜びも共に明るいことに心をむけるかどうかによってきまる。想像にすぎない暗い光景に気をとめることなく、神が彼らの道にまいておられる恵みを思い、その果てにある目に見えない永遠のものを見るようにさせなさい。

あらゆる試練に対して神は助けを準備しておられる。イスラエル人が荒野のメラにおいて苦い水に行きあつたとき、モーセはエホバに叫び求めた。神は別に新しい救済策をほどこされるのではなく、手もとにあつたものに注意を向けさせられた。すなわちその水を清く、甘くするために神が作られた大灌木を泉に投げ入れなければならなかった。そうしてから人々はその水を飲み元気を回復したのであった。あらゆる試練に際してわたしたちがキリストを求めるならば、キリストは助けを与えてくださる。わたしたちの目は打ち開かれ、そのみ言葉の中に記録されているいやしの約束に気づくようになる。聖霊は悲しみを和らげる祝福をいっさい自分のものとする方法を教えてく

れる。わたしたちのくちびるにあるすべての苦い水に対してそれをいやす木の枝を発見するであろう。

わたしたちは未来のことを考え、困難な問題や面白くない予想をして自ら失望し、ひざを震わせ、両手を下げて意気消沈してはいけない。「わたしの保護にたよって、わたしと和らぎをなせ、わたしと和らぎをなせ」と大能の神は申されている（イザヤ書二七ノ五）。神の指導に従い、神に仕えるために一生をささげる者が神が備えられない境遇に陥ることは決してない。もしわたしたちが神の言葉を行っていけば、境遇がどうであっても、みちびき手である案内者があり、どんな困惑に遭遇しても確かな相談相手があり、どんな悲しみ、死別、孤独の中にあってもわたしたちには同情深い友人がいるのである。

知らずに過失を犯したときも、救い主は、わたしたちを見捨てられない。わたしたちは決して孤独を感じる必要がない。わたしたちの友は天使であり、キリストがみ名によって送ると約束された慰め主は、わたしたちと共に宿られるのである。神の都に行くその途中には、キリストにたよる者が勝つことのできない困難など一つもなく、またのされることのできない危険もない。神が助けの道を備えておられない悲嘆、苦痛、人間的弱さというものはないのである。

だれひとりとして失望落胆し、自暴自棄に陥る必要はない。サタンは「あなたは見込みのない人間だ。あがなわれることができない人間だ」と残酷な暗示をかけに来るかもしれないが、あなたのためにはキリストの中に望みがあるのであって、神はわたしたちが自分の力で勝利するように命じてはおられない。神のそば近くに来るように神は申されている。身心をうちひしぐ、あらゆる困難のもとに働くときも、神はわたしたちを自由にしようと待って

おられる。

自ら人性をおとりになったイエスは、人間の苦痛に同情する方法を知っておられる。キリストはひとりびとりの魂とその魂の独特の要求や試練を知っておられるばかりでなく、心をいらだたせ、困惑させる事情もいっさいご承知である。彼は苦しんでいる神の子ひとりびとりに対してあわれみと優しさをもってみ手をひろげておられる。最も苦しむ者が最も多くそのあわれみと同情を受ける。イエスはわたしたちの弱さに心動かされ、わたしたちが自分の困難や悩みをイエスの足もとにおくように望んでおられる。

自己を観察し、自己の感情にふけることは賢明ではない。そうするとき、敵はわたしたちの信仰を弱め、勇気をくじくような困難や誘惑をあらわしてくる。自分の感情にふけり、気分にはげけることは疑惑の念をそだて、困惑の中に自分をまき込むようなものである。わたしたちは目を自分から離し、イエスを見なければならぬ。

試練が襲い、心労、困惑、暗黒が魂を取り囲むように思われるときは、最後に光を見た場所を見なさい。キリストの愛と保護の下に安んじ、心の中で罪が勝利しようと戦い、苛責の念が魂を苦しめ、良心を悩ますとき、また不信仰が心を暗くするとき、キリストの恵みは罪を征服し、暗黒を追い払うに十分な力のあることを覚えなさい。救い主とまじわるとき、わたしたちは平安の境地にはいるのである。

い や し の 約 束

「主はそのしもべらの命をあがなわれる。主に寄りたのお者は、ひとりだに罪に定められることはない」(詩篇

三四ノ二二)。

「主を恐れることによつて人は安心を得、その子らはのがれ場を得る」(箴言一四ノ二六)。

「しかしシオンは言った、『主はわたしを捨て、主はわたしを忘れられた』と。『女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子をあわれまないようなことがあるうか。たとい彼らが忘れるようなことがあつても、わたしは、あなたを忘れることはない』」(イザヤ書四九ノ一四、一五)。

「恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手をもつて、あなたをささえる」(イザヤ書四一ノ一〇)。

「生れ出た時から、わたしに負われ、胎を出た時から、わたしに持ち運ばれた者よ、わたしに聞け。わたしはあなたがたの年老いるまで変らず、白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。わたしは造つたゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う」(イザヤ書四六ノ三、四)。

感謝と賛美

感謝と賛美の精神ほど心身の健康を増進するものはない。憂鬱、不満な気持や思想に抵抗することは祈ることと同じように積極的な義務である。もしわたしたちが天に向かって歩いて行っているなら、わたしたちの父の家に行く道すがらをどうして会葬者の一隊のように嘆き、つぶやきながら歩いたりできよう。

つねにつぶやき、快活や喜びは罪であるかのように思っているクリスチャンと称する人々は、真の宗教を持って

いない。自然界のあらゆる陰気な事物を見て悲しむことに快樂を覚え、美しく咲いた花よりも枯れ葉をながめようとする者、生き生きとした緑におおわれた高い山や谷の美を見ず、自然界の中で話しかけている喜びの声に耳を傾けず、楽しく、音楽のように響くその声に五官を閉ざす者はキリストに連なっていない人である。こうした人は望むならば心に光をもち、またその光線にいやしの力を備えた義の太陽がその心の中に上ることできるので、自ら憂鬱と暗黒を集めている。

苦痛のために精神が鈍ることもしばしばあるかもしれないが、そのときには何も考えないように努めなさい。イエスがあなたを愛しておられることはよくわかつている。イエスはあなたの弱さを理解されている。ただその腕に安らかにいこうことによってイエスのみ心がなされるのである。

口に出すときに思想や感情が助長され、強められるのは自然の法則である。言葉は思想を表現するが、同時に思想は言葉によって動かされることも事実である。したがって、もっとわたしたちが信仰を言いあらわし、自分に自覚している祝福、すなわち神の大きなあわれみと愛をもっと楽しむならば信仰は増大し、より大きな喜びを感じるはずである。神の恵みと愛を感謝することから生ずる祝福は、それを表現する言葉がなければ、どんな人間もそれを理解することはできない。わたしたちは、この地上においてさえ、神のみ座から流れ出る水の流れによって養われているのだから、決して尽きない水の泉のような喜びを味わうことができる。

だからこの比類のない神の愛のゆえに彼をほめたたえるように自分の心とくちびるを教育し、魂が希望にあふれ、カルバリーの十字架から輝く光の中に居ることができるよう教育しよう。わたしたちは天の王の子であり万軍の

エホバのおすこ、娘であることを忘れてはならない。神によって静かな平和を保つことはわたしたちの特権である。

「キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。…いつも感謝していなさい」(コロサイ三ノ一五)。自分の困難や悩みを忘れ、神のみ名の栄光のために生きる機会があることを神に賛美しよう。日ごとにもたらされる新しい祝福を、神の優しい保護の印として賛美の念を心にいだかなければならない。朝、目ざめたとき一夜の守りを神に感謝し、心の中にある神の平安を感謝し、朝に昼に夜にかおり高い香水のように感謝を天に上げなさい。

人に気分を尋ねられた場合、同情を得ようとしてその人に何か悲しいことを言おうと思って考え出そうとしてはならない。自分の信仰の足りなさ、悲しみ、苦しみについて語るのをやめなさい。誘惑者はそういう言葉を聞くのを喜ぶ。陰鬱な話をするのはサタンをあがめていることになる。わたしたちを征服せんとするサタンの大きな力について長く語ったり、考えたりすべきではない。サタンの力について語っているうちに、その手中に陥ることがよくある。その代りに、ご自身のみ心にわたしたちの関心をすべて結びつけられる神の大きな力について語ろう。キリストの比類のない力や栄光について話しなさい。全天はわたしたちの救いに興味をもっている。千々万々の神の使が救いの世継ぎとなるべき者に奉仕するように命じられている。彼らは悪よりわたしたちを守り、わたしたちを滅ぼそうとする暗黒の権威を退けているのである。つねに感謝し、行く手に困難がみえるときにも感謝にあふれるのが当然ではないだろうか。

賛 美 の 歌

歌をもって神をほめ、感謝をささげなさい。試練にあうとき自分の気分を口に出さないうで、信仰によって神に感謝の歌をささげるべきである。

賛 美 歌

一、おおみ子を 世にたまひし

あまつ神を たたえまし

(折返し)

ふたたび我らを いかしたもう

ハレルヤみ神に 栄えあれ

二、父の神 あらわしたもう

わが主イスを たたえまし

三、イスきみを しめさせたもう

きよきみ霊 たたえまし

四、あまつ火を そのみ民に

燃やしたまえ神よ今

歌は失望するときにいつでも用いることのできる武器である。救い主より出る光に心をうち開くとき、健康と祝福を受ける。

「『主に感謝せよ、主は恵みふかく、

そのいつくしみはとこしえに絶えることがない』と、

主にあがなわれた者は言え。」

(詩篇一〇七ノ一、二)

「主にむかって歌え、主をほめうたえ、そのすべてのくすしみわざを語れ。

その聖なるみ名を誇れ。主を尋ね求める者の心を喜ばせよ。」

(詩篇一〇五ノ二、三)

「主はかわいた魂を満ち足らせ、飢えた魂を良き物で満たされるからである。

暗黒と深いやみの中にいる者、苦しみと、くろがねに縛られた者、…

彼らはその悩みのうちに主に呼ばわたしたので、主は彼らをその悩みから救い、

暗黒と深いやみから彼らを導き出して、そのかせをこわされた。

どうか彼らが主のいつくしみと、人の子らになされたくすしみわざのために、主に感謝するように。」

(詩篇一〇七ノ九―一五)

「わが魂よ、何ゆえうなだれるのか。」

何ゆえわたしのうちに思いみだれるのか。

神を待ち望め。

わたしはなおわが助け、

わが神なる主をほめたたえるであろう。」

(詩篇四二ノ一一)

「すべてのことについて感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって、神があなたがたに求めておられることである」(テサロニケ第一・五ノ一八)。この命令は事態がわたしたちに不利とみえるときでも、わたしたちの益となるという確証である。神はわたしたちに害になるものに対して感謝の念をいだけとはお命じになっていない。

「主はわたしの光、わたしの救いだ、

わたしはだれを恐れよう。

主はわたしの命のとりでだ。

わたしはだれをおじ恐れよう。」

(詩篇二七ノ一)

「それは主が悩みの日に、その仮屋のうちにわたしをひそませ

その幕屋の奥にわたしを隠し…

それゆえ、わたしは主の幕屋で喜びの声をあげて、

いけにえをささげ、

歌って、主をほめたたえるであろう。」

(詩篇二七ノ五、六)

「わたしは耐え忍んで主を待ち望んだ。

主は耳を傾けて、わたしの叫びを聞かれた。

主はわたしを滅びの穴から、泥の沼から引きあげて、

わたしの足を岩の上におき、わたしの歩みをたしかにされた。

主は新しい歌をわたしの口に授け、

われらの神にささげるさんびの歌をわたしの口に授けられた。」

(詩篇四〇ノ一―三)

「主はわが力、わが盾。

わたしの心は主に寄り頼む。わたしは助けを得たので

わたしの心は大いに喜び、歌をもって主をほめたたえる。」

(詩篇二八ノ七)

善を行う

確実に病人の回復を妨げる一つの原因は病人が自分に注意を集中することである。多くの病人は自分を忘れ、他

人のことを考え、他人のために尽さなければならぬのに、すべての者が自分に同情し、自分を助けるのが当然であるかのように考えている。

病人、悲しんでいる者、落胆した者のために祈りを求められることが多くあるがこれは正当なことである。神が暗い心に光を照し、悲しむ者を慰めてくださるように祈ってほしいとたのまれることがよくある。神の祝福の通路に自ら立つ者の祈りに神はこたえられるのである。わたしたちは、こうした悲しんでいる人のために祈るとともに、もっと困っている人を助けるように彼らを励まさなければならぬ。他人を助けようと努力するとき、その人自身の心から暗黒は追い払われるであろう。わたしたちが慰められたその慰めをもって他人を慰めようとするとき、祝福が自分に返ってくるのである。イザヤ書五八章には身心の病気をなおす処方があるされており、もし健康と生活の真の喜びを望むならば、この章に与えられている法則を実践しなければならない。神が喜ばれる奉仕とその祝福について神は次のように言われている。

「また飢えた者に、あなたのパンを分け与え、

さすらえる貧しい者を、あなたの家に入れ、

裸の者を見て、これに着せ、

自分の骨肉に身を隠さないなどの事ではないか。

そうすれば、あなたの光が暁のようにあらわれ出て、あなたは、すみやかにいやされ、

あなたの義はあなたの前に行き、

主の栄光はあなたのしんがりとなる。

また、あなたが呼ぶとき、主は答えられ、

あなたが叫ぶとき、『わたしはここにある』と言われる。

もし、あなたの中からくびきを除き、

指をさすこと、悪い事を語ることを除き、

飢えた者にあなたのパンを施し、

苦しむ者の願いを満ち足らせるならば、

あなたの光は暗きに輝き、

あなたのやみは真昼のようになる。

主はつねにあなたを導き、

良き物をもってあなたの願いを満ち足らせ、

あなたの骨を強くされる。

あなたは潤った園のように

水の絶えない泉のようになる。」

(イザヤ書五八ノセー二)

よい行いは、それをする人とその親切を受ける者を共に益する二重の祝福である。正しいことをしたという意識

は病める心身に最もよい薬であって、義務をよく果たしたという観念と他人を喜ばせた満足感によって心が自由かつ幸福であるとき、心をうれしくし、ひきたてるその力は全身に新しい生命をもたらすものである。

病人には、人からの同情を絶えず求めるよりは、むしろ他人に同情するように努めさせるべきである。自己の弱さ、悲しみ、痛みをあわれみ深い救い主に任せ、自分の心を開いてその愛を受け、その愛が他人にまであふれ出るようにさせなさい。だれでも耐えがたい試練があり、勝利しがたい誘惑があることを覚えていれば、こつした重荷を軽くしてあげることができる。受けている祝福に対して感謝し、受けている世話に対して謝意を示しなさい。神の尊い約束を心に満たし、その宝の中から他人を恵み、慰め、力づけるような言葉を出せるようにすべきである。こうしたことが助けを与え、向上に導く雰囲気であなただけを包むようになる。周囲の人を祝福することを目標にしなさい。そうすれば自分の家族に対しても、また人に対しても助けとなる種々の方法が見いだされる。

不健康に悩む者が他人を思う気持ちで自分を忘れ自分よりもっと困っている人に奉仕をなさいと言われる主の命令を守るならば、「そうすれば、あなたの光が暁のよつにあらわれ出て、あなたは、すみやかにいやされ」との預言の約束が真実であることを知るであろう。

メ ラ と エ リ ム

棕櫚の葉が茂り、清水もわいて

砂漠の旅の疲れをなおす

楽しい木陰のエリムに今休んでいるが

きのうは、見わたすかぎり岩と砂で

影一つない寂しいメラにいた。

広漠とした荒野の中に

このメラとエリムとがあって

同じ熱風がその上に吹きすさび

えんえんとした谷間にかくれ

同じ山々がとり囲んでいるのだ

わたしたちのこの地上の生涯の日も

つねにそうなのだ

苦難と歓喜は一日の行程のちがいであり

悲しみと喜びは近くに住んでいる。

神はわたしたちの苦難を歓喜に変え

ここちよい泉を与えられることがある

雲の柱をもって陰を与え、

棕櫚の木陰にお導きになることもある。

それがなんであろう、時は長くない。

メラもエリムも過ぎ去って

泉も棕櫚もやがて消えさるであろう。

そしてついにわたしたちは神の都に達するのだ

ああ、なんと楽しい国

人生の荒野のさすらいが尽きるところ

ああ、天上のきよいパラダイスよ。

第十九章 自然との接触

創造主はわたしたちの最初の先祖のために健康と幸福に最も適した環境を選ばれた。神は彼らを宮殿に住まわせたり、今日多くの人々が手に入れようとして、ほねをおっている人工的な装飾やぜいたくな物で満たしたりなどされないで、自然と近く接し、天の聖者たちと親しくまじわる場所に置かれた。

神の子らの家庭として備えられた園にはどちらを向いても美しい灌木や優しい草花があり、あらゆる種類の樹木があつて、その多くはよいにおいを放ち、おいしい実がみのつていた。枝には小鳥が賛美の歌を歌い、その樹陰には地の生き物が、なんの恐れもなく共にたわむれていた。

汚れなく純潔であつたアダムとエバはエデンの光景と響きを楽しみ、神は彼らに園を「耕させ、これを守らせられた」(創世記二ノ一五)。毎日の労働は彼らに健康と喜びを与え、この幸福なふたりは創造主の訪問を喜んで迎えた。神は涼しいうちに彼らと歩み、語られ、日々教訓を与えられた。

神が人間の最初の先祖におかつて定められた生活様式はわたしたちへの教訓である。罪が地上に暗影を投げかけたとはいえ、神はその子らが神のみ手のわざの中に喜びを発見するように望んでおられる。人間生活に関する神の計画を注意深く守れば守るほど、神はますます不思議な方法で、苦しんでいる人間をいやすために働かれる。病人

は自然に近く接する必要がある。自然に取り囲まれた屋外生活は、ほとんど見込みがないほど弱り果てている多くの病人に奇跡を行うものである。

都市の騒音、興奮、混乱や、無理な不自然な生活は病人を最も疲れさせ、過労におとしいるものである。煤煙と塵埃に満ち、有害な気体や病原菌を含んでいる空気は生命に危険である。そして四方が壁で取り囲まれた中で一日の大部分を過ごす病人はまるで病室の中の囚人のように感ずるようになる。混み合った家々、舗道、雑踏する群衆をながめるだけで、そこには一点の青空も、一条の日光も草も花も木も見られない。こうしてひとり閉じ込められ、苦痛や悲嘆にふけり、自分の悲しい思いのとりことなる。

また道徳力の弱い人にとって都市は危険に満ちており、不自然な食欲に打ち勝たねばならない患者はたえず誘惑にさらされている。そういう人は思想の傾向が変ってしまうような新しい環境に置かれなければならない。その生涯を破壊してしまったのと全く異なった環境に彼らをおかねばならない。神から彼らを遠ざけたこうした力から一定の期間引き離し、もっと清澄な雰囲気の中に置くべきである。

病人を世話する機関を都市から離れた場所に建てることのできたらもっと成功する。健康の回復を求めている人は皆できるだけ屋外生活の益が得られるいなかに住むべきである。自然は天来の医者であり、新鮮な空気、気持ちよい日光、花や樹木、果樹園、ぶどう園、こうした環境の中で屋外運動をすることは健康を増進すると共に生命を与える。

医者や看護婦は患者ができるだけ屋外に居るように勧めなければならない。屋外生活は多くの病人に必要な唯一

の治療法である。これには流行を追う生活や、肉体と精神および霊の力を弱め、破壊する生活における興奮や不節制から起きた病気をいやす驚くべき力がある。

都市の生活、まばゆい多くの電燈、道路上の騒音に飽きた病人にとって、いなかの静けさや自由はどんなによいだろう。彼らはどれほど喜んで自然のけしきを求めることだろう。また彼らは屋外に座し、日を浴びて楽しみ、樹木や草花のかおりをどんなに喜ぶだろう。松の香液とか、西洋杉、もみの木のかおりの中には生命を与える要素があり、その他の木にも健康を回復する特質がある。

慢性病の患者にとって感じのよいいなかの風景に囲まれた所で生活するほど健康を回復し、喜びを与えるものはない。最も弱い病人でもひなたあるいは日陰に腰をおろし横になることができる。見あげれば、そこには美しく茂った緑の葉があり、涼風のささやきに耳を傾けるとき安息と爽快なこちよさを感じる。萎縮した精神は生き返り、衰弱した体力が回復し、知らない間に心が平安となり、異常な脈はくは平靜かつ正常となる。そして病人がしだいに回復してくれば、この地上で苦しんでいる神の家族に対する神の愛をつたえているかわいらしい使者である美しい草花を採りに少しずつ歩き出すようになる。

患者を屋外に居さすように万事を計画すべきである。働ける者には何か楽しい、やさしい仕事を与え、屋外の労働がどんなに気持よく、また効果あるものかを示しなさい。新鮮な空気を呼吸するように勧め、深呼吸をし、腹部の筋肉を運動させるように呼吸し、話をするように教えなさい。病人にとってこれは計りしられぬ価値のある教育である。

屋外運動は生命維持に必須なものとして勧めなければならない。この種の運動としては土地を耕作するよりほかによいものはない。患者には花畑の手入れや果樹園や野菜畑の仕事を与えなさい。あなたがたは病室を離れ、屋外で時を費し、花を作り、その他、軽度の楽しい仕事をするようになさいと彼らを励ますならばその注意力は自分の身体や自分の苦痛からそらされるであろう。

患者を屋外に置けば置くだけ、手がかからず、環境が楽しければそれだけ病人は希望に満たされるものである。どんなにりっぱに飾られた家でもその中に閉じ込められると病人は気分が悪くなり憂鬱となる。自然の美の中に置き、草花の生長をながめ、小鳥の歌を聞ける場所に置くならば病人の心も小鳥の歌に合わせて歌い出すであろう。そうすれば心身共にらくになり、知能はよび起され、想像力は活気づき、心に神のみ言葉の美しさを悟ることができようになる。

自然の中には自分のことばかり考えている病人の注意力をそらし、その思いを神に向けさすものがいつでも発見される。神の驚くべきみわざに囲まれるとき、思いは目に見えるものから見えないものへと高められる。自然界の美は病人の思いを天の家郷にはしらせる。そこには何一つとして美を傷つけ、汚し、そこなうものはなく、また病气や死をきたらせるものもない。

医者や看護婦も自然の事物から神の教えを見つけたし、そびえる樹木や草や花を創造された神を患者に示し、一つ一つのつぼみや花の中にその子らを愛される神の愛のあらわれを見るように病人を励ますべきである。小鳥や花を養われる神は、ご自身の像に似せて創造なさった人間をも守られるのである。

屋外において神が創造されたものに取り囲まれ、新鮮な、健康的な空気を呼吸するとき、病人にキリストによる新しい生命について最もよく教えることができる。また神のみ言葉を読み聞かせ、キリストの義の光が罪で暗くなつた心を照らすことができる。

肉体と精神のいやしを必要とする男女は、このようにして言行をもつて病人をキリストに導く人々とまじわらなければならぬ。霊肉共にいやしうる大医事伝道者イエスの感化を受けるところに連れてこられ、救い主の愛の物語や、罪を告白して彼にきたる者はすべて許される物語を聞かなければならぬ。

こうした感化のもとにあつて多くの病人が生命の道へ導かれる。天使は人間の働き人と協力し、病み苦しんでいる人の心に励ましと希望、喜びと平安をもたらす。このとき病人は二重の祝福を受け、多くの者は健康となり、弱い足どりも元気をとり戻し、その目は再び輝きを増し、絶望していた者も希望に燃え、元気を失っていた顔が喜びの色に輝き、不平を言っていた音声が楽しい満足した調子に変わるのである。

肉体の健康が回復すると、人間はキリストへの信仰をさらに深めることができ、それが霊の健康を与える。罪がゆるされたという自覚によって言い知れぬ平安と喜びと安息を得、薄らいでいたクリスチャンの望みが輝き、次の言葉がその信仰を言い表わすに至る。「神はわれらの避け所また力である。悩める時のいと近き助けである」(詩篇四六ノ一)。「たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわざいを恐れません。あなたがわたしと共におられるからです。あなたのおちと、あなたのつえはわたしを慰めます」(詩篇二三ノ四)。「弱つた者には力を与え、勢いのない者には強さを増し加えられる」(イザヤ書四〇ノ二九)。

第五部

健康の法則

第二〇章 一般衛生

人は神の宮、神の栄光のあらわれる住み家とならなくてはならないとの知識が、わたしたちの体力を守り、またそれを発育させていくうえに最高の動機とならなければならない。創造主はおそろべく、くすしく人間の身体を造られており、わたしたちがそれを研究し、その必要なものを理解し、これを危害や汚辱から守るために自分の責任を果すように命じられている。

血液の循環

血液は生命の流れであるから、健康を保つには良い血液が必要である。それは消耗した組織を回復し、身体に栄養を与える。血液が正しい栄養素を供給され、新鮮な空気によって浄化されて活力を与えられると、それは身体の各部分に生命と活力をもたらす。血液の循環が完全であれば、それだけその働きはよくあらわれるのである。

心臓が鼓動することにより血液はやく、らくに全身に流れなければならない。その循環が、窮屈な被服、またはかたい帯などのため、あるいは手足の先を十分におおわずにいるため、妨げられたりしてはならない。循環を妨害す

るものがあると血液は重要器官に押し返され、そこに充血を起す。その結果として、頭痛、せき、心悸亢進、あるいは消化障害などがしばしば起る。

呼 吸

血液をよくするためには十分に呼吸しなければならない。新鮮な空気を一杯に深く吸うと肺に酸素を供給し、血液を浄化する。血液はあざやかな色となり、身体各部に生命の流れを送る。正常な呼吸は神経を和らげ、食欲を進し、消化をいっそう完全にして、深い気持のよい眠りに導く。

肺はできるだけ最大の運動ができるようにしておかなければならない。肺活量は肺の自由な運動によって増大し、肺が圧縮されたり、圧迫されると減少する。したがって前にかがんで働く仕事、特に座業においては悪い結果を生ずることが非常に多い。前にかがんだ姿勢では深呼吸ができない。浅く呼吸することがしだいに習慣となり、肺が拡張する力を失う。またつよく胸を締めると同じ結果を生ずる。胸の下部が十分に運動する余地がなくなり、呼吸を助けるために備えられている腹筋は十分に活動せず、肺もその運動を束縛されるのである。

こうして十分な酸素の供給が受けられなくなり、血液の循環は鈍り、肺から排泄されるはずの有害な老廃物が内部に残存し、血液は不純になる。肺ばかりか、胃、肝臓、脳髄も影響を受け、皮膚の色が悪くなり、消化があくれ、心臓は不活発になり、頭脳の働きが鈍り、思考は乱れ、精神が憂鬱となる。そして全身の組織に活気がなくなり、不活発となり、特に病気にかかりやすくなる。

新鮮な空気

肺はたえず不純物を排泄しているので、つねに新鮮な空気を供給しなければならない。不純な空気は必要量の酸素を供給しないから血液が活力を与えられないまま脳その他の器官に流れていく。だから換気は十分にすることがある。しめ切った換気の悪い部屋に住み、空気が腐敗、汚濁した部屋に居ると、からだ全体を弱めることになる。身体は不思議にかぜをひきやすく、少し風にあてても病気になる。いつも家の中に閉じこもっているために、青ざめた虚弱な婦人が多い。同じ空気を繰り返し吸っているうちに、肺や皮膚から排泄される有毒な物質で空気が汚染し、不純物は再び血液中にはいるのである。

換気と日光

公の建物であっても個人の住居であっても、家を建てる場合、よい換気と十分な日光が得られるように注意しなければならない。ところが教会や学校の建物には、この点がうまくいっていないのが多い。換気を見ることが眠気や倦怠の大きな原因であり、多くの説教の効果をなくし、教師の働きをほねがられる効果のないものにするのである。

住居用の建物はすべてできるかぎり排水の良い、高い所に建てなければならない。そうすれば土地は乾燥し、湿気や毒気から生ずる病気の危険が防止される。この問題があまり軽視されている場合が多く、低い土地や排水の悪

い場所の湿気やマラリアのため、つねに不健康で恐ろしい病気にかかり、多くの人が死ぬのである。

家の建築にあたって完全な換気とよく日光が当たるかどうかをしらべて着手することが特に重要である。各室に空気が十分に通り、日光がよくはいるようにするべきである。寝室は昼夜空気がよく流通するように設計しなければならぬ。日々窓を開放して空気と日光を入れることのできない部屋は寝室に使用するには適しない。たいていの国では、寝室は寒い日や雨の日にはよく暖め、乾燥できるように暖房のくふうが必要である。

客間はたえず使用する他の部屋同様に注意し、他の寝室と同じ様に空気と日光がよくはいり、常時使用せぬ部屋にたまりがちな湿気をとるためなんらかの暖房のくふうが必要である。日が当たらない部屋に眠る者や、よく乾燥せず、空気にさらしていない寝床に休む者は、自分の健康を危険にさらし、その生命を左右されることがしばしば起る。

建築に際し、多くの人は樹木や草花を植えることに細心の注意を払い、そのための温室や窓には暖かい日がよく当たっている。温度と空気と日光なしに樹木は生長も繁茂もできぬからである。もしそうした状態が樹木の生命に必要なならば、我々自身の健康や家族および訪問客のためにはどれほどたいせつであろう。

もし家庭を健康と幸福が宿る所としたければ低い土地から生ずる毒気や霧がとどかぬ所に家を建て、生命を与える天来の働きが自由にはいつて来るようにしなければならぬ。厚地のカーテンを掛けるのをやめ、窓やおおいを開放し、どんなに美しい草でもそれが窓を陰にしたり、日光が内部にさし込めないほど家のそばに木を持ってきたりしてはならない。日光は織物や敷物の色をあせさせ、額を変色させるかも知れないが、しかし子供のほおには健康な色を与える。

老人の世話をする者は老人には特に暖かい気持のよい部屋が必要であることを記憶しなければならない。年が進むにつれて精力は衰え、非衛生的な影響に抵抗する活力が少なくなるものであるから、老人には十分な日光と、新鮮な清い空気を与える必要がさらに大きいわけである。

清 潔

肉体の健康にとつても精神の健康にとつても嚴重な清潔が絶対に必要である。皮膚を通してからだからは絶えず不純物が排泄されており、しばしば身体を洗つて清潔にしておかなければ、たちまち幾万の毛穴がふさがり、このため皮膚から排泄されるべき不純物は他の排泄器官にとつて余分の負担になる。

たいていの人には毎日、朝か晩に冷水浴か微温湯浴がからだのためになる。入浴は適当な方法とするならば、かぜをひきやすくするどころか、血液循環をよくし、かぜに対して抵抗力を強める。血液は体表面に導かれ、ずっとらくに、規則正しく循環するに至る。そして心身ともに元気になり、筋肉は動かしやすく頭脳は明せきになる。入浴は神経をしずめ、胃腸や肝臓の働きを助け、それに健康と力を与え、また消化力を増進する。

衣服を清潔にしておくことも重要である。身につけている衣服は毛穴から出る老廃物を吸収するので、それをたびたび洗濯して着替えないとその不純物はまた元に吸収されてしまう。

どんな種類のものであつても、不潔は病気を招く。死を引きおこす様な病原菌は、暗いそうじの行きとどこか隅、腐敗した廃物の中、湿気、腐蝕土、かびの中に繁殖する。野菜の残りや落葉の山が家のそばに放置され、腐敗して

空気を汚毒するままにしておいてはならない。また不潔物や腐敗物は何一つ家の中に置いてはならない。完全に衛生的だと考えられている都市に生ずる多くの流行性熱病は不注意な世帯主の居る住居の周囲に捨ててある腐敗物に起因している場合が多い。

完全な清潔、十分な日光、および家庭生活の細部にわたって注意することが病気にかからないため重要であり、家族が幸福であり、元気であるための必要条件である。

第二章 イスラエル民族の衛生

神がイスラエル民族に与えられた教訓の中でも健康維持の問題には細心の注意が払われていた。不潔、不衛生的習慣をうむ奴隷生活から脱出したこの民はカナンにはいる前に荒野において最も厳格な訓練をさづけられた。健康の原則が教えられ、衛生法規が施行された。

病気の予防

宗教儀式ばかりでなく、日常生活のあらゆる点において清潔と不潔の区別が守られていた。伝染病疾患に接触した者は皆、陣営から隔離され、身体と衣服を完全にきよめなければ帰ることが許されなかった。伝染病にかかった者に対しては次のような命令が与えられた。

「流出ある者の寝た床はすべて汚れる。またその人のすわった物はすべて汚れるであろう。その床に触れる者は、その衣服を洗い、水に身をすすがなければならない。彼は夕まで汚れるであろう。流出ある者のすわった物の上にする者は、その衣服を洗い、水に身をすすがなければならない。彼は夕まで汚れるであろう。流出ある者の肉に

触れる者は衣服を洗い、水に身をすすがなければならない。彼は夕まで汚れるであろう。…また彼の下になった物に触れる者は、すべて夕まで汚れるであろう。またそれらの物を運ぶ者は、その衣服を洗い、水に身をすすがなければならない。彼は夕まで汚れるであろう。流出ある者が、水で手を洗わずに人に触れるならば、その人は衣服を洗い、水に身をすすがなければならない。彼は夕まで汚れるであろう。流出ある者が触れた土の器は碎かなければならない。木の器はすべて水で洗わなければならない」(レビ記一五ノ四―一二)。

らい病に関する法規もまた、こうした規則がいかに厳密に実施されなければならないかを示す一例である。「その患部が身(らい病人)にある日の間は汚れた者としなければならない。その人は汚れた者であるから、離れて住まなければならない。すなわち、そのすまいは宿営の外でなければならない。また衣服にらい病の患部が生じた時は、それが羊毛の衣服であれ、亜麻の衣服であれ、あるいは亜麻または羊毛の縦系であれ、横系であれ、あるいは皮であれ皮で作ったどのような物であれ、もしその衣服あるいは皮、あるいは縦系、あるいは横系、あるいは皮で作ったどのような物であれ、その患部が青みをおびているか、あるいは赤みをおびているならば、これはい病の患部である。これを祭司に見せなければならない。祭司はその患部を見て、その患部のある物を七日のあいだ留め置き、七日目に患部を見て、もしその衣服、あるいは縦系、あるいは横系、あるいは皮、またどのように用いられている皮であれ、患部が広がっているならば、その患部は悪性のらい病であって、それは汚れた物である。彼はその患部のある衣服、あるいは羊毛、または亜麻の縦系、または横系、あるいはすべて皮で作った物を焼かなければならない。これは悪性のらい病であるから、その物を火で焼かなければならない」(レビ記一三ノ四六―五

二)。

したがって家屋も人の住居には安全でない証拠があれば破壊された。祭司は「その家は、こぼち、その石、その木、その家のしつくいは、ことごとく町の外の汚れた物を捨てる場所に運び出さなければならぬ。その家が閉鎖されている日の間に、これにはいる者は夕まで汚れるであろう。その家に寝る者はその衣服を洗わなければならぬ。その家で食する者も、その衣服を洗わなければならぬ」(レビ記一四ノ四五―四七)。

清 潔

身体を清潔にしておく必要は最も感銘深い方法で教えられた。シナイ山のふもとに集まり、律法を宣言する神の声をきく前に、民は身体も衣服も洗うように要求された。しかもこの命令は違反者は死刑に処せられるという条件のもとに施行され、神の前ではどんな不純物も容認されなかった。

イスラエル人が荒野にとどまっていた間は、ほとんどいつも屋外に居たため、しめきった家に住んでいる人のようには害の及ばぬところで生活したのであるが、幕屋の内外は厳重に清潔を守るように要求されていた。塵芥は幕屋の中にもまた周囲にも置くことは許されなかった。「あなたの神、主があなたを救い、敵をあなたにわたすつと、陣営の中を歩まれるからである。ゆえに陣営は聖なる所として保たなければならぬ」と神は申されている(申命記二三ノ一四)。

食 事

食事全般にわたって、きよいものときよくないものの区別があった。

「わたしはあなたがたを他の民から区別したあなたがたの神、主である。あなたがたは清い獣と汚れた獣、汚れた鳥と清い鳥を区別しなければならない。わたしがあなたがたのために汚れたものとして区別した獣、または鳥または地に這うものによって、あなたがたの身を忌むべきものとしてはならない」(レビ記二〇ノ二四、二五)。

周囲の異邦人が自由に食べていた食物の大部分はイスラエル人には禁止された。しかし、それは専横的に差別をつけたのではなく、禁じられたものは不衛生なものであった。こうしたものが不潔であると宣言された事実は無害な食物を食すると汚れる事実を教えるものである。身体を汚す者は魂をも汚すことになり、これを食する者は神とまじわるには不適当なものとなり、崇高な、きよい奉仕をするにはふさわしくない者となる。

特 権 と 規 則

荒野で始められた訓練は、約束の地においても正しい習慣を形成するに適した環境のもとに継続された。都市に密集せず、各家族は自分の土地を所有し、すべての人が自然の正しい生活による健康的な祝福を受けることができた。

イスラエル人によって追放されたカナン人の残虐、放縦な行為について、主は次のように申された。

「あなたがたの前からわたしが追い払う国びとの風習に、あなたがたは歩んではならない。彼らは、このもろもろのことをしたから、わたしは彼らを憎むのである」(レビ記二〇ノ二三)。「あなたは忌むべき物を家に持ち込んで、

それと同じようにあなた自身も、のろわれたものとなってはならない」(申命記七ノ二六)。

日常生活のあらゆる点でイスラエル人は聖霊からでた教訓を学んだ。

「あなたがたは神の宮であって、神のみ霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう。なぜなら、神の宮は聖なるものであり、そして、あなたがたはその宮なのだからである」(コリント第一・三ノ一六、一七)。

歡 喜

「心の楽しみは良い薬である」(箴言一七ノ一二)。感謝、歡喜、善行、神の愛とその保護に対する信頼、これらは健康への最も安全な道である。イスラエル人にとってはこれが生活の真の基準でなければならなかった。

エルサレムで行われた年祭に出席するための年三回の旅行や仮庵の祭のあいだ一週間仮小屋に住んだことは、屋外の娯楽と社交の機会を与えた。こうした祭は楽しい時であり、他国人、レビ人、貧しい人々に親切なもてなしをすることによって、さらにうれしい親切なものとなっていた。

「あなたの神、主があなたとあなたの家とに賜わったすべての良い物をもって、レビびとおよびあなたのなかにいる寄留の他国人と共に喜び楽しまなければならない」(申命記二六ノ一一)。

後年、エルサレムにおいてバビロンから帰ってきた俘虜に向かって神の律法が読み聞かされ、人々が自分の罪に泣いた時、やはり恵み深いお言葉が下った。

『嘆いたり、泣いたりしてはならない』……『あなたがたは去って、肥えたものを食べ、甘いものを飲みなさい。その備えないものには分けてやりなさい。この日はわれわれの主の聖なる日です。憂えてはならない。主を喜ぶことはあなたがたの力です』(ネヘミヤ記八ノ九、一〇)。

また次のように発表、宣言された。「またすべての町々およびエルサレムにのべ伝えて、『あなたがたは山に出て行って、オリブと野生のオリブ、ミルトス、なつめやし、および茂った木の枝を取ってきて、しるされてあるとおり、仮庵を造れ』と言ってあるのを見いだした。それで民は出て行って、それを持って帰り、おのおのその家の屋根の上、その庭、その宮の庭、水の門の広場、エフライムの門の広場などに仮庵を造った。捕囚から帰ってきた会衆は皆仮庵を造って、仮庵に住んだ。……それでその喜びは非常に大きかった」(ネヘミヤ記八ノ一五―一七)。

神の律法に服従した結果

神はイスラエル人に精神的健康と同時に肉体的健康に必要なすべての原則にもとづく教訓をお与えになった。神が次のように命じられたのは道徳律ばかりでなく身体上の原則に関することにも及んでいる。

「きょう、わたしがあなたに命じるこれらの言葉をあなたの心に留め、努めてこれをあなたの子らに教え、あなたが家に座しているときも……これについて語らなければならない。またあなたはこれをあなたの手につけてしるしとし、あなたの目の間に置いて覚えとし、またあなたの家の入口の柱と、あなたの門とに書きしるさなければならない」(申命記六ノ六―九)。

「後の日となって、あなたの子があなたに問うて言うであろう、『われわれの神、主があなたがたに命じられたこのあかしと、定めと、おきてとは、なんのためですか。』その時あなたはその子に言わなければならない。『…主はこのすべての定めを行えと、われわれに命じられた。これはわれわれの神、主を恐れて、われわれが、つねにさいわいであり、また今日のように、主がわれわれを守って命を保たせるためである』」（申命記六ノ二〇―二四）。もしイスラエル人が教えられた教訓を守り、その特権によつて益を得ていたなら、健康と繁栄の世界的実物教訓となつたはずである。もし一国民として神の計画に従つて生きたならば他の国民がかつた病氣から守られていたのである。彼らは他のいかなる民族よりもすぐれた体力、知力を持ち、地上における最も強い国民となつていたのである。神はこう言われた。

「あなたは万民にまさつて祝福されるであろう」（申命記七ノ一四）。

「主は先に約束されたように、きよう、あなたを自分の宝の民とされること、また、あなたがすべての命令を守るべきことを明言された。主は誉と良き名と栄えとをあなたに与えて、主の造られたすべての国民にまさるものとされるであろう。あなたは主が言われたように、あなたの神、主の聖なる民となるであろう」（申命記二六ノ一八、一九）。

「もし、あなたがあなたの神、主の声に聞き従うならば、このもろもろの祝福はあなたに臨み、あなたに及ぶであろう。あなたは町の内でも祝福され、畑でも祝福されるであろう。またあなたの身から生れるもの、地に産する物、家畜の産むもの、すなわち牛の子、羊の子は祝福されるであろう。またあなたのかごと、こねばちは祝福され

るであろう。あなたは、はいるにも祝福され、出るにも祝福されるであろう」(申命記二八ノ二一六)。

「主は命じて祝福をあなたの倉と、あなたの手のすべてのわざにくだし、あなたの神、主が賜わる地であなただを祝福されるであろう。もし、あなたの神、主の戒めを守り、その道を歩むならば、主は誓われたようにあなたを立てて、その聖なる民とされるであろう。そうすれば地のすべての民は皆あなたが主の名をもって唱えられるのを見てあなたを恐れるであろう。主があなたに与えると先祖に誓われた地で、主は良い物、すなわち、あなたの身から生れる者、家畜の産むもの、地に産する物を豊かにされるであろう。主はその宝の蔵である天をあなたのために開いて、雨を季節にしたがってあなたの地に降らせ、あなたの手のすべてのわざを祝福されるであろう。…主はあなたをかしらとならせ、尾とはならせられないであろう。あなたはただ榮えて衰えることはないであろう。きょう、わたしが命じるあなたの神、主の戒めに聞き従って、これを守り行つならば、あなたは必ずこのようになるであろう」(申命記二八ノ八一三)。

大祭司アロンとその子らには次の命令がくだされていた。

『願わくは主があなたを祝福し、あなたを守られるように。』

願わくは主がみ顔をもってあなたを照し、

あなたを恵まれるように。

願わくは主がみ顔をあなたに向け、

あなたに平安を賜わるように。』

「こうして彼らがイスラエルの人々のために、

わたしの名を唱えるならば、

わたしは彼らを祝福するであらう。」

(民数記六ノ二四―二七)

『あなたの力はあなたの年と共に続くであらう』

『エシユルンよ、神に並ぶ者はほかにない。

あなたを助けるために天に乗り、

威光をもって空を通られる。

とこしえにいます神はあなたのすみかであり、

下には永遠の腕がある……イスラエルは安らかに住み

ヤコブの泉は穀物とぶどう酒の地に

ひとりいるであらう。

また天は露をくだすであらう。

イスラエルよ、あなたはしあわせである。

だれがあなたのように、主に救われた民があるであらうか。主はあなたを助ける盾、

あなたの威光のつるぎ。』

(申命記三三ノ二五―二九)

イスラエル人は神の御目的を果すのに失敗し、自分のものとしてできた祝福を受け損じた。しかし、ヨセフ、ダニエル、モーセ、エリシャその他多くの人々によつて正しい生活法の結果を示すりっぱな模範が与えられている。今日も彼らのように忠実であれば同じ結果をもたらすのである。わたしたちに対して次のように書かれている。

「あなたがたは、選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民である。それによつて、暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざを、あなたがたが語り伝えるためである」(ペテロ第一・二ノ九)。

「おおよそ主にたより、

主を頼みとする人はさいわいである。」

(エレミヤ書一七ノ七)

「正しい者はなつめやしの木のように栄え、

レバノンの香柏のように育ちます。

彼らは主の家に植えられ、

われらの神の大庭に栄えます。

彼らは年老いてなお実を結び、

いつも生氣に満ち、青々として。」

(詩篇九二ノ二一―二四)

「わたしの戒めを心にとめよ。

そうすれば、これはあなたの日を長くし、

命の年を延べ、あなたに平安を増し加える。」

「こうして、あなたは安らかに自分の道を行き、

あなたの足はつまずくことがない。

あなたは座しているとき、恐れることはなく、

伏すとき、あなたの眠りはこちよい。

あなたはにわかにかかる恐慌を恐れることなく、

悪しき者の滅びが来ても、それを恐れることはない。

これは、主があなたの信頼する者であり、

あなたの足を守って、わなに捕われさせられないからである。」

(箴言三ノ一、二、二三―二六)

第二章 衣服

聖書には地味な衣服を着るように教えられていて、「女はつつましい身なりをし、適度に慎み深く身を飾るべきであつて」とある（テモテ第一・二ノ九）。ここには華美な服装や、けばけばしい色彩、ぜいたくな装飾が禁じられている。神のみ言葉の中に命じられているよろしきになつた服装とは、他人の注意をひき、感嘆してもらうために、くふうをこらすことをしないものである。

わたしたちの衣服は高価なものであつてはならない。「金や真珠をつけたり、高価な着物を着たり」しないのである（テモテ第一・二ノ九）。

金銭は神からの委託物である。誇や野心を満足させるために金銭を費す権利はない。金銭は、神の子の手にあつては、飢えた者への食物となり、裸の人のためには衣服となり、しいたげられた者を保護し、病める者に健康を与え、貧しい者に福音をのべ伝える費用となるのである。現在、みせびらかしのために費されている費用を賢明に使用して、多くの人を幸福にすることができると。キリストの生涯を考えてみなさい。その品性を学び、キリストと共に没我の生活をなす者となきなさい。

クリスチャンの社会と称している中ですべての飢えた者を養い、裸である者に着せるのに十分な費用が、宝石や不必要に高価な衣服のために浪費されている。気のどくな人、苦しんでいる人を慰めることができる金銭が流行や見えのために費される。そうした人は救い主の愛の福音を世間から盗んでいるのである。そして伝道は衰え、多くの人がキリスト教の教えを受けないで滅んでいく。隣家でも、また外国の土地においても異邦人たちが教えを受けず、救いにはいつていない。神が大地に豊かな恵みをそそぎ、人間の生活を慰めるために倉庫を満たし、さらに人間を救う神の真理の知識を豊かに与えておられるのに、寡婦、孤児、病人、苦しんでいる者、無知な者、滅びんとしている者の叫びが天に達するままに放置されているのに対し、どんな言いわけをすることができよう。時と金銭を神が禁じられた私欲のために費している者は、こうした貧しい人のために生命を与えられたキリストに会わなければならぬ神の日に、なんと言って申しわけをするだろう。こういう人に向かってキリストは、「あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせず、かわいていたときに飲ませず、旅人であつたときに宿を貸さず、裸であつたときに着せず、また病気のときや、獄にいたときに、わたしを尋ねてくれなかったからである」と言われないだろうか（マタイ二五ノ四二、四三）。

わたしたちの衣服は地味で単純でなければならないが、質の良い、色の似合った、役に立つものでなければならぬ。それは見えのためよりも、むしろ、じょうぶなものを選び、保温と身体を適切に保護するものでなければならぬ。箴言にしろされている賢い婦人は「家の者のために雪を恐れない、その家の者はみな紅の着物を着ているからである」とある（三二ノ二一）。

わたしたちの衣服は清潔でなければならない。衣服の不潔は不衛生であり、身心を共に汚す。「あなたがたは神の宮であって、…もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであるう」(コリント第一・三ノ一六、一七)。

衣服はあらゆる点で衛生的でなければならない。「すべてのこと」にまさって神はわたしたちが身心共に、「すこやかであるように」と望んでおられる。そしてわたしたちは霊と肉の健康のために神と共に働く働き人でなければならぬ。この両者は健康的な衣服によって増進するものである。

衣服はしとやかさと美しさと自然の単純さに相当したものをもっているものでなければならない。キリストは高慢な生活を警告されているが、しとやかさや自然の美に反対しておられない。キリストは野の花を指さし、純潔な花を開こうとしているゆりをさして言われた。「栄華をきわめたときのソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった」(マタイ六ノ二九)。こうしてキリストは天が価値ありと認める美を自然の事物によって例示された。その美とはしとやかな上品さ、単純、純潔、適切であって、これがあって初めてわたしたちの衣服が神に喜ばれるものとなるのである。

キリストは最も美しい衣服を心に着るように命じておられる。キリストの目には「高価な」「柔和でしとやかな霊」の価値と美はどんな外見的な装飾にも比較することができない(ペテロ第一・三ノ四)。

救い主の原則を自分の標準とする人々にとってキリストの約束の言葉はどんなに尊いものであろう。

「なぜ、着物のことで思いわずらうのか。」「きょうは生えていて、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神

はこのように装ってくださるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくだらないはずがあるうか。ああ、信仰の薄い者たちよ。だから、……何を着ようかと言って思いわずらうな。……あなたがたの天の父は、これらのものが、ことごとくあなたがたに必要であることをご存じである。まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」(マタイ六ノ二八―三三)。

「あなたは全き平安をもってこころざしの堅固なものを守られる。彼はあなたに信頼しているからである」(イザヤ書二六ノ三)。

流行の支配

流行に支配されることから起る疲労、不安、病氣、不幸などに比べてこれはなんと言う相違であろう。流行によって定められる衣服の洋式の大部分は聖書にしろされている法則になんと反していることであろう。過去数百年あるいはこの数十年に流行したスタイルを考えてみなさい。流行にあっていなければ上品ではないと言われるものがどんなに多いことだろう。いつばな敬虔な自尊心のある婦人には不適當な服装であると言われるものが大部分である。

ただ流行のために服装を変えることを神のみ言葉は許していない。変るスタイルや入念で高価な装飾は金持に時間と金銭を浪費させ、頭脳と心のエネルギーを消耗させる。また中流階級や貧困な階級の人には重荷を負わせることになる。ほとんど生計がたてられない者、また簡単な型であれば自分で衣服が作れる人まで流行を追うために仕立屋にたのまなければならなくなる。流行服のために多くの貧しい娘たちは温かい下着も買えず、その生命をおか

され、またさらに多くの者が金持の華美な、りっぱなものを欲しがり、不正直な、はずべき道に陥るのである。妻や子供の過大な要求をみたすために多くの家庭では苦しい生活を送り、多くの男性が委託金を横領したり、破産のうきめに会ったりするのである。

自分のため、子供のために流行を追ってスタイルの良い衣服を作ろうとして絶えず苦しんでいる婦人が多い。子供の健康、安楽、真の美には何の役にもたない装飾を子供の服につけるため、多くの母親が神経を痛め、指を震わせて、夜のふけるまでほねをおっている。流行を追うために自分の健康を犠牲にし、子供の正しい指導に非常に重要な平静な精神を失う。また頭脳や心の啓発はなおざりにされ、その魂は萎縮してしまう。

多くの母親は子供の健康を守る方法を知るために、身体の発育に関する諸原理を学ぶ時間もなく、子供の頭脳や精神の要求を満たす時間も、彼らの小さい失望や試練に同情したり、子供と興味や研究を共にする時間もない。

この世に生れ出ると子供はすぐに流行の力のとりことなってしまう。救い主のことよりも衣服の事を耳にする機会が多く、母親が聖書よりも流行服の絵を熱心にしらべているのを見る。そして、品性を発達させることよりも着飾ることが重要な事柄となる。親も子も人生で最もよい、最も美しい、最も真実なものを奪いとられている。流行のために欺かれ、きたるべき国における生命の準備をしていない。

不適当な衣服が身体に及ぼす害

たえず変化する流行を考えださせるのはすべて良いことに反対する敵であって、人間を悲惨にし、破滅させて神

の名を汚し、はずかしめることほど、彼が望んでいるものはないのである。そのために最も効果をあげる一つの方法は頭脳を衰えさせ、魂を墮落させると共に身体を弱めるような流行を考えだすことである。

とかく婦人方は服装の様式から危険な病気に冒され、大きな苦痛を受けやすい。必ず到来する苦しい危機に際して自己の健康を保持しえず、悪習慣によって健康ばかりでなく生命まで犠牲にし、子供には苦惱となる遺産、すなわち虚弱な身体、誤った習慣、誤った人生観を残すことになる。

流行の中でもむだで、有害な一つの考案は、地面をひきずるスカートである。それは不潔、不快、不便、不衛生なだけでなく、もっと悪いものである。余分な材料を要し、たけが長いため、すり減らして浪費となる。ひきずるスカートををはき、手にいっぱい荷物を持った婦人が階段を上下しているのや、電車に乗り、人ごみの中を歩いている姿、または雨の日や道が悪い時に歩いていく姿を見たりすれば、その不便、不快さを証明するのに他の何ものも要しない。

もう一つ非常に悪いのは重みを腰にささえるスカートをはくことである。その重みが内臓を圧迫し、下方に押し下げ、そのために胃を弱くし、倦怠感を与え、身体を前屈させ、ついには肺を圧迫して正しい呼吸をさらに困難にする。

腰部の圧迫から生ずる危険については近年よく討論されており、それについて知らぬ人はほとんどいないが、流行の力があまりにも大きいため、この悪習慣がやまないのである。この習慣によって婦人や娘たちは自らを害している。肺臓が十分に空気を吸い込むことができるように胸膈を最大限に拡張する余裕を与えることは健康にとって

重要である。肺が束縛されると肺にはいる酸素量が減じ、血液に正しい活力が与えられず、肺を通して排泄される有害な老廃物が中に残る。そして、さらに血液の循環は妨げられ、内臓が圧迫され、正常位より押し出されるためにその働きが弱くなる。

胴をしめつけても容姿はよくならない。肉体美の一つの主要点は均整美であって、身体各部の調和がとれたつりあいである。身体発育の正しいモデルはフランスの仕立屋が見せてくれるものではなく、神の法則に従って自然の環境の中に発育した人間の姿にあるのである。神はあらゆる美の根源であり、わたしたちがその考えに従う時にはじめて真の美の標準に近づくのである。

風習から生ずるもう一つの悪は身体の部分に必要以上に衣類をまとい、他の部分は十分におおわないという不平等な衣服の着方である。手足は重要器官から遠いので、特別につけるものを多くして冷却を避けなければならない。四肢がいつも冷えていては健康であることはできない。四肢に血液が少なすぎると身体の他の部分に多すぎることになるからである。完全な健康は完全な血液循環を必要とする。しかし、重要器官のある個所に手足よりも三、四倍もの衣服をつけていたのではそれは不可能である。

神経過敏で疲れ果てている婦人が多いが、それは新鮮な血液を作り出すきれいな空気を吸い、血液が元氣よく血管を通じて生命と健康とエネルギーを与えるように自由に身体を動かすことをしないからである。もし健康法則に従って衣服をつけ、屋外で十分に運動していたなら、健康を楽しむこともできたらうし、また定められた人生を送ることもできただろうのに、多くの婦人が難治の病氣にかかったり、肺病、その他の病氣で死んでいくのである。

最も衛生的な衣服をととのえるためには身体各部の必要を入念に研究しなければならない。氣候、環境、健康状態、年齢、職業なども考慮しなければならない。服のすべての部分はゆったりして、血液循環を妨げたり、自由に完全に自然な呼吸を妨げたりしないようにしなければならない。身につけるものはすべてゆったりとして、腕をあげると服がそれにつれてあがるようではなければならない。

健康が衰えていく婦人は気のきいた衣服をつけ、運動をとることで大いに益することができる。屋外で楽しむために適当な服装をつけたならば、最初は注意しながら運動をし、それに耐えるにしたがつて、運動量を増大すべきである。そうすれば多くの人が健康を回復し、社会的な活動における自己の分を果すために生きることができるようになる。

流行に支配されないこと

流行の要求に応ずる努力をしないで、婦人方は勇氣をもつて衛生的で単純な服装をなさい。妻であり、母である人は単なる家事にあくせくせず、主人のよき伴侶となり、成長する子供の頭脳におくれぬように読書に時間を取り、物事に精通していなければならない。愛する者をより高い生活へと導くために現在与えられている機会を賢明に利用しなさい。愛する救い主を日々、おのが伴侶とし、親しい友とするために時間を費しなさい。また時間をさいて聖書を学び、子供と共に野外に出て、神のみわざの美を通して神について学ぶようになさい。

婦人はつねに快活で元気よく、限りのない裁縫に全時間を費さず、夜は、一日の働きを終えて皆が再び共になつて、家族一同が楽しく交わる時間となさい。こうして多くの男女がクラブハウスや酒場よりも自分の家庭のまじわ

りを選ぶようになり、青年の多くが町をうつき、あるいは町角の売店に行かなくなるであろう。多くの娘たちもつまらぬ悪友から救われるのである。そして家庭の感化は親にとっても、子供にとっても神が計画なさった一生の祝福となるのである。

第二十三章 食事と健康

わたしたちの身体は食べる食物によつてきずきあげられる。身体の組織はたえず損じ、あらゆる器官の活動は消耗を招くが、食物によつてその消耗が補われる。身体の各器官はそれぞれ栄養を必要とする。脳髄には必要量の栄養が供給されなければならない。骨格、筋肉、神経もそれぞれ必要量を要求する。食物を血液に変じ、さらにこの血液をもつて身体の各種部分を構成することは驚くべき働きである。しかも、この機能はたえず行われ、神経、筋肉、組織それぞれに生命と力を供給している。

食物の選択

身体を構成するのに必要な要素を最もよく供給する食物を選択しなければならない。この選択においては食欲が安全な標準ではない。間違つた食習慣によつて食欲は不正となり、健康を害し、身体を強くしないで弱くする食物を欲することがしばしばある。また社会の習慣に左右されるのも安全ではない。至るところにある病氣と苦痛の原因はたいいてい食事に関する一般の誤りによるものである。

最善の食物が何であるかを知るためには人間の食事に対する神の最初の計画を研究しなければならない。人間を

創造し、その必要を理解しておられる神がアダムを定めて「わたしは…たねをもつすべての草と、種のある実を結ぶすべての木とをあなたがたに与える。これはあなたがたの食物となるであろう」と言われた（創世記一ノ二九）。罪ののろいを受け、土地を耕して生活するためエデンを去るとき、人間は「野の草」をも食する許可をつけた。

穀類、果実、堅果類、野菜がわたしたちのために創造主のお選びになった食物である。こうした食物をできるだけ単純に自然のまま調理したものが最も健康的で栄養がある。それはさらに複雑な刺激的な食物によっては得られない力と耐久力と知能の力を与える。

しかし、健康的な食物はどれでも、どんな場合にでも自分の必要に適するとはかぎらない。食物の選択には注意を要する。食物は時節に適し、住んでいる土地の気候に合い、その人の職業に応じたものでなければならない。時節や気候の違った地方で用いられている食物はそのほかの場所では適しない。また職業の異なった人にはそれぞれ最も適切な食物がある。強度の肉体労働に携わっている人が食べるのによいものは、座業や、ひどく頭脳を使う人には不適當である。神は健康的な食物を種々与えておられるから、各自はその体験と正しい判断に基いて自分の必要に最も適するものを選ぶべきである。

自然が豊かに供給する果実、堅果類、穀類は十分にあり、年々各地の生産物は輸送の便が増すにつれて、さらに全般的に広く、あらゆる人にゆきわたるようになった。その結果、数年前までは高価なぜいたく品とされていた多くの食品も今日では日常の食物として万人の手にはいるようになった。特に乾燥果物と缶詰果実がそうである。

堅果類とその加工食品が肉類の代用として一般に食用されるようになり、これを穀類や果実あるいは根菜類と混じて衛生的な栄養食品とすることができると言える。しかし、堅果類は大量に使用せぬように注意しなければならない。堅果類の食品を用いて結果の悪い人はこの点に注意すればその障害が解消する。また堅果類の中には比較的健康的でないものもあることを覚えておかなければならない。ピーナツよりもアーモンドの方がよい。ピーナツも少量を穀類と共に用いるならば栄養となり、消化をよくする。

適当に調理すればオリーブの実には堅果類のようにバターや肉の代用になる。オリーブをそのまま食べると、その油は動物性の油や脂肪よりもはるかに良く、便通をよくする。また肺病にも効果をもたらす、炎症性の荒れた胃にもききめがある。

濃厚な、刺激の強い食事になれた人は不自然な味覚を持っており、急に単純、質素な食物を賞味することはできない。味覚が正常になるには時がある。また胃が受けた虐待からたち直るのにも時間がかかる。しかし、根気強く、健康的な食物を食する者はしばらくするとそれがおいしくなるものである。その繊細な、けつこうな風味の価値がわかってきて、不健康な珍味よりもっとおいしく食べられるようになる。しかも胃は刺激されず、過労することもなく、健康状態においてその働きをらくに果すことができる。

食 品 の 種 類

健康を保つためには栄養のある、よい食物を十分に必要とする。もし利口にくふうするなら、ほとんどどんな土

地においても健康的な食物を手に入れることができる。米、麦、とうもろこし、からす麦、およびいんげん豆、えんどう、れんず豆等各種の食品が海外の至るところに送り出されている。こうしたものとその土地のもの、あるいは輸入された果実、またはその地方にできる種々な野菜を用いて肉類を除外した完全な食事を選ぶ便が与えられている。

果実がよくできる地方では缶詰や乾燥によって冬のために十分貯蔵しなければならない。ほとんど使用されていないか、あるいは全然耕作されていない土地が多くあるがそうした場所には野ぶどう、グースベリー、いちご、木いちご、黒いちご等小さいくだものをりっぱに育てることができる。

家庭で缶詰にするには缶よりも、むしろびんをできるだけ使用すべきで、それに用いる果実は、質のよいものであることが特にたいせつであり、砂糖は少量とし、保存できる程度に煮る。こうして貯蔵したものは新鮮な果実に対するりっぱな代用品になる。

ほしぶどう、プルーン、りんご、なし、もも、あんず等の乾燥果実が適当な値段で得られるところでは今までよりももっと多く主食品として食べることができ、それによって各種階級の労働者の健康と元気が増大する。

一回の食事に多種類のものを食べてはならない。それは過食になりやすく、不消化を招くからである。また果実と野菜を一回の食事に食べることもよくない。消化力が弱いとこうして両方をいっしょに食することはよく苦痛を生じ、頭脳を働かせることができなくなる。それでこの食事でくだものをとったら、他の食事で野菜ものを食べるようにするのが良い。

食事には変化がなければならない。同じ様に調理した、同じごちそうが食事のたびに毎日食卓にあらわれてはならない。食物に変化があると食事はさらにおいしく食べられ、身体もそれだけ多く栄養をとることになる。

食物の調理

食欲を満足させるためにだけ食べることは誤りであるが、食物の質や調理法について無関心ではならない。食べる食物がおいしくなければ身体によい栄養とならない。食物は注意深く選び、知識と技術をもって調理すべきである。

パンを焼くのに精白した白い小麦粉を使うことは最も良いことではない。それはまた健康的でもなければ経済的でもない。精白した粉で作ったパンには完全小麦粉（ふすまをとらない粉）のパンの中にある栄養がない。そしてよく、便秘の原因となり、そのほか不健康な状態を招く。

パンを焼くのにソーダやベーキングパウダーを使用するのは有害であり、必要である。軍曹は胃の炎症を起し、全組織を毒することがよくある。ソーダがなければおいしいパンはできないと思っている主婦が多いがそれは誤りであって、もっと良い方法を学ぶ労を惜しまないなら、さらに衛生的で本来の味覚にもっと合ったパンを作ることができよう。

イーストのパンを作るには水の代りに、ミルクを使つてはいけない。ミルクを使つとそれだけ費用が多くなり、しかも、パンはずっと不衛生なものになる。ミルクパンは水で作ったパンよりも早くいたみ、胃の中でもたやすく発

酵する。

パンはよくふくれていて、甘味をおびているべきである。少しでも酸味があったら食べてはならない。パンのたまりは小さくしてよく焼き、できるだけ酵母菌が死んでいなければならない。パン種のはいったパンはどんなものでも、できたては不消化であって、決して食卓に出してはならない。ただし、パン種のはいらぬものはそうしなくてよい。イーストやパン種なしで作り、強く熱したオーブンで焼いた小麦粉のパンは健康的で美味である。

穀物をおかゆやマッシュにして使う時は数時間煮なければならない。しかし、よくかまねばならぬ乾燥食品に比べると軟食や流動食は不衛生である。ズアイバック、またはオーブンで二度焼いたパンは最も消化しやすく、最も美味な食物の一つである。普通に焼いたパンをうすく切って熱いオーブンで湿気が全然なくなるまで乾燥させ、しんまで薄く焦がし、乾燥した所におけば普通のパンより長くもち、食前にもう一度火を通すと新しく焼いたものと同様になる。

一般に食品中に用いられている砂糖の量はあまりに多すぎる。ケーキ、甘いプディング、メリケン粉で作った菓子、ゼリー、ジャム等は消化不良の有力な原因となる。ことに有害なのはミルクと砂糖がおもな材料としてはいつているカスタードやプディングである。ミルクと砂糖を多量に同時に使用するのは避けなければならない。

ミルクを用いる時は十分に消毒すべきで、それに注意さえすれば病気に感染する危険は少ない。バターは料理に使うより冷えたパンにつけて食べる方が害が少ない。しかし、原則として全然食べない方がよい。またチーズは、なおいっそう避けねばならない食品で、食物としては全然不適當である。

量が少なく、しかも料理のへたな食物は造血器官を弱め、血液の状態を悪化させる。そのうえ、組織を狂わせ、病気をひき起すとともに神経をいらだたせ、気短にする。へたな料理の犠牲者は何千何万とかぞえられる。多くの墓石には、「へたな料理のために死す」とか「胃を濫用して死す」などと書くことができる。

料理をする者が衛生的な食物を調理する方法を学ぶことは神聖な義務である。多くの魂がへたな料理のために失われる。良いパンを作るには思慮と注意を必要とするが、一塊のパンの中には多くの人が考えている以上に宗教が存在している。ほんとうに良い料理人はまれであって、若い婦人は料理その他の家事はいやしい仕事と考え、結婚をして家庭をもつ女性の多数がこの妻や母にゆだねられている義務を少しも知らないのである。

料理はつまらぬ学問ではない。それは实际生活における一番重要な事柄に属するものである。これはまたすべての女性が学ばなければならない学問であり、貧しい階級に益となるように教えなければならない。食欲をそるよ
うに調理され、同時に単純で栄養に富んだものを作るには技術がいる。しかもそれは可能である。料理人は単純で健康的な方法をもって食物を料理することを知り、食物が健康的であると共に単純だからうまいというようにしなければならない。

家庭の主婦でありながら衛生的料理法を知らない婦人は家族の健康のためにこの非常に重要な事柄を学ぼうと決心すべきである。多くの場所に衛生的な料理学校があり、こうした教育を受ける便宜を与えている。そういう設備の助けが得られない人は良い料理教師の指導に従い、女子料理技術者になるまで上達するよう忍耐強く努力すべきである。

規則正しい食事

規則正しく食事することは非常に重要である。

三度の食事には一定の時間がなければならない。その時間には各自が身体の要求するものを食し、次の食事まで何も口に入れてはならない。自己の性癖に勝つ意志の力が足りないために、身体が食物を要求しないのに、不規則な時間や、食間に食べる者が多い。また旅行中、手元に何か食べる物がありさえすれば、絶えず口を動かしている人がいるが、これは非常に有害である。もし旅行者が単純な栄養のあるものを規則的に食するならば、それほど疲労せず、病気にかかることも少ないのである。

もう一つ悪い習慣は就寝直前に食べることである。規則的に食事をして力がぬけたように感じ、さらに食物をとる。そして、ほしいままにそつするうち、この悪い行為が習慣となり、食物なしには眠れないと考えるほどかく固定してしまうことが多い。おそく夕食をとる結果、消化作用は睡眠中にも継続する。胃は絶えず働くが、その働きは完成されない。不快な夢で睡眠がしばしば妨げられ、翌朝目がさめても快い気分になれず、朝食がおいしくない。わたしたちは休むために横になるときは胃が働きをすっかり終え、他の器官と同じように休息を楽しむ状態でなければならない。あまり運動をしない人は夕食がおそくなるのは特に有害である。これがもとでついに死ぬべき病気をひき起こすことがある。

多くの場合、食物を欲する脱力感は消化器官が一日中過度に使用されたために感じられるものである。一回の食事

を処理した後は消化器官は休息を必要とする。少なくとも五、六時間の時間を食事の間におかなければならない。また試みた人はたいてい三食よりも一日二食の方がよいことがわかるであろう。

誤っている食事

非常に熱かったり、冷たかったりするものを食べてはならない。食物が冷たいと消化が始まる前にそれを温めようと胃の力が奪われる。同じ理由から冷たい飲み物も有害であるが、熱い飲み物を多量にとることも身体を弱らせる。事実、食事に液体が多ければ多いほど消化は困難になる。消化作用が始まる前にその液体が吸収されなければならぬからである。塩を過度にとらぬようにし、ピクルスや香料のはいった食物を避け、果実を多量に食するならば食事に際して大量の飲み物を要求する刺激はほとんどなくなるであろう。

食物はゆっくり食べ、ていねいにかまなければならぬ。これは食物が唾液とよくまざり、消化液がよく働くために必要なのである。

次に非常に悪いのは適当でない時間に食することである。たとえば過度の激動の後に、非常に過労して熱くなつたときに食することである。食事の直後は神経の力が非常に奪われるもので、頭脳や身体が食前食後に極度に疲労していると消化が妨げられるのである。人間が興奮したり、心配したり、急いでいる時は休息し、またはその状態がよくなるまで食べない方がよい。

胃は脳と密接に関係し、胃が侵されるとこの弱った消化器官を助けるために脳から神経の力が奪われる。こうし

た要求があまりしばしば起ると脳に充血をきたす。脳をたえず使い、肉体の運動をとらない場合には単純な食物であつてもさし控えたとり方をしなければならない。食事のときには、心労や心配事を捨て、落ち着いた気持ちで食しすべて神の恵みに対し感謝にあふれ、ゆつくりとそして喜んで食べなさい。

過 食

肉類およびその他粗末で有害な食物をしりぞけた人であっても、食物が単純で衛生的だから食べただけ食べてよいと考え、過食をし、ときには暴食をするが、それは誤りである。組織が受け入れたら過労となるような性質の食物またはそうなるほど多量に食べて消化器官の負担を重くしてはならない。

一般的習慣によると、食物は順次、食卓に出すものであるが、次に何が出てくるかわからないため、自分に適さぬものでも十分にとることがある。そして最後の皿が出ると自分の限度を越えていて無理だと知っていないながら、そのデザートを食べるが、それは決してよいことではない。もしその食事のための食物が初めから食卓に全部並べてあれば、その中から最も適当なものを選ぶことができる。

過食の結果がすぐわかることもあり、なんら苦痛を感じない場合もあるが、しかし消化器官はその活力を失い、体力の根本がそこなわれているのである。

余分な食物は身体組織に重荷となり、不健全な、熱がある状態をひき起す。また胃に必要な以上の血液を集め、そのため手足が早く冷えてくる。それは消化器官に過重な負担を負わせる結果、消化器官の働きが終った後、脱力

感と倦怠感を覚える。いつも過食している人はこの脱力感を空腹と呼ぶが、それは消化器官の過労によって生ずるもので、ときには脳髓が鈍り、知力、体力が損耗する。

こうした不快な症状は自然力が不必要に活力を出してその働きをしてから全く疲れ果てたために感ずるもので、胃が「休ませてほしい」と言っているのである。しかしこの脱力感を胃が食物をもっと要求しているものと勘違いをして、休ませるかわりに、さらに負担をかけている人が多い。その結果、たいてい良い働きができたはずの消化器官が疲れ果ててしまうのである。

安息日の食事

安息日のためには他の日より多量の食物を種類多く準備してはならない。かえって、靈的な事物を理解するよう頭脳がはつきりして活発であるために、食物はいつもより単純で量も少なくすべきである。胃に食物が詰め込まれると脳髓も詰まって働かなくなる。不適当な食事のために頭が混乱し、最も尊いみ言葉を聞いてもその価値がわからない。安息日に過食することによって、多くの人が考えている以上に、この神聖な機会に恵みを受けるのに不適當なものになってしまうのである。

安息日に調理することは避けなければならない。しかしそのために冷たい食物をとる必要はない。寒い気候の間は、前日に料理したものを暖めるべきである。そして、どんなに単純な食事でもおいしく、また目に美しく作らなければならない。特に子供のある家庭では、安息日にごちそうと思われるようなもの、すなわち、日常食卓に出

さないようなものを準備することは良い。

食事の改革

誤った食習慣が行われているところでは猶予せず改革に着手すべきである。胃を濫用して消化障害をきたしたときは、身体に無理な負担はすべて除去し、残っている活力を注意深く保存することに努力しなければならない。長期間胃を濫用した場合、再び完全に回復しないかもしれないが、正しい食事法によってそれ以上の衰弱を防ぎ、多くの人がほぼ完全に回復する。どんな人にもあてはまる規則を定めるのは困難であるが、食事の正しい原則に注意すれば大改革をすることができ、料理人が食欲をそるためにたえず苦勞をする必要がなくなる。

食事の節制は知力と道徳力が増大し、情欲を制する助けとなる。過食は気性が活発でない者には特に有害であるから、そういう人は小食をして十分に運動をしなければならない。生れつきすぐれた能力がありながら、食欲を制しさえすればできるのにその半分の仕事もしていない人がいる。

多くの著述家や講演家もこの点で失敗している。心ゆくまで食した後、読書し、勉強し、ものを書くなど、すわりがちな仕事をして肉体運動には少しの時間もさかない。その結果、思想も言葉も自由に浮んでこない。人の心を感動させるに必要な力と熱烈さをもって書いたり、語ったりすることができず、そのほねおりも無効、無益となる。

重要な責任を負っている者、なかんずく、靈的方面の保護者である者は鋭敏な感覚と鋭い知覚の持ち主でなければならない。したがって他の人よりも食事に節制し、濃厚でぜいたくな食品を食卓にのぼらせてはならない。

責任ある地位の人は非常に重要な結果をもたらす問題を毎日決定し、そのうえ、しばしば迅速に事を考えなければならぬが、それはきびしい節制の人だけがよくできることである。体力と知力を正しく取り扱うことによって頭脳は強められる。もし、頭脳の緊張が過度でなければ働かせるたびに新たな元気が生ずる。しかし重要な計画を考え、重要な決定をしなければならぬ人が不適当な食事をとる結果、その仕事に悪影響が及ぶことがよくある。失調をきたした胃は、頭脳にも同様な失調した不確実な状態を招き、人間をしばしば短気にし、また荒々しくし、不正をひき起す。そして食事の悪習慣のために生じた病的な状態が原因となり、社会に祝福となるべき多数の計画がしりぞけられ、不正、かつ圧制的な、しかも残虐な幾多の方策がとられる。

座業をする者、あるいは頭脳をおもに使う働きをする人全員に対して一つの提案がある。それは十分勇気がある人、また自制力をもっている人に試みてほしいのであるが、食事のたびにただ二、三種の単純な食物を食し、空腹を満たすに必要な量だけをとり、毎日活発に運動することである。そのうえで効果の有無をためしてみなさい。

活発な肉体労働をする強健な人は静かにすわっている習慣の人ほど食物の量や質に注意しなくてもよいが、それでも飲食に自制力を働かすならば、さらに健康になれる。

ある人は自分の食事の正確な規定を決めてほしいと言う。そして過食しては後悔し、何を食べるか、何を飲むかについて考えてばかりいるが、それではいけない。ひとりの人が他の人のために正確な法則をたてることはできないことで、各自が理性と自制力を働かせ、原則に基いて行動すべきである。

わたしたちの肉体はキリストがあがなわれたキリストの所有物であるから、勝手に取り扱う自由をもっていない。

健康の法則を理解している人はすべて神がわたしたちの身体にたてられたこの法則に従う義務を自覚すべきである。健康の法則に服従することは各個人の義務となるべきもので、その法則を犯すとき、自分自身が苦しまなければならない。わたしたちは自分の習慣や行動に対して自分で神に言いわけをしなければならない。だからわたしたちの問題は「社会の習慣がどうであるか」ではなく、「神がわたしに与えられた住み家をどう取り扱うべきか」である。

第二十四章 食物としての肉類

最初人間に定められた食事には動物の肉は含まれていなかった。洪水後、地球上に緑色のものが全く絶滅するまで人間は肉食の許可を受けていなかった。

エデンにおいて神が人間の食物を選ばれた際、最善のものをお示しになった。イスラエル人のために食物を選びになったときにも同じ教訓を与られている。神はイスラエル民族をエジプトから連れ出し、神の民となるための訓練を彼らになさった。イスラエル人を通して神は世界の人々を祝し、教えようとお望みになった。そしてこの目的のために最も適した食物を備えられたのであるが、それは肉でなく、マナ、すなわち「天のパン」であった。動物の肉がイスラエル人に与えられたのは彼らが不満をいだき、エジプトの肉鍋を求めてつぶやいたため、それはほんの短い期間であった。しかもその肉を食べたため多くの人が病気になって死んだのである。肉を禁ずる食事はそれでもなお心から受け入れられず、いつも陰に陽に不満とつぶやきの原因となり、永久的食事となるに至らなかった。

イスラエル民族がカナンに落ち着くと肉食が許されたが、その悪い結果を少なくするため、細心な制度が設けら

れた。ぶたをはじめ、その他汚れたものといわれていた動物、鳥、魚の肉を食することは禁止された。また許可された肉であっても、その脂肪と血液を食することはきびしく禁じられていた。

健康な動物だけが食用になるのであって、傷があるもの、ひとりでに死んだもの、血液を注意深く排泄してないものは、いずれも食用にはできなかった。

人間の食物として神が指定された計画から離反したため、イスラエル人は非常な損失をこうむった。肉食を望んだため、その結果を刈り取らねばなくなり、神の目的を果す域にたち至らなかった。「主は彼らにその求めるものを与えられたが、彼らのうちに病気を送って、やせ衰えさせられた」（詩篇一〇六ノ一五）。彼らは霊的の事物よりもこの世的な事物を尊び、神が彼らのために立てられた目標である、きよい、高い標準に到達しなかった。

肉食を廃する理由

肉食をする人は穀類や野菜の古物を食していることになる。動物は成長するためにその栄養を穀物や野菜からとるからである。穀物や野菜の中の生命はこれを食べたものの中にはいる。わたしたちは動物の肉を食べてその生命を受けるわけである。だから神がわたしたちのために備えられている食物をとって、直接その生命を受けた方がどれだけよいだろう。

肉は決して最良の食物ではなかった。しかも動物の病気が実に急激に増加している今日、肉の使用反対の根拠は倍加している。肉食している人は自分が食べているものがどんなものかほとんど気がつかない。その動物が生きて

いる時の状態を見、自分が食べている肉の質を知ることができたら、いやになってやめる人が多いであろう。結核菌や**がん**の菌がいつぱい付着した肉を人間はつねに食べているのである。こうして結核、**がん**、その他致命的な疾患が伝染する。

ぶたの肉組織には寄生虫が充満している。ぶたについては「これは…汚れたものである。その肉を食べてはならない。またその死体に触れてはならない」と神は仰せになった（申命記一四ノ八）。この命令はぶた肉が食用に適さないために与えられたものである。ぶたは腐肉を食する動物で、ただこの役割のために生存するのであるから、どんな時にも、その肉を決して人間が食してはならなかった。どんな動物でも、不潔物の中に住み、かつ嫌悪すべきものを食しているかぎり、その肉が衛生的であることは不可能である。

動物が病気になると持ち主はこれ以上手元におくのを恐れ、市場にもって行き、食用としてこれを売却することがよくある。また売却するため、動物を太らすやり方のうちには病気を発生させるものがある。日光と新鮮な空気を遮断し、きたない家畜小屋の空気を吸わせ、あるいは腐敗した食物を与えて太らせるとき、全身はたちまちのうちに汚れた物質で汚染してしまう。

動物は遠距離を運搬され、市場につくまで非常な苦痛をなめさせられることがしばしばある。緑色の牧場から連れ出され、暑い、ほこりにまみれた道を何マイルも歩き、あるいはきたない車に積み込まれて、からだはのぼせ、疲れ果て、何時間も食物も水も与えられずに運ばれることが多い。こうしてあわれな動物は殺されるために追いつてられて行くが、それは人間がその死体を食べて楽しむためである。

多くの場所で魚類もその食する汚物のため汚染し、病氣の原因となっている。魚類が大都市の下水に近接する場合、特にそうであって、下水の含有物を食する魚が遠海に遊泳し、水がきれいな場所で捕獲されることもある。こうして食用に供せられる場合、危険を予想しない人に病氣と死をもたらすに至る。

肉食の影響はただちに認められないかもしれないが、だからと言って、その事が無害である証拠にはならない。血液を毒し、苦痛を招くものは、食した肉であると教えても信ずる人はほとんどいない。肉食だけで病氣になり、死ぬ人が多数ある。しかも本人も他の人々も真の原因に気がついていない。

肉食からくる精神的な害は身体の病氣に比較して決して劣ったものでなく、顕著に現われるものである。肉食は健康に有害であり、肉体を侵すものはまた同様に頭脳と心に害を及ぼす。肉食に関連して動物に対する残虐さ、それを加える人、見ている人に及ぼす影響を考えなさい。神がおつくりになったこれらの動物に対して、わたしたちが持っていなければならない優しい気持がどんなに破壊されていることだろう。

ものを言わぬ多くの動物があらわしている知性は不思議なほど人間の知性に似ている。動物も見、聞き、愛し、恐れ、苦しみを経験する。そして多くの人間よりもずっと忠実に身体の諸器官を使用する。苦しんでいる仲間に対しては同情とあわれみを表わし、飼育人に対してはある種の人間よりもはるかにすぐれた愛情を示すものが多い。そして、非常に大きい苦痛を加えないかぎり、破れない愛着を人間に対していだくものである。

人間の心を持っている者が家畜を飼育したことがあれば、信頼と愛情に満ちたその目を見ながら、どうして進んでそれを屠殺者に渡すことができよう。そうした家畜の肉を、どうしておいしいごちそうとして、おさぼり食うこ

とができよう。

食 事 の 変 化

筋肉の力は肉食によると考えるのは誤りである。肉食をしない方が身体の組織の必要は十分に満たされ力強い健康も与えられる。穀類、果実、堅果類、野菜などが良い血液をつくるのに必要な栄養を全部含んでおり、肉食によつてはこうした栄養素はそれほどつまく、また完全に供給できない。もし肉食が健康や体力に欠かされぬ重要なものであつたならば、最初から人間に定められた食物の中にはそれが含まれていたはずである。

肉食をやめると、よく衰弱感や元気がなくなつたように感じることもある。これが肉食を欠くことのできない証拠であると言張する人が多い。しかしやめたときにもの足りなく感じるのはこの種の食物が刺激性を有し血液を熱くし、神経を興奮させるためである。ある人には、飲酒家が酒をやめると同様、肉を廃するのに困難を感じる。それでも変更した方がよい。

肉食をやめたならば栄養があり、食欲をそそる各種の穀類、堅果類、野菜、果実などをもって補わなければならない。衰弱した人、または絶えず労働をして疲れる人には特にそれが必要である。貧困者が多い国では、肉が最も安価な食物であることがある。そういう場合には食物の変更は比較的困難を伴うが、それでも実行できることである。しかし各人の事情や、従来の習慣の力を考慮し、正しい考えであっても極端にそれを強制せぬように注意しなければならぬし、また急激な変更を主張してはいけぬ。肉の代りに高価でない衛生的な食物をもって補足すべ

きである。これは料理する人の仕方一つであり、注意と技術をもってすれば、栄養のある食欲を増進させる食品を調理することができるし、これは大いに肉食の代用となる。

どんな場合でも良心を教育し、意志の力を借りて質の良い、衛生的な食物を供給しなさい。そうすれば食事の変更もたやすくでき、肉に対する要求もやがて消えるであろう。

すべての人が肉食を廃するように努めるときではないだろうか。天使とまじわれるように純潔、上品な、きよい者となることを求めている人が、霊肉をこのように害するものを食物として食べ続けることがどうしてできよう。美食をするため肉をとり、そのため神の創造物の命をとることがどうしてできよう。むしろ最初に人間に与えられた健康的なおいしい食物にもどり、神が創造され、わたしたちの支配下に入れられた動物をかわいがり、子供にもこれをあわれむように教えるべきである。

第二十五章 極端な食事

食事の改革を信ずるという人が全部真の改革者であるとはかぎらない。改革とは単に、ある健康的でない食物を廃することと考える人が多い。こうした人は健康の法則をはっきり理解せず、食卓には依然として有害な珍味が並べられて、キリスト者の節制や中庸の模範となるにはあまりにもかけ離れているのである。

また別の人は正しい模範を示そうとして、反対の極端に走る。ある者は最良の食品が入手できないとその不足を最もよく補う食品を用いなくて、栄養の少ない食事をとっている。この人たちの食物はよい血液をつくりだすのに必要な要素を供給しない。したがって彼らの健康は害され、才能はそこなわれ、示そうとしたその模範は食事の改革とはならず、かえって悪影響を及ぼす。

このほか健康には単純な食事が必要であるから、食品の選択や料理にはあまり懸念しなくてもよいと思っている人がいる。またある者は、自ら非常に貧弱な食事に制限し、身体組織の必要を満たすに十分な種類のものを食べず、その結果苦しみを招いている。

単に一部分だけ健康の法則を理解している者は自分の考えを自ら実行する場合だけでなく、家族、隣人にそれを

勧めるときも極端に頑固となることが往々ある。まちがった改革のため自分自身不健康になっていながら、自分の考えを他人に強要しようとする結果、多くの人に食事の改革に関するまちがった観念を植えつけ、改革を全く排斥してしまう方向に導く。

健康法則を理解し、原則によって支配されている者は放縦と節制の両極端を避けるであろう。単に食欲を満たすだけでなく、身体を養うことを基準に食物が選択される。そして神と人との最高の奉仕ができるように全能力を最も良い状態におこうと努力する。食欲を理性と良心の支配下におくとき、心身の健康が報いられる。彼らは自分の考えを無理に他人に強制しないが、その示す模範は正しい原則に有益なあかしとなる。こういう人は広く、りっぱな感化を及ぼすものである。

食事の改革には真の常識というものがあって、この問題は広く深く研究しなければならない。他人のすることが自分のやり方と調和しないからといって他人を非難すべきではない。すべての人の習慣を調節しようとして、不変的法則を定めることは不可能であって、だれひとりとして自分が全般の標準であると思つてはならない。すべての人が同じ物を食するわけにはいかなからである。ある人には美味で健康的であつても、別の人にはまずくて有害であることさえある。ある人は牛乳が飲めないが、ある人は牛乳でよく育つ。また豆類を消化できない人もおり、豆を食べて健康のためになるという人もいる。粗製の穀粒がよい人もいれば、それが食べられない人もいる。

果実や堅果類の少ない、新開拓地方や貧しい地方に住む人々に日常の食事から牛乳と卵をとりのぞくように勧めてはならない。肥満した、動物的情欲が強い人が刺激的食品を避けなければならないのは事実であり、特に肉欲的

な習慣をもった子供の家庭では卵を用いるべきではない。しかし、造血器官が弱い人の場合、特に必要な栄養素を供給する他の食品が得られない場合は、牛乳と卵を全然廃してはならない。しかし、健康な牛の乳が手にはいり、よいえさでよく飼育された健康な鶏の卵を得るように細心の注意を払うべきである。また鶏卵は最も消化しやすいように料理しなければならない。

食事の改革は進歩すべきものであって、動物の病気が増すにつれ、牛乳や卵の使用がしだいしだいに危険になる。そこで健康的で、安価な他のものをその代用とするように努力しなければならない。できるだけ牛乳と卵を用いずに、しかも衛生的でおいしく料理する方法を至る所で人々に教えなければならない。

一日に二食の習慣は一般的にみて健康によいが、事情によっては三回食事を必要とすることもある。しかし、それは食べるにしても非常に軽い、最も消化しやすいものでなければならぬ。クラッカーすなわち、ビスケットがズアイバックそれに果実が穀類でつくったコーヒーが夕食に最も適した食物である。

単純で健康的な食物をとりながら、身体に害を及ぼしはしないかとたえず心配している人がいるが、こういう人に向かって「この食物が身体の害になると思わないように、それについて全然考えないようにしなさい」とわたしは言いたい。自分の最高の判断に従って食し、神に自分の身体を強めるためにこの食物を祝してくださいと求めるなら、必ず神はそうなさることを確信し、いたずらに心配してはならない。

原則によれば胃を刺激し、健康を害する食物は廃すべきであるが、その一方、貧弱な食事は貧血をきたすことを記憶しておかなければならない。そうしないと最も回復しにくい病気をひきおこす。各組織は十分に栄養を受けず、

胃弱と全身的衰弱をひき起す。しかもそういう食事をとる人は、必ずしも貧困のゆえにそうするのでなく、無知とか、怠慢から、あるいは自分の誤った改革に関する観念を実行しようとしてこの方法にでるのである。

身体をおろそかにし、これを濫用し、そのために神のみ事業に不適當な者となることは神の栄光とはならない。おいしい、体力をつける食物を準備し、身体に注意を払うことは家長の主要な義務の一つである。食物を節約するよりも衣服や家具の方で高価でないものを用いるのがずっとよいのである。

ある主婦はお客に高価なごちそうをするため家族の食物を節約するがこれは愚かなことである。お客をもてなす時はもっと単純なものを出し、家族の必要をまず満たすべきである。

接待の必要が生じ、またそれが祝福となるような場合にも、経済がへたなために、あるいは不自然な習慣のためにそれができないことがよくある。日常の食卓にのせる食物は主婦がわざわざ余分な準備をしなくても、不意の客を迎迎できるような程度のものでなくてはならない。

だれでも、何を食し、どういう風に料理をするかを学ばなければならない。男子も女子と同様、単純で衛生的な料理法を知っておく必要がある。往々、男の人は仕事のため、衛生的な食物が得られない場所に行かなければならないことがある。そういう場合に料理の知識があればうまく役だてることができる。

自分の食事について注意して考えてみなさい。原因から結果を学び、自制心を養い、理性で食欲を支配し、過食によって胃を濫用することなく、健康に必要な衛生的でおいしい食物をとるようになさい。

一部のいわゆる衛生改革者という人の狭い考えが衛生運動に大きな害を及ぼしている。衛生学者は、自分の食卓

にのせる食物によって衛生改革が大いに価値判断されるということを覚え、この運動の信用を落すようなことをせず、率直な心の持ち主にこの原則を推奨できるように、自ら原則を実行すべきである。いかに道理になっても食欲に制限を加えるとき、どんな改革運動であっても、大勢の反対者がそこには現われるものである。彼らは理性や健康の法則よりも嗜好を第一に考える。社会の因習から離れ、改革を唱える者はすべて、どんなにその行動が道理になっても、こうした階級の人々から極端であると言われる。こうした人々が非難する余地がないように、衛生家は他人とことさらに違ったことをしようとしてはいけない。原則を犠牲にしない範囲において、なるべく彼らに近づくべきである。

衛生改革を唱える人々が極端に走るとき、こうした人を衛生法則の代表者とみていた多くの人がこの改革を全く拒否するのは当然である。このように極端に走る人は短期間のうちに、一生涯充実した生活を送っても、取り返しのつかないほどの害を及ぼしてしまうことがよくある。

衛生改革は広大深遠な原則に基いたものであり、狭い見解や行動によってこれを卑しめてはならない。しかし、反対や嘲笑のために、あるいは他を喜ばせたり、勢力を及ぼすために、真の原則から離れたら、これを軽視したりしてはならない。原則に従って行動する人は、正義のためには確固決然として立ち、あらゆる交わりにおいて、寛大なキリストの精神と真の中庸を示すものである。

第二十六章 刺激物と催眠剤

刺激物や催眠剤と名づけられているものは多種多様で、その中には食物として、または飲み物として用いられながら胃を刺激し、血液を毒し、神経を興奮させるものがある。これを使用することは明らかに有害である。一時的にはよい気分を起させるため、刺激物による興奮を求めるがこれには必ず反応が伴う。不自然な刺激物をとると、きまつて過度に使用する傾向があり、肉体の変質と衰弱を早める有力な原因となる。

薬 味

このスピード時代には、食物は刺激の少ないものほど良い。薬味は有害な性質を持っている。とうがらし、からし、香料、ピツクル、その他これと同様な食物は胃の炎症を起し、血液を熱くし、不純にする。アルコール性飲料の影響を示すために、飲酒家の胃の炎症状態がよく引用されるが、刺激性の薬味によってもこれと同様な炎症状態がひき起される。まもなく、普通の食物では食欲が満足しなくなり、身体にもの足りない感じが起り、さらに強い刺激物を求めるようになる。

茶 と コーヒー

茶は刺激物として作用し、ある程度、中毒を起す。コーヒー、その他の一般飲料の多くがこれと同じ影響を及ぼす。その第一は気分を浮き立たせ、胃の神経を興奮させ、脳を刺激する。こうして脳より今度は心臓の運動量を増大させ、全身の組織に一時的の活力をおこす。すると疲労が消え、力がついたように感ずる。知能はよみがえり、想像力は非常に活発になる。

こうした結果から多くの人が茶やコーヒーは身体のために非常によいと思っている。しかしこれはまちがいであつて、茶やコーヒーは身体組織の栄養とならない。その影響は消化や同化が始まらないうちに生じ、力が出たように感ずるのは単なる神経の興奮にすぎない。刺激物の影響が消えると、この不自然な力もなくなり、その結果、興奮の度に相当した倦怠と衰弱が生じる。

こうした神経の刺激物を常用すると頭痛、不眠、心悸亢進、消化不良、手のふるえ、その他多くの障害をきたす。こうした刺激は生命力を消耗させるからである。疲れた神経は刺激や過労ではなく、休息と安静を必要とし、自然は使い果したエネルギーを回復するのに時間を要する。刺激物の使用によって体力が刺激されると、一時は仕事も多くできるが、それを常用すると体力が衰弱して希望どおりにエネルギーを働かすことがますますむずかしくなり、ついに意志はそれに圧倒され、この不自然な欲求を拒否する力がなくなってしまう。こうなると、さらに強い刺激物を欲するようになり、ついに疲れ果てた身体は、もはやその刺激に反応しなくなる。

喫煙の習慣

たばこは緩慢で、潜行的ではあるが、最も悪性の毒であって、どんな形で、これを用いても必ず身体を害する。その影響が徐々であるだけに、危険も大きく、最初はほとんど気がつかない。それは神経を刺激し、つぎに麻痺させる。それは脳髄を弱め、鈍らせ、アルコール性飲料以上に強く神経を害することがある。その力は気がつかぬほど微妙で、身体組織からその影響を除去することはむずかしい。喫煙は酒類に対する欲望を起させ、多くの場合、飲酒の基礎を築きあげる。

喫煙は不便で費用がかかり、不潔でからだを汚し、他人に対してはいやな感じを与える。愛煙家は至るところにいて、人ごみの中を通るとき、わたしたちは毒を含んだその息を吹きかけられずにすむことはめつたにない。酒やたばこの息で充満した汽車や部屋の中にいるのは不快であり、不衛生である。こうした毒物を自分は常用していたとしても他人まで呼吸しなければならぬ空気を汚す権利がどこにあるだろう。

青少年の間において、喫煙は測り知れぬ害を及ぼしている。代々の不健康な習慣は今日の青少年に影響を及ぼしている。知能の欠陥、肉体の虚弱、狂った神経、不自然な欲望が両親から子供への遺産として受け継がれる。同じ習慣がさらに子孫に継続されて、その悪結果は増大し、永續するに至る。社会の一大恐慌となっている肉体、知能、道徳の退廃は少なからずここに起因している。

男の子は非常に早くから喫煙を始める。肉体や精神がこのたばこの害に対して特に感受性が高い時代に形成さ

れた習慣は知らない間に体力をそこない、成長を害し、知能を麻痺させ、道徳的墮落に陥らせる。

だが、両親や教師や牧師が青少年に自ら手本を示しながら、どうしてその悪影響について彼らに教えることができるか。赤ん坊の域を脱していないような小さい男の子がたばこを吸っているのを見つけることがあるが、だれかがそれを注意すると、「わたしのおとうさんはたばこをのんでいるよ」と言って、日曜学校の校長や牧師をさし、「ああいう人ものんでいるのだから、わたしがそのまねをするのがどうして悪い」と言う。禁酒運動に参加しているうちに、たばこの中毒になっている者が大ぜいいる。不節制な風習の発展を防止するのにこうした人がどれだけ力を持っているであろうか。

神のみ言葉を信じ、これに従っていると称する人々に訴える。クリスチャンとして自分の知能を麻痺させ、永遠の事物を正しく推し量る力を失わせる習慣にふけることができますか。神に当然ささげるべき奉仕をせず、同僚に対してなすべき奉仕も、示すべき力ある模範も示さないで毎日満足できますか。

自分の所持している金銭についてあなたは神の家司としての自分の責任を考えたことがありますか。神の金銭をどれほどたばこのために使っているでしょうか。一生の間たばこのために費した金銭を計算してごらん下さい。肉体を汚す欲のために消費される額と貧しい人を助けたり、福音を広めるために出した費用とを比較してどちらが多いでしょうか。

人間はだれにもたばこの必要はない。浪費よりもさらに悪いことに金銭が費されているが、多くの人は費用がないために減びていく。あなたは主の財産をまちがったことに用い、神と人に対し盗みの罪を犯してはいませんか。

「あなたがたは…自分自身のものではない」ことを知っていますか。「あなたがたは代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい」(コリント第一・六ノ一九、二〇)。

人を酔わせる飲料

「酒は人をあざける者とし、濃い酒は人をあばれ者とする、

これに迷わされる者は無知である。」

(箴言二〇ノ二)

「災ある者はだれか、憂いある者はだれか、

争いをする者はだれか、わずらいある者はだれか、

ゆえなく傷をうける者はだれか、

赤い目をしている者はだれか、

酒に夜をふかす者、

行つて、混ぜ合わせた酒を味わう者である。

酒はあかく、杯の中にあわだち、なめらかにくだる、

あなたはこれを見てはならない。

これはついに、へびのようにかみ、まむしのように刺す。」

(箴言二三ノ二九―三二)

酒によって墮落し、奴隷のようになることを、これほどはっきりと人間の手で書いたものはない。酒の奴隷となり、墮落し、自分の悲惨な状態に気がついても、もはや、そのわなからのがれる力がなく、「また酒を求めよう」とする（箴言二三ノ三五）。

飲酒家がこうおつている酒の害を示すには何ら議論を要しない。もうろつ、泥酔、破滅の状態にある人間が至るところにいる。しかし、キリストはこうした魂のために死にたまい、天使はこうした人々のために嘆くのである。彼らはわたしたちが誇る文明の汚点であり、各国の恥辱であり、のろい、危険である。

また飲酒家の家庭にかくされている悲惨、心痛、絶望をだれが描写できよう。多くは上品にそだち、感じやすく、教養があり、洗練された人でありながら、酒を飲めば泥酔者、また悪鬼のように変る者と結婚した妻のことを考えてみなさい。また家庭的慰安も教育も訓練も施されず、誇であり、保護者であるはずの人を恐怖しながら生活し、はずかしい汚名をきせられて社会におし出され、しかも、往々、飲酒癖という遺伝的なものまで受け継ぐ子供のことを考えてみなさい。

酒のために日々起る恐ろしい事故について考えてみなさい。鉄道の公務員が信号に注意するのを怠り、また命令をはきちがえ、そのため進行中の列車が衝突して多くの生命が失われる。また気船は座礁し、船客も船員もともに海のもくずと消える。こうした事件を調べてみると、重要な立場にあった者が酒に酔っていたことが発見される。どの程度に飲んだ人であれば人間の生命を託しても安全であろうか。完全に禁酒している人でなければ信頼はできない。

軽く人を酔わす飲み物

不自然な刺激物に対する食欲の遺伝を持つ者は、決して酒、ビール、サイダーを目のとどく所や手近な場所には置かないことである。それは絶えず誘惑となるからである。発酵していないサイダーは無害だと思い、多くの人が平気で買っているが、発酵しないのはほんのちよつとの間で、まもなく発酵し始める。そのときに生ずる刺激性の味が多くの人々の味覚によく喜ばれ、これを飲みつけている人はそれが発酵したものであると認めることをきらう。

一般に製造されている発酵していないサイダーであっても、その飲用は健康に危険がある。買ってきたサイダーを顕微鏡で見ると、喜んで飲む人はおそらくないだろう。販売用サイダー製造者はその製造に用いる果実の状態に注意せず、虫がわいた、腐ったリンゴから汁をしぼることがよくある。有毒な、腐ったリンゴが、一体どんな用途を他にもつだろうかというようなことも考えようとせず、それからできたサイダーを飲んでうまいと言う。しかし顕微鏡で見ると、このおいしい飲み物はしぼりたてのものでさえ飲用に全然適さないことを示している。

ぶどう酒、ビール、サイダーを飲むと強度のアルコール性飲料による場合と同様に酔う。こうした飲み物をとるとさらに強い飲料に対する嗜好を起し、それが飲酒の習慣となっていく。控え目に飲んでいるうちに人間は一生、酒飲みになる教育を受けているのである。しかもこうした軽度の刺激物の作用は実に油断がならないので、その犠牲者が危険と感じた時には、もう飲酒家の大道へと足を踏み入れている。

ほんとうの飲酒家とは到底考えられない人でも、軽度の飲み物の影響を絶えず受けている。彼らはのぼせて、精

神が不安定で平衡がとれていない。しかも自分は安全だと思ってそれを常用し、ついにはあらゆる防御は破壊され、すべての原則が踏みにじられるに至る。最強の決心もくつがえされ、最高の理想もこの低級な食欲を理性の支配下に置く力を持たない。

聖書はどこにも人を酔わせる酒を飲むことを許していない。カナにおける結婚の席上、キリストが水から酒をつくられたのは純粋なぶどうの液であった。これは聖書に「それを破るな、その中に祝福があるから」とある「ぶどうの中にある汁」である（イザヤ書六五ノ八）。

旧約聖書の中に「酒は人をあざける者とし、濃い酒は人をあばれ者とする。これに迷わされる者は無知である」とイスラエル人を警告されているのはキリストであって、キリストご自身がそのような飲み物を与えられることはなかった（箴言二〇ノ一）。サタンは理性を鈍らせ、霊的感覚を麻痺させようとし、人間を誘惑して放縦へと導くが、キリストはわたしたちに低級な性質を従わせるように教えられるのである。キリストは人間の前に誘惑となるようなものはいっさい置かれなかった。キリストの全生涯は克己の模範であった。四十日間の荒野の断食を通して、わたしたちのために、人間が耐える最大の試練をお受けになったのも食欲の力を破るためであった。バプテスマのヨハネにぶどう酒もアルコール性飲料も飲まぬように命じられたのはキリストであった。またマノアの妻に同じように禁止されたのもそうであった。キリストはご自分の教えに反することはなさらなかった。結婚の席につらなっていた客のためにおつくりになった発酵していないぶどう汁は、衛生的な飲んで気持のよいものであって、これが最初の聖餐式に主と弟子たちが用いたぶどう酒であった。救い主の血を象徴する聖餐卓に用いるべきぶどう酒もこ

ういうものでなければならない。聖餐式は魂をさわやかにし、生命を与えるように計画されているものである。そこには悪に導くものは何一つあつてはならない。

中毒性飲料の使用に関して、聖書や自然、また理性の教えるところを知りながら、クリスチャンがどうしてビール醸造に用いるホップの栽培や販売用の酒やサイダーの製造に携わることができよう。もしわたしたちが自分のように隣人を愛するならば、彼らのわなとなるものをどうして彼らの道におく手伝いができようか。

両親の責任

不節制は往々にして家庭に始まる。不健康な濃厚食品をとるため消化器官が弱められ、さらに刺激の強い食物に対する欲望が育成される。そして、刺激物への要求はさらにひんびんとなり、それに対する抵抗は一段と困難になる。からだの組織は、多かれ少なかれ、有毒素で満たされ、衰弱するにつれ、こうしたものに対する欲望が増大する。まちがった方向に一步踏み出せば、つぎつぎとその方向に進みやすい。今まで食卓にぶどう酒やいろいろな酒を決してのせなかった人まで強度の飲料に対する強い欲望を起させるような誘惑にとうてい抵抗できないようにする食物を食卓に並べることが多い。飲食の誤った習慣は健康を害し、飲酒家になる道を聞くものである。

社会を形成していく青年の間に節制に関する正しい法則を植えつけることができれば、禁酒運動もまもなく不必要になるだろう。乳児の時代から子供に服従するように教える原則をもって禁酒運動を一家だんらのうちに始めなさい。そうすれば、成功が望めるであろう。

母親たちには子供が正しい習慣と純粋な嗜好をもつように助ける仕事がある。食欲を正しく養い、刺激物をきうように教え、周囲の悪に打ち勝つ道徳上の力がつくように子供を育てなさい。他人に左右されず、強い感化に負けることなく、かえって他人を良く感化しなければならないことを教えなさい。

個人的な責任

禁酒禁煙のために非常な努力が払われているが、要点からはずれたものが多い。禁酒禁煙運動を唱えている人は不衛生な食品、香料、茶、コーヒーの使用から起る害に気づかなければならない。わたしたちは禁酒禁煙運動をしている人の成功を祈るものであるが、彼らが戦っている罪悪の原因をもっと深く研究し、その改革に矛盾がないかをよく確かめるように勧めるものである。

知力と道徳上の力が正しく均衡がとれているためには多分に身体組織の正常な状態によるものであることを人々に示さなければならない。肉体を弱め、低下させる催眠剤や不自然な刺激物はすべて知能と精神の力を低くする力をもっている。不節制が社会の道徳的墮落の基であり、誤った食欲をほしいままにすれば人間は誘惑に勝つ力を失う。

この点を教育するところに禁煙運動家の働きがある。疲れきったエネルギーを刺激して、不自然な発作的行動を起させる刺激物の使用によって、健康や品性や生命さえも危険にさらすのだということを教えなさい。

茶、コーヒー、アルコール性飲料に関する唯一の安全策はこれに触れず、味わわず、取り扱わないことである。

茶やコーヒーやこれと同種の飲料の傾向はアルコール性飲料やたばこに似てあり、時によると、その習慣は飲酒家
が酒をやめると同様に困難である。こうした刺激物をやめようと努力する者はしばらく欠乏を感じ、それを飲ま
ないと苦しみを覚える。しかし忍耐によつてその欲望に打ち勝つと物足りなさを感じなくなる。しばらく時間が経
過しなければ、身体は濫用の結果から回復しないが、その機会さえ与えれば再び回復してりっぱにその働きを果
すものである。

第二十七章 酒類の売買とその製造販売禁止

「不義をもってその家を建て、不法をもってその高殿を造る……者はわざわざいである。彼は言う、『わたしは自分のために大きな家を建て、広い高殿を造ろう』と。そしてこれがために窓を造り、香柏の鏡板であおい、それを朱で塗る。あなたは競って香柏を用いることによって、王であると思うのか。……あなたは目も心も不正な利益のためにのみ用い、罪なき者の血を流そうとし、圧制と暴虐を行おうとする」(エレミヤ書二三ノ一三一―一七)。

酒類販売者の働き

この聖句は酒を製造する人とそれを販売する人の働きを描写している。この仕事は略奪である。受けた金銭に相当するものを返していないからであって、彼らの利益となる金銭はことごとく支払人ののろいであつた。

神は人間に祝福を豊かに施しておられる。もしこのたまものが賢明に使用されていたならば、社会には貧困や苦難はほとんどなかったであろう。神の祝福をのろいに変えるのは人間の悪である。わたしたちをささえるために与えられた穀類や果実が悲惨と破滅をもたらす毒に変えられていくのは利欲と食欲のためである。

毎年莫大な量の酒が消費されている。悲惨、貧困、疾病、墮落、肉欲、犯罪、死亡を買い求めるために幾億と知れぬ財産が浪費されていく。利益を得るために酒類販売人は心身を墮落させ、破滅さすものを犠牲者たちに売りつけ、飲酒家の家族に貧困と悲惨をもたらす。

そしてその犠牲者が死んでも酒の販売人の搾取は終わらない。寡婦から金銭を盗み、子供を乞食に落とし入れ、夫や父の酒代の支払のために窮乏した家庭から生活の必需品さえ奪い取るのをちゅうちょしない。子供が苦しうに叫ぶ声や、母が煩悶から流す涙もただ彼を怒らせるだけである。こうして苦しんでいる者が餓死したとしても、彼らには何のかかわりがあろう。こうした人々が墮落し、破滅しても何でもない。彼が導いて滅亡へと落とし入れている人が持っているわずかな財産をも奪って富を増していくのである。

売春の家、悪の巢窟、裁判所、刑務所、養老院、精神病院、病院、これらはほとんどと言っていいくらい酒類販売者の働きの結果であふれている。黙示録にある神秘的なバビロンのように、彼は「奴隷そして人身」を取り扱っている（黙示録一八ノ一三）。酒販売者の後には巨大な魂の破壊者が立っていて、自分の権威の下に人間を引き寄せるために考え出せるあらゆる技巧を用いている。都市であれ、いなかであれ、また汽車、汽船、事務所をとる場所、歓楽のホール、診療所、さらに教会でさえ聖餐式のテーブルの上に悪魔の**わな**が設けられている。酒に対する欲求を起し、それを養うためにはあらゆる手段を尽す。たいていの町には、ほとんどのすみにも明るい光をともし、陽気に人を呼び寄せている居酒屋があつて、労働者や金持の怠け者、または何も知らない青年を招いている。

また特別な飲食店や盛り場では、婦人にも結構な名称のついた人気のある飲み物が提供されている。これも実際

は酔わせるものである。また病人や過労した者のために、ほとんどアルコールからできている「にが酒」というものが広く宣伝されている。

幼児に酒に対する欲求を起させるため、アルコールを菓子に入れたものが、お菓子屋で販売されている。酒類販売人はこうした菓子を与えて、自分たちの場所に子供を誘惑する。

こうして日々、月々、年々この働きが続けられていく。国家の支柱であり、希望であり、誇である父や夫や兄弟が徐々に酒類販売人の化け物屋敷にはいつて行き、墮落して敗残者となって帰されるばかりである。

さらに恐ろしいのはそうした行為が家庭の中心を侵すことである。婦人の間にだんだんと飲酒の習慣が形成されており、多くの家庭では幼児や罪を知らない無力な乳児さえ、酒に酔った母親の怠慢、虐待、卑劣から生ずる危険に毎日さらされている。おすこ、娘がこの恐ろしい悪の感化を受けて成長してゆき、将来は両親よりも一段とひどく墮落するほか希望がなくなってしまう。

キリスト教国と呼ばれている国々から、このろいが偶像教のはやっている地方にまで伝わり、あわれなことには無知な野蛮人に飲酒を教えている。異教徒の間でさえ、知識のある人は酒は恐ろしい毒だと認めて反対し、自分の国土が荒されないように努力はしたが、むだであった。酒もたばこもあへんも文明人によって異教の国民に強制されている。野蛮人の放縱な情欲が酒によって刺激され、かつてないほどの墮落に陥っていて、こうした国に宣教師を送ることをほとんど絶望に近い状態にしてしまう。

神の知識を与えてくれるはずの人と接触することによって、異邦人はかえって部族全体が滅亡に至る罪惡へと導

かれている。こうして地上の未開地において文明国人が憎悪を受けている。

教会の責任

酒造業者は世界の一大勢力であつて、これに金銭、習慣、食欲の混合した力が付随しており、教会でもその威力を感じさせられる。酒の製造販売で直接または間接に財産をつくった人が、教会の評判のいい、正式な会員となっている。このような人には一般の慈善事業に多額の寄付をしている者が多く、彼らの献金が教会の事業を支持し、牧師たちを養っている。金銭の力に対して払われる尊敬を彼らは受けている。こういう会員を受け入れる教会は事実上、酒の製造販売を助けていることになる。牧師は正義のために立つ勇氣がないことがよくある。神が酒の販売について言われていることを教会の人々に告げない。率直に言う聴衆の気持を害し、自分の人気を失墜し、月給を失うからである。

しかし、教会の判定の上には神の法廷があり、最初の殺人者に「あなたの弟の血の聲が土の中からわたしに叫んでいます」と仰せになった神は、酒を売る者のささげ物を祭壇に受け入れたまわらない。慈善の装いをして自分の罪を隠そうとする人に対し、神の怒りは消えない。彼らの金銭は血に染み、のろいがかかっている。

「主は言われる、『あなたがたがささげる多くの犠牲は、わたしになんの益があるか。…』

あなたがたは、わたしにまみえようとして来るが、

だが、わたしの庭を踏み荒すことを求めたか。

あなたがたは、もはや、おなしい供え物を携えてきてはならない。…

あなたがたが手を伸べるとき、わたしは目をおおって、あなたがたを見ない。

たとい多くの祈りをささげても、わたしは聞かない。

あなたがたの手は血まみれである。』

(イザヤ書一ノ二一—二五)

飲酒家ももっとよいことができる。彼は、神をあがめ、社会を祝すために神からタレントを委託されているのであるが、同僚がその魂をわなにかけ、墮落させ、自分たちが裕福になったのである。略奪した相手の哀れな犠牲者は貧困と悲惨の中に生活しているのに、彼らは豪奢な生活を送っている。しかし神は酒飲みを破滅へおいやった者の手にその責任を問われる。全天を支配されている神は飲酒の最初の原因も最後の結果も見失われることはない。すずめを養い、野の草をも装いになる神はご自分の形にかたどっておつくりになり、その血でお買いになった者を見過ごしたり、その叫び声に耳を傾けなかつたりなどなさない。神は犯罪と悲惨を永續させるこうした罪惡をすべて覚えておられる。

社会も教会も、人間の魂を墮落させて財産をつくった人を喜んで受け入れ、恥辱と墮落への道へ一步一步導いていった人間に笑い顔を示すことがあるかもしれないが、神は万事を知っておられ、正しくさばかれるのである。社会では酒類販売人はよい実業家であるといわれるかもしれない。しかし、神は「わざわざいである」と言われる。酒の販売人にはそれによって社会にもたらされた絶望的状态、悲惨、苦痛についての責任がある。衣食住に困り、何

の希望も喜びもなくなった母親や子供の困窮と悲嘆に対する責任を問われる。また何の備えもなく永遠の未来に送りこんだ魂について申しわけをしなければならない。酒の販売を支持している人もその罪を分担する。彼らに向かつて神は「あなたがたの手は血まみれである」と言われている（イザヤ書一ノ一五）。

酒類販売認可に関する法律

酒類販売認可法は飲酒の弊害を制限するものであると多くの人が唱えているが、その売買を許可することはそれ自体法律の保護下に置くことであり、これはまた政府がその存在を是認することになり、制限すると称している弊害を助長することにもなる。この認可法の保護下にあって、酒造所、酒蒸溜場、ぶどう酒製造所が全国に建てられ、酒の販売人はわたしたちの家のすぐ近くで商売を始める。

泥酔者や常習飲酒家とわかつている人に酒を販売することは禁止されていることが多いが、青年を酒飲みにすることは相変わらず増大している。青年に飲酒欲を起させることが酒販売上、最も重要なことであって、これにより青年は一步一步導かれ、飲酒の習慣ができ、犠牲をどれほど払ってもその欲望を満たそうとするまでになる。前途有為な青年が誘惑され、この恐ろしい習慣から、破滅にいたるのを許すよりも、たいていはもう破滅するにきまつている常習飲酒家に酒を許可した方が害が少ない。

酒類販売認可法は禁酒しようと努力している人々をたえず誘惑する。飲酒による犠牲者がその欲望に打ち勝てるようにする病院が建てられている。これはりっぱな働きであるが酒の販売が法律で許されているかぎり、飲酒家は

こういう病院からほとんど益を受けない。そうした人はいつまでもその病院にいるわけにいかず、再び社会に出なければならぬ。酒に対する欲望が押えられていても全くなかったわけではないから、至るところで誘惑が彼らを攻めたてれば再びたやすく負けてしまうことがきわめて多い。

悪習のある動物の持ち主がその動物の性質を知らながら放任しておけば、国家の法律によって、その動物が及ぼす害の責任を問われる。イスラエル民族に与えられた律法の中にも主は悪い性質を持っているとわかっている動物が人間を殺したときは、その動物の所有者は自分の不注意、または悪意の代償として自分の生命をもってつぐなうように命じられている。酒の販売を許している政府は同じ原則をもってその販売の結果に対する責任を負うべきである。そして悪獣を放任していることが死に価する罪ならば酒の販売の働きを認可する罪はさらに大きい。

認可法は大蔵省の財源となるという主張のもとに認可されたものであるが、酒販売の結果生ずる犯罪者や精神病患者や貧民のために出す莫大な費用に比べれば、これらの税金が何であろう。酒の影響を受けている人間が犯罪を犯すと法廷に連行される。したがって酒販売を法律で許可した人たちが自然その行為の結果を取り扱わねばならない。彼らが、正気な人間を気ちがいにする酒を売る権威を与えたのである。彼らはそうしたきちがいじみた人間を刑務所や絞首台に送る必要がありながら、一方そうした人間の妻や子供は窮乏の中にとり残されて、彼らの住んでいる社会の世話になる場合が多い。

単にこの問題の経済的方面だけを考えてもこういう商売を許可することは、なんと愚かなことであろう。しかし人の理性を奪い、人間のうちにある神のみ姿を変形させ、あるいは消し去り、子孫に酒飲みの父の悪影響を遺伝さ

せ、彼らを貧困と墮落に陥らせるような損失に対して、どれだけの税金がその代償となりえようか。

禁 酒 令

飲酒の習慣をもっている人は絶望的状态にある。頭脳は侵され、意志の力は鈍り、自分の力では欲望に打ち勝つことができない。自制するように理性に訴えることも、理性を納得させることもできない。悪い場所にひきこまれと禁酒の決心をした者でも誘われて、また杯を取るようになり、一口、酒を味わうと、りっぱな決心も、たちまちにして、くつがえされ、意志の力など、あとかたもなくなる。気ちがい水を一度味わえばその結果はどうなるか全く考えなくなり、悲嘆にくれる妻を忘れ、酒食にふける父はもはや子供が飢え、裸でいてもかまわなくなる。酒の売買を許すことによって、法律は魂の破滅を認め、社会を罪悪で満たす商売をとめるのを拒否する。

この状態はいつまでも続かなければならないのであろうか。誘惑の門が広く開かれたまま人間は勝利を得るためたえず戦わなければならないのだろうか。飲酒ののろいは文明社会に病弊のようにいつまでも存在しなければならぬものか。燃え尽す火のように毎年幾万の幸福な家庭が破壊されていくが、いったい、それはいつまで続くべきものなのか。岸から見えるところで難破している船があったら、人々は黙って見てはいない。彼らは水の底から人間を救うために命を賭して努力する。飲酒の破滅から人々を救うためにはなんと大きな努力が必要であらう。酒類販売者の働きによって危険にさらされるのは、酒飲みとその家族だけではなく、またその商売が社会に及ぼす害のおもなものは納税の苦労でもない。わたしたちはだれでも人類という織物の中に織り込まれている。罪悪がこの人

類の大家族のどこにふりかかっても、その危険は全員に及ぶのである。

利益と安逸を愛するために、酒類販売禁止について全然手をくださない人が多く、取り返しがつかなくなったころ、酒の販売が自分に及ぼしたところをみつけ、自分の子供が酒に酔い、墮落してしまったのを見るのである。不法ははびこる。財産は危険になり、生命も安全でなくなる。海上、陸上の事故は増加し、不潔で悲惨な住居に繁殖する病気が、りっぱな、ぜいたくな家に侵入し、放蕩と犯罪の子供がそだてた罪惡に、上品な教養のある家庭の子女が感染して行く。

酒の販売によって自分の仕事が危険にさらされない人はいない。人はみな自分のためだけでも酒をなくすように決心すべきである。

議事堂と裁判所は他の世間一般の事業に関係したどんな所よりも酒の害毒が存在してはならない。知事、議員、代議士、判事、国家の法律を制定し、執行する人、人間の生命や名誉財産をその手中に握っている人は厳格な禁酒家であるべきである。そうでなければ正と不正を判別するために明せきな頭脳の所有者となりえない。また原則に堅くたち、正義を行い、あわれみを示す知恵はそうしなれば得られない。しかし、記録はどうであろう。こういう人の中で、なんと多くの人が飲酒によって頭脳を鈍らせ、正誤の觀念を混乱させたことであろう。なんと多くの圧制的な法律が作られ、酒飲みの政治家、証人、陪審員、弁護士、さらには裁判官によってどんなに多くの人が無実の罪で死刑にされたことであろう。世の中には「ぶどう酒を飲むことの英雄であり」「濃き酒をまぜ合わせることの勇士」が実に多く、彼らは「悪を呼んで善といい、善を呼んで悪といい」「まいないによって悪しき者を義と

し、義人からその義を奪う」者があるが、このような人々について神はこう言われている。

「わざわざいなるかな…

火の舌が刈り株を食い尽すように、

枯れ草が炎の中に消えうせるように、

彼らの根は朽ちたものとなり、

彼らの花はちりのように飛び去る。

彼らは万軍の主の律法を捨て、

イスラエルの聖者の言葉を侮ったからである。」

(イザヤ書五ノ二二―二四)

神の栄え、国家の安定、社会、家庭、および個人の幸福のためにはできるかぎりの努力をして人間を飲酒の害から覚せいさせなければならない。現在わからないがやがて恐ろしい悪の結果を見ることがであろう。この破壊的な働きを押えるために、だれが断固たる努力を払うであろうか。戦いはまだほとんど開始されていない。人間を気ちがいにしてゐる酒の販売を停止させるために禁酒団体を組織しなさい。酒の販売による危険を明らかにし、禁酒令を主張する世論が起るようにしおけ、酒に狂った人にはその束縛からのがれる機会を与え、この不名誉な商売をやめさせるように政治家に向かって国民の声をあげるようにすべきである。

「死地にひかれゆく者を助け出せ、

滅びによろめきゆく者を救え。

あなたが、われわれはこれを知らなかったといっても、

心をはかる者はそれを悟らないであろうか。

あなたの魂を守る者はそれを知らないであろうか。」

(箴言二四ノ一一、一二)

「彼らがあなたの親しみ慣れた人たちを、

あなたの上に立ててかしらとするとき、(英訳・彼なんじを罰する時)

あなたは何を言おうとするのか。」

(エレミヤ書一三ノ二一)

第
六
部

家

庭

第二十八章 家庭の奉仕

人間の回復と向上は家庭から始まり、両親の働きはあらゆる仕事の基礎である。社会は家庭から成り、各家長が作りあげるものである。「生命の泉」は心の中にわき出るのであって、また社会、教会、国家の中心は家庭である（箴言四ノ二三）。社会の幸福と教会の成功、国家の繁栄は家庭の感化に左右される。家庭生活の重要性やその機会がイエスの生涯のうちに実証されている。わたしたちの模範となり、教師となるために天からおいでになったイエスは、ナザレにおいて家庭の一員として三十年の歳月を送られた。その年月について聖書の記録は非常に簡単である。偉大な奇跡が人間の注意をひいたわけでもなく、熱心な群衆が跡をしたらたり、彼の言葉を聞きいったのでもなかったが、この間、キリストは神の使命を果されていたのである。キリストはわたしたちのように家庭生活にあずかり、家庭的訓練に服従され、義務を果し、その重荷を負われた。貧しい家庭の中に育ち、わたしたち一般の者が受ける経験をされながら、キリストは「知恵が加わり、背だけも伸び、そして神と人から愛された」のである（ルカ二ノ五二）。

こうした人目につかない年月の間イエスの生命は他人への同情と助けとなって流れ出たのである。彼の無我の精

神、忍耐、勇氣、忠誠、誘惑に対する抵抗、不變の平安、それに静かな喜びはたえず人間を感動させた。キリストは清い、美しい雰囲気を家庭にもたらし、その生活は社会の各方面に働くパン種のようなものであった。彼が奇跡を行ったとはだれも言わなかったが、しかしその徳、すなわち人をいやし、生命を与える愛の力がイエスから出て、誘惑された者、病人、失望している人に与えられた。キリストは幼い子供の時からおとなしいやり方で他人に奉仕された。こうしたことがあったため、伝道の公生涯においては、大勢の人が喜んでその話をきくに至った。

救い主の青年時代は、青年たちにとって模範以上のものである。またどの両親にとっても教訓であり、当然、奨励されてよいものである。人類向上のために尽そうと思っている人にとって、家庭や隣人の義務は第一に努力すべき場所である。家庭を建設する人やこれを保護する人に委託された働き場ほど重要なものはない。人間に委託された働きの中で父母の働きほど影響が大きいものはない。

今日の青年や子供によって社会の将来は決定し、また、これらの青年や子供がどういう人になるかは家庭によってきまる。正しい家庭教育が欠けていることは、人類のわざわざいである疾病、悲惨、犯罪の大きな原因になっている。家庭生活が純潔で真実であり、その中に育つ子供が人生の責任を負い、危険に應ずる準備ができていれば、この社会はどんなに大きく変化することであろう。

悪習慣の犠牲となった人を改革するための事業や機関に非常な努力が払われ、時間、金銭、労力がほとんど無制限に用いられている。しかもこうした努力さえ、その大きな要求を満たすのに不十分であって、その結果はいかに

も小さく、永久に改心した者がなんと少ないことであろう。

よい生活を望んでいる者は数多くいるが、習慣の力から脱する勇氣と決意に欠けている。そのために必要な努力、戦い、犠牲からしりごみし、ついに生涯を破滅と墮落にみちびく。こうしてもっとも明せきな頭腦の持ち主、高遠な希望とりっぱな能力の持ち主、すなわち先天的にみても教育上からみても高い責任ある地位をみだすに適した人間でさえ墮落し、この世の生命を失い、きたるべき国における生命をも失うのである。

改革の実行者がその面目を取り返すことは、なんとという苦しい戦いであろう。一生涯いためつけられていた身体、動揺する意志、そこなわれた知能、弱まった靈的な力をもって自分がまいた悪い種を刈りとらなければならぬ人が多い。もし最初のうちにその悪が処理されていたら、どれだけ多くのことが完成しえたことであろう。

この働きは大部分、両親に責任がある。子供の習慣と品性を形成する方法を両親に教える努力がもっと払われていたなら、社会を癌のようにむしばんでいる飲酒、その他の罪惡の増大を防止するには百倍の効果をあげることができるであろう。悪のためには恐るべき力となる習慣も両親の努力によつて善のための力に変えることができる。

両親は子供のため物事をその根源にさかのぼつて処理すべきであり、事態を正しい方向に進行させるのは両親の肩にかかっている。

両親は子供のために健康で幸福な生活をきずくことができる。子供を誘惑に抵抗する道德の力と人生問題と戦つて勝つ勇氣と力をもたせて家庭から送り出すことができる。生涯が神の名誉となり、社会の祝福となる決心を心に起させ、その力を養育することもできる。また子供が輝かしい天に向かうために、天氣のよい日も悪い日も、その

足にまっすべな道を備えてやることもできる。

実物教訓

家庭の伝道はその家族だけにとどまらない。クリスチャンの家庭は生活の真の原則がすぐれていることを実証する実物教訓でなければならない。そういう実証は社会を益する力となる。真の家庭が人の心や生涯に及ぼす感化はどんな説教よりも有力であって、青年がこういう家庭から出ていくとき、その教訓を他に伝え、一段と高尚な生活原則が外の家庭に紹介され、進歩向上に導く感化が社会に及ぼされるのである。

客の接待

その他多くの人々のために、わたしたちの家庭を祝福とすることができ。わたしたちの社交、接待は社会の習慣に左右されることなく、かえってキリストの精神とその教えに従ってすべきである。イスラエル人はいつも祭日に貧しい人、旅人、レビ人、すなわち聖所において祭司の助けであり、また宗教教師、伝道師であつた者を家に迎え入れた。これらの人は客とみなされ、社交的および宗教的なすべての祝いに、いつもその接待を受け、病気のとき、困ったときには優しくいたわられた。わたしたちが自己の家庭に歓迎すべき人もこういう人でなければならぬ。こうした歓迎がどれほど伝道にたずさわっている看護婦や教師、あるいは苦勞をなめ、働き疲れた母親、または家もなく、貧困と多くの失望にあつて戦っている弱い年寄たちを喜ばせ、励ますことであらう。

「午餐または晚餐を設ける場合には、友人、兄弟、親族、金持の隣り人などは呼ばぬがよい。おそらく彼らもあなたを招きかえし、それであなたは返礼を受けることになるから。むしろ宴会を催す場合には、貧乏人、不具者、足なえ、盲人などを招くがよい。そうすれば、彼らは返礼ができないから、あなたはさいわいになるであろう。正しい人々の復活の際には、あなたは報いられるであろう」と、キリストは言われている。

こういう客を接待するには少しも苦勞がいらす、念のいった、高価なごちそうを備える必要がない。見えをはる必要もなく、親切なあたたかい観迎をし、時に炉辺にすわり、また家族の食卓に招いて祈りの祝福をとにもするにとが、こうした人々にとっては天国のように感じられるのである。

わたしたちの同情は自分や家庭のわくからあふれ出なければならぬ。自分の家庭を開いて他人の祝福とする人には尊い機会がある。社交によって及ぼす力は驚くばかり力強いものであつて、周囲の人を助ける手段としようとするとき、それを用いることができる。

わたしたちの家は誘惑にあつた青年の避難所でなければならぬ。道の分かれ目に立っている人が多い。一つ一つの感化、印象が現在および今後の運命をどういうふう形成していくかを決定する。悪が彼らを招いており、悪の場所は光に輝いていて魅力的で、はいつてくる者はだれでも歓迎する。わたしたちの周囲には家庭のない青年、また家庭があつても、それが何の助けにもならず、向上させる力となっていない家庭の青年が多く、悪の方へ押し流されてしまうのである。彼らはわたしたちの家庭のすぐ近くで墮落におちいるのである。

こうした青年に同情の手がさしのべられなければならない。簡単に口から出た親切な言葉や、ちょっとした小さな

い心づくしがこうした魂の上に集まっている誘惑の雲を一掃するのである。神から出た同情の真の表現は、キリストのような、かおり高い言葉とキリストの愛の精神から発する清純な優しい接触が必要である人々の心の戸を打ち開く力をもっている。もし青年に対する興味を示したいと思うなら自分の家庭に招き、喜びにあふれた有益な感化で囲みなさい。そうすれば、喜んで天国への道を踏み出す者が大ぜいある。

人生の機会

この世でのわたしたちの時は短く、しかもこの世は一度しか通ることができない。この世にある間、最も高い人生を送るべきである。わたしたちが召されている働きは富や社会的地位や偉大な能力を必要としない。それは親切な自己犠牲の精神と不変の決意を要するものである。ともしびはどんなに小さくても、つねに燃えてさえいれば、他の多くのともしびに火を点ずるものとなる。わたしたちの感化する範囲も狭く、その力も小さく、与えられる機会が少なく、学識がなくても自分の家庭に与えられた機会を忠実に利用するならば驚くほどの働きができる。もしその心と家庭を開いて神の生活法式を受け入れるならば、わたしたちは生命を与える力への水路となるであらう。わたしたちの家庭から人々をいやす川が流れ出て、荒れはてた不毛の地に生命と美と収穫をもたらすのである。

第二十九章 家庭を築く者

アダムの助け手としてエバを与えられたお方が結婚の祝いの席上で最初の奇跡を行われた。友人や親族が喜び合っていた祝いの場所で、キリストは公の伝道を開始されたのである。こうしてキリストは婚姻を是認し、御自ら制定された制度として認められた。キリストは男女が清い結婚によって結ばれ、天の家族の一員として認められるような、りっぱな家族を育てあげるようにお定めになった。

また、キリストとキリストがあがなってくださった人間との結合の象徴として結婚を尊ばれた。すなわちキリストご自身が新郎で、花嫁は教会であり、キリストが選ばれたものとして「わが愛する者よ、あなたはことごとく美しく、少しの傷もない」と仰せになっている（雅歌四ノ七）。

「キリストが教会を愛して、そのためにご自身をささげられた……のは……教会をきよめて聖なるものとするため……清くて傷のない」ものとなさるためであった（エペソ五ノ二五―二七）。「それと同じく、夫も自分の妻を……愛さねばならない」（二八節）。

家族のきずなは、地上における何ものよりも親密で最も優しく、神聖なものである。それは人類の祝福となるた

めに計画された。賢明に事を運び、神をおそれ、責任を十分に考慮して結婚の誓いがなされるならばそれは祝福である。

結婚をしようと考えている人は、自分たちがきずこうとしている家庭の性質と感化がどんなものになるかをよく考慮すべきである。親になると神聖な責任が負わされるのであって、現在の世界における子供の幸福ときたるべき国における幸福とは大いにその双肩にかかっている。幼い子供が受ける肉体上、精神上の性質は大部分、両親によって決定される。家庭の性質が社会の状態を左右し、各家庭の感化力が社会を向上させ、あるいは墮落させるのである。生涯の配偶者には親のためにも子供のためにも、肉体、知能、および霊的幸福が最もよく保証できるような人を選ぶべきである。すなわち親子ともに他人を祝福し、創造主の名誉となりうる者でなければならない。

結婚によって生ずる責任を負う前に若い青年男女はその義務と責任を果すことができるように実際の生活の体験をしなければならない。早婚を奨励してはならない。結婚のような重要で、影響するところの大きな関係には十分な準備もなく、また知能、体力が十分に發育もしないのに急いではいるべきではない。

結婚をする人は世間的な財産がなくても、健康というもつと大きな祝福を持つべきである。たいていの場合、年齢に大差があつてはならない。この法則をおろそかにすると若い方の健康をひどくそこなうことがあり、また、その子供は肉体と知能に欠けることが多い。また若い者が養育や友情を必要とするとき、老年の親からそれを受けることができないし、愛と指導が最も必要であるときに、父や母が死んでなくなってしまうことがある。

キリストのうちにあるときにはじめて結婚の縁組は安全である。人間の最も親密な愛のきずなは神の愛から受け

るべきであり、キリストが支配なさるところにのみ深い真の無我の愛がありえるのである。愛はわたしたちがイエスから受ける尊いたまものである。純潔な、清い愛情は感情ではなく、一つの節操である。真の愛に基いて行動する者は不合理でも盲目でもない。聖霊によって教えられ神を第一に愛し、隣人をおのれのごとくに愛するのである。

結婚しようと考えている人は一つ一つの感情をよく考え、生涯の運命を共にしようと思う相手に表われてくる品性のあらゆる発達とあらゆる情操を一つ一つよく見守るべきである。そして結婚の縁組に至るまで、しとやか、単純、真実、それに、神を喜ばせ、あがめる熱心な気持をもって一步一步進むべきである。結婚はこの世におけるその人の将来にも、また、きたるべき国における生命にも影響を及ぼす。真実のクリスチャンは神が承認できないような計画を立てることをしない。

神をおそれる、敬けんな両親に恵まれているならばその助言を求めなさい。自己の希望と計画を発表し、両親が生涯のうちに経験し、学んだ教訓を聞きなさい。そうすれば多くの心痛を防止することができよう。しかし、だれよりもまず、キリストを相談相手とし、祈りながらその言葉を研究なさい。

こうした指導のもとに若い婦人は、純潔で男らしい性質をもち、勤勉で大望に燃え、正直で、神を愛し、おそれる人だけを配偶者として受け入れるべきである。また青年は妻の分としての人生の重荷を負うに適した人、その感化が自分を向上させ、精練し、その愛が自分を幸福にするような人を伴侶として求めるべきである。

「賢い妻は主から賜わるものである」(箴言一九ノ一四)。「その夫の心は彼女を信頼して……彼女は生きながら

えている間、その夫のために良いことをして、悪いことをしない」(同三一ノ一、一二)。「彼女は口を開いて知恵を語る、その舌にはいつくしみの教えがある。彼女は家のことをよくかえりみ、怠りのかてを食べることをしない。その子らは立ち上がって彼女を祝し、その夫もまた彼女をほめたたえて言う、『りっぱに事をなし遂げる女は多いけれども、あなたはすべてのにまさっている』と」(同三一ノ二六―二九)。こういう妻をもった人は、「よき物を得る、かつ主から恵みを与えられる」のである(一八ノ二二)。

結 婚 後 の 体 験

いかに注意深く、賢明に結婚が進められても、結婚式が行われた時に完全に一致している夫婦はほとんどない。結婚によるふたりの真の結合はその後においてできるものである。

新婚の夫婦が生活の困窮や思いわずらいにであうと、往々にして結婚について以前から想像していたロマンスが消滅する。夫も妻も結婚前の交際ではわからなかった相互の性質を知るようになる。これが彼らの経験のうちで最大の危機であり、その後の全生涯の幸福と有用さはこの時に正しい態度をとるか否かによってきまるのである。お互に今まで予期しなかった弱点や欠陥が見えてくるが、愛によって結び合った心は以前には気づかなかった長所も発見する。だれでもみな欠陥よりも長所を発見しようと努力なさい。自分の態度や自分の周囲の雰囲気、自分に対する相手の態度を決定する場合が多い。愛を表現することは弱さを表わすことであると思っている人が大ぜいて、相手をよせつけぬような冷淡さを装う。こうした精神は同情の気持がわきでるのをとめてしまう。人に親しむ

気持や寛大な気持を押えているとそれは枯死し、心は孤独で冷たくなる。わたしたちはこの過失に陥らないよう警戒しなければならない。表現しなければ愛は長くつづかない。あなたと結ばれた人の心が親切と同情に欠乏して餓死することがないようにすべきである。

愛をもって互にしのべ

困難や困惑や失望に遭遇しても、その結婚が誤りであつたとか、失望であつたとかいうような気持を夫も妻も抱いてはならない。互に相手に対してできるだけ最善のものとなるように決心なさい。最初のころの心づくしを継続し、人生の戦いを戦ううえにあらゆる面で互に励まし合い、相互の幸福を増進するように研究なさい。相互の愛と忍耐が必要である。そうするならば結婚は愛の終局ではなく、出発点となる。真の友情のあたたかさ、心と心を結ぶ愛は天国における喜びをこの世において味わせるものである。

各家庭はそれぞれ神聖な**わく**の中にあつて、それはこわしてはならぬものである。この**わく**の中には他人はだれもはいる権利がない。夫も妻も自分たちだけのものである信頼を他人に与えてはならない。

お互に愛を強制することなく、かえつて愛を与えるべきである。自分の中にある最高の品性を養育し、互に相手の長所をすみやかに認めるようにしなさい。真価を認められているという意識は驚くほどの刺激となり、満足感を与える。同情と尊敬の念は卓越しようとする努力する気持を強め、愛は一段と高い標準に達しようとする気持を鼓舞しながら、愛自体も大きくなっていく。

夫も妻も自分の個性を相手の中に没入させてはならない。各人は神と個人的関係にある。個人が「何が正しく」「何がまちがい」であるか、「自分の生涯の目的をどつしたら最もよく果しうるか」を神に尋ねるべきである。あなたのためにご自分の生命を捨てられたキリストにまず豊かな愛情をささげるべきで、すべてのことにおいてキリストを最初とし最後とし、最高としなさい。キリストに対する愛が強くなるにつれ、相互の愛が清められ強くなる。キリストがわたしたちに表わされた精神を夫婦は相互に示すべきである。「愛のうちを歩きなさい。キリストもあなたがたを愛してくださつ……たのである。」「教会がキリストに仕えるように、妻もすべてのことにおいて、夫に仕えるべきである。夫たる者よ。キリストが教会を愛してそのためにご自身をささげられたように、妻を愛しなさい」(エペソ五ノ二、二四、二五)。

夫も妻も専横的な態度で相手に接してはならない。しいて自分の希望に服従させようとしてはならない。そうするとき、相互間の愛を保つことはできない。親切、忍耐、辛抱、思慮、礼儀をもちなさい。結婚の誓いに約束したように神の恵みによって相互に幸福になることができる。

無我の奉仕による幸福

しかし夫婦が他の人と交わらず、自分たちだけで互に愛情をかわして満足していたのでは、幸福はありえないことを記憶なさい。あらゆる機会を捕えて、周囲の人の幸福のために尽し、真の喜びは無我の奉仕以外に発見できないことを覚えなさい。

すべてキリストによる新しい生涯に生きる者の言葉、行動は忍耐と無我の精神がその特徴である。キリストのよ
うな生涯を送り、自分と利己主義に勝利し、他人の必要を満たすために奉仕をしようと努力するとき、あなたは勝
利から勝利へと進むのである。こうしてあなたの感化が社会を祝福するのである。

もしキリストを助け手とするならば、男も女も自分のために定められた神の理想に達することができる。愛によ
る信頼によってキリストは自分をささげた人のために人間の知恵でできないことを恵みによって完成するのである。
神の摂理は天から与えられたきずなによって心と心を結ぶことができる。愛とは単に柔らかいおせじの交換ではな
い。天の織機は地上の織機で織ることができないほど一段と緻密に、また堅実に縦糸と横糸を織り合わせ、その結
果、薄い布でなく、もちのよい、試験や試練にも耐える織物となる。心は切れることがない黄金の愛のきずなによ
って心に結びつけられる。

黄金よりりっぱな平安の家、

楽しい団楽はみなそこにある。

母、姉、妹、そして妻がきよめた愛の殿堂は

この世ながら、天国の心地がする。

たとえ、貧乏であっても、み旨による悲しい試練にであっても

そこには売買することのできない幸福がある。

黄金よりりっぱな祝福である。

第三〇章 家庭の選択と準備

福音には人生の諸問題をきれいに解決する驚くべき力がある。その教訓に従うならば多くの困難は解決し、多数のまちがいから救われるのである。また福音は事の真価をはかることを教え、最も大きな価値があるもの、すなわち永続性のあるもののために、最大の努力をするように教えている。この教訓は家庭を選ぶ責任がある人に必要で、その最高の目標からそれてはならない。地上の家庭が天の家庭の象徴となり、その準備となることを記憶すべきである。人生は養成学校であって親も子もともにここを卒業し、神の国にある、さらに高度の学校にはいるのであって、家庭の位置選定にあたってはこの目的に従って選ぶべきである。財産に対する欲望、流行の教えるところ、また社会の風習によって動かされてはならない。最も単純で純潔で健康的で実際に価値があるものを重んじなさい。世界中の各都市が罪惡の温床と化している。どこにおいても罪惡を目にし、耳にし、墮落放蕩への誘惑が至るところに存在する。腐敗と犯罪の傾向はつねに増大し、日々、暴動、略奪、殺人、自殺、その他名もつけられないような犯罪の記録が重ねられている。

都市生活は虚偽で不自然である。金銭を獲得しようという強い欲望や不断の興奮、快樂の追求、みえ、奢侈、ぜ

いたく、こうしたすべてのことが人生の真の目的から大ぜいの人の心をそらせてしまう。そして、数知れぬ罪惡への門を開き、青年男女の上にほとんど抵抗しがたい力を持っている。

都市の子供や青年をおそう最も狡猾で危険な誘惑は快樂を愛することである。祭日が多く、競技や競馬が幾万の人を集め、連続した興奮と快樂は人生のまじめな仕事から人の心を奪ってしまう。もっと良いことのためにたくなえねばならない金銭が娛樂のために消費されていく。

独占企業の活動や労働組合やストライキによって都市の生活状態は刻々、困難になっていつている。恐ろしい災難が迫っており、多数の家庭が都市から離れねばなくなる。

都市の保健上の環境はしばしば健康に危険であり、たえず疾病に接触しやすいということ、汚染した空気、不潔な水や不潔な食物が多いこと、それに密集した、暗い非衛生な家屋等は、数多い都市の害の一部にすぎない。

人口が都市に密集し、狭い土地や長屋に雑居することは神のみ心ではなかった。最初、神は人間の先祖を美しいしき、楽しい音響がする場所に住まわせられたのであつて、今日もわたしたちがそういう環境を楽しむことをお望みになっている。神の最初の計画に調和すればするほど、わたしたちは肉体と知能と靈の健康を獲得しやすい。

高価な家屋、念の入った家具、装飾、奢侈、安逸は、幸福で有益な生活の重要条件をみだすものではない。イエスは今まで人類の間でなされた働きの中で一番大きい働きをするためにこの世界にこられた。イエスは神の大使として、人生の最大の結果を得る生活法をお教えになるためになった。神である父がそのみ子のために選ばれた環境とはどんなものであつたろうか。ガリラヤの丘の上の人里離れたところにある家、正直で尊い労働によつ

てささえられた家庭、単純な生活、困難と苦勞をともなつた日々のたたかい、克己、經濟、忍耐、喜びにあふれた奉仕、母のそばでの聖書研究の時間、緑の谷間の静かな暁やたそがれ、清い自然界の感化、創造と摂理の研究、神との心のまじわり―これらがイエスの若い時代の環境であり、機会であつた。

各時代の最も善良で高尚な人々の多くもこれと同じであつた。アブラハム、ヤコブ、ヨセフ、モーセ、ダビデ、エリシャの歴史を読んでみなさい。またそれ以後の、高い責任のある地位をりっぱに果し、その感化が社会の向上に非常に役だつた人々の生涯を研究してみなさい。

こつした人々の中で何人がいなかの家庭で育つたであろうか。彼らはぜいたくを知らなかつた。また青年期を娯楽に費さず、多くは貧困と苦難と戦わねばならなかつた。幼いころから働くことを覚え、野外の活発な生活は全身の機能に元氣と弾力性を与えた。彼らは持つてゐる物で生きていかなければならないため、困難と戦い、障害物をのり越えることと勇氣と忍耐を学んだ。また独立独歩の教訓と自製の教訓を学んだ。悪友とまじわる機会がきわめて少なく、自然の楽しみと健全な友情とに満足し、その嗜好は単純で、節制の習慣を形成した。主義にもとづいて行動し、純潔、強健で眞実な人間に成長した。そして、終生の働きに召されたとき、心身の力と輕快な精神、計画し実行する能力と、悪に抵抗する不拔の精神を打ち込んだため、世界を益する決定的な力となつたのである。

子供に残すどんな財産よりもすぐれてよいのは健康な身体と健全な頭脳とりっぱな品性である。人生の眞の成功は何によつて手に入れるかを理解している人は遅くならないうちに賢くなる。そつした人は家庭を選ぶとき人生の最上のものを念頭におくのである。

人工的事物のみが見え、目にはいるもの、耳にきくものがしばしば悪念をいだかせ、そうぞうしさと混乱が疲労と不安を与えるような場所に住まないで神のみわざをながめることができる場所に行きなさい。自然界の美と静けさと平安の中に精神の安定を見いだし、緑の野、森、丘に目を休ませ、都市の塵埃や煤煙でくもっていない青空をながめ、気持ちを爽快にする天の空気を呼吸し、気がちる都会の生活から離れ、子供とまじわれる場所、神のみわざを通して子供が神について学ぶことができる場所に行き、真実で有用な生涯を築くために子供を教育しなさい。

単 純 な 家 具

わたしたちの不自然な習慣は多くの祝福と楽しみを奪い、最も有益な生活を送るのに適さぬものとする。念の入った高価な家具は単に金銭の浪費であるばかりでなく、それより千倍も尊いものを失わせる。すなわち家庭に心配と労働とめんどろな重荷を負わせる。

経済が制限され、家庭の仕事がおもに母親にかかっている多くの家庭の状態はどうであろう。住む人の経済の限度をこえた家具で飾られ、便利でもなく、楽しむのにも適さない部屋があり、高価な敷物や複雑な彫刻のある美しく装飾された家具や優美な織物もある。テーブルや暖炉の上のたな、その他あらゆる場所に装飾品がみち、壁には絵が数多くかけてあって、見ていて疲れる。こうしたものを整頓し、ほこりのないようにしておくにはどんなに手がかることであろう。こういう仕事やその他流行にならった不自然な習慣が主婦を無限に働かせるのである。

多くの家庭では主婦や母親は知識を得るために本を読む時間もなく、夫の相手をする暇もなく、育ちゆく子供の

心に触れる時間もない。また尊い救い主を近しい愛する友とするときも場所もない。そしてだいに、単に家庭の仕事に酷使される人間となり、力も時間も興味も、使えばなくなってしまうものに奪われる、自分が家庭の中でまるで他人のようになつた姿に気づくときはもう遅すぎる。愛する者をさらに高い生活へと感化するようにならなくてはならぬ。

家庭を築く者は、もっと賢明な計画の下に生活しようと決心するべきである。楽しい家庭をつくることを第一の目標とし、楽しく働き、健康を増進し、生活をらくにする手段を必ず講じ、キリストがわたしたちに歓迎するようにお命じになつた客をもてなす計画を立てなさい。それについてキリストは「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」と言われている（マタイ二五ノ四〇）。

飾り気がなく単純なもので、また使用に耐え、たやすく清潔にすることができ、高い金を使わずに、代りの品が買えるもので家庭の設備をしなさい。もし愛と満足さえあれば、非常に簡素な家でも趣味を働かせることによって魅力的な感じのいいものにすることができる。

美しい環境

神は美しいものを愛される。天地を美でおおい、ご自分が創造されたもので神の子が楽しむのを、父の喜びをもつて見守つておられる。神は自然の事物の美によつてわたしたちの家を囲むように望んでおられる。

どんなに貧しくても、いなかに住んでいれば、ほとんどだれもが家の周囲にいくらかの芝をもったり、数本の木

や花の咲く灌木や、かおりの高い草花を植えることができる。それがどんな人工的な装飾よりもはるかに家族を幸福にするであろう。それは家庭生活に温和な、高尚な感化をもたらし、自然を愛する愛を強め、家族の者を互に親しませ、神に近づかせる。

第二章 母

子供はたいてい両親のとおりになるものであり、親のからだの状態や気性や食欲、知的、道徳的な傾向は多少にかかわらずその子供に再び現われる。

両親の目標が高潔で知的、霊的な能力が高く、体力の發育がよければ、子供に与える生命もそれだけりっぱなものである。また、親は彼らが持っている最高のものを育成することによって社会を形成し、将来の時代を進歩させる影響を及ぼすのである。

父母はその責任を理解する必要がある。社会には青年のゆくてを誤らせるわながいっぱいある。多くの人々は利己的、肉欲的な快樂の生活に心をひかれ、幸福と見える道に隠されている危険や恐ろしい結果を見抜くことができない。食欲と情欲におぼれて勢力を浪費し、幾百万の人がこの世で破滅し、来世の滅びを招いている。両親はその子供がこうした誘惑に遭遇しなければならぬことを覚えておくべきである。子供が悪に対する戦いにりっぱに勝てるように、生れ出る前からその準備を始めなければならない。

責任は特に母親にあるのであって、母親は生命の血液によって子供を養い、その肉体を築くばかりでなく、その

子供の精神や品性を形成する知的、靈的感化を与える。イスラエルの救済者モーセを生み、「王の命令をも恐れなかった」のは、強い信仰をもったヘブル人の母ヨケベデであつた（ヘブル一ノ二三）。また神から教育された子供であり、高潔なさばき人であり、イスラエルの聖なる学校の創始者であつたサムエルを生んだのは、祈りと自己犠牲の人、神の靈感を受けた婦人ハンナであつた。救い主の先驅者ヨハネの母となつたのは、ナザレのマリヤの親族で彼女と同じ精神をもつた婦人エリサベツであつた。

節制と自制

母親は注意深く自分の生活習慣を守らねばならないことが聖書に教えられている。エホバがイスラエルの救済者としてサムソンをたてようとしたとき、「エホバの使」がその母に現われて彼女の習慣に関し、またその子供の取り扱いに関して特別な指示を与え「あなたは氣をつけて、ぶどう酒または濃い酒を飲んではいけません。また、すべて汚れたものを食べてはいけません」と告げた（士師記一三ノ四、七）。

妊娠中の影響が及ぼす結果について小さい問題のように考えている親が多いが、神はそうみてはあられない。神の使によつてその使命が送られてきており、しかも厳肅な態度で二度までそれが与えられたことは、これが最も注意深く考える価値のある問題であることを示している。

ヘブルの母親に語られた言葉を通して、神は各時代のすべての母親に言われているのである。「あなたは氣をつけて……わたしが彼女に命じたことは皆、守らせなければなりません」と天使は言った（士師記一三ノ四、一四）。

子供の幸福は母親の習慣に左右される。母親の食欲や情欲は原則によって支配されなければならない。子供を授けられる神の目的を果そうとするとき、避けなければならないこと、抵抗しなければならないことがある。もし妊娠中に婦人が放縱、利己主義、短気、苛酷であれば、その性質は子供の性格に反映し、多くの子供がほとんど打ち勝つことのできない悪い性癖を遺伝として受けるに至る。

しかし母親が堅く原則を守り、節制し克己し、親切で優しく、無我の精神を持っているなら、子供にもまた同じ尊い性質を与えることができる。母親が酒を飲んではならないという命令は非常に明らかであった。欲望をみたすために母親が飲む酒の一滴一滴がその子供の肉体、知能、精神の健康を危険にし、創造主に対する直接の罪を作るのである。

多くの助言者は妊婦の欲求はすべてみたすべきであるとして、たとえば有害な食物を求めても、望むままに与えるべきだと言うが、こうした助言は偽りであり有害である。どんな場合でも、母親の肉体の必要を無視してはならない。二つの生命が彼女によってささえられていることを考え、その希望を優しく考慮し、その必要には十分応じなければならないが、しかしこの場合こそ食事においても、またその他どんなことにおいても、体力や知能の力を減ずることは何よりもさきに避けるべきである。神からの直接の命令によって妊婦は自制力を働かせる最も厳粛な責任が負わされている。

過 労

母親の体力は優しくいたわり、その貴重な体力をひどい労働に費すことなく、心労や重荷を軽くしなければならぬ。夫であり父である人は往々、生理的法則を知らないが、家庭の幸福のためにはそれを理解する必要がある。生計をたてるのに夢中になり、あるいは財産を作るのに必死になって、仕事や思いわずらいに心を奪われた夫は妻であり母である者に重荷を負わせ、最も危険なときに体力に無理なことをさせ、虚弱、疾病を招くのである。

夫であり、父である多くの人は忠実な牧者の注意深さから有益な教訓を学ぶことができる。ヤコブは急いで困難な旅をするようにすすめられたとき、次のように答えた。

「子供たちは、かよく、また乳を飲ませている羊や牛をわたしが世話をしています。もし一日でも歩かせ過ぎたら群れはみな死んでしまいます。」「わたしはわたしの前にいる家畜と子供たちの歩みに合わせて、ゆっくり歩いて行き」(創世記三三ノ一三、一四)。

夫であり、父である人は苦勞の多い生涯の道程において、共にゆく同伴者が耐えられるように「ゆっくり歩いて行」くべきである。財産や権力を得ようとして社会の人々が殺到している中で、自分と共に歩むように召された者を慰め、ささえるために歩みをとどめることを学びなさい。

快 活

母は快活な、満足した、愉快的な性質を養うべきである。そのために払う努力はすべて子供の肉体の健康と道徳的

な性質の上に豊かに報いられる。快活な精神はその家族の幸福を増進し、自分自身の健康をも増大する。

夫は同情と不変の愛情をもってその妻を助けるべきである。もし妻を家庭の太陽のように、はつらつとうれしうにしておきたければ、夫は妻が重荷を負うのを助けなさい。夫の親切と愛にみちた礼儀は彼女にとって尊い励ましとなり、夫が与えた幸福は夫自身の心にも喜びと平安をもたらす。

気むずかしく、利己的で、横柄な夫や父は自分が不幸であるばかりでなく、いっしょに住む家族のすべてをうつにする。そのために妻は元気を失い、病身になり、子供はその好ましくない気性を受けて、そこなわれ、こうして自らの結果を刈りとるに至る。

もし、母親が受けるべき保護を母親が受けず、慰安が奪われ、過労、心配、ゆううつのため体力を使い果すならば、その子供は遺伝として受けるはずの生命力を持たず、頭脳の敏感さもなく、快活な性質を失う。それよりも母親の生活を明るく幸福にし、欠乏やひどい労働やゆううつな思いわずらいから守り、生れてくる子供が一生、自分の元気な力で戦いぬくことができるように、良い身体を遺伝するようにした方がはるかによい。

子供に対して、神の代りにならなければならぬ父や母の名誉と責任は大きなものである。その品性と日常生活および教育法が幼い子供に向かって神の言葉を説明するのであって、その感化こそ子供に神の保証を確信させるか、失わせるかのどちらかである。

子供を教育する親の特権

生活態度に真に神をあらわし、神の約束やいましめが子供の心に感謝と敬神の念を起させる両親、優美、正義、忍耐によって神の愛と正義と忍耐を子供に伝える両親、愛し、信頼し、服従することを子供に教えることによって天の父を愛し、信頼し、服従するように教えている両親は幸福である。こうしたたまものを子供に与える親は、世のどんな宝よりも尊い宝、永遠に残る宝を子供に授けることになる。

どの母親も自分に託された子供のことで、神から与えられた神聖な責任を持っている。「このおすこ、娘をわたしのために教育しなさい。永遠に神の宮で輝くようにその品性を宮殿のようにみがきなさい」と、神は言っておられる。

母親の仕事は重要な働きでないように自分から考えている人が多く、また事実その働きは、ほとんど感謝されていない。母親の数多い苦労や重荷は他人にはわからない。日常、忍耐強い努力、自制、気転、知恵、自己犠牲的な愛をたえず必要とする絶え間のない、小さい仕事を繰り返しており、しかも何一つ偉大なことをしたとは誇れないのである。家庭の中が円滑にゆくようにひたすら努め、たびたび疲れはて、当惑しながら子供には優しく語ろうと努力し、また彼らを飽かずに楽しませ、子供の小さな足を正しい道に導こうと努力するのであるが、いっこう何一つなし遂げなかったように感じる。しかし事実はそうでなく、天使は疲れはてた母親を見守り、日常彼女の負っている重荷に注意している。この世でその名が人々に知られなくても、小羊のいのちの書にしろされているのである。

母の好機

天には神があられ、そのみ座から出る光と栄光は子供が悪の力に抵抗できるようにと教育に努力している忠実な母親の上にくだる。これほど重要な働きはほかにない。母親は画家が画布の上に美しい肖像をえがき、彫刻家が大理石を刻むのと違う。また著述家が力強い言葉でりっぱな思想を表現したり、音楽家が美しい感情をメロディーに表現したりするのとも異なり、神の助けによって人の心の中に神のごとき姿を育てるのが母親の仕事である。

このことを理解している母親は与えられた好機をこの上もない尊いものと考えてであろう。そして自分自身の品性と教育法によって、その子供に最高の理想を示そうと熱心に努力する。子供の教育にあたって力を最高度に、また正しく発揮できるように、熱心、忍耐、勇気をもって自分の才能の向上に努力する。ことごとくに「神はどう言われたか」を真剣に尋ね、勤勉に神の言葉を学び、卑しい仕事や義務を繰り返していく間に、日常の経験が唯一の真の生命であるキリストをほんとうに反映することができるよう、キリストを注視していくのである。

第二章 子供

ヘブルの両親に与えられた天の使の指示には母親の習慣だけでなく、子供の訓練に関すること含まれていた。イスラエル民族を救済すべき子供のサムソンは良い遺伝を受けるだけでは不十分で、その後も注意深い訓練を受けなければならず、乳児期から厳格な節制の習慣を形成するように訓練されるべきであった。

同じ教訓がバプテスマのヨハネに関しても与えられた。彼の生れない前に天からその父に次の言葉が与えられた。「彼はあなたに喜びと楽しみをもたらし、多くの人々もその誕生を喜ぶであろう。彼は主のみまえに大いなる者となり、ぶどう酒や強い酒をいっさい飲まず、母の胎内にいるときからすでに聖霊に満たされており」（ルカ一ノ一四、一五）。

天に記録されているりっぱな人々の中でバプテスマのヨハネよりも大いなる人はなかったと救い主は言われた。彼にゆだねられた働きには体力と忍耐力が必要であったばかりでなく、最もすぐれた頭脳と霊をも必要とした。この働きの準備として正しい体育が非常に重要であったため、天の最高の天使がその子供の両親に指示する言葉を携えてつかわされたほどであった。

へブルの子供について与えられた命令は子供の肉体の健康に影響を及ぼすものはどんなことでもあろそかにしてはならないということを教えている。その中に重要でないものは何一つなく、身体の影響するものはすべて知能と品性に関係してくるのである。

幼少時における子供の教育はどのように重要視してもしすぎるということはない。乳児期や小児期に学んだ教訓や形成した習慣は、その後施されるいかなる教育訓練よりも品性の形成とその生涯を支配するのに関係がある。

このことを両親は考慮する必要がある。子供の養育と訓練の基礎となる原則を理解しなければならぬ。子供を肉体的、知能的、精神的に健康に育てることができなければならない。両親は自然の法則を学ぶべきである。人体の組織を理解し、いろいろな器官の機能とその関係、および器官相互の関連性を理解しなければならぬ、また知能と体力の関係、ならびに両者が健全に活動するために必要な条件を学ぶべきである。こういう準備なしに親としての責任を負うことは罪である。

今日、最も文明化し、恵まれた地にさえも、疾病と衰退とが存在するが、その根底となる原因についてほとんど考えられていない。人類は衰退している。三分の一以上が乳児期に死亡し、成人期に達した人のうち、大多数が何らかの病気にかかり、ほんの少数しか人生の終りを全うしない。

人類に悲惨と破滅をもたらす罪悪はたいてい、防止することができものである。それを左右する力は両親の上に大いにかかっている。幼い子供を奪うのは「神秘的摂理」ではない。神は子供が死ぬことをお望みになつていない。地上でも役だち、また天においても有用な人になるように教育をするようにと神が子供を親に与えられたの

である。もし、父母が子供に良い素質を遺伝しようと最善の努力をし、正しい取り扱い方によって生れつきの悪状態を除去するように努力するならば社会はどんなに向上進歩をみるであろう。

育 児

子供の生活が静かで単純であればあるほど肉体と知能の発育もそれだけ効果的である。母親はつねに静かに落ち着いて冷静であるように努めなければならない。多くの乳児は神経を刺激するものに極度に敏感で、母親の穏やかなゆったりとした態度が神経を静める感化を及ぼし、それが子供にとってはかり知れぬ益となる。

乳児は保温を要するが、新鮮な空気の非常に少ない、暖め過ぎた部屋に置くことは大まちがいである。また睡眠中、乳児の顔をおおう習慣は自由な呼吸運動を妨げるから有害である。

乳児には身体を弱め、毒する傾向のあるものはすべて近づけぬように守るべきで、周囲にあるものはすべて清潔にしておくために細心の注意を払わなければならない。温度の急変やあまり大きな変化から乳児を保護することはたいせつであるが、寝ているときも起きているときも、昼夜とも新鮮な爽快な空気を呼吸するように注意すべきである。

子供の衣類

乳児の衣服を準備するときは流行や他人の賞賛を得ようという希望よりも便利な、気持のよい、健康的なものを

求めるべきである。母親は小さい衣服を美しくするために刺繍や装飾に時を費し、不必要な仕事で疲労し、自分の健康と子供の健康を犠牲にするようなことをしてはいけない。十分に休息をとり、気持ちよい運動を必要とするときに、目と神経をひどく使う縫物に背中を曲げて、夢中になっていてはならない。母親は自分に要求されることに応じうるようにその力を大事にする義務を認識すべきである。

もし、子供の衣服が暖かく、身体を保護し、気持ちよいものであれば、子供をいらだかせたり、不安にするおもな原因の一つが除去され、幼い者はさらに健康になり、母親は育児が自分の体力や時間により負担にならぬことがわかる。

きつい帯や胴着は心臓や肺臓の活動を妨げるから避けるべきである。どの器官でも圧迫したり、自由な運動を束縛する衣服をつけ、身体のごく窮屈にするようなことはどんな場合でもしてはいけない。子供の衣類はすべて最も自由に、最も深く呼吸ができるようにゆったりと作り、肩で重みをささえるようにできていなくてはならない。

ある国では小さい子供の肩や四肢を裸にしておく習慣があるが、あれはどれだけ非難しても非難過ぎることはない。腕や足は血液循環の中心から遠いため、他の部分よりもよけいなおあわなければならぬ。血液を手足の先に送る動脈は太くて、体温と栄養を与える血液を十分に供給することができ、腕や足が裸であったり、または十分におあわれていないと、動脈や静脈が収縮して身体の敏感な部分は冷却し、血液循環が妨げられる。

子供の成長にあたってその身体を完成しうるように自然がもっているあらゆる力が活用される必要がある。もし、腕や足が十分におあわれていないと子供、とくに女の子は暖かい気候のとき以外は外に出ることができない。そこ

で寒気を恐れて家の中に閉じこめられてしまう。しかし子供が適当な衣服をつけていれば夏冬を通じて屋外で自由に運動ができ、それが子供の身体の益になる。

子供が元気で健康であることを望む母親は子供に適当な衣類を着せ、あまり悪くない気候のときには屋外に長くいるようにすすめるべきである。習慣の鎖を破り、健康に適する衣服を身につけさせ、教育していくには努力がいるが、その努力は十分に報いられるものである。

子 供 の 食 事

乳児のための最良の食物は自然が供給するものである。これは理由なく子供から奪うべきものではなく、母親が便宜や社交の楽しみのために、小さい乳児に授乳する優しい役目からのがれようとするのは無情なことである。

自分の子供を他人の婦人によって授乳させる母親はその結果が、どうなるかをよく考慮に入れるべきで、多かれ、少なかれ、その乳母は授乳する子供に自分の気性や気分をうつすものである。

子供に正しい食習慣をつける重要性を過大視すぎるということはほとんどない。幼い者も生きるために食するのであって、食するために生きているのではないことを学ばなければならない。その訓練は母の腕に抱かれている乳児から始めるべきもので、子供は規則的な時間にのみ食事を与え、成長するにつれて回数を減らすべきである。菓子や消化しにくいおとなの食物を与えてはならない。注意深く、規則的な哺乳は健康を増進し、子供を静かな良い性質にするばかりでなく、成長した後にも祝福となるような習慣の基礎を築くものである。

子供が乳児期を脱しようとする時期はその嗜好と食欲をそだてあげるのに非常な注意を払うべきである。よく子供の健康も考えず、食べたいものを食べさせ、好きなときに食するのを許すことがあるが、非衛生的なごちそうのためにしばしば払われる苦労や金銭は子供に人生の最高の目的や最も大きな喜びを与えるものは食欲をほしきままにすることだと思わせるに至る。こういう教育の結果、暴食家となり、次に病気となり、したがって、たいていは有毒な薬を飲ませることになる。

親は子供の食欲を訓練すべきである。不衛生な食物を食べることを許してはならない。しかし食事を正しくするように努めるときにあたって、子供にまずい物を食べるように要求したり、必要以上に食べることを要求しないように注意しなければならない。子供には権利があり、好ききらいがあり、それが合理的であれば尊重すべきである。

食事を規則的にすることを注意深く守るべきである。食間には菓子、堅果類、果実、その他いかなる食物もつてはならない。食事の不規則は消化器の健全な調子を狂わせ、健康と快活な精神には有害である。そして子供が食卓につくとき、衛生的な食物を喜ばず、有害なものを望むようになる。

子供の健康を害し、子供のよい性質をそこなわせてまでも、子供の欲望をみたすのを許す母親は、後日、芽ばえて実を結ぶ災の種をまいているわけである。欲望をほしいままにすることは幼い者の成長とともに大きくなり、知能と肉体の活気が犠牲にされる。こういうことをする母親は自分のまいた種を苦しんで刈り取ることになり、子供が社会に出ても、家庭においてもりっぱな、有用な役を果すのに不適当な知能と品性を持った人間になるのを見るに至る。不衛生な食物の影響を受けて知能や体力ばかりでなく、霊的にも損害を受ける。良心は鈍り、良い印象に

対する感受性が薄くなる。

子供は食欲を制して健康に適する物を食べるように教えなければならないが、彼らに有害なものだけを自制しているのだということを明らかにすべきである。そうすれば子供は、さらによいもののために有害なものを捨てるようになる。神が豊かにお与えになった良い物を食卓に並べ、見るからに感じ良く、また魅力的にととのえ食事の間は明るい楽しい時間とすべきである。神のたまものを楽しむときに、それを与えられた方に対して感謝の賛美をささげよう。

病気のときの子供の看護

多くの場合、子供の病気は取り扱いの誤りから起る。食事の不規則、寒い夜に衣服が不十分であったこと、活発な運動が不足して血液循環が悪くなり、あるいは血液を清浄にするための空気が不足したなどの理由で病気になるとがある。であるから親は病気の原因を見いだすために心を用い、できるだけ早く誤った状態をなおすべきである。

どんな親でも病気の看護、予防、さらに治療についても多くのことを学ぶことができる。特に自分の家族の普通一般の病気の場合にすべきことを母親は知っていなければならない。自分の病気の子供を看護する方法を知るべきで、母親の愛と洞察力があれば、彼女は、他人の手にまかせてはあまりよくないこの働きをするのにふさわしい者となる。

生理の研究

親は子供が生理の勉強に興味をもつように早くから努力し、単純な原理を教えなければならない。また肉体と知能と霊の力をいかにして最高度にたもち、その生涯が互に祝福をもたらし、神の誇となるようにするには与えられた力をどう用いるべきかを教えなければならない。この知識は若い者にとって限りなく尊いものであり、生命と健康に関する教育は学校で学ぶ多くの神学知識よりも重要である。

両親はもっとその子供のために生活し、社会のために費す時間を減ずべきである。健康問題を研究し、その知識を実行にうつしなさい。原因から結果に至る道理を子供に教え、もし子供が健康と幸福を望むならば、自然の法則に従わなければならないことを教え、たとえ希望どおりに早く進歩しなくても失望せず、忍耐と根気をもってその働きを継続なさい。

子供がゆりかごの中にいるときから克己自制を働かせるように教育しなさい。自然の美を楽しむことを教え、有益な仕事によって身体と頭脳のあらゆる力を組織的に働かせるように教えなさい。また健全な肉体と精神と明るい性質と優しい気性を持つように育て、神はわたしたちが単に欲望を満足させるために生きるように計画されたのではなく、わたしたちが終局の益のために生きることをお望みになっているという真理を子供の敏感な頭脳に印象づけなさい。誘惑に負けるのは弱いことであり、悪いことであること、また男らしく、りっぱに抵抗すべきことを教えなさい。こうした教訓は良い地にまかれた種のように実を結んであなた方の心を喜ばせるのである。

どんなことよりもまず、両親は子供たちを快活な、礼儀正しい愛の雰囲気で囲むべきである。愛の宿っている家庭、愛が表情に、言葉に、行動に表現されている家庭は天使も喜んで姿を現わすところである。

両親方よ、愛と喜びと、幸福な満足の光線を自分の心に入れ、その感じのいい、明るい感化が家庭にみなぎるようにすべきである。親切な、忍耐強い精神を表わし、そういう精神を子供にも持たせるように励まし、家庭生活を明るくするあらゆる美徳を養成しなさい。こうして生ずる雰囲気は子供にとって、ちょうど植物に対する空気や日光のように健康と心身の活気を増進するものである。

第三章 家庭の感化

家庭は子供にとって世界中で最も魅力的な場所であり、母親の存在は最大の魅力であるべきである。子供は敏感な愛の性質を持っている。たやすく喜ばせることもでき、不快にさせることもできる。母親は愛のこもった言葉と行為と優しいしつけをもって子供を自分の心に結びつけることができる。

幼い子供は人と交わることを好み、ひとりで楽しむことはまれである。彼らは同情と優しさを慕い、自分が楽しいことは母親も喜ぶものと思う。そこで彼らの小さい喜びや悲しみをいちいち母に訴えるのは自然である。母親にとって些細な問題でも子供には非常に重大である事柄を、冷淡に取り扱って子供の敏感な心を傷つけてはならない。母親の同情と同意は尊いものである。同意しているという目つきや奨励、称賛の言葉は子供の心にとっては、日光のようで、その一日中を楽しくさせることがよくある。

子供の騒がしい音で悩まされないため、またはその小さい数々の要求に妨げられまいとして、子供を追いやりたくないで、母親は子供の遊びを計画したり、活動的に手や頭を使う軽い仕事を考えるべきである。

子供と同じ気持ちになってその遊びや仕事を導くと、そこで母親は子供の信頼を得、悪い習慣を効果的になおすこ

とができ、利己的精神やかんしゃくの表現をとめることができる。適当な時期に注意や矯正の言葉をかけることは非常に価値があるもので、忍耐強く、注意深い愛によって母親は子供の心を正しい方向に向けることができ、美しい感じのいい性質を養うことができる。

母親は子供を依頼心の強い、自己中心の者に育てないように警戒すべきで、子供に自分がすべての中心で、他のことはみな自分を中心にして運行されねばならないと思わせたりしてはならない。ある親は子供を遊ばせるために多くの時間を費し、手段を尽すが、子供が自分の才能や技術を働かして、自分で遊ぶように訓練しなければならぬ。そうすると、非常に単純な楽しみで満足するようになる。また子供が小さい失望や試練に耐えるように教えるべきで、小さい痛みや外傷を一つ一つ取りあげず、かえって子供の気持をそらし、小さい苦痛や不快なことを軽く忘れてしまうように教えなさい。他人に対して子供が思いやり深い者となれるように、母親は研究をして、各種の方法をすすめるべきである。

しかし、子供をおろそかにしてはならない。ときどき、母親は多くの思いわずらいに悩まされ、小さい子供を忍耐強く教え、愛と同情をよせる暇がないように思うが、もし同情と友情を求める子供の気持を満足させるものが、両親または家庭に見いだされなければ、子供は精神上、品性上危険な場所にそれを求めるものであることを記憶しておくべきである。

時間もなく、考えも足りないため、多くの母親が子供に無邪気な楽しみを与えるのを拒みながら、忙しく指を動かし、疲れた目でただ子供のからだを飾るための仕事に営々とたずさわり、いくら考えても、子供の心に虚栄心と

浪費の精神を助長する助けにしなければならないこのために働いている。子供は成人するにつれて、こうしたことから学んだことが実を結び、傲慢な、道徳的に価値のない者となってしまうのである。母親は子供の欠陥を嘆くが、自分が刈り取ったものは自分がまいたところの実であることがわからない。

ある母親は子供の取り扱い方がいつもきまっておらず、ときには子供の害になることでも思うままにさせているかと思うと、ときには子供の心を非常に喜ばせる無邪気な楽しみでも許さない。これではキリストに似たやり方ではない。キリストは子供を愛し、その感情を理解し、子供が楽しい時も、悩んでいる時も子供に同情を示された。

父の責任

夫であり、父である者は家庭の長である。妻は愛と同情を彼に求め、子供の教育の助けを求めるが、それは正當なことである。子供は母親のものであると同時に父のものであり、子供の幸福に関して父も同じく関心をもっている。子供は父に支持と指導を仰ぐ。父は人生に関する正しい観念と家庭を包むべき感化と交わりに関して正しい考えを持たなければならないが、しかし何よりもまず、神の愛と神を畏れる気持とみ言葉の教えによって支配されないなければならない。それは子供の足を正しい道に導きうるためである。

父は家族の中の立法家である。したがってアブラハムのように神の律法を家庭の法則となすべきである。神はアブラハムについて「わたしは、彼が後の子らと家族とに命じて主の道を守らせ、正義と公道とを行わせるために彼を知ったのである」と申された（創世記一八ノ一九）。そこには悪を制するのに怠慢で、罪を犯し、柔弱な、無分別

な、きままな、えこひいきをすることも、また誤った愛情に負けて、義務の観念をしりぞけるようなこともないであろう。アブラハムは正しい教えを示すばかりでなく、正義の法律の権威を保とうとした。神は、わたしたちが指導するのに基準をお与えになった。子供を放任して神のみ言葉の中にしるされている安全な道から迷い出るにまかせ、どちらを向いても存在する危険に立ち至る道を進ませてはならない。親切に、しかも厳格に忍耐と祈りをもって努力し、子供の誤った欲求を抑え、その性癖を制すべきである。

父親は家族にしっかりとした徳行、根気、高潔、正直、忍耐、勇氣、勤勉、實際的な有用さを身につけるようにしなければならぬ。そしてその子供に要求することは自ら実行し、こうした美德を自分のりっぱな態度によって示すべきである。

しかし、父親方よ、あなたの子供を失望させてはならない。権威に愛情を合わせ、厳格な制限には親切と同情を共に用いなさい。あいた時間を子供のためにさき、子供と親しみ、仕事や運動を共にして信頼を得なさい。子供との間に友情を育て、特にむすこと友だちにならなさい。こうすればあなたは子供をよくする強い力となるのである。

父親は家庭を幸福にするために自分の分を果さねばならない。どんなに苦勞があり、仕事の困難があっても、そのために家庭を暗くしてはならない。微笑と感じのいい言葉を語りながら家にはいるべきである。

ある意味において父親は家族の祭司であって、家庭の祭壇に朝夕、燔祭をささげるものである。妻や子供は父とともに祈り、彼に合わせて賛美の歌を歌うべきである。朝はその日の勤めに家を出る前、父は子供を自分のまわりに集め、神のみ前にこうべをたれ、天の父の保護に子供をゆだねるべきである。一日の仕事が終わったならば、その

日の神の守りを覚え、家族は感謝の祈りとともにし、賛美の声をあげなさい。

父母よ、仕事がどんなに忙しくても神の祭壇のまわりに家族を集めることをやめてはならない。家庭の中に聖天使の保護を求めなさい。愛する者が誘惑にさらされていることを記憶しなさい。日々、いろいろなわずらわしいことで、老若を問わず悩まされる。忍耐と愛の満ちた明るい生活を願うものは祈らなければならない。神から絶えず助けを得なければ、自分に勝つことはできない。

家庭は喜びと礼儀と愛が宿るところであるべきである。こうした美德があるときに幸福と平安が来る。悩みが生ずることがあるが、それは人類が当然受けるものである。たとえ、どんなに暗い日があっても忍耐と感謝と愛によって心に光を持っているべきで、そういう家庭には神の使が宿るのである。

夫も妻も相互の幸福を計り、生活を気持よく、明るくするような細かい礼儀や、ちょっとした親切な行為を決して怠ってはならない。完全な信頼が夫婦の間にあるべきである。自分たちの責任とともに考え、ともに子供の最高の利益を計るべきで、決して子供の前でお互の計画を非難し、お互の判断を疑ってはならない。妻は子供に対する夫の働きを困難にしないように注意し、夫は妻の手をささえ、賢明な助言を与え、愛のこもった励ましを与えなさい。

冷淡やうち解けない気分のために両親と子供の間にへだたりを生じさせてはならない。両親は子供と親しみ、その趣味や性質を理解しようと努力し、子供の気持になって子供の心の中にある考えを引き出すべきである。

両親方よ、あなたが子供を愛し、子供を幸福にするために全力を尽していることを子供に知らせなさい。そうす

るならば必要な束縛も子供の柔軟な頭には非常に大きい効果をもたらす。「彼らのみ使たちは天にあって、天にいますわたしの父のみ顔をいつも仰いでいる」ことを覚えて、優しさとおわれみをもって子供を取り扱いなさい（マタイ一八ノ一〇）。天使が神より与えられた働きを自分の子供にしてほしいと思うならば、自分のなすべきことを果し、天使と協力しなさい。

真の家庭における賢明で愛情のある指導のもとに育った子供は快樂や友人を求めてさまよい出る気持を持たない。罪惡も子供の心をひかず、家庭にみなぎる精神がその品性を形成し、子供が家庭を出て、社会にたつとき、誘惑に對して強い防禦となる習慣をつくり、道義を築くのである。

子供も両親と同じく家庭においては重要な義務がある。子供は家庭という会社の社員であることを学ばなければならない。彼らは養育され、衣類を与えられ、愛され、世話されているのであるから、自分の家庭の重荷を分担して、おのが分を尽し、自分が一員となっているその家庭にできるだけ幸福をもたらし、こうした数々の恩恵にこたえるべきである。

子供はときどき、束縛されると怒りたくなるものであるが、大きくなった後、無経験な時代に自分を保護し、指導した忠実な養育と厳格な注意について両親をほめたたえるであらう。

第二章 真の教育は伝道者の養成

真の教育とは伝道者を養成することであって、神のむすこ、娘はすべて伝道者となるように召された者である。わたしたちは神と人との奉仕するために召されている。そしてこの働きに適した者となることが、わたしたちの教育の真の目的でなければならない。

奉仕のための養成

この目的を、クリスチャンの両親、教師はいつも覚えていなければならない。自分の子供がどういう方面で奉仕するかはわからないし、生涯を家庭内ですごすか、普通一般の職業に携わるか、あるいは異教の国へ福音の教師としておもむくかわからないが、皆同じく神の伝道者として、この世に対する恵みの使者となるように召されているのである。

はつらつとした才能、元氣、勇氣、鋭敏な感受性を持った子供や青年を神はお愛しになり、神の使者にふさわしい者となるように導こうとお望みになっている。彼らはキリストの傍に立って、無我の奉仕をするのに助けとなる

教育を受けなければならない。

最初の弟子たちと同様にキリストは最終時代に至るまでの間、神の子らのすべてに対し「あなたがわたしを世につかわされたように、わたしも彼らを世につかわしました」と言われている（ヨハネ一七ノ一八）。それは彼らが神の代理者となり、神の精神を表わし、その品性を示し、神の働きをするためである。

わたしたちの子供はちょうど別れ道に立っているようなものである。利己追求と放縦な生活に対する世の誘惑がいたる所に存在し、神にあらがわれた者のために備えられた道からおびき出そうとして呼びかけている。その生涯が祝福となるか、のろいとなるかは選択次第である。力が余っているため、使ったことがない才能をためしてみたいと切望し、そのあり余る元気のはけ口をどこに見つけ出さなければならない。彼らは善の方向か、悪の方向かのどちらかへ活動的である。

神のみ言葉は人の活動を抑圧せず、正しく導く。神は青年にあまり大望をいだくとは言われていない。人間を眞に社会的に成功させ、誉を得させる品性の要素、すなわち、何かもつと益になることをしたいと望む心や、抑えがたい意志や、不屈の熱心、勤勉な努力、しんぼう強い忍耐の精神をくじいてはならない。単に利己的でこの世の利益に比べると天地雲泥の相違をもつ、きわめて高度の目的遂行のため、青年は神の恵みに導かれなければならない。

わたしたちは親として、またクリスチャンとして子供に正しい指導を与える義務がある。注意深く、賢明に、そして優しく、キリストのような奉仕の道へ子供を導かなければならない。わたしたちは自分の子供を神のみ働きの

ために育てるといふ神聖な契約を神と結んでいる。子供が奉仕の生涯を選ぶにいたるような感化の力で彼らをかこみ、必要な教育を与えることはわたしたちの第一の義務である。

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛してくださった」(ヨハネ三ノ一六)。それはわたしたちが滅びないで、永遠の生命を得るためであった。「キリストもあなたがたを愛して下さって、わたしたちのためにご自身を…ささげられたのである。」わたしたちは愛するならば、与えるのである。「仕えられるためではなく、仕える」ことをするのが、わたしたちの学ぶべき、また教えるべき大きな教訓である(マタイ二〇ノ二八)。

青年たちに、彼らは自分自身のものでないという考えをきざみつけるべきである。青年はキリストに属する者である。その血潮で買われ、キリストが愛されて自分のものであると主張されているものである。キリストによって守られているため青年は生きているのである。その時間も体力も能力もキリストのものであり、キリストのために用いるように発達させ、訓練しなければならない。

神の姿に似せて造られた人類は神の創造のみわざの中で天使に次ぐ、最もりっぱなものである。人間がなれるように神が定められた域に完全に達するように、また神がお与えになった力をもって最善を尽すように望まれている。生命は神秘であり、神聖である。それはすべての生命の根源である神ご自身のあらわれである。生命の機会は尊いものであり、熱心にこれを用いなければならない。一度これを失えば、永久に返らない。

神は厳粛な現実性のある永遠をわたしたちの前に置き、不死不滅のものを手に握らせてくださる。神はわたしたちが安全確実な道を進むことができ、全能力をあげて一意努力するのに価値のある目的を遂行するために、品性を

高める貴重な眞理をお与えになる。

神は自らおつくりになった小さい種をながめ、その中に美しい花、灌木、または高くそびえる枝をひろげている木が包蔵されているのをご覧になるが、それと同じように各個人のうちに可能性を見られるのである。わたしたちはある一つの目的のためにこの地上に居るのであって、神はわたしたちの生涯のために計画を与え、わたしたちが最高の発育を遂げるように望まれている。

神はわたしたちがよく、幸福に、そして有益な者になるように絶えず成長して行くことを望んでおられる。わたしたちは皆能力を持っているが、それを神聖な財産とみなし、主のたまものとして感謝し、正しく使用するように教えられなければならない。全身の力を発育させ、あらゆる能力を盛んに働かせるように神は希望されている。この世においてわたしたちが、有益な、貴重なものをすべて楽しみ、よい人となり、よいことを行い、きたるべき国のために天の宝をたくわえるように望んでおられる。

利己的でなく、高級、高尚なことならどんなものにもすぐれた者になりたいというのが、彼らの熱烈な欲求でなければならない。青年が模倣すべき型としてキリストを見あげさせるべきで、その生涯に表われているキリストの聖なる大望を青年が持ち、自分が世の中に生きていることによってこの世界をよりよくするという望みをいだかなければならない。青年が召されたのはこの働きをするためである。

広 大 な 基 礎

救霊の知識はすべての知識のうちで最高のものである。人間が望みうる最高の働きは罪からきよい生涯へと人を救う働きである。この仕事を遂行するためには広大な基礎が築かれなければならない。包含的教育が必要である。

この教育は単なる学問の教育には不必要的思考や努力を親や教師に要求する。知能の啓発以上のものが必要なのである。教育は、肉体と知能と心が等しく教育されなければ、完全ではない。品性が最も完全に、最高の發育をとげるように、正しい訓練をしなければならないし、知能と肉体の全能力が發育し、正しく訓練されなければならない。神のために一段と有能な働き人になるため、あらゆる能力を養成し、働かせることが義務である。

真の教育は知徳体の全部を含んでいて、自分を正しく用いることを教え、頭脳、骨格、筋肉、からだ、精神、心を最善に用いうるようにする。頭脳的能力は最高の当局としてからだ全体を支配することになっている。生れつきの食欲や情欲は良心と霊的愛情によつて統御を受けるべきである。キリストは人類のかしらとして立たれ、わたしたちをキリストの奉仕と、高い、純潔な、きよい道へ導こうと計画されている。驚くべきキリストの恵みの働きによつて、わたしたちはキリストにあつて完全にされなければならない。

イエスは家庭で教育を受けられた。イエスの母が人間としての最初の教師であり、彼女のくちびるから、また預言者の書物からキリストは天のことについて学ばれた。イエスは農夫の家庭に生活し、忠実に、快活に自分の務を果して、家庭の重荷を負われた。天の指揮官であつた彼は心よく働くしもべであり、愛する従順なおすこであつた。

彼は手仕事を学び、大工の仕事場でヨセフとともに手ずから働かれた。普通の労働者の衣服をつけ、小さい町の通りをいやしい仕事へと往復された。

その時代の人々は事物の価値を外観で計算した。宗教が力を減ずるにしがたい、外観は豪奢となっていた。そのころの教育者は見せびらかしや見えを張ることによつて尊敬を得ようとした。こうした世の様に対しイエスの生涯は著しく対照的であつた。人生のうちで最も重要だと思われていたことが無価値なものであることをその生涯をもつて実証された。小さいことを大げさにし、偉大なことを卑しめていた当時の学校をイエスは求められなかった。イエスの教育は天が定められたものから学びとられ、有用な仕事、聖書研究、自然界、ならびに生活の体験から得られたものであつた。こうしたものは自ら進んで働く腕と、ものを見る目と理解する心を養成し、万人に対する教訓にみちている神の教科書である。

「幼な子は、ますます成長して強くなり、知恵に満ち、そして神の恵みがその上にあつた」(ルカ二ノ四〇)。
このような準備の後、キリストは伝道を始め、人と接触するときには絶えず彼らを祝し、人を変化させる力を及ぼされたが、それは世界がいままで見たこともないところであつた。

家庭 教育

家庭は子供の最初の学校であつて、奉仕の生涯の基礎が築かれるのはここにおいてである。その原則は単に理論だけで教えるべきではない。これは全生涯の教育を形づくるべきである。

ごく小さいときから人を助けることを教え、体力と思考力が十分に発達したら、家庭で仕事を与えるべきである。父母を助け、自分を制し、統御し、自分の便宜を計る前に他人の幸福と便宜を考え、機会をとらえて兄弟姉妹や遊び友だちを元気づけ、また助け、老人や病人や不幸のある人に親切を示すように励まさなければならない。真の奉仕の精神が家庭にもっとみなぎれば、それだけ子供の生涯にもそれが養われ、子供は他人を益するための奉仕や犠牲に喜びを見いだすことを学ぶものである。

学 校 の 働 き

家庭教育は学校の働きによって補足されるべきである。知、徳、体すなわち全体の発育と、それに奉仕と犠牲の教育をたえず念頭におかなければならない。日常経験する小さいことでキリストのために奉仕することは他のどんな手段よりも品性を形成し、その生涯を無我の奉仕へと導く力を有している。この精神を覚醒させ、励まし、正しく導くことが両親の働きであり、教師の仕事であって、これよりも重要な働きはあり得ない。奉仕の精神が天の精神であり、これを発達させ、助長するための努力に対して天の使が協力する。こういう教育は神のみ言葉に立脚すべきである。その原則が完全に示されているのは聖書だけであって、聖書を研究と教授の根底とする必要がある。重要な知識とは神を知ることと、神がおつかわしになったキリストを知ることである。

青少年は皆、自分について知っていなければならない。神がお与えになった肉体とこれを健康に保つ法則を理解すべきである。彼らはみな教育全般にわたって周到に教えこまなければならない。また実際的な能力のある男女

となり、日常生活の義務を果す者となるために実業教育を受けるべきで、そうした上で、伝道事業の各種の方面の訓練と実際の体験が与えられる必要がある。

分け与えることから学ぶ

青年には学べるだけ最高の速度で勉強させ、力のあるかぎり知識を獲得させるべきである。その能力にしたがって勉強の範囲を広くし、学ぶかたわら、その知識を他に分け与えさせなさい。こうしてその頭脳は鍛練され、強くなるのである。青年の教育の価値は知識を活用することによってきまる。勉強に長い時間を費し、学んだことを少しも他人に教えようと努力しないとき、眞の教育の助けになるどころか、かえって妨げになることが多い。家庭においてても学校においても、いかに学びそして、その得た知識をどのようにに他人に与えたらよいかということを学ぶように生徒は努力しなければならない。職業が何であろうと、生命が続く限り、彼は生徒であり、また教師でなければならぬ。こうして神に信頼し、無限の知恵をお持ちになる神、すなわち長年の間、封じられていた秘密を現わし、信ずる者のために最も困難な問題を解決なさることのできる神によりすがって、たえず進歩することができるのである。

交友の感化

神の言葉は、成人した男女の場合においてさえ、交友の感化について非常に重きをおいている。まして発育盛り

の子供や青年の頭脳や品性には、その力がどんなに大きいかわからない。彼らが交わっている友人や、彼らが獲得する主義や、彼らが形成する習慣は、地上にいる間の有用性と彼らの未来永遠の利害を決定する。

頭脳の啓発と鍛練のために、入学した多くの学校や大学において青年の品性をそこない、その心を人生の真の目的からそらし、道德の墮落をきたらせるような感化が一般に優勢であることは恐ろしい事実であり、両親の心を寒からしめる問題である。不信仰な快樂主義に墮落した者と交わることによって、実に数多くの青年がクリスチャンの父母が注意深く教育し、熱心な祈りをもって育て守ってきた単純さと純真性と神を信ずる信仰を失い、自己犠牲の精神をなくしてしまう。

無我の奉仕に携わるに適した者となろうとして、学校にはいる者の多くが世俗の勉強に夢中になり、優秀な成績をおさめ、社会に地位と名誉を得たいという野心を起すようになる。入学した目的は忘れて生涯を利己的、世俗的な追求に送ってしまい、この世のためにも、きたるべき国のためにも破滅をきたすような習慣を形成することが非常に多い。

広い見解をもち、無我の精神と高い希望をいだく男女は、通例、幼年時代における交際によってこうした性質を養った者である。イスラエルとのあらゆる関係において、神はつねにイスラエルの子供の交わりに警戒することが重要であると解かれている。子供を有害な友人から守り、ごく幼少のころから神の律法の中にある原則に親しませることを念頭において政治、宗教、社会生活のあらゆる制度が定められた。イスラエルの国家創立に際して与えられた実物教訓はすべての人の心に深い感銘を与える性質を持っていた。すなわちエジプト人の長子の死という、恐

ろしい最後の刑罰が下る前に神はご自分の民に子供を各自の家庭に集めるように命じられた。そして、各家庭の門柱は血で塗られ、このしるしによって保証された保護の中に全員が宿ることになっていた。このように今日も神を愛し、畏れる親は「契約のつなぎ」、すなわち、キリストのあがないの血によって可能とされたきよい感化のうちにその子供を守らなければならない。

こ れ を 離 れ よ

キリストはその弟子たちについて「わたしは彼らにみ言葉を与えましたが、…わたしが世のものでないように、彼らも世のものではないからです」と言われた（ヨハネ一七ノ一四）。

「不信者と、つり合わないくびきを共にするな。義と不義となんの係わりがあるか。光とやみとなんの交わりがあるか。…神の宮と偶像となんの一致があるか。わたしたちは生ける神の宮である。神がこう仰せになっている、『わたしは彼らの間に住み、かつ出入りをするであらう。』

そして、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となるであらう。』

だから、『彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。』

そして汚れたものに触れてはならない。

触れなければ、わたしはあなたがたを受けいれよう。

そしてわたしは、あなたがたの父となり、

あなたがたは、わたしのむすこ、むすめとなるであろう。全能の主がこう言われる。』」

(コリント第二・六ノ一四―一八)

祝福の約束

「幼子…を集め」(ヨエル書二ノ一六)。「神の定めと判決を知らせるのです」(出エジプト記一八ノ一六)。

「イスラエルの人々のために、わたしの名を唱えるならば、わたしは彼らを祝福するであろう」(民数記六ノ二七)。

「そうすれば地のすべての民は皆あなたが主の名をもって唱えられるのを見…るであろう」(申命記二八ノ一〇)。

「その時やコブの残れる者は、多くの民の中にあること、

人によらず、また人の子らを待たずに

主からくだる露のごとく、

青草の上に降る夕立のようである。」

(ミカ書五ノ七)

わたしたちもイスラエル人に数えられている。したがって、昔のイスラエル人に与えられた子供の教育、養育に関する教訓や服従によって受けた祝福の約束はすべてわたしたちのためである。

わたしたちに対する神のみ言葉は「わたしはあなたを…祝福し…あなたは祝福の基となるであろう」である（創世記一・二二）。

キリストは最初の弟子や、弟子たちの言葉を通してキリストを信ずるに至った人々について、「わたしは、あなたからいただいた栄光を彼らにも与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。わたしが彼らにあり、あなたがわたしにいますのは、彼らが完全に一つとなるためであり、また、あなたがわたしをつかし、わたしを愛されたように、彼らをお愛しになったことを、世が知るためであります」と言われている（ヨハネ一七・二二、二三）。

なんという驚くべき言葉であろう。ほとんど信仰では把握しきれないほどの言葉である。全宇宙の創造主が神への奉仕に献身する者を、自分のみ子を愛されるように愛してくださるのである。この地上において、今日でも神の豊かな恵みは驚くばかり与えられている。神は天の栄光の王をわたしたちに与え、それとともにあらゆる天の宝をおさずけになった。きたるべき国のためにこれほど多くの約束を与えられたうえ、この世においてもすばらしいたまものを与えておられる。わたしたちはその恵みを受ける者として品性を高尚にし、発展向上させるものはなんでも受けることを望まれている。神は青年を天来の力で鼓舞し、彼らがキリストの血に染まった旗の下に立って、キリストがお働きになったように働き、人々を安全な道に導いて、多くの人々が足を「ちとせの岩」の上におくに至るのを待っておられる。

神の確証

教育に関する神の計画に調和して働いている人には、すべて神からのささえの力が加えられ、不断の神の臨在と保護の力が与えられる。ひとりびひとりに対して「強く、また雄々しくあれ。あなたがどこへ行くにも、あなたの神、主が共にあられるゆえ、恐れてはならない、おののいてはならない。」「わたしはあなたを見放すことも、見捨てることもしない」と申されている（ヨシユア記一ノ九、五）。

「天から雨が降り、雪が落ちてまた帰らず、地を潤して物を生えさせ、芽を出させて、種まく者に…かてを与える。」

このように、わが口から出る言葉も、おなしくわたしに帰らない。

わたしの喜ぶところのことをなし、わたしが命じ送った事を果す。

あなたがたは喜びをもって出てきて、安らかに導かれて行く。

山と丘とはあなたの前に声を放って喜び歌い、野にある木はみな手を打つ。

いとすぎは、いばらに代って生え、

ミルトスの木は、おどろに代って生える。

これは主の記念となり、また、としえのしるしとなって、絶えることはない。」

（イザヤ書五五ノ一〇―一二）

世界はいたるところ、社会状態は混乱し、徹底的な改革が必要である。青年に施す教育は社会の全組織を形成するものである。

「彼らはいにしえの荒れた所を建てなおし、さきに荒れすたれた所を興し、荒れた町々を新たにし、世々すたれた所を再び建てる。」

「しかし、あなたがたは……われわれの神の役者と呼ばれ、…

とこしえの喜びを得る。

主なるわたしは公平を愛し。」

(イザヤ書六一ノ四、六一八)

「眞実をもつて彼らに報いを与え、彼らと、とこしえの契約を結ぶからである。」

(同六一ノ八)

「彼らの子孫は、もろもろの国の中で知られ、

彼らの子らは、もろもろの民の中に知られる。

すべてこれを見る者は、これが主の祝福された民であることを認める。…

地が芽をいだし、園がまいたものを生やすように、

主なる神は義と誉とを、もろもろの国の前に、生やされる。」

(同六一ノ九―一二)

第七部

重要な知識

第二十五章 神に関する真の知識

救い主と同じように、わたしたちも神のために働くようにこの世に生存している。わたしたちは神のごとき品性を持つようになり、奉仕の生活によって社会に神を示さなければならない。神とともに働き、神に似た者となり、その品性を表わすためには正しく神を知るべきであって、神がご自分について示されているとおりに、わたしたちは神を知らなければならない。

神を知ることとはあらゆる真の教育、真の奉仕の基礎である。それは誘惑に対する唯一のほんとうの防御であり、わたしたちの品性を神に似たものにするこのことができるのはこのほかにはない。このことは人類向上のために働いているすべての人に必要な知識である。品性の变化、生活の純潔、奉仕の能率、正しい原則の厳守はすべて神に関する正しい知識に基く。この知識は地上の生涯のためにも、またきたるべき国での生活のためにも重要な準備である。

「聖なる者を知することは、悟りである」(箴言九ノ一〇)。神を知ることによって「命と信心とにかかわるすべての事は」わたしたちに与えられるのである(ペテロ第二・一ノ三)。

「唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがたがかわされたイエス・キリストとを知る」ことは、す

なわち、永遠の生命である、とイエスは言われている（ヨハネ一七ノ三）。

「主はこう言われる、

『知恵ある人はその知恵を誇ってはならない。

力ある人はその力を誇ってはならない。

富める者はその富を誇ってはならない。

誇る者はこれを誇とせよ。

すなわち、さとくあつて、わたしを知っていること、

わたしが主であつて、

地にいつくしみと公平と正義を行っている者であることを知ることがそれである。

わたしはこれらの事を喜ぶと、主は言われる。』」

（エレミヤ書九ノ二三、二四）

わたしたちは神から与えられた神に関する黙示を研究しなければならない。

「あなたは神と和らいで、平安を得るがよい。

そうすれば幸福があなたに来るでしょう。

どうか、彼の口から教えを受け、その言葉をあなたのおさめるように。」

「……全能者があなたのこがねとなり……その時、あなたは全能者を喜び、

神に向かって顔をあげることができる。

あなたが彼に祈るならば、彼はあなたに聞かれる。

そしてあなたは自分の誓いを果す。

あなたが事をなそうと定めるならば、

あなたはその事を成就し、あなたの道には光が輝く。

彼は高ぶる者を低くされるが、へりくだる者を救われる。」

(ヨブ記二二ノ二一、二二、二五―二九)

自然の中にお現われになる神

「神の見えない性質、すなわち、神の永遠の力と神性とは、天地創造このかた、被造物において知られていて、明らかに認められるからである。したがって、彼らには弁解の余地がない」(ローマーノ二〇)。

現在、わたしたちがながめている自然の事物はエデンの輝きをかすかにしのばせている。罪は地上の美を傷つけ、万物の上に罪惡の痕跡が見える。しかしなお、美しいものが多く残っていて、無限の力を持ち、大いなる恵みとあわれみと愛に富まれる神がこの地を創造し、生命と喜びで地上を満たされたことを自然が証明している。こうした、むしばまれた状態においてなお、万物は「大芸術家」の手のわざを表わしていて、どちらを向いても、わたしたちは神の声を聞き、神の恵みの証拠を見ることができる。

低くなりとどろく雷の荘厳な響きや、絶え間ない海の波の音をはじめとし、森の中にメロディーをひびかせる小鳥の楽しい歌声にいたるまで、自然のあらゆる声が神を賛美している。また地も海も空もすばらしい色彩をこらし、目のさめるような配合や、美しく調和した混合色のうちに神の栄光をながめるのである。いつも変わらない丘は神の力を語り、緑の旗を太陽になびかせている木々や優美な花も、創造主の力を示している。褐色の地上を敷きつめている新鮮な緑は被造物の中で最も低いものに対する神の保護を物語っている。海の洞窟や地中の深い所に神の宝がある。海中に真珠をちりばめ、岩の間に紫水晶や緑玉を飾られた神は、美を愛されるおかたである。空にのぼる太陽はすべての被造物の生命であり、光である神を代表するものであり、地を飾り、天を照す、あらゆる輝きと美が神を物語っている。

「その栄光は天をおおい。」（ハバクク書三ノ三）

「地はあなたの造られたもので満ちている。」（詩篇一〇四ノ二四）

「この日は言葉をかの日につたえ、

この夜は知識をかの夜につげる。

話すことなく、語ることなく、その声も聞えないのに、

その響きは全地にあまねく、その言葉は世界のはてにまで及ぶ。」

（詩篇一九ノ二―四）

万物が神の優しい、父としての保護と神の子を幸福にしようとお望みになっているそのみ心を告げている。

個性をそなえられる神

自然界すべてに働いており、万物を支配している強い力の一部の神学者が言うような単なる宇宙に充滿している法則や活動力ではない。神は霊であるが、しかし形のある実在者である。神は自らを形あるものとして示されている。

「しかし主はまことの神である。」

生きた神であり、永遠の王である。…

『天地を造らなかつた神々は地の上、天の下から滅び去る』と。」

「ヤコブの分である彼はこのようなものではない。」

彼は万物の造り主だからである。」

「主はその力をもって地を造り、

その知恵をもって世界を建て、

その悟りをもって天をのべられた。」

(エレミヤ書二〇ノ一〇、一一、一六、一二)

自然は神でない

神が造られた自然の事物自体は自然界における神ではない。自然の事物は神の品性と力の表現であるが、わたし

たちは自然を神と思つてはならない。人間の芸術的手腕は人の目を喜ばせる非常に美しいものをつくり出す。出来上がったものは製作者の考え方をいくぶん示しているが、それが製作者ではない。名譽の対象となるのは作品ではなく、製作者である。したがって自然界は神の思想の表現であつて、あがめるべきものは自然ではなく、自然界の神である。

「さあ、われらは拝み、ひれ伏し……主のみにひざまずこう。」

「地の深い所は主のみ手にあり、山の頂もまた主のものである。」

海は主のもの、主はこれを造られた。

またそのみ手はかわいた地を造られた。」

(詩篇九五ノ六、四、五)

「プレアデスおよびオリオンを造り、

暗黒を朝に変じ、昼を暗くして夜となし……者、その名は主という。」

(アモス書五ノ八)

「彼は山を造り、風を創造し、人にその思いのいかなるかを示し。」

(同四ノ一三)

「主はご自分の高殿を天に築き、大空の基を地の上にすえ

海の水を呼んで、地のおもてに注がれる。その名は主となえられる。」

(アモス書九ノ六)

地球の創造

創造の働きは科学をもって説明できない。生命の神秘を、どんな科学が解明し得るであろう。

「信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉で造られたのであり、したがって、見えるものは、現われているものから出てきたのでないことを、悟るのである」(ヘブル一ノ三)。

「わたしは光をつくり、また暗きを創造し、…

わたしは主である、すべてこれらの事をなす者である。」

「わたしは地を造って、その上に人を創造した。

わたしは手をもって天をのべ、その万軍を指揮した。」 (イザヤ書四五ノ七、一二)

「わたしが呼ぶと、彼らはもろともに立つ。」

(イザヤ書四八ノ一二)

地球の創造に際して、神はそれより前に存在していた物質を借りて造られたのではない。「主が仰せられると、そのようになり、命じられると、堅く立ったからである」(詩篇三三ノ九)。物質も霊的なものもすべて、神のみにしたがって主の前に立ち上がり、神ご自身の目的のために創造されたのである。天とその万軍、地とその中のすべてのものが神の口の息によって出現したのである。

人類の創造

人類の創造において、個性をそなえられる神の力があらわされた。神がご自分の像に似せて人を造られたとき、そのかたちはすべての点において完全であつたが、生命がなかった。そこで個性をそなえておられる神が、そのかたちに生命の息を吹き入れた。そこで初めて人間は生ける、理性のある生物となった。人体のあらゆる部分が活動を開始し、心臓、動脈、静脈、舌、手足、感覚、頭脳、すべてが活動を始め、あらゆるものが法則のもとにおかれ、人間は生ける霊となった。神のみ言葉であるキリストを通じて、実在者である神が人間を創造し、知能をおさずけになられたのである。

わたしたちの肉体がかくれたところで造られたときも、わたしたちの身体は神の目には明らかであり、未完成であるその身体を神はごらんになり、生れ出る前から神の書に、わたしたちの器官は全部しるされている。

神は、創造の最高作品である人間が、すべて人間より下等なものにまさって神の思想をあらわし、その栄光を示すように望んでおられる。しかし、人間は自分を神としてはならない。

「主に向かって喜ばしき声をあげよ。

喜びをもって主に仕えよ。

歌いつつ、そのみ前にきたれ。

主こそ神であることを知れ。

われらを造られたものは主であって、われらは主のものである。

われらはその民、その牧の羊である。

感謝しつつ、その門に入り、ほめたたえつつ、その大庭に入れ。

主に感謝し、そのみ名をほめまつれ。」

(詩篇一〇〇ノ一―四)

「われらの神、主をあがめ、その聖なる山で拝みまつれ。

われらの神、主は聖でいらせられるからである。」

(同九九ノ九)

自然の法則・神のしもべ

神は、ご自分が創造になったものを神のしもべとして絶えず用い、これをささえておられるが、また自然の法則を通して働かれ、それを自分の手段としてお用いになる。それは自分で活動しているのではない。活動している自然は、み心にしたがって万物を運行なさる神の理性的な臨在と活動的な力を証明するものである。

「主よ、あなたのみ言葉は天においてとこしえに定まり、

あなたのまことはよろずよに及びます。

あなたが地を定められたので、地は堅く立っています。

これらのものはあなたの仰せにより、堅く立って今日に至っています。

よるずのものは皆あなたのしもべだからです。」

(詩篇一一九ノ八九―九二)

「主はそのみどころにかなう事を、天にも地にも、海にもすべての淵にも行われる。」

(同二三五ノ六)

「これらは主が命じられると造られたからである。

主はこれらをとこしえに堅く定め、越えることのできないその境を定められた。」

(同二四八ノ五、六)

年々、地球が農作物を産出し、太陽のまわりを回転するのは地球固有の力によるのではなく、無限の神の手が絶えず働いてこの遊星を導いているからである。すなわち、地球の位置と回転を支持しているのは、つねに働いている神の力によるのである。太陽を天にのぼらせ、また天の窓を開いて雨を降らせるのも神である。

「主は雪を羊の毛のように降らせ、霜を灰のようにまかれる。」

(詩篇一四七ノ一六)

「彼が声を出されると、天に多くの水のざわめきがあり、また地の果から霧を立ちあがらせられる。

彼は雨のために、いなびかりをおこし、その倉から風を取り出される。」

(エレミヤ書一〇ノ一二)

植物が繁茂し、木の葉が一枚一枚現われ、花が咲き、実がなるのは神の力によるものである。

人体構造を完全に理解することはできない。それは最も知恵のある人でも当惑するほど神秘である。脈をうち、呼吸を繰り返すのは、ある機械が一度運転を始め、その働きが継続するようなくみによるのではない。人間は神によって生き、動き、存在する。生物の身体の中に鼓動する心臓、脈、あらゆる神経、筋肉はつねに存在してあられる神の力によって秩序を保ち、活動を続けているのである。

神 の 保 護

聖書はいと高く、いと聖なるところにおられる神をわたしたちに示しているが、それは活動しない、沈黙した、孤独な状態の神ではなく、神のみ心をはたそうと待機している千々万々の聖なる使に囲まれておられる神である。こうした使者を通して神はその支配下にあるあらゆる場所と盛んに連絡をされる。神は聖霊によっていたるところに臨在し、聖霊と天使の働きを通して人の子に奉仕をなさる。

神はそうぞうしいこの世界の上に王として君臨なさっている。神の目には万事が一目瞭然としており、偉大なる、静寂な永遠のかなたから最善とみられるところを命令されるのである。

「人の道は自身によるのではなく、歩む人が、その歩みを自分で決めることのできないことを。」

(エレミヤ書一〇ノ二三)

「心をつくして主に信頼せよ、自分の知識にたよってはならない。…

そうすれば、主はあなたの道をまっすくにされる。」

(箴言三ノ五、六)

「見よ、主の目は主を恐れる者の上にあり、そのいつくしみを望む者の上にある。

これは主が彼らの魂を死から救い、ききんのときにも生きながらえさせるためである。」

(詩篇三三ノ一八、一九)

「神よ、あなたのいつくしみはいかに尊いことでしょう。

人の子らはあなたの翼のかげに避け所を得。」

(同三六ノ七)

「ヤコブの神をおのが助けとし、その望みをおのが神、主におく人はさいわいである。」 (同ー四六ノ五)

「主よ、地はあなたのいつくしみに満ちています。」

(同ー一九ノ六四)

「主は正義と公平とを愛される。」

(同三三ノ五)

あなたは「地のもろもろのはてと、遠き海の望みである。」

「あなたは大能を帯び、そのみ力によつて、もろもろの山を堅く立たせられる。

あなたは海の響き、…もろもろの民の騒ぎを静められる。」

(同六五ノ五―七)

「あなたは朝と夕の出る所をして喜び歌わせられる。」

「またその恵みをもって年の冠とされる。あなたの道にはあぶらがしたたる。」

(同六五ノ八、一一)

「主はすべて倒れんとする者をささえ、すべてかがむ者を立たせられます。」

よろずのものの目はあなたを待ち望んでいます。

あなたは時にしたがって彼らに食物を与えられます。

あなたはみ手を開いて、すべての生けるものの願いを飽かせられます。」

(同 一四五ノ一四―一六)

キリストにあらわれている神の個性

神は有形の実在者たる神としてご自身をみ子の中にあらわされた。父の栄光の輝きであり、「神の本質の真の姿」であるイエスは実在者である救い主としてこの世にこられた(ヘブル一ノ三)。彼は個性をも持たれる救い主として天にのぼり、個性を持たれる救い主として執り成しておられる。神のみ座の前でわたしたちのために「人の子のような者」として奉仕されている(黙示録一ノ一三)。

世の光であるキリストはその神性の、目もくらむ光を隠して人間となり、人間の間に住むためにこられたが、それは人間が焼き滅ぼされることなく、創造主に親しめるようになるためであった。罪が人間と創造主とを離反させて以来、キリストを通して神がおあらわれになる以外に、だれも神を見た者がなかった。

「わたしと父とは一つである」とキリストは言われた(ヨハネ一〇ノ三〇)。また、「子を知る者は父のほかにはなく、父を知る者は、子と、父をあらわそうとして子が選んだ者とのほかに、だれもありません」(マタイ一ノ二七)。

神が人間に知らせたいと思っておられることを教えるためにキリストはこられた。高い天に、地に、広い海に神の手のわざをわたしたちは見るのである。全被造物は神の力と知恵と愛を証明している。しかし、星や海や瀑布などからは、キリストのうちにあらわされているほどの神の性質を学びとることはできない。

神の個性と品性を描写するには自然界よりもさらに明りように表わすものが必要であることをごらんになり、神のみ子を世につかわし、見えざる神の性質や属性を人間の目にたえられる程度に表わされたのであった。

弟子にあらわされた

十字架におかかりになる前夜、二階座敷で語られたみ言葉を学んでみよう。試練の時が近づいてきていて、キリストはこれからひどく試みられ、誘惑に会わなければならぬ弟子たちを慰めようとなさって、弟子たちに「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には、すまいがたくさんある。もしなかったならば、わたしはそう言っておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから…」と言われた（ヨハネ一四ノ一）。

「トマスはイエスに言った、『主よ、どこへおいでになるのか、わたしたちにはわかりません。どうしてその道がわかるでしょう。』イエスは彼に言われた、『わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。もしあなたがたがわたしを知っていたならば、わたしの父をも知ったであろう。しかし、今は父を知っており、またすでに父を見たのである。』…

「ピリポはイエスに言った、『主よ、わたしたちに父を示してください…』』」と言ったとき、「イエスは彼に言われた、『ピリポよ、こんなにあなたがたと一しよにいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのである。どうして、わたしたちに父を示してほしいと、言うのか。わたしが父にあり、父がわたしにおられることをあなたは信じないのか。わたしがあなたがたに話している言葉は、自分から話しているのではない。父がわたしのうちにあられて、みわざをなさっているのである』」（ヨハネ一四ノ五―一〇）。

弟子たちは、ご自身と神との関係について語っておられるキリストの言葉をなお理解せず、その教えの多くが、はつきりと彼らにわかっていなかった。キリストは弟子たちがもっと明白、鮮明に神を知ることをお望みになった。

「わたしはこれらのことを比喻で話したが、もはや比喻では話さないで、あからさまに、父のことをあなたがたに話してきかせる時が来るであろう」と言われている（ヨハネ一六ノ二五）。

ペンテコステの日に聖霊は弟子たちの上に降りそそぎ、そのとき、彼らはキリストがたとえをもって語られた真理をさらに完全に理解し、今まで不可解であつた多くの教えが明りようになったが、しかしなお、そのときもキリストの約束の完全な成就を見なかった。彼らは理解し得られるだけの神に関する知識を受けたが、父を表わそうと言われたキリストの約束の完全な成就是まだ先のことであつた。今日でもわたしたちが持っている神に関する知識は部分的で不完全である。争闘が終り、罪の世にあつてキリストのために真のあかしをたてた、忠実な働き人を人間であるキリスト・イエスが父の前で承認なさるとき、今日、人間にとって不可解なこともはつきりわかるのである。

キリストは栄化された人体をもって天の宮にのぼられた。そして、キリストを受けいれる人に神の子となる力を

与えられるのである。それは最後に神が人間をご自分の子として受け入れ、永遠に神とともに住まわせるためである。もしこの世の生涯を通して人間が神に忠誠であれば、その人たちはついに、「み顔を仰ぎ見るのである。彼らの額には、み名がしるされている」(黙示録二二ノ四)。天における楽しみは、神のみ顔を見ることにほかならない。キリストの恵みによって救われた罪びとにとって神のみ顔を見あげ、父として神を知ること以上に大きな喜びがあるだろうか。

聖書のあかし

聖書は神とキリストとの関係を明りように示し、両者の個性や特性をあきらかにしている。

「神は、おかしは、預言者たちにより、いろいろなときに、いろいろな方法で、先祖たちに語られたが、この終りのときには、み子によって、わたしたちに語られたのである。神はみ子を万物の相続者と定め、また、み子によって、もろもろの世界を造られた。み子は神の栄光の輝きであり、神の本質の真の姿であって、その力ある言葉をもって万物を保っておられる。そして、罪のきよめのわざをなし終えてから、いと高き所にいます大能者の右に、座につかれたのである。み子はその受け継がれた名がみ使たちの名にまさっているので、彼らよりもすぐれた者となられた。いったい、神はみ使たちのだれに対して、『あなたこそは、わたしの子。きょう、わたしはあなたを生んだ』と言い、さらにまた『わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となるであろう』と言われたことがあるか」(ヘブル一ノ一二五)。

父と子の個性とその両者間の一致については、ヨハネによる福音書十七章に示されている。すなわち、弟子のために祈られたキリストの祈りの中にあらわれている。

「わたしは彼らのためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにも、お願いいたします。父よ、それは、あなたがわたしのうちにあられ、わたしがあなたのうちにいるように、みんなの者が一つとなるためであります。すなわち、彼らをもわたしたちのうちにおらせるためであり、それによって、あなたがわたしをおつかわしになったことを、世が信じるようになるためであります」(ヨハネ一七ノ二〇、二一)。

キリストと弟子たちとの間に存在する一致はどちらの個性をも失わせるものではない。両者は、目的において、精神において、品性において一つである。だが、からだは一つのからだではない。神とキリストとが一つであるのもそういう意味である。

キリストにあらわされた神の品性

キリストは人性をとり、人間と一つになるためこの世にこられたが、同時にそれは罪深い人類に天の父を示すためであった。世の初めから父の前にあって、目に見えない神の本質の真の姿であったキリストだけが神の品性を人間に示すことができたのである。彼はすべての点で兄弟のようになり、わたしたちと同じ肉体をお持ちになった。キリストは飢えかわき、疲れを体験された。食物によってささえられ、睡眠をとって元気を回復された。彼は人間の分け前を受け、しかも神の傷なきみ子であった。地上にあられるときには、旅人、また宿れる者であって、この

世におられても、この世のものではなく、今日の人々のようにいざなわれ、試みられ、しかも、罪のない生涯をおくられたのである。優しく、あわれみ深く、同情に富み、つねに他人のことをお考えになった点で、キリストは神の品性を示し、神と人とにいつも奉仕なさっていた。

「主がわたしに油を注いで、貧しい者に福音を宣べ伝えることをゆだね、

わたしをつかわして心のいためる者をいやし、捕われ人に放免を告げ。」（イザヤ書六一ノ二）

「盲人の目が開かれることを告げ知らせ。」（ルカ四ノ一八）

「主の恵みの年と…告げさせ、

また、すべての悲しむ者を慰め」とキリストは言われた。

（イザヤ書六一ノ二）

「敵を愛し、憎む者に親切にせよ。のろう者を祝福し、はずかしめる者のために祈れ。」「こうして、天にいますあなたがたの父の子となるためである」とキリストはわたしたちに命じてあられる（ルカ六ノ二七、二八、マタイ五ノ四五）。「いと高き者は、恩を知らぬ者にも悪人にも、なさけ深いからである」（ルカ六ノ三五）。「天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らしてくださるからである」（マタイ五ノ四五）。

「あなたがたの父なる神が慈悲深いように、あなたがたも慈悲深い者となれ」（ルカ六ノ三六）。

「これはわたしたちの神のあわれみ深いみこころによる。

また、そのあわれみによって、日の光が上からわたしたちに臨み、

暗黒と死の陰とに住む者を照し、

わたしたちの足を平和の道へ導くであろう。」

（ルカーノ七八、七九）

十字架の栄光

人類に対する神の愛の黙示は十字架に集中されている。その完全な意義は言葉で表現することも筆で描写することも頭脳で理解することもできない。カルバリーの十字架をながめ、わたしたちはただ、「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛してくださった。それはみ子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」とだけ言えるのである。

キリストはわたしたちの罪のために十字架にかかり、死からよみがえり、昇天なさったことが、わたしたちが学び、また教えねばならない救いの科学である。

それはキリストであつた

「キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをおなしうして、しもべのかたちをとり、人間の姿になられた。そのありさまは人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた」（ピリピ二ノ六―八）。

「キリスト・イエスは、死んで、否よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなしてください

るのである」(ローマ八ノ三四)。

「そこでまた、彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神に来る人々を、いつも救うことができるのである」(ヘブル七ノ二五)。

「この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである」(ヘブル四ノ一五)。

ここに無限の知恵、愛、正義、憐憫がある。すなわち「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は」である(ローマ一ノ三三)。

言い尽せぬたまもの

わたしたちがどんな恵みを受けるのもすべてキリストというたまものを通してである。このたまものを通して、日々、神の恵みが尽きることなくわたしたちに注がれる。美しい色彩とかがりを持った花はみな、このたまものを通じてわたしたちが喜ぶために与えられている。日も月もキリストによって造られた。天を美しくしている星は一つとしてキリストによって造られぬものはない。降り注ぐ雨のしずく、感謝の気持ちのないこの世界に照る日の光はすべてキリストの中にある神の愛を証明している。すべてのものは、この言い尽せぬたまものである神のひとり子を通してわたしたちに与えられている。これらの恵みがすべて、神の被造物に満ちあふれるためにキリストは十字架につかれたのであった。

「どんなに大きな愛を父から賜わったことか、よく考えてみなさい。わたしたちは、すでに神の子なのである」

(ヨハネ第一・三ノ一)。

「いにしえからこのかた、あなたのほか神を待ち望む者に、このような事を行われた神を聞いたことはなく、耳に入れたこともなく、目に見たこともない」(イザヤ書六四ノ四)。

人を変化させる知識

キリストの中にあらわされている神の知識は、救われた者が皆持たねばならないものである。それは品性を変化させる知識である。この知識を受けるとき人間は神のかたちに似て再創造される。それは全身に神聖な霊の力を与える。

「わたしたちはみな、顔おおいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく」(コリント第二・三ノ一八)。

救い主はご自分の生涯について、「わたしはわたしの父のいましめを守ったので」「わたしをつかわされたかたは、わたしと一しよにあられる。わたしは、いつも神のみこころにかなうことをしているから、わたしをひとり置きざりになさることはない」と言われている(ヨハネ一五ノ一〇、八ノ二九)。神のしもべが人性をとられたイエスのようになることを神は求めてあられる。救い主の力によって、わたしたちは救い主が送られたような純潔で、りっぱな生活を送らなければならない。

パウロは「わたしはひざをかがめて、天上にあり地上にあつて『父』と呼ばれているあらゆるものの源なる父に祈る。どうか父が、その栄光の富にしたがい、みたまにより、力をもってあなたがたの内なる人を強くしてください。また、信仰によって、キリストがあなたがたの心のうちに住み、あなたがたが愛に根ざし愛を基として生活することにより、すべての聖徒と共にその広さ、長さ、高さ、深さを理解することができ、また人知をはるかに越えたキリストの愛を知って、神に満ちているもののすべてをもつて、あなたがたが満たされるように、と祈る」と言っている（エペソ三ノ一四―一九）。

そして、「わたしたちも絶えずあなたがたのために祈り求めているのは、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力とをもって、神のみ旨を深く知り、主のみにこころにかなった生活をして真に主を喜ばせ、あらゆるよいわざを行って実を結び、神を知る知識をいよいよ増し加えるに至ることである。さらにまた祈るのは、あなたがたが、神の栄光の勢いにしたがって賜わるすべての力によって強くされ、何事も喜んで絶え、かつ忍」ぶのであると言っている（コロサイノ九―一）。

これこそ神が人間に受けさせようと招いておられる知識であつて、これらのもの以外はすべて空虚なものであり、無である。

第二十六章 思索的知識の危険性

知識の追求や科学の探究にともなう一つの最も大きいわざわいは人間の考えを真価以上に尊重し、その正当な領分よりも高くあがめる傾向である。多くの人が自分の不完全な科学知識によって創造主とそのみわざを判断しようとする。彼らは神の性質や特質や大権を測定しようとして無限なる神に関する思索的な理論をほしいままにしている。こういう研究をする人は禁断の地を踏んでいるわけで、その研究は価値のある結果をうむことなく、かえって必ず、魂の危険を招くのである。

わたしたちの最初の先祖は神が与えられなかった知識を得ようとして罪に陥った。その知識を求めようとして、さらに価値あるものをことごとく失ったのである。もし、アダムとエバが禁断の木に触れなかったら、神は罪ののろいのともなわない知識、永遠の喜びを与えるはずの知識を彼らに与えられたのである。誘惑者に耳を傾けて得たものは、ただ罪とその結果を知ったということであつた。その不従順によって人類は神から遠ざかり、地は天から離されてしまった。

この教訓はわたしたちのためのものである。サタンが人類の始祖をひっぱって行った領域は、今日彼が人々をい

ざなっているところと同じである。サタンは人の喜ぶような作り話で社会をみだし、あらゆる方法を用いて人類をいざない、神に関して思索するように誘惑している。こうしてサタンは、人間が神の救いの知識を手に入れられぬように妨害しようと努力をしている。

万有神論

今日、至るところの教育機関や教会に、神と神のみ言葉に対する信仰をくつがえす唯心論的な教えが侵入している。神とは自然界にみなぎっているエッセンスであるという説が聖書を信ずると称している多くの人に受け入れられているが、この説は外見がどんなに美しく見えて最も危険な欺瞞である。それは神について誤った観念を与え、神の偉大さや尊厳さをはずかしめるものである。そして、単に人を誤らせるだけでなく、必ず墮落させる。その要素は暗黒であり、その領域は肉欲である。これを受けいれるとき、神から離れる。墮落した人間性にとってこれは破滅を意味する。

罪によって生じた状態は不自然であり、これから回復する力は超自然的なものでなければならず、そうでないものは価値がない。人の心から悪の手を断ち切ることができる力は一つしかなく、それはイエス・キリストの中にある神の力だけである。十字架におつきになったキリストの血潮のうちにしか、罪からきよめるものではなく、キリストの恵みだけがわたしたちの墮落した人間性がもつ傾向に抵抗し、これを服従させるのである。神に関する唯心論的な説はキリストの力を認めない。もしも神が全自然にみちている一つのエッセンスであるならば、キリストは

万人に宿ることになり、人間がきよくなるためにはただ自分の中にある力を発達させればよいことになる。

このような説を論理的につきつめて行くと、それはキリスト教の制度をことごとく一掃してしまうことになる。贖罪の必要はなくなり、人間は自分の救い主となる。神に関するこうした理論は神のみ言葉を無効とし、この説を受け入れる人はついに聖書全体を作り話と見るにいたる誘惑の大きな危険の中に居るのである。彼らは善を悪よりいいと思うかもしれないが、神を当然である最高の地位からしめ出し、神なしでは無価値である人間の力に依存する。人間の意志は助けがなければ悪に抵抗してこれに打ち勝つ真の力はない。魂の防御はくずれ、罪に対する防壁はなくなる。一度、神のみ言葉と聖霊の拘束を拒むならば、わたしたちはどこまで墮落するかわからない。

「神の言葉はみな真実である、

神は彼に寄り頼む者の盾である。

その言葉に付け加えてはならない、

彼があなたを責め、あなたを偽り者とされないためだ。」

(箴言三〇ノ五、六)

「悪しき者は自分のとがに捕えられ、自分の罪のなわにつながれる。」

(同五ノ二二)

神の奥義を探る

「隠れた事はわれわれの神、主に属するものである。しかし表わされたことは長くわれわれとわれわれの子孫に属」するのである(申命記二九ノ二九)。神のみ言葉の中に与えられている神に関する黙示は、わたしたちの研究の

ためにあるもので、これは理解しようと努力してよいものである。しかし、その限界を越えて、推測に走ってはならない。神の性質に関して臆測に疲れはてるまで最高度に知能を労したところでこのような努力はむだである。この問題は解決するために、わたしたちに与えられているのではなく、いかなる人間の頭脳も神を理解することはできない。だれも神の性質に関して思索をほしいままにしてはならない。このことについては沈黙が雄弁である。全知の神は議論されるべきあかたではない。救いの計画がたてられたとき、天の父とみ子との間の相談には天使さえ介入することが許されなかった。まして人間は至高者の神秘に立ち入るべきではない。わたしたちは神については幼児のごとく無知であるが、幼児のように神を愛し、彼に従うことができる。神の性質や大権について思索しないで、神が語られた言葉にききしたがいたいものである。

「あなたは神の深い事を窮めることができるか。

全能者の限界を窮めることができるか。

それは天よりも高い、あなたは何をなしうるか。

それは陰府よりも深い、あなたは何を知りうるか。」

(ヨブ記一ノ七、八)

「しかし知恵はどこに見いだされるか。

悟りのある所はどこか。

人はそこに至る道を知らない、また生ける者の地でそれを獲ることができない。

淵は言う、『それはわたしのつちにない』と。

また海は言う、『わたしのもとにない』と。

精金もこれと換えることはできない。

銀も量ってその価とすることはできない。

オフルの金をもってしても、その価を量ることはできない。

尊い縞めのうも、サファイヤも同様である。

こがねも、玻璃もこれに並ぶことができない。

また精金の器物もこれと換えることはできない。

さんごも水晶も言うに足りない。

知恵を得るのは真珠を得るのにまさる。

エチオピアのトパズもこれに並ぶことができない。

純金をもってしても、その価を量ることはできない。

それでは知恵はどこから来るか。

悟りのある所はどこか。...

滅びも死も言う、『われわれはそのうわさを耳に聞いただけだ。』

神はこれに至る道を悟っておられる、彼はそのある所を知っておられる。」

「彼は地のはてまでもみそなわし、天が下をみきわめられるからだ。...

彼が雨のために規定を設け、雷のひらめきのために道を設けられたとき、彼は知恵を見て、これをあらわし、これを確かめ、これをきわめられた。

そして人に言われた、『見よ、主を恐れることは知恵である、悪を離れることは悟りである』と。』

(ヨブ記二八ノ二一―二八)

地の奥深い所をさがしたずねてみても、神の存在の神秘をむなしくさぐってみても、知恵は発見されない。かえって、神が喜んで与えておられる黙示を謙そんに受けいれて、その生涯を神の意志に従わせるときに、それは見いだされるのである。

自然界の神秘

最高の知恵を持っている人々でも、自然界に示されている神秘を語ることはできない。聖書や自然界には最もすぐれた学者も答えられぬ質問が多く存在している。こうした質問はわたしたちがそれに答えるために出されたものでなく、神の深い神秘に人間の注意をひき、わたしたちの知恵が有限なものであり、日常生活の周囲には有限なるものの理解力ではわからぬことが多くあることを教えるためである。

懐疑論者は、神がご自身をあらわされているものを通して、その無限の力を理解し得ないため、神を信じることを拒むが、しかし神がわたしたちの有限なる理解力に明らかにしておられる事柄からばかりでなく、ご自身をあらわしておられないものからも大いに神を認めるべきである。神の黙示と自然界の中に神は神秘的なものをお与えに

なっているが、それはわたしたちに信仰をおこせるものであると同時に、また、そうあるべきなのである。絶えず尋ね、求め、学んでも、その先はさらに無限である。

「だが、たなごころをもって海をはかり、

指をのばして天をはかり、地のちりを枿に盛り、

てんびんをもって、もろもろの山をはかり、

はかりをもって、もろもろの丘をはかったか。

だが、主の霊を導き、その相談役となつて主を教えたか。…

見よ、もろもろの国民は、おけの一しずくのように、はかりの上のちりのように思われる。

見よ、主は島々を、ほこりのようにあげられる。

レバノンには、たぎぎに足りない、またその獣は、燔祭に足りない。

主の面前には、もろもろの国民は無きにひとしい。

彼らは主によって、無きもののように、おなしのもののように思われる。

それで、あなたがたは神をだれとくらべ、どんな像と比較しようとするのか。…

あなたがたは知らなかったか。

あなたがたは聞かなかったか。

初めから、あなたがたに伝えられなかったか。

地の基をおいたときから、あなたがたは悟らなかったか。

主は地球のはるか上に座して、地に住む者をいながらのように見られる。

主は天を幕のようにひろげ、これを住むべき天幕のように張り、…

聖者は言われる、『それで、あなたがたは、わたしをだれにくらべ、…』

目を高くあげて、だが、これらのものを創造したかを見よ。

主は数をしらべて万軍をひきだし、おのおのをその名で呼ばれる。

その勢いの大きいなるにより、またその力の強きがゆえに、一つも欠けることはない。

ヤコブよ、なにゆえあなたは、『わが道は主に隠れている』と言うか。

イスラエルよ、なにゆえあなたは、『わが訴えはわが神に顧みられない』と言うか。

あなたは知らなかったか、あなたは聞かなかったか。

主はとこしえの神、地のはての創造者であって、

弱ることなく、また疲れることなく、その知恵ははかりがたい。」

(イザヤ書四〇ノ一二―二八)

わたしたちの神の偉大さ

聖霊によって預言者に与えられた言葉の中から神の偉大さについて学ぼう。預言者イザヤは、こう言っている。

「ウジヤの王の死んだ年、わたしは主が高くあげられたみくらに座し、その衣のすそが神殿に満ちているのを見た。その上にセラピムが立ち、おのおの六つの翼をもっていた。その二つをもって顔をおあい、二つをもって足をおあい、二つをもって飛びかけり、互に呼びかわして言った、『聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主、その栄光は全地に満つ。』その呼ばわっている者の声によつて敷居の基が震い動き、神殿の中に煙が満ちた。

そのときわたしは言った、『わざわざいなるかな、わたしは滅びるばかりだ。わたしは汚れたくちびるの者で、汚れたくちびるの民の中に住む者であるのに、わたしの目が万軍の主なる王を見たのだから。』

このときセラピムのひとりが火ばしをもって、祭壇の上から取った燃えている炭を手に携え、わたしのところに飛んできて、わたしの口に触れて言った、『見よ、これがあなたのくちびるに触れたので、あなたの悪は除かれ、あなたの罪はゆるされた』(イザヤ書六ノ一七)。

「主よ、あなたに並びうる者はありません。

あなたは大きいなる者であり、あなたの名もその力のために大きいなるものであります。

万国の王であるあなたを恐れない者がありませんか。」

(エレミヤ書一〇ノ六、七)

「主よ、あなたはわたしを探り、わたしを知りつくされました。

あなたはわがすわるをも、立つをも知り、遠くからわが思いをわきまえられます。

あなたはわが歩むをも、伏すをも探し出し、

わがもろもろの道をことごとく知っておられます。

わたしのしたに一言もないのに、主よ、あなたはことごとくそれを知られます。

あなたは後から前からわたしを囲み、わたしの上にみ手をおかれます。

このような知識はあまりに不思議で、わたしには思いも及びません。

これは高くて達することはできません。」

(詩篇一三九ノ一―六)

「われらの主は大いなる神、力も豊かであって、その知恵ははかりがたい。」(詩篇一四七ノ五)

「人の道は主の目の前にあり、主はすべて、その行いを見守られる。」(箴言五ノ二二)

「神は深妙、秘密の事をあらわし、暗黒にあるものを知り、光を自身の中に宿す。」(ダニエル書二ノ二二)

「世の初めからこれらの事を知らせておられる主」(使徒行伝一五ノ一八)。「『だが、主の心を知っていたか。だれが主の計画にあずかったか。また、だれが、まず主にあたえて、その報いを受けるであろうか。』万物は、

神からいで、神によって成り、神に帰するのである。栄光がとこしえに神にあるように」(ローマ一ノ三四―三六)。

「世々の支配者、不朽にして見えざる唯一の神」(テモテ第一・一ノ一七)。「神はただひとり不死を保ち、近づきがたい光の中に住み、人間の中でだれも見えた者がなく、見ることもできないかたである。ほまれと永遠の支配とが神にあるように」(テモテ第一・六ノ一六)。

「その威厳はあなたがたを恐れさせないであろうか。」

(ヨブ記二三ノ一一)

彼を恐れる恐れがあなたがたに臨まないであろうか。」

「神は天に高くおられるではないか。」

(同二三ノ一二)

見よ、いと高き星を。いかに高いことよ。」

「その軍勢は、数えることができるか。」

(同二五ノ三)

何物かその光に浴さないものがあるか。」

「われわれの悟りえない大いなる事を行われる。」

彼は雪に向かつて『地に降れ』と命じ、夕立および雨に向かつて『強く降れ』と命じられる。

彼はすべての人の手を封じられる。

これはすべての人にみわざを知らせるためである。…

雲はそのいならずまを散らす。

これは彼の導きによってめぐる。

彼の命じるところをことごとく世界のおもてに行うためである。

神がこれらをこさせるのは、懲らしめのため、

あるいはその地のため、あるいはいつくしみのためである。」

「…これを聞け、立って神のくすしきみわざを考えよ。」

あなたは知っているか、神がいかにこれらに命じて、その雲の光を輝かされるかを。

あなたは知っているか、雲のつりあいと、知識の全き者のくすしみわざを。…

あなたは鍔た鏡のように堅い大空を、彼のように張ることができるか。

われわれが彼に言うべき事をわれわれに教えよ、

われわれは暗くて、言葉をつらねることはできない。…

光が空に輝いているとき、風過ぎて空を清めると、人々はその光を見ることができない。

北から黄金のような輝きがでてくる。

神には恐るべき威光がある。

全能者は―われわれはこれを見いだすことができない。

彼は力と公義とにすぐれ、正義に満ちて、これを曲げることはない。

それゆえ、人々は彼を恐れる。」

(同三七ノ五―二四)

「われらの神、主にくらぶべき者はだれか。

主は高き所に座し、遠く天と地とを見おろされる。」

(詩篇一一三ノ五、六)

「主の道はつむじ風と大風の中にあり、雲はその足のちりである。」

(ナホム書一ノ三)

「主は大いなる神で、大いにほめたたえらるべきです。

その大いなることは測り知ることができません。

この代はかの代に向かってあなたのみわざをほめたたえ、

あなたの大能のはたらきを宣べ伝えるでしょう。

わたしはあなたの威厳の光栄ある輝きと、あなたのくすしきみわざとを深く思います。

人々はあなたの恐るべきはたらきの勢いを語り、

わたしはあなたの大いなることを宣べ伝えます。

彼らはあなたの豊かな恵みの思い出を言い表わし、あなたの義を喜び歌うでしょう。」

「主よ、あなたのすべてのみわざはあなたに感謝し、

あなたの聖徒はあなたをほめまつるでしょう。

彼らはみ国の栄光を語り、あなたのみ力を宣べ、あなたの大能の働きと、

み国の光栄ある輝きとを人の子に知らせるでしょう。

あなたの国はとこしえの国です。

あなたのまつりごとはよろずよに絶えることはありません。…

わが口は主の誉を語り、すべての肉なる者は世々かぎりなく

その聖なるみ名をほめまつるでしょう。」

(詩篇一四五ノ三―二二)

僭越に対する警告

神がどんなかたであるかを知り、また自分自身が神の前にいかなる者であるかを知れば知るほど、わたしたちはその前に恐れおののくであろう。神が神聖であると宣言されたものに対して、僭越にも無遠慮にふるまった古代の人々の運命から現代人は警告を受けとらねばならない。ペリシテの国から契約のはこが帰ってきたとき、イスラエル人が近づいてあげようとして、その不信心な大胆さをきびしく罰せられた。

またウザにくだった罰を考えてみなさい。ダビデの治世に契約のはこがエルサレムに運ばれて行くときに、ウザははこが揺れないように手をかけたが、神の臨在の象徴に対して手をかけた僭越さのために直ちに撃ち殺されたのである。

神の臨在の神聖さ

モーセが、燃えるしばの中に神がおいでになるとは思わず、この不思議な光景を見ようとふり返ったとき、命令が与えられた。

『ここに近づいてはいけない。足からくつを脱ぎなさい。あなたが立っているその場所は聖なる地だからである。』…モーセは神を見ることを恐れたので顔を隠した（出エジプト記三ノ五、六）。

「さてヤコブはベエルシバを立て、ハランへ向かったが、一つの所に着いたとき、日が暮れたので、そこに一

夜を過ごし、その所の石を取ってまくらとし、そこに伏して寝た。

時に彼は夢をみた。一つのはしが地の上に立っていて、その頂は天に達し、神の使たちがそれを上り下りしているのを見た。そして主は彼のそばに立って言われた、『わたしはあなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが伏している地を、あなたと子孫とに与えよう。…わたしはあなたと共にいて、あなたがどこへ行くにもあなたを守り、あなたをこの地に連れ帰るであろう。わたしは決してあなたを捨てず、あなたに語ったことを行うであろう。』ヤコブは眠りからさめて言った『まことに主がこの所におられるのに、わたしは知らなかった。』そして彼は恐れて言った、『これはなんという恐るべき所だろう。これは神の家である。これは天の門だ』(創世記二八ノ一〇―一三、一五―一七)。

地上における神の住居の象徴であった荒野の幕屋、および宮の聖所の中で一つの室が神の臨在の場所として神聖なものとされていた。その入口にかかっていたケルビムの織りだされている幕はあるひとりの人以外はだれもあげてはならなかった。その幕をあげ、至聖所の神聖な場所にはいることは死を意味した。贖罪所の上には至聖所の栄光、すなわち、どんな人間でもそれをながめれば死ななければならない栄光があったからである。一年に一回、至聖所に奉仕するように定められていた日に、大祭司はおののきながら神の前に出るのであるが、そのときは香煙がその栄光をおおって彼の目に見えないようにするのであった。幕屋の庭全体が静粛となり、祭司はだれひとり祭壇に奉仕せず、礼拝者の群れは沈黙のうちに恐れおののきながら、こうべをたれ、神のあわれみを祈ったのである。

「これらの事が彼らにおこったのは、他に対する警告としてであって、それが書かれたのは、世の終りに臨んで

いるわたしたちに対する訓戒のためである」(コリント第一・一〇ノ一)。

「しかし、主はその聖なる宮にいます、全地はそのみ前に沈黙せよ。」(ハバクク書二ノ二〇)

「主は王となられた。」

もろもろの民はおののけ。

主はケルビムの上に座せられる。

地は震えよ。主はシオンにおられて大いなる神、主はもろもろの民の上に高くいらせられる。

彼らはあなたの大いなる恐るべき名をほめたたえるであろう。

主は聖でいらせられる。」

(詩篇九九ノ一―三)

「主のみくらは天にあり、その目は人の子らをみそなわし、

そのまぶたは人の子らを調べられる。」

(同一一ノ四)

「主はその聖なる高き所から見おろし。」

(同二〇二ノ一九)

「そのおられる所から地に住むすべての人をながめられる。

主はすべて彼らの心を造り、そのすべてのわざに心をとめられる。」(同三三ノ一四、一五)

「全地は主をおそれ、世に住むすべての者は主を恐れかしこめ。」(同三三ノ八)

神をさがし求めても人間は神を見いだすことはできない。だれも思いあがり、神の栄光を隠している幕をあげてはならない。「そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい」(ローマ二ノ二三)。神の力が隠されているのは

神のあわれみの証拠である。神の臨在を人の目にふれぬようにしている幕をあげるならば人間は死ぬからである。どんな人間の頭脳も万軍の神がおすまいになり、働かれている神秘を透察することはできない。さとることができないのは神がおあらわしになったことだけである。理性より更に上にある権威を理性は認めなければならない。心と知能は偉大なる、「わたしは有る」という者に頭をさげなければならないのである。

第二十七章 教育の真偽

悪の一味のかしらは神のみ言葉をかくし、人間の説を目につくようにしようとたえず働いている。彼は「これは道だ、これに歩め」と言われる神のみ声を人間に聞かせまいとする（イザヤ書三〇のノ二一）。そして誤った教育を通して天の光をおおい隠そうとできるかぎりのことを尽している。

神を認めない哲学的思索や科学的研究が多くの人を懐疑論者に行っている。今日の学校では学者が研究の結果として得た結論を注意深く教え、ていねいに説明しているが、それにつれて、これらの学者が正しいならば聖書は正しいものではありえないという印象を明らかに与えている。懐疑論は人間の頭には魅力的である。青年は彼らの想像を魅惑する独立的精神をそこに発見し、それにだまされ、サタンに勝利を得させてしまう。サタンは青年の心にまかれた疑惑の種を一つ一つ養い、成長させ、実を結ばせる。そして間もなく多数の無神論者が生れるのである。

人間の心は悪に傾く傾向があるため、若い人の頭に懐疑論の種をまくのは非常に危険である。神に対する信仰を弱めるものはすべて誘惑に抵抗する力を奪うものである。それは罪に対してただ一つしかない真の防備をとり去ってしまう。最も偉大な必要は、日常生活の中に神の品性をあらわし、それによって神をあがめることであると青年

に教える学校である。わたしたちの生涯が神の目的を果すためには、神のみ言葉とみわざを通して神を学ぶ必要がある。

無 神 論 の 著 者

教育を得るためには、多くの人が、無神論者の著書を研究することが必要であると考えている。彼らはこうした著書にりっぱな思想が多くしるされていると考えるからである。しかし、りっぱな思想を起させるものはだれであろう。それは神に外ならぬのであって、神はすべての光の源である。あらゆる真理が自由に得られるのに、どうしてわざわざかばかりの知的真理を求めんがために、無神論者の著作に含まれている多くの誤謬の中をほねおって進む必要があらうか。

神の統治にさからう者が、ときどき発揮するあのような知恵をどうして持つようになるのだろうか。サタン自身は、天の宮で教育を受け、悪いことと共に善の知識を持っている。彼は尊いものと汚れたものを混ぜ合わせ、そこからあざむく力を所有しているのである。しかしサタンが、天の輝く服装をしているからといって、わたしたちは彼を光の天使として受け入れるだろうか。誘惑者は、彼の方法で教育され、彼の精神を吹き込まれ、彼の働きに代り者たちを持っている。わたしたちは彼らと協力すべきであろうか。教育を上げるための重要手段だと言って、無神論者の利口な考えを理解するために費す時間と努力を、神のみ言葉の中にある尊い問題の研究に用いるならば、今日、暗黒と死の陰にいる多くの人が生命の光である方の栄光を楽しむことであらう。

歴史と神学の著作

多くの人はキリスト教の働きをする準備として、歴史や神学の著書に関する広い知識を得なければならないと思
い、この知識が福音を教える助けになるように考えている。しかし人間の説をほねおって研究することは、伝道を
強めるよりもむしろ弱める傾向がある。歴史や神学の著書がどっしりと書齋に満ちているのを見ると、なぜ、パン
にもならぬもののために金銭を費すのかと思う。ヨハネによる福音書六章に、「わたしが命のパンである。わたし
に来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決してかわくことがない」(三五節)「わたしは天から
下ってきた生きたパンである。それを食べる者は、いつまでも生きるであろう」(五一節)。「信じる者には永遠の
命がある」(四七節)。「わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である」と言われている(六三節)。

歴史の研究には非難してはならないものもある。宗教歴史は預言者の学校の一つの課目であつた。神が各国民を
取り扱われた記録の中にエホバの足跡が調べ出された。今日もそのように、わたしたちは地上の国々に対する神の
処置を考えなければならない。歴史の中に預言の成就を見、偉大な改革運動の中に神の摂理を学び、最後の大争闘
に入ろうとしている国々の間に起る事件の経過を理解すべきである。

こういう研究は人生に関する広範な見解を与える。また人間の相互関係や依存の関係を悟らせ、わたしたちが社
会や国家の大家族として、まことに驚くばかり結び合わされていること、ひとつの悩みや墮落が全体にどれほど影
響し、損失となるかを悟らせるものである。

しかし、一般に学ばれている歴史は人間の功績、戦争の勝利、権威と高位の獲得に関して書かれているものであって、人生の諸問題における神の働きは無視されている。各国の興亡の中に神のみ旨が遂行されているのを学ぶ者はほとんどいない。

人々が学び、教えている神学も、大部分、人間の思索の記録にすぎず、ただ「無知の言葉をもって、神の計りごとを暗くする」に役だっただけである（ヨブ記三八ノ二）。こうした本を多く集める動機は、頭脳や心を養うためというよりも、むしろ哲学者や神学者と知り合いになり、キリスト教を学問的な用語や文章で人々に示そうとするためである場合が多い。

あらゆる書物がすべてきよい生活の目的に役だつものではない。「わたしに学びなさい」と大教師は仰せられている。『わがくびきを負いて』わたしの謙そんと身を低くすることを学びなさい」と。知的な誇は命のパンの欠乏のために滅びようとしている魂に接するのに何の助けにもならない。こうした著書を研究して、キリストから学ぶべき実際の教訓の代りにしているのである。このような研究の結果は、人々にかてを与えることができないとともに、極度に頭脳を疲らせての研究であつたにしても、救霊事業の成功にはほとんど役だたない。

救い主は「貧しい人々に福音を宣べ伝え」るためにこられた（ルカ四ノ一八）。人を教えるにあたっては最も単純な言葉、明白な象徴を用いられた。したがって「大ぜいの群衆は、喜んでイエスに耳を傾けていた」と言われている（マルコ一二ノ三七）。今日、神のために働こうとしている人は、キリストが言われた教訓を深く察知する必要がある。

生ける神のみ言葉はあらゆる教育の中で最高のものである。伝道に従事する者は命のパンを食さなければならぬ。それは彼らに霊的な力を与え、あらゆる階級の人に伝道する準備となる。

古典文学

大学で、多数の青年が生涯のうちの最もよい才月を大部分、ギリシア語とラテン語の勉強に費し、その研究の間に異教の文学の悪思想によって頭脳や品性が形づくられていくのであるが、一般的に見て、これらの国語研究にはどうしても異教文学を読むことだとする考えが多い。

古文に通じている人は「ギリシアの悲劇は近親相姦、殺人、肉欲的復讐心に燃えた神々に対する人身御供の話にみちている」と言っている。そういうものから得た教育はなくした方が社会のためにずっとよい。「人は熱い火を踏んで、その足が、焼かれないであろうか」(箴言六ノ二八)。「だれが汚れたもののうちから、清いものを出すことができようか、ひとりもない」(ヨブ記一四ノ四)。神の律法の原則に反抗する人が教育にあたっている場合、その青年のクリスチャン的品性は発達すると期待できようか。

束縛を拒否し、無分別な娯楽、放蕩、罪惡の中に飛び込む学生はこうした学問によって見せつけられていることを模倣したにすぎない。ギリシア語やラテン語の知識が必要な職業もあるから、これらの語学を学ばねばならない者もいるが、実際に役だたせるために重要な知識は汚れた文学や人を汚す文学を学ばなくても獲得できるものである。

またギリシア語とラテン語の知識は多くの人にはいらぬ。すたれた国語の研究は、心身の全能力を正しく用い

ることを教える課目の勉強に対しては第二義的なものとすべきである。人生の実際的な仕事の訓練をおろそかにして、すたれた国語や書物の知識を得るために時間を費すことは、いずれの面から見ても愚かなことである。

学校を卒業するとき、生徒は何を持ち、どこへ行って何をしようとするのだろうか。他人を教えることができる知識があるのだろうか。真の父や母になれる教育を受けたのだろうか。賢明な教師として家長の地位に立つことができようか。教育の名にふさわしいことは、ただひとつ、若い青年男女をキリストのごとき者とするように導き、人生の責任を負うに適する、家長として立つにふさわしい者とすることである。こういう教育は異教の古典文学の研究から得られるものではない。

扇 情 文 学

今日、人気のある出版物は多く、扇情的な話を満載しており、青年に罪惡を教え、破滅の道へと彼らを導いている。まだ若い子供も犯罪に関する知識に長じている。彼らは読みものから惡に導かれる。本に書いてある動作を頭の中で実演しているうちに、ついに罪惡を犯し、罰をのがれてみよつという野心が起るのである。

想像上のひらめきから子供や青年たちがその活発な頭腦の中に描く未来についての光景は現実的なものである。その中には革命があり、法律や克己心の防御をこわす各種の行動が描写されると多くの者はその話の精神に捕われ、こうした扇情文学者の描写するところよりも、できればもっとひどい犯罪を犯すようになる。こういうような感化によって社会は乱れてきている。不法の種が広くまかれ、その結果、犯罪が発生しても驚くにあたらない。

恋愛小説

恋愛小説や、つまらない刺激的な小説もまた、読者には同様な災となる。著者は作品の中に宗教的な思想を織り込み、道徳的な教訓を与えろと言つかも知れないが、そういうことはその背後に隠されている愚かさや無価値を隠すに役だつだけである。

社会には誘惑的な誤謬に満ちた書籍があふれている。青年は聖書はにせものであると宣告しているものを真理として受け、魂を破滅に導く欺瞞を愛し、これに執着する。

高級な小説

真理を教え、大きな罪惡を暴露する目的で書かれた小説がある。これらの著書はよいことをしている一面、また無限の害をも及ぼしている。その中にはとくに青年の想像力を刺激し、危険に満ちた思想を起させる感情や大げさな描写があり、こうして描写された光景は、彼らの思想の中にくりかえし見られるのである。こういう読み物は頭脳を役だたぬものにし、霊的な働きをできなくしてしまう。聖書に対する興味を失わせ、天の事物を思ふ余地をなくする。描かれた不純な光景を思い続けるうち、情欲が刺激され、ついに罪を犯すようになる。

不純な思想を思い浮べさすようなことを書いてない小説、または、すぐれた原則を教えるために書かれたものでも、害がある。それはただ話の筋を追って、軽率な表面的な読書の習慣を強めるだけである。こうして合理的な考

え方や活発な思考力を失わせ、人生の義務や運命の大問題を静かに考えられぬようにする。

小説を読むことは単なる娯楽を愛する気持を養って、人生の実際的な仕事をきらうようにしてしまう。小説の刺激的な、また人を酔わせる力によって、知的、肉体的疾患を招くことも少なくない。多数のあわれな、なおざりにされている家庭や長期療養者や精神病患者は小説を読む習慣がもとでそうなのである。

扇情的な、あるいは無価値な書物から青年の気持をそらせるために高級な小説を与えなければならぬと人はよく言うが、それはちょうど、ウィスキーやブランデーの代りにぶどう酒、ビール、サイダーのような軽い酒を飲ませて、飲酒の習慣をなおそうとするようなものである。この様なことをすれば、さらに強度の刺激物を求める欲求を絶えず育成することになる。飲酒家にとってただ一つしかない安全な方法、また節制家の唯一の防御が完全禁酒であるように小説愛読家にも同一法則があてはまるのであって、完全に禁止することがその人にとって唯一の安全策である。

伝説とお伽話

今日、青年子女の教育にお伽話、伝説、小説が広く用いられ、この種の書籍が学校で使用され、また多くの家庭にもある。クリスチャンの両親はどうして、偽りに満ちた本を子供に読ませることができようか。両親の教えと全く矛盾した話の意義を子供が尋ねるとき、その話は実話でないと答えるであろうが、そこに生じた悪い結果を除去する事はできない。こうしたものは人生のまちがった見解を与え、現実的でないものを望む気持を起させ養成する。

今日、こういう書物が広く読まれていることはサタンの巧妙な計略の一つであって、彼は老若男女をとわず、人の心を、品性を築きあげる大きな働きからそらせようと努めている。サタンは魂を滅ぼしてしまうところの欺瞞を世に満たし、青年子女をかすめ去ろうとたくらんでいるので、青年の気持を神のお言葉からそらし、サタンに対する防御となる真理の知識を獲得させまいと妨げる。

真理を曲解させるようなことを書いた書籍は子供や青年の手に決して与えてはならない。わたしたちの子供が教育を受けている過程において、罪の種となる思想を受けさせないようにすべきで、成熟した頭脳の持ち主もこういう書物に触れなければ、ずっと安全であり、そうした正しい模範と感化は青年を誘惑から守りやすくする。

ず っ と き よ い 泉

わたしたちは現実的で神聖なものを豊富に持っているので、知識に飢えかわいても汚れた泉に行く必要はない。主はこう言われている。

「あなたの耳を傾けて知恵ある者の言葉を聞き、かつ、わたしの知識にあなたの心を用いよ。…
あなたが主に、寄り頼むことのできるように、わたしはきょう、これをあなたにも教える。」

(箴言二二ノ一七―一九)

「わたしは、勧めと知識との三十の言葉をあなたのためにしるしたではないか。
それは正しいこと、真実なことをあなたに示し、

あなたをつかわした者に、真実の答をさせるためであつた。」

(同二二ノ二〇、二一)

「主はあかしをやコブのうちにたて、おきてをイスラエルのうちに定めて、その子孫に教うべきことをわれらの先祖たちに命じられた。」

(詩篇七八ノ五)

「主の光榮あるみわざと、その力と、主のなされたくすしきみわざとをきたるべき代に告げるであらう。」

(同七八ノ四)

「これは次の代に生れる子孫がこれを知り、

みずから起つて、そのまた子孫にこれを伝え、彼らをして神に望みをおき。」

(同七八ノ六、七)

「主の祝福は人を富ませる、主はこれになんの悲しみをも加えない。」

(箴言一〇ノ二二)

キリストの教え

キリストもまた、真理の原則を福音の中にそのようにお示しになった。キリストの教えの中に神のみくらから流れ出る純潔な水を飲むことができる。彼は従来、あらわされたものよりもはるかにまさった知識を人に与え、他の発表をすべて完全に目だたなくしてしまうほどの知識を与えることもおできになったのである。また、つぎつぎに奥義をあらわし、その驚くべき黙示に終末に至るまでの各時代の人間が積極、熱烈に思いを集中するようにさせることもおできになったのである。しかし、キリストは救いの科学を教える時間を一瞬たりとも減らそうとは考えられなかった。その時間もその力も生命もただ人間の魂を救う働き的手段として用いられたのであった。彼は失われ

た者を尋ねて救うためにこられたのであって、この目的から離れられることはなかった。キリストは、なにものによってもそのみ心を転じようとはなさらなかった。

キリストは、使うことのできる知識だけをお与えになった。人間に対するその教えは、実生活における彼らの境遇に必要な事項に限られていた。せんさく的な質問をもってきた者の好奇心を満足させることなく、こつした質問のおりをのがさず、厳肅な、重要な訴えの機会となさった。知識の木から実を得ようとする熱心な人々にいのちの木の実を提供された。神に至る道以外はすべての道がとざされているのを人々は知った。永遠の生命の泉以外は、あらゆる泉が封じられていたのである。

わたしたちの救い主はその時代のラビの学校に行くようにとは、だれにもお勧めにならなかった。「という」とか、「こう言われている」と、絶えずくり返しているうちに頭脳が腐敗するからであつた。そうだとすれば、もつとすぐれた確実な知恵が自分に得られるのに、どうして人間の不安全な言葉を高い知恵として受け入れなければならないのだろうか。

わたしが見た永遠の事物と人間の弱さはわたしの頭に深い印象を与え、わたしの生涯の働きを左右した。人間が称賛され、あがめられるべき理由をわたしは知らない。世的なことに賢明な人やいわゆる偉大な人の説に信頼し、これをあがめる理由がわたしにはわからない。神の光を受けていない者が神の計画や方法に関する正しい観念をどうして持つことができよう。彼らは神を完全に否定し、その存在を無視するか、あるいは自分の有限な観念によって神の力を制限するかである。

天地を創造し、空に星を並べ、日と月に働きを定められた神から教えを受ける方をわたしたちは選ぶ。

利用できる知識

青年が知能力を最高度に發育させなければならないと考えるのは正しいことで、神が制限しておられない教育をわたしたちも制限しない。しかし、わたしたちが学び得たところを神のほまれと人類の利益のために用いなければ何にもならない。

非常に頭を使いながら、実際に応用しない勉強で頭を充満させるのはよくない。そういう教育は生徒にとって損失である。有用なことに適する者となり、自己の責任を果しうるように勉強しようとする気持を低下させるからである。どれほど多くの理論もそれが単なる理論にすぎないならば、実際の訓練の方がはるかに価値がある。知識を得ただけでは十分でなく、それを正しく使用する能力がなければならない。

比較的無用な教育のために多くの人が費す時間と金銭と勉強を、人間を実際的な者とし、人生の責任を負うのに適した人とする教育を受けさすために用いるべきで、この様にしてなされた教育こそ、最高の価値があるのである。

心の教育

必要なのは頭脳と心を強くする知識、わたしたちを一段とりつばな男女とする知識である。心の教育は単なる教科書の勉強よりもはるかに重要である。わたしたちが生存している世界を知ることはいよいことであり、重要なこと

であるが、もし永遠のことを全然忘れてしまうなら、取り返しのつかぬ失敗をする。

学生が全力をあげて知識を獲得しても、もし神を知らず、自分の身を支配している法則に従わなければ、自分を滅ぼすのである。悪習慣によって自己判断の力を失い、自制力がなくなり、自分に最も関係が深い問題を正しく考えることができなくなる。自分の心身を取り扱うのに無分別で、不合理なことをする。正しい道義を養成しないために、この世においても、きたるべき国においても破滅を招くのである。

青年が自分の弱さを悟るならば、力の源泉は神にあることを見いだす。神に教えを求めれば、神の知恵で賢くなり、その生涯は社会に対して豊かな祝福となる。しかし単なる世的な、思索的な研究に没頭し、その結果神から離れるならば、人生を豊かにするものを失ってしまうのである。

第三十八章 眞の知識を求めることの重要性

わたしたちが戦っている大闘争の危険な状態を今よりもっとはつきり知らなければならぬ。神のみ言葉の眞理の価値をさらに完全に悟り、大欺瞞者によって眞理から心が奪われてゆく危険性をよく理解すべきである。

わたしたちの贖罪のために要求された犠牲の無限の価値は罪が恐るべき悪であることを示している。罪によって人間の全身が障害をきたし、頭脳が乱れ、想像力が腐敗する。罪が心の能力を低下させ、外部からの誘惑に反応するものが心の中にあるため、人間は知らず知らず、悪に向かうのである。

わたしたちのために払われた犠牲が完全であつたように罪の汚れから回復することも完全であるべきである。神の律法は悪い行動はいかなることでも許さない。その断罪を免れうる不正は一つもない。福音の倫理は傷なき神の品性以外には標準を認めない。キリストの生涯は、律法のすべてのいましめの完全な成就であつた。彼は「わたしがわたしの父のいましめを守つた」と申された（ヨハネ一五ノ一〇）。その生涯は服従と奉仕の模範である。神だけが人の心を新しくすることができる。「あなたがたのうちに働きかけて、そのねがいを起させ、かつ実現に至らせるのは神であつて、それは神のよしとされるところだからである」（ピリピ二ノ一三）。しかしわたしたちは、「自

分の救いの達成に努めなさい」と命じられている。

考慮を必要とする働き

わずかな、断片的な努力によっては誤りを正すことも、行いを改めることもできない。品性をきずくのは一日や一年の仕事ではなく、一生の仕事である。自己に打ち勝ち、きよくなり、天国にはいるための戦いは一生の戦いであって、絶えざる努力と活動なしには、神聖な生活の進歩も、勝利者の冠を獲得することもできない。

高い状態から人間は墮落したという最大の証拠は、元の状態に帰るのにこれほど努力がいるという事実である。一瞬間の軽率、不注意な行動によって悪の力に支配されることがあるが、その鎖を破ってさらにきよい生活に達するには一瞬間ではできないのである。決心ができ、実行し始めても、それを完成するには苦勞と時間と不屈の努力と忍耐と犠牲がいる。

わたしたちは衝動によって行動してはならない。一瞬も警戒をゆるめてはならない。数知れぬ誘惑の攻撃を受けるのであるから、かたく抵抗しなければ征服されてしまう。仕事が未完成のまま人生の終りに至るならばそれは永遠の損失である。

使徒パウロの生涯は自己との絶えざる戦いであつた。彼は「わたしは日々死んでいる」と言い、日々、その意志と欲望は義務と神の意志と戦つたのである。そして彼は自分の性癖に従わないで、自分の性質をどんなに苦しめようと、神のみ旨を果したのであつた（コリント第一・一五ノ三一）。

戦いの多いその生涯の終りにあたって、彼は、自分の戦いと勝利を振り返って「わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。今や、義の冠がわたしを待っているばかりである。かの日には、公平な審判者である主が、それを授けてくださるであらう」と言うことができた（テモテ第二・四ノ七、八）。クリスチャンの生涯は戦いと進軍である。この戦いには休息がない。つねに努力し、忍耐をしなければならぬ。サタンの誘惑に勝利してゆくには絶え間ない努力がいる。クリスチャンの高潔は何ものも抵抗できぬ熱心さをもって求むべきものであり、確固不動の決意をもって保持しなければならない。

だれでもきびしい、不撓の努力をせずに向上する者はいない。すべてが自己のためにこの戦いに参加しなければならない。だれも代りに戦うことはできない。わたしたち個人個人が自己の戦いの結果に対して責任をもつのである。ノア、ヨブ、ダニエルがそこに居たとしても、彼らの義によっておすこや娘を救うことはできないのである。

精通すべき科学

精通していなければならないキリスト教の科学がある。それは天が地よりも高いように、どんな人間の科学よりも、はるかに深く、広く、高い学問である。わたしたちは生来の性癖に調和しない方法で神に仕えなければならず、そのため、精神を鍛え、教育を施し、訓練しなければならないからである。悪に対する遺伝的あるいは後天的な性癖を征服しなければならない。キリストの学校の生徒となるために今までの教育や訓練を放棄しなければならぬこともよくある。わたしたちの心は教育され、神に堅く立つようにされなければならない。誘惑に抵抗し得られるだ

けの思考の習慣を形成すべきであって、上を見ることを学ばなければならない。神のみ言葉の原則、すなわち、天のように高い、永遠に至る原則がわたしたちの日常生活にいかなる意義をもつかを悟るべきであって、すべての行動、言語、思想がこの原則に一致しなければならない。すべてのことがキリストと調和し、キリストに服従していなければならない。

聖霊の尊い美德は一瞬間に発達するものでなく、勇氣、不屈、謙そん、信仰、神の救済力に対する不動の信念は長年の体験によって得られるものである。きよい努力の生活と確固として正義を守ることによって神の子の運命が決するのである。

猶予している時はない

わたしたちには時間の猶予がない。恵みの期間がいつ終るか分からない。どんなに長く見積っても、この世の生涯は短く、いつ死の矢が心臓をつらぬくかわからない。この世と世に対するあらゆる興味を捨てるようにいつ要求されるかわからない。永遠はわたしたちの目の前にあって、その幕は今にもあがれようとしている。ここ数年のうちに、現在、生きている者の中に数えられている人間ひとりひとりに、次の命令が発せられるのである。

「不義な者はさらに不義を行い……義なる者はさらに義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うままにさせよ」(黙示録二二ノ一一)。

わたしたちは準備ができているだろうか。天の支配者、律法をお与えになる方である神と、神がご自分の代表と

してこの世につかわされたイエス・キリストを、わたしたちはよく知っているだろうか。自分の生涯の働きが終ったとき、模範であるキリストのように、わたしたちもこう言えるだろうか。

「わたしは、わたしにさせるためにお授けになったわざをなし遂げて、地上であなたの栄光をあらわしました。……わたしは……み名をあらわしました」(ヨハネ一七ノ四―六)。

天の使は自分のこと、この世のことからわたしたちの心をそらせようとしている。彼らをむだに働かさないようになしように。

散漫な考え方をしていた者は改めなければならない。「それだから、心の腰に帯を締め、身を慎み、イエス・キリストの現われるときに与えられる恵みを、いささかも疑わずに待ち望んでいなさい。従順な子供として、無知であつた時代の欲情に従わず、むしろ、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なる者となりなさい。聖書に、『わたしが聖なる者であるから、あなたがたも聖なる者になるべきである』と書いてあるからである」(ペテロ第一・一ノ一三―一六)。

思想を神に集中させるべきである。生れつきの悪性癖に勝利するためには、熱心な努力を払わなければならない。わたしたちの努力、克己、忍耐はわたしたちが追求している目的の無限な価値に相当したものであるべきである。キリストが勝利されたように勝利しなければ、いのちの冠は獲得できない。

自己放棄の必要性

人間にとって最大の危険は自己欺瞞にあちいり、自己満足に溺れ、そのために自分の力の源泉である神から離れ

ることである。わたしたちの生来の性癖は神の聖霊によって矯正されなければ、その中に、道德的死をきたらす種を持っており、わたしたちが神としっかりつながっていないければ、放縱、自己愛、罪への誘惑による汚れた影響に抵抗することはできない。

キリストから力を得るには自分の必要を認識しなければならない。自分自身をほんとうに知らなければならない。キリストは自分が罪びとであると知っている者でなければ救うことはできない。自分が全く無力であることを知り、自己信頼の念を放棄するときに初めて神の力にすぐれるのである。

この自己放棄はクリスチャンの生涯の最初にだけするものではなく、天国に向かって一步一步進むたびに、新しくすべきことからである。わたしたちのなしうる良いわざはすべて自分以外の力によるものである。だから、絶えず心から神を求め、神の前につねに熱心に罪を告白し、謙そんにならなければならない。危険がわたしたちを取り囲むときも、自己の弱さを感じ、信仰の手をのべて、力ある主の手にすぐるときに初めて安全なのである。

真の知識の源であるキリスト

注意をひく、多くの話題を避けなければならない。時間を取り、せんさく心を起させ、しかもその結果のむなし問題が世の中には多く、比較的つまらぬことに細心の注意と努力を払うことがよくあるが、それは最高の問題に對して払うべきものである。

新しい説を受け入れても、それは心に新しい生命をもたらさない。きわめて重要な事実や学説をよく学んでも、

実際に応用しなければ価値はない。わたしたちは自分の心に栄養となり、霊的生活を刺激する食物をとる責任を感じる必要がある。

「あなたの耳を知恵に傾け、あなたの心を悟りに向け…

銀を求めるように、これを求め、かくれた宝を尋ねるように、これを尋ねるならば、

あなたは、主を恐れることをさとり、神を知ることができるようになる。…

そのとき、あなたは、ついに正義と公正、公平とすべてのよい道を悟る。

これは知恵が、あなたの心にはいり、知識があなたの魂に楽しみとなるからである。

慎みはあなたを守り、悟りはあなたを保つて。」

(箴言二ノ二一—二二)

「知恵は、これを捕える者には命の木である、これをしっかり捕える人はさいわいである。」

(同三ノ一八)

考えなければならぬ問題は「真理とは何か、わたしたちが、はぐくみ、愛し、尊び、服従すべき真理とは何であるか」という事である。科学に熱心な人は神を見いだそうとして失敗し、失望している。今日、彼らが尋ねなければならぬことは「自分の魂の救いを得ることができる真理は何か」ということである。

「キリストについてどう考えるか」これは最も重要な問題である。あなたは自分の救い主としてキリストをお信じになりますか。キリストは、信じる者には、すべて神の子となる力をお与えになるのである。

キリストは弟子たちに神を示されたが、それは彼らの心に特別な働きが完成するためであり、今日、わたしたち

の心にも神はそうしようと望んでおられる。理論に熱心になりすぎて、救い主の模範の力を見失っている者が大ぜいいる。謙そんな自己否定の働き人であるキリストを見失ってしまう。必要なことはイエスをながめることであって、日々、わたしたちは新たにイエスの存在を知る必要がある。キリストの自己放棄と自己犠牲にさらに近く従わなければならない。

パウロが「わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストがわたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子を信じる信仰によって、生きているのである」と、しるしたときの彼の体験がわたしたちにも必要である（ガラテヤ二ノ一九、二〇）。

品性の中にあらわされる神とイエス・キリストの知識は、天にも地にも、どこにおいても、あらゆるものよりも高貴なものである。それは最高の教育であり、天の都のとびらを開く鍵である。この知識をキリストを着る者がすべて持つことが神の御目的である。

第二十九章 神の言葉を通して受ける知識

聖書全体はキリストの中にあらわれた神の栄光の黙示であり、これを受けて信じ、これに服従するとき、品性を变化させる大きな助けとなる。肉体、知能、霊的な力を強め、人間の生涯を正しい方向に向けるりっぱな刺激であり、矯正力である。

青年でもおとなでも誘惑と罪に実にはやすく陥るのは、彼らが神のみ言葉を学ばず、それについて瞑想しないからである。生活と品性に確固とした意志の力が表わされていないのは、神のみ言葉のきよい教訓をおろそかにするからである。彼らは純潔できよい思想を起させるものに心を向けること、また不純な、真実でないものから心を転ずることのために熱心な努力を払わない。マリヤのように良い方を選び、神なる教師から学ぶために、イエスの足もとにすわる者などほとんどない。心にキリストのみ言葉を学び、それを生活に実行する者が少ないのである。

聖書の真理を受け入れると、頭脳と心は向上する。神のみ言葉を正当に評価するならば、青年も年寄も誘惑に抵抗することができる正しい心と道義の力を持つにいたる。

聖書の中の尊い事柄について教え、話をすべきである。神の思想を学ぶために才能を働かせ、頭脳を敏活にはた

らかせ、人間の臆測による学問を学ぶのではなく、真理である神の学問を学びなさい。他のどんな文学とも、その価値を比較することはできない。

世俗的な人は、神のみ言葉を考えることに喜びを見いださないが、聖霊によって新しくなった人の心には聖書から天の美と光が輝く。世俗的な人の心には荒れはてた荒野のようなものも、霊的な人の心には生ける川の流れる土地となる。

聖書に表わされた神の知識は、わたしたちの子供に教えなければならぬものであって、理性の起り始める最初から、子供にイエスのみ名と生涯についてよく学ばせなければならない。最初の勉強として神が彼らの父であることを教えるべきである。また愛によって服従することが最初の訓練でなければならない。神のみ言葉の中から子供を理解に適し、その興味を起させるような部分を敬けんな態度で、優しく読み聞かせ繰り返すべきである。何よりもまず、キリストの中に表わされている神の愛とその大きな教訓「神がこのようにわたしたちを愛してください」であるから、わたしたちも互に愛し合うべきである」(ヨハネ第一・四ノ一)。

青年には神のみ言葉を頭脳と心のかたとさせ、キリストの十字架をあらゆる教育の科学とし、あらゆる教訓と研究の中心とすべきであって、それを实际生活における日常の経験に織り込ませなさい。こうして救い主は青年にとって日々の伴侶となり、友人となり、すべての思いがキリストにとらえられ、キリストに従わせられるのである。使徒パウロと共に彼らはこのように言えるようになる。

「わたし自身には、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇とするものは、断じてあってはならな

い。この十字架につけられて、この世はわたしに対して死に、わたしもこの世に対して死んでしまったのである」(ガラテヤ六ノ一四)。

体験による知識

このようにして信仰を通し、人間は体験の知識によって神を知るようになる。神のみ言葉の真実さや約束の真理を自分でためしてみるなり、体験するなりして、神が善であることを知るのである。

愛されたヨハネは、自分の経験から知識を得、次のようにあかしをすることができた。

「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て、手でさわったもの、すなわち、いのちの言葉について―この永遠のいのちをわたしたちは見て、そのあかしをし、かつ、あなたがたに告げ知らせるのである。この永遠のいのちは、父と共にいましたが、今やわたしたちに現われたものである―すなわち、わたしたちが見たもの、聞いたものを、あなたがたにも告げ知らせる。それは、あなたがたも、わたしたちの交わりにあずかるようになるためである。わたしたちの交わりとは、父ならびにみ子イエス・キリストとの交わりのことである」(ヨハネ第一・一ノ一―三)。

したがって個人個人は、自分の体験から「神がまことであることを、たしかに認め」とともに(ヨハネ三ノ三三)、自ら見、聞き、感じたキリストの力についてあかしをたてることができる。なおまた、こういうあかしをその人はたてることができる。

「わたしは助けを必要として、それをイエスの中に見いだした。すべての欠乏がおぎなわれ、わたしの心の飢えは満たされた。聖書は、わたしにとってキリストの黙示である。キリストはわたしにとって天来の救い主であるから、わたしは彼を信じる。聖書はわたしの心にとって神の声であることを知ったから、わたしはこれを信じるのである。」

自然界の研究の助け

個人的な体験によって、神と神のみ言葉を知った者は自然科学の勉強をする準備ができたのである。キリストについて「この言葉に命があった。そしてこの命は人の光であった」としるされている（ヨハネ一ノ四）。罪が侵入する前にアダムとエバはエデンの園であざやかな美しい神の光におおわれていて、彼らが近づくものにはすべての光が反射した。神の品性やみわざの認識を暗くするようなものは何もなかった。しかし、誘惑者に負けたとき、その光は彼らから離れた。きよい衣を失うことによって自然界を照していた光を失ったのであって、もはや自然を正しく読みとることはできなくなった。神のみわざの中に表わされている神の品性を見抜くことができなくなった。そこで今日、人間は自然が教えるところを自分で正しく読みとることができない。神の知恵に導かれなければ、人間は、自然を造られた神よりも、自然界や自然の法則をあがめるにいたる。科学に関する人間の考えがしばしば神のみ言葉の教えに矛盾するのはこうした理由による。しかし、キリストのいのちの光を受ける人々には自然界が再び光で照されるのである。十字架から輝く光によってわたしたちは自然の教訓を正しく解釈することができる。

個人的体験によって、神とそのみ言葉を知った者は、聖書の神聖さについて確固とした信仰を持っている。神のみ言葉が真理であることを確かめ、真理は決して矛盾するところがないことを知っている。こういう人は聖書を人間的な科学に関する考え方で吟味せず、誤りのない標準に照して、いろいろな思想を調べるのである。真の科学には神のみ言葉の教えに矛盾するものはあり得ないことを知っている。両者共にその創始者は同じ方であるから、正しく理解するならば、二つが共に調和していることを知る。いわゆる科学的教育が神のみ言葉のあかしに矛盾するというのは単なる人間の推測にすぎない。

こうした研究者にとって、科学的研究は思想と知識の広大な分野へと展開する。自然界の事物を瞑想するとき、真理が新しく理解できるようになる。自然の書と聖書は互に光を反射し合い、この両者はともに、神の品性と神が用いて働かれる法則を人間に教え、それによってさらに神をよく知るように導く。

詩篇記者の体験

詩篇記者の体験は、自然と黙示を通して神のみ言葉を信じるすべての者が持つことのできる体験である。

「主よ、あなたはみわざをもつてわたしを楽しませられました。

わたしはあなたのみ手のわざを喜び歌います。」

(詩篇九二ノ四)

「主よ、あなたのいくつしみは天にまで及び、あなたのまことは雲にまで及び。

あなたの義は神の山のごとく、あなたのさばきは大きな淵のようだ。

主よ、あなたのつくしみはいかに尊いことでしょう。」

(同三六ノ五―七)

「人の子らはあなたの翼のかげに避け所を得…あなたはその楽しみの川の水を彼らに飲ませられる。

いのちの泉はあなたのもとにあり、われらはあなたの光によって光を見る。」

(同三六ノ八、九)

「おのが道を全くして、主のおきてに歩む者はさいわいです。

主のもろもろのあかしを守り心をつくして主を尋ね求め(る)…者はさいわいです。」

「若い人はどうしておのが道を清く保つことができるでしょうか。

み言葉にしたがってそれを守るよりほかにありません。」

「わたしは真実の道を選び、あなたのおきてをわたしの前に置きました。」(同一一九ノ一、二、九、三〇)

「わたしはあなたに向かって罪を犯すことのないように、心のうちにみ言葉をたくわえました。」

(同一一九ノ一一)

「わたしはあなたのさとしを求めたので、自由に歩むことができます。」

(同一一九ノ四五)

「わたしの目を開いて、あなたのおきてのうちのくすしき事を見させてください。」

「あなたのあかしは、わたしを喜ばせ、わたしを教えさとすものです。」

「あなたの口のおきては、わたしのためには、幾千の金銀貨幣にもまさるのです。」

「いかにわたしはあなたのおきてを愛することでしょう。

わたしはひねもすこれを深く思います。」

「あなたのあかしは驚くべきものです。それゆえ、わが魂はこれを守ります。」

(同 一一九ノ一八、二四、七二、九七、一二九)

「あなたの定めはわが旅の家でわたしの歌となりました。」

「あなたの約束はまことに確かです。あなたのしもべはこれを愛します。」

「あなたのみ言葉の全体は真理です。」

あなたの正しいおきてのすべてはとしえに絶えることはありません。」

「わたしを生かして、あなたをほめたえさせ、あなたのおきてを、

わが助けとしてください。」

(同 一一九ノ五四、一四〇、一六〇、一七五)

「あなたのおきてを愛する者には大いなる平安があり、何もかも彼らをつまずかすことはできません。」

主よ、わたしはあなたの救いを望み、あなたの戒めをおこないます。

わが魂は、あなたのあかしを守ります。

わたしはいたくこれを愛します。」

(同 一一九ノ一六五―一六七)

「み言葉が開けると光を放って無学な者に知恵を与えます。」

(同 一一九ノ一三〇)

「あなたの戒めはつねにわたしと共にあるので、わたしをわが敵にまさって賢くします。」

わたしはあなたのあかしを深く思うので、わがすべての師にまさって知恵があります。

わたしはあなたのさとしを守るので、老いた者にまさって事をわきまえます。」

「わたしはあなたのさとしによって知恵を得ました。

それゆえ、わたしは偽りのすべての道を憎みます。」

「あなたのあかしはとこしえにわが嗣業です。まことに、そのあかしはわが心の喜びです。」

(同 一九ノ九八—二〇〇、一〇四、一一一)

さらに明確な神の啓示

神の品性について一段と明りような啓示を求めて、ますます高く進むことはわたしたちの特権である。モーセは「どうぞ、あなたの栄光をわたしにお示しください」と祈ったとき、神は彼を譴責なさらず、その祈りをきき入れ、「わたしはわたしのもろもろの善をあなたの前に通らせ、主の名をあなたの前にのべるであろう」とそのしもべに言われた(出エジプト記三三ノ一八、一九)。

頭脳を鈍らせ、理解力を弱めるのは罪であって、罪がわたしたちの心から一掃されるとき、イエス・キリストの顔にある神の栄光を知る知識の光は、神の言葉を照し、自然界から反射を受け「あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神」をいよいよ完全に示すのである(出エジプト記三四ノ六)。

わたしたちは神の光によって光を見、ついに頭脳も心も霊も神のきよい姿にまで変化させられるのである。

こうして神のみ言葉の神聖な確証をつかむ人には驚くべきことが可能となる。その前には真理の広大な世界が開け大いなる力の源泉がわき、輝かしい事実が出現し、聖書の中にあるなどと思われもしなかった特権や義務がわか

るようになる。へりくだって服従の道を歩み、神のみ心を果す者はすべて、いよいよ神のみ言葉を知るようになる。

研究者は聖書を自分の道しるべとし、原則のために堅くたつならば、どんな高さにまでも到達することを望むことができる。神がすべてであることを認めないときに、あらゆる人間の哲学は混乱と恥辱を招いている。しかし神によって感動を受けた、尊い信仰は力と高尚な品性を与える。神の恵みとあわれみと愛を瞑想するとき、真理はいよいよ鮮明に理解され、心の純潔と思想の明りようを望む気持はさらに高まり、きよめられる。きよい思想の純潔なふんいきにある魂は神のみ言葉を研究し、神と交わり、それによって変化する。真理は非常に大きく、かつ遠大で深く、広く、自分が見えなくなるほどである。心は和らげられ、柔和になり、謙そんで愛を持つようになる。

そしてきよい服従によって生来の力も増大し、いのちの言葉の研究により知能を増し、向上し高尚になる。もしダニエルのように神の言葉を聞き、行う者であれば、彼のようにあらゆる方面の学問に進歩を示しうるのである。心がきよくなり強くなり、あらゆる知的能力が鼓舞される。そして知恵と力の神につながるとき、人間は何になり、何をすることができるかを、感化が及ぶ範囲のすべての人にわからせるにいたる教育と訓練が可能となる。

永遠の生命の教育

地上での終生の仕事は永遠の生命への準備であり、地上で始まった教育はこの世で完成するものではない。それは永遠に続き、たえず進歩し、決して終ることがない。贖罪の計画の中にある神の愛と知恵がますます完全にわかると共に、救い主がその子を生ける水の源に導き、豊かな知識をお与えになるのである。そして、神の驚くべきみ

わざ、すなわち宇宙を創造し、ささえておられる神の力の証拠が日ごとに新しい美しさをもって理解され、みくから輝きでる光に照されて、不思議であったことも明りようとなり、今までどうしてもわからなかったことが簡単なことからであったのを見て、人間は驚きに満たされる。

わたしたちは、今は鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしそのときには、顔と顔を合わせて見るのである。わたしの知るところは、今は一部分にすぎない。しかし、そのときにはわたしたちが完全に知られているように完全に知るのである。

第八部

働き人に必要なこと

第四〇章 日常生活の助け

純粋な、真のクリスチャンの静かな、矛盾のない生活の中には言葉よりもさらに有力な雄弁がある。人物そのものがその話す言葉よりも、もっと力のあるものである。

イエスのところにつかわされた役人は今までこのように語った人はないという報告をもって帰ってきた。しかしそれはイエスのように生活をした人がなかったからである。そのような生活をキリストが送っておられなかったならば、あのように語ることではできなかった。キリストの言葉は純潔で、きよく、愛と同情に満ち、徳行と真実にあふれた心から出たもので、人を信服させる力があつた。

他人に及ぼす影響を決定するのは自分の品性と体験である。キリストの恵みの力をほかの人に信じさせるためには自分の心と生活の中にあるその力を知っていなければならない。人を救うためにわたしたちが教える福音は自分の魂が救われた福音でなければならない。キリストを自分個人の救い主とし、生きた信仰を持つのでなければ、懷疑的な社会に感化を及ぼすことは不可能である。もし急流から罪びとを救い出そうと思えば自分の足をキリスト・イエスである岩の上に堅く立てていなければならない。

クリスチャンの徽章は表面につけるしではなく、十字架や冠をつけたりすることでもない。それは神と人間との結合を示すものである。変えられた品性の中に表わされている神の恵みの力を見て、社会は神がそのみ子をあげない主としてつかわれたことを納得させられるのである。人の心をとリまく影響の中で無我の生活の感化ほど力のあるものはない。福音に対して好感をいだかせる最も強いあかしは、愛し愛されるクリスチャンである。

試練による鍛練

こうした生活を送り、こうした感化を及ぼすためには一步一步、努力と自己犠牲と鍛錬がいる。このことを理解しないため多くの者がクリスチャン生活にすぐ失望してしまう。真心から神の働きに献身する多くの人が、従来に見ないほど妨害をうけ、試練や困難に襲われて驚き、失望する。主の働きにふさわしい者となるために彼らはキリストのような品性を求めて祈っているが、自分の持っている悪い性質しか引き出せないような事情におかれている。そして、持っているとは思わなかった短所があらわれ、昔のイスラエルびとのように「神が導いておられるなら、どうしてこんなことがわたしたちに起るのだろう」と尋ねる。

神が導いておられるからこそ、こうしたことが彼らの上に起るのである。試練や困難は神がお選びになった鍛練の手段であって、神が定められた成功の条件である。人の心の中をざらになる神は、人間が自分自身を知る以上に人間の性質を知っておられる。正しく指導すれば神の働きを進展さすのに用いることができる能力や感受性を持っている人々がいることを知っておられ、摂理によってこうした人をいろいろ異なる地位や各種の境遇に導かれる

のであるが、それはその人自身知らなかった自己の欠陥を発見するためである。神はこうした欠陥を改める機会を与え、神の働きに適する者となる機会を与えられる。そして、きよめられるためにしばしば火のような試練が彼らを襲うことを許されるのである。

わたしたちが試練に耐えるように召されている事実は、主イエスがわたしたちの中に発達させようとお望みになっている、尊いものがあることを認められていることを示している。もし、わたしたちの中に神のみ名の誉となるものが一つもないとわかれば、わたしたちをりっぱなものにする時間を費されないであろう。神は無価値な石を神の炉の中に投げ入れられることはない。神が精練なさるのは価値のある鉱石である。かじ屋は金属の品質を知るために鉄や鋼を火の中に投入する。神はご自分がお選びになった者が悩みの炉の中に投げ入れられるのを許し、彼らがどんな性質を持ち、神の働きのために適当かどうかをためされるのである。

陶工は粘土をとって好きなように形を作る。それをこねて細工し、ちぎったり、かためたり、ぬらしたり、かわかしたりする。そしてそれを、しばらくそのままにしておく。こうして全くしなやかになったときに、また手を入れ、器を作る働きをつづける。彼はそれを形作り、ろくろで不要な部分を落して磨く。彼はそれを日光にかわかし、かまどで焼く。こうして初めて使用に適する器となるのである。偉大なる創造主はこのようにわたしたちを形づくろうと希望されている。ちょうど陶工の手の中の粘土のように、わたしたちも神のみ手のうちにあるべきである。わたしたちが陶工の仕事をしようとしてはならない。わたしたちのなすべきことは作り主によって形づくられるように自分をその手にゆだねることである。

「愛する者たちよ。あなたがたを試みるために降りかかって来る火のような試練を、何か思いがけないことが起ったかのように驚きあやしむことなく、むしろキリストの苦しみにあずかれば、あずかるほど、喜ぶがよい。それは、キリストの栄光が現われる際に、よろこびにあふれるためである」(ペテロ第一・四ノ一二、一三)。

かごの中の鳥は、真昼の間や、また他の声をきくときには、飼い主が教えようとする歌を決して歌わないものである。これを少し、あれも少しと部分的に覚えるだけで、決して完全なメロディー全体を覚ええない。しかし、飼い主がかごをおおい、その鳥に教え込もうとする歌だけが聞える場所におくと、暗い中で鳥はその歌を全部覚えるまで何回もくり返して歌い、ついに完全なメロディーを歌い出す。それから鳥を外に出すと、その後はいつでも明るみでその歌を歌うことができる。そのように神もその子らを取り扱われる。わたしたちに対しても教えようとなさる歌があり、苦悩の暗黒の中でわたしたちがそれを覚えてしまうと、その後はいつでもそれを歌うことができるのである。

わたしたちの終生の働きにおける神の選択

多くの人が自分の生涯の仕事に不満を感じている。その境遇が気に入らぬこともある。あるいは、もっと高い責任が果せると思うのに普通の仕事に携わっているためかもしれない。またその努力が認められず、効果がないように思われて、未来が不安に感じられることもある。

わたしたちがしなければならぬ仕事は、自分の好きなものでないかもしれないが、自分のために神が選ばれた

働きであるとして受け入れるべきことを覚えよう。好きであっても、きらいであっても、わたしたちは自分の最も身近にある義務を果さなければならない。「すべてあなたの手のなしうる事は、力をつくしてなせ。あなたの行く陰府には、わざも、計略も、知識も、知恵もないからである」(伝道の書九ノ一〇)。

もし、神がわたしたちに使命を二ネベに伝えるように望まれるならば、ヨッパやカペナウムに行くことを喜ばれない。わたしたちが導かれて行くところは理由があつて、そこへ神があつかわしになつたのである。ちやうどそこにわたしたちが与えることができる助けを必要としている人がいるかも知れない。ピリポをエチオピアの役人につかわされ、ペテロをローマの百卒長に、また幼いイスラエルの娘をシリヤの大將ナアマンを助けるために送られた神は、今日、青年男女を自分の代表者として神の助けや指導を必要とする人々へつかわされるのである。

最善である神の計画

わたしたちの計画が必ずしも神の計画であるとは限らない。ちやうど、ダビデの場合になされたように、わたしたちが持っている最善の考えを拒むことが、わたしたちのためにも、神の働きのためにも最もよい方法とお思ひになるかも知れない。しかし、一つ確かなことは、自分と自分の持ち物を神の栄光のために真心からささげる人を祝してみ事業進展のためにお用いになるということである。もし神が、彼らの望むものを与えない方がよいとお考えになれば、神は必ず彼らに愛のしるしを与え、また彼らに別の奉仕をゆだねたもうことによつて、その拒否の埋め合わせをなさるのである。

わたしたちが自分のことを知っている以上にわたしたちをご理解になる神はわたしたちを愛し、ご配慮くださるみ心から、しばしば人間が利己的な野心を満足させることを許されず、身近にある、そぼくではあるが、きよい義務をみのがすことをお許しにならない。往々、こうした義務がより高い働きのための重要な準備訓練になる。わたしたちのために立てられた神の計画が成功するために、わたしたちの計画が失敗に終わることがよくある。

神のために真の犠牲を払うように要求されることは決してない。神は当然ささぐべきものを数多く要求されるが、それを実行することによって、わたしたちは天にゆく途上の妨害となるものを捨てているにすぎない。よいものを手離すことを要求されたときさえも、それはわたしたちのために、さらに益になることをなさっておられるのだと確信してよい。

この地上でわたしたちを悩まし、失望させた不思議な出来事も、きたるべき国では明らかとなり、答えられそうにもないと思った祈りや、また実現しなかった希望も、わたしたちに最大の祝福であつたことがわかる。

どんな仕事でもすべて神のみ働きの一部であるから、たとえ、いかにいやしいことであろうと、神聖なものともなければならぬ。そして、わたしたちの日常の祈りは、「主よ、最善が尽せるように助けてください。もったいぶな仕事ができる方法を教えてください。力と快活な精神を与え、わたしの働きの中に救い主の愛の奉仕が実行できるようにしてください」と言うのでなければならぬ。

モーセの生涯から学ぶ教訓

モーセの経験を考えてみるとよい。王の孫として、また未来の王としてエジプトで受けた教育は非常に周到なもので、エジプト人の考えるような知恵の立場からモーセを賢者にしようとして計画されたところには何一つ欠けたものがなかった。彼は最高の政治と軍事教育を受けたのである。モーセはイスラエル人を奴隷生活から救い出す働きの準備が完全にできたと考えた。しかし、神は異なった判断をされ、摂理をもって四十年の間、モーセを牧羊者として荒野の訓練に導かれたのである。

エジプトでモーセが受けた教育は、多くの点で彼の助けとなったが、その生涯の働きのため最も価値のある準備は彼が牧者として雇われていたときに受けたものであった。彼は生来、衝動的であった。エジプトではりっぱな軍隊の指揮官であり、王や国民から愛され、つねに称賛と歓迎をうけ、人心は彼に集まっていた。モーセはイスラエルを救う働きを自分自身の力でなしとげようと望んだが、神の代表者として学ばなければならなかった教訓はこれとはずっと異なり、寂寞とした山を経て谷間の牧場に羊を導きながら、信仰と柔和と忍耐と謙そんと自己忘却を学んだ。彼は弱いものをいたわり、病気のものをみとり、迷ったものを尋ね、気ままなものに耐え、子羊を守り、老齢のものや虚弱なものを養うことを覚えた。

この労働によってモーセは大牧者にいっそう近く引き寄せられ、イスラエルの聖者に密接に結ばれたのである。もはや、大きなことをしようという計画をたてなかった。ただ自分に委託された仕事を神に忠実に果そうと努めた。

彼は自分の周囲に神があられることをみとめた。自然界のすべては見えない神を教えた。モーセは神を自分の神として知り、その品性を瞑想することによって、ますます深く神がご臨在になることを意識し、永遠の腕に避けどころを発見した。

この体験の後、モーセは牧羊者のつえを權威のつえと取り換え、羊の群れを後にして、イスラエルの指導権をとるようにとの命令を天からきいた。この命令を神から受けたとき、モーセは自信のない、訥弁な、臆病な人間になっていた。神の代弁者となるには自分は能力がないという気持ちで圧倒されていた。しかし、神に全信頼をおいてその働きを承諾した。それは偉大な使命であり、最高度に頭脳の能力を発揮することが必要であつた。神は喜んで服従したことを祝福され、モーセは雄弁となり、希望にあふれた沈着な人間として、人に与えられた働きの中で最大の働きに適する者とされたのである。モーセについて「イスラエルには、このちモーセのような預言者は起らなかった。モーセは主が顔を合わせて知られた者であつた」としるされている(申命記三四ノ一〇)。

自分の働きが認められないと感じ、さらに大きい責任の地位を切望する人は、「上げることは東からでなく、西からでなく、また荒野からでもない。それはさばきを行われる神であつて、神はこれを下げ、かれを上げられる」ということを考えてみるがよい(詩篇七五ノ六、七)。人間は各自、天の永遠の計画にそれぞれの役割がある。その役割を果すかどうかは、忠実に神に協力するか否かによって定まる。

自分をあわれむことを警戒しなければならぬ。自分の正当な真価が認められず、その努力が感謝されず、仕事があまりに困難だというような気持ちをほしいままにしてはならない。キリストがわたしたちのため耐えられたこと

を覚えて、すべての不平な思いをしずめなさい。わたしたちはわたしたちの主よりもよく取り扱われているのである。「あなたは自分のために大いなる事を求めるのか、これを求めてはならない」(エレミヤ書四五ノ五)。十字架を負うよりは冠を手に入れたいと望む人は、神の働きの中にお用いになる余地はない。報酬を受けるよりもその義務を果すのに熱心な人、昇級するよりも正義のために熱心な人を神は求めておられる。

謙そんで神に対するように働く人は、から騒ぎをしたり、もったいぶった人のようにあまり外観をつくらわないが、その働きはそれ以上に価値のあるものである。外観を非常に誇示する人は、往々に、他人の注意を自分にひき、神と人との間をさえぎり、その働きは失敗に終るのである。「知恵の初めはこれである。知恵を得よ、あなたが何を得るにしても、悟りを得よ。それを尊べ、そうすれば、それはあなたを高くあげる、もしそれをいだくならば、それはあなたを尊くする」(箴言四ノ七、八)。

自ら改革する決意がないため、多くの者は誤った行動の中にかたまってしまっているが、その必要はない。彼らは、最善の奉仕をするために能力を養うこともでき、いつまでも要望される人間になることができるのであって、持っているだけの価値はすべて評価されるようになる。

さらに高い地位に立つ資格があれば、神はただその人にもみ重荷を負わせたまわらないで、その人々を考査して、その価値を知り、理解をもって彼らを奨励できる人々にも責任を負わせられる。自分に定められた仕事を毎日忠実に果す人が神がお定めになった日に「高く上にのぼりなさい」という神の招きの声を聞くのである。

ベツレヘムの丘で、羊飼たちが羊の群れの番をしていたとき天の使が訪れた。そのように今日も、人が神のため

に身をひくくして働くとき、神の使はそばに立ってその人の言葉を聞き、また仕事に対する彼の態度に注意し、さらに大きな責任をその人に任してよいかどうかを見ているのである。

真の偉大さ

神は、財産や教育、または地位によって人を評価されず、その動機の純潔と品性の美をもってなさる。また、どれだけ神の霊を有し、どれほどその生活が神の姿を表わしているかを見られる。神の国で偉大な者となるためには子供のような謙遜と単純な信仰と清純な愛を持たなければならない。

「あなたがたの知っているとおり、異邦人の支配者たちはその民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている。あなたがたの間ではそうであってはならない。かえって、あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となり」とキリストは言われた（マタイ二〇ノ二五、二六）。

天が人間に授けることができるいろいろなたまものの中でキリストと共にその苦しみにあずかることは最も重い信頼と最高の栄誉である。天に移されたエノクや、火の車で昇天したエリヤも、土牢の中でひとり死んでいったバプテスマのヨハネの偉大さにくらべれば、それほどでなく、ヨハネ以上の名誉を受けなかった。「あなたがたはキリストのために、ただ彼を信じることだけではなく、彼のために苦しむことをも賜わっている」（ピリピ一ノ二九）。

未来の計画

未来のためにはつきりした計画が立てられぬ人が多いが、その生涯は定まらず、事の結果を見抜くことができず、

そのために憂慮と不安に満たされる場合がよくある。この地上における神の子の生涯はさすらいの生涯であることを覚えよう。わたしたちには自分の生涯を計画だてる知恵もなく、また未来を定めるのもわたしたちのなすべきことではない。「信仰によつて、アブラハムは、受け継ぐべき地に出て行けとの召しをこうおつた時、それに従い、行く先を知らないで出て行つた」(ヘブル一ノ八)。

キリストは地上の生活で、ご自分のためには何一つ計画をたてず、キリストのために神がたてられた計画を受け入れ、天の父が日々それをお示しになった。そのようにわたしたちも神に信頼し、その生活が神のみ旨の実現となるようにしなければならない。自分の道を神に任せるとき、神はわたしたちの歩みを導かれるのである。

輝かしい未来を計画しても完全に失敗に帰する人が実に多い。神に自分の計画をゆだねるがよい。「その聖徒たちの足を守られる」神の導きに幼児のようにたよるのがよい(サムエル記上二ノ九)。もしも、神の子供が最初から事の終局を見ることができ、神と共に働く者として果している仕事の栄光を認めることができたならば、神が導かれる道は自分たちが導いてほしいと望んでいる道にほかならないことがわかる。

報 酬

キリストがわれに従えと弟子たちを呼び集められたとき、現世に有望な見込みがあるとは言われなかった。利益や世的な名誉を約束することもなく、また弟子たちも何を受けるかについて契約をたてなかった。マタイが収税所にすわっているとき救い主が『わたしに従ってきなさい』と言われると、彼は「いっさいを捨てて立ちあがり、

イエスに従ったのである（ルカ五ノ二七、二八）。イエスに仕えるにあたり前もってマタイは自分が前の職業で受けていただけの報酬を要求することもしなかった。質問したり、ちゅうちよしないで彼はイエスに従った。救い主といっしょに居り、み言葉を聞き、働きをともにするだけで十分であつたからである。

それまでに召されていた弟子たちも同様であつた。イエスがペテロとその仲間に、従うように命令されたとき、ただちに舟と網を捨てた。こうした弟子の中には養つてゆかねばならない人をもつた者もいたが、救い主に招かれたとき、ちゅうちよして「わたしはどういうふうに住し、家族を養えるでしょうか」とは尋ねなかった。彼らは招きに対して従順であり、後日イエスが「財布も袋もくつも持たせずにあなたがたをつかわしたとき、何かこまつたことがあつたか」と尋ねられた際「いいえ、何もありませんでした」と答えることができた（ルカ二ノ三五）。

救い主は、マタイ、ヨハネ、ペテロをその働きに召されたように、今日、わたしたちを呼び求めておられる。もし、わたしたちの心がその愛に感動するならば、報酬の問題はそれほど重要事項とはならない。かえってキリストと共に働くことを喜び、恐れずにその保護にたよる。もし神を自分の力とするならば、義務に関する明りような見解と無我の抱負をいだき、わたしたちの生活が高尚な目的によって動かされ、さらにその目的はわたしたちをより深い動機へと向上させるのである。

神は備えておられる

キリストのしもべと自称する多くの者が神に自分を任せることを恐れて心配し、心を悩ませている。彼らは万事

を神に任せない。神にすべてを任せるとどうなるか、その成りゆきを恐れてちゅうちよする。しかし神に任せないならば、平安は得られない。

この世の標準に到達しようと努めるために思いわずらいをし、心を痛めている人が多い。彼らは現世的な働きを選び、その悩みを負い、社会の習慣を取り入れて、そのため品性は傷つき、人生に疲れ、次から次におこる心配で生命力が消耗してゆく。わたしたちの主は、こうしたどれいなくびきを捨てるように希望されている。「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」と言われて、主のくびきを負うように招いておられる（マタイ一ノ三〇）。憂慮は盲目であって、未来を見わけることができない。しかし、イエスは初めから終りまで、あらゆる困難に助けを与えるため道をそなえておいでになる。「直く歩む者に良い物を拒まれることはありません」（詩篇八四ノ一一）。

天の父はわたしたちが想像さえでき多くの道を備えられている。神の働きを最も高いものとする法則を受け入れる者は、いろいろな困難が消滅し、平らな道が開けてゆくのを発見する。

信仰を強める

きょうの仕事を忠実に果すことは、あすの試練に備える最善の準備である。あす起りそうなことや、思いわずらいを集めて、きょうの重荷に加えてはならない。「一日の苦労は、一日だけで十分である」（マタイ六ノ三四）。

希望にあふれ、勇氣に満ちていよう。神の働きに意気消沈していることは罪であり、不合理である。神はわたし

たちの必要をすべてご存じである。契約をお守りになるわたしたちの神は諸王の主なる全能者であり、やさしい羊飼のような柔和と配慮をもっておられる。その力は絶対であり、それはまた神にたよる者にはすべての約束が確実に成就するという保証である。神はすべての困難を除去する手段を持っておられるが、それは神に仕え、神が用いられる手段を尊ぶ者をささえるためである。神の愛は他のどんな愛に比べても天と地の差のように高いものである。神は量り知られぬ永遠の愛をもって神の子を見守っておられる。

最悪の状態とみえる暗黒の時代に神を信じなさい。神はみ旨を行い、その民のために万事よくなるように働かれるのである。神を愛し、神に仕える者の力は日々に新たにされる。

神はそのしもべに、彼らが必要とする助けをすべて与えることができ、また喜んでそれをお与えになる。そして、いろいろと必要に応じた知恵を授けられる。試練をつけた使徒パウロは「主が言われた、『わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる』それだからキリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。だから、わたしはキリストのためならば、弱さと、侮辱と、危機と、迫害と、行き詰まりとに甘んじよう。なぜなら、わたしが弱いときにこそ、わたしは強いからである」と言っている（コリント第二・一二ノ九、一〇）。

第四章 人との接触に

人生におけるすべての交わりには自制と忍耐と同情を働かせなければならない。わたしたちは性格、習慣、教育が非常に異なっているため、物事の見方も異なり、また判断も異なる。真理に対する理解や身の処し方に関する考へも細部にわたっては同じでなく、ふたりの人がすべての点で同一の経験をするということはない。ある人にとって試練であることも他の人にとってはそうではない。ある人にとっては輕易な仕事も別の人にはもっと困難でめんどうなことがある。

人間の性質は実に弱く、無知であり、誤解しやすいものであるため、他人を評価する際には注意深い態度をもつてしなければならない。わたしたちは自分の行動が他人の体験にどのような影響を及ぼすかほとんど知らない。自分の言行は、自分ではごく小さいことのように思われても、もし、わたしたちの眼が開かれるならば、善におもひくか、悪に至るか重大結果はこの自分たちの言行の上にかかっていることがわかるはずである。

責任者に対する考慮

多くの人はほとんど重荷を負ったこともなく、真の苦しみをあまり知らず、他人のために心をくだき、悩むこと

が少ないので、真に責任を負う者の働きが理解できない。責任が重い父親の心労や苦労はその子供にわからないように、彼らは責任者の重荷について理解することができない。子供は父親の心配や困惑を不思議に思い、それは不慣れたことのように考えるが、幾年か経験を経て、自分も責任を負うようになる。父の生涯をふり返り、昔わからなかった事態を了解する。苦しい経験が知識を与えたのである。

多くの責任者の働きが理解されず、そのほねおりも死ぬまで価値が認められないものである。そして、その人の重荷を他の人が取りあげ、かつてその人が遭遇していた困難に会ってみて初めて、どんなにその人が信仰と勇気を試みられたかということを理解できる。かつてはたやすく非難したはずの失敗が目につかなくなることがよくある。体験は同情を教える。神は人間を責任ある地位に立たせ、失敗があったときにはそれを正し、またはその地位から除く力を持っておられる。わたしたちは、神に属するさばきのわざを、人間が行わないように注意しなければならぬ。

サウルに対するダビデの行動の中には教訓がある。神の命令によってサウルはイスラエルの王として油をそそがれた。しかし、不従順のためにその国は彼の手から取りあげられると神が言われたが、サウルに対するダビデの行いはなんと柔和で礼儀正しく忍耐にみちたものであったろう。ダビデの生命を求めてサウルは荒野にき、ダビデと兵士たちが隠れていた洞穴にひとりではいつてきた。「ダビデの従者たちは彼に言った、『主があなたに告げて、『わたしはあなたの敵をあなたの手に渡す。あなたは自分の良いと思うことを彼にすることができると言われた日がきたのです。』…ダビデは従者たちに言った、『主が油を注がれたわが君に、わたしがこの事をするのを主は

禁じられる。彼は主が油を注がれた者であるから、彼に敵して、わたしの手をのべるのは良くない』(サムエル記上二四ノ四、六)。

救い主は「人をさばくな。自分がさばけないためである。あなたがたがさばくそのさばきで、自分もさばかれ、あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量りあたえられるであろう」と戒められている(マタイ七ノ一、二)。まもなく生涯の記録が神の前に調べられることを記憶し、「すべて人をさばく者よ。あなたには弁解の余地がない。…他人を…さばくあなたも、同じことを行っているからである」とキリストが言われたことを覚えていなさい(ローマ二ノ一)。

不正な取り扱いに対する忍耐

わたしたちに対する実際上または仮定上の不正行為のため自分の精神をいらだたせるわけにはいかない。自我はわたしたちの最も恐るべき敵であって、どういう形の悪も、聖霊に制せられていない人間の情欲に比べると、それほど有害な影響を品性に及ぼさないのである。また勝つことができた他のどんな勝利に比べても、自己に打ち勝つ勝利ほど尊いものはない。

感情をたやすく害してはならない。わたしたちは自分の気持や名声を守るために生きているのではなく、人を救うために生きなければならない。人を救うことに熱心になれば、相互の間によく起るわずかな意見の相違に気を留めなくなる。他人が自分のことをどんなに思い、自分に対してどのようにふるまっても、そのためにキリストと自

分との結合、聖霊との交わりを妨げる必要はない。「悪いことをして打ちたたかれ、それを忍んだとしても、なんの手柄になるのか。しかし善を行って苦しみを受け、しかもそれを耐え忍んでいるとすれば、これこそ神によりせられることである」(ペテロ第一・二ノ二〇)。

復讐をしてはならない。できる限り、あらゆる誤解の原因を取り除き、悪い外見を避けなさい。原則を犠牲にしないかぎり、全力を尽して人と融和しなさい。「祭壇に供え物をささげようとする場合、兄弟が自分に対して何かうらみをいだいていることを、そこで思いだしたなら、その供え物を祭壇の前に残しておき、まず行って、その兄弟と和解し、それから帰ってきて、供え物をささげることにしなさい」(マタイ五ノ二三、二四)。

短気な言葉をかけられても、決して同じ精神で答えてはならない。「柔らかい答は憤りをとどめ」ることを覚えなさい(箴言一五ノ一)。沈黙には驚くほどの力がある。おこっている人に答える言葉が、ますますその人をおこらせることがあるが、やさしい忍耐の精神をもって沈黙を守れば、たちまち消えてしまう。

鋭い言葉を浴びせかけられ、口やかましい小言を言われたとき、心にただ神の言葉を考えなさい。頭と心に神の約束をたくわえ、虐待され、誤った非難を受けたとき、おこった答をせず、その尊い約束を心の中で自分にくり返して言いなさい。

「悪に負けてはいけない。かえって、善をもって悪に勝ちなさい」(ローマ二ノ一二)。

「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ、主はそれをなしとげ、あなたの義を光のように明らかにし、あなたの正しいことを真昼のように明らかにされる」(詩篇三七ノ五、六)。

「おおいかぶされたもので、現われてこないものではなく、隠れているもので、知られてこないものはない」(ルカ二二ノ二)。「人々にわれらの頭の上を乗り越えさせられた。われらは火の中、水の中を通った。しかしあなたはわれらを広い所に導き出された」(詩篇六六ノ一二)。

わたしたちはイエスに同情を求めないで、人間に同情を求め、それにささえられようとする傾向がある。神はつねにあわれみ深く忠実な方であり、わたしたちが信頼を寄せている人から、たびたび失望させられることをお許しになるが、それはわたしたちが人間にたより、肉を助けとすることの愚かさを学ぶためである。完全に、身を低くし、自我を捨てて神に信頼しよう。神はわたしたちが心の底に感じながらも表現できない悲しみを知っておられる。すべてが暗黒で筆舌に尽しがたいと思われるとき、「わたしのしていることは今あなたにはわからないが、あとでわかるようになるだろう」とのキリストの言葉を思い起しなさい(ヨハネ一三ノ七)。

ヨセフとダニエルの歴史を研究しなさい。彼らを害しようとした人々の謀略を神は妨げられなかったが、かえってこうした策略が試練や災難の中にもその信仰と忠誠を守った神のしもべの益となるように導かれた。

この地上に居る以上、わたしたちは敵対する勢力に会うのである。自分の気性をためす試練にあうが、正しい精神でこれに応ずることによってクリスチャンの美德が養成される。もしキリストがわたしたちのうちに宿っておられるならば、わたしたちは煩悶や、いらだちにあっても、忍耐強く、親切で寛容で快活である。日々に、また年ごとになわたしたちはおのれに勝利し、りっぱな英雄になっていくのである。これがわたしたちに定められた仕事であるが、イエスの助けと堅い決心、不動の決意、不断の注意、そして絶えず祈ることなどがなければ完成できない。

それぞれに戦わなければならない自分の戦いがある。わたしたちが神と協力しなければ、神でさえもわたしたちの品性をりっぱにし、生涯を有用なものとなさることはできない。戦いをこぼむ者は、勝利する力と喜びを失う。

わたしたちは自分の試練、苦難、不幸、悲嘆を記録しておく必要はない。これはみな書にしろされて天に保管されている。不愉快なことを数えあげているうちに、楽しい思い出が多く忘れられていく。たとえば、絶えずわたしたちを囲んでいる神の深いあわれみや、天の使も驚くほどの愛、すなわち神がわたしたちのためにみ子を死にわたされたことを忘れてしまう。キリストのために働く者として人よりも心労や試練が多いと感じるとき、こうした重荷を拒否する人々にはわからない平安があることを覚えなさい。キリストの働きには慰めと喜びがある。キリストと共に生きるとき、そこには失敗がないことを世に証明しなさい。

たとえ心が軽く愉快でなくても、その気分を外に表わしてはならない。他人の生活に陰を与えぬようにしなさい。冷たい、暗い宗教は決して人をキリストにひきつけない。かえってキリストから追い払い、迷う者の足をとらえるためにサタンがひろげている網の中へ追い込んでしまう。自分の失望について考えないで、キリストの名によって要求することができるを考えなさい。目に見えないものを想像力で把握し、あなたを愛しておられる神の大きな愛の証拠に思いを向けなさい。信仰は、試練に耐え、誘惑に抵抗し、失望に会っても、それに耐えることができる。イエスはわたしたちの仲保者として生きておられ、その執り成しによって得られるものは、すべてわたしたちのものである。

ただキリストのために生きる者だけをキリストは尊重なされるとあなたは考えないだろうか。流刑にあった愛弟子

ヨハネのようにキリストのために困難な、つらい境遇にある人をキリストは訪れなさると思えないだろうか。神は眞の働き人がひとりでも勝ち目のない敵と戦って負けるままに放置されたりはなさらない。キリストと共に神に隠れ家を持つ人をすべて尊い宝石のように守り、こうした人のひとりひとりについて主は「わたしはあなたを立て、あなたを印章のようにする。わたしはあなたを選んだからである」と言われている（ハガイ書二ノ二三）。

だから神の約束について語り、イエスは喜んで祝福をお与えになる方だということを告げなさい。神は、ほんの一瞬間でも、わたしたちのことをお忘れにならない。不快な境遇に会っても彼の愛に信頼し、安んじ、神に隠れ家を持つならば、神はおられるのであるとの感が深まり、おだやかな喜びを起させる。キリストはご自分のことについて「わたしは自分からは何もせず、ただ父が教えてくださったま話を話していたことが、わかってくるであろう。わたしをつかわされたかたは、わたしと一しよにあられる。わたしは、いつも神のみこころにかなうことをしているから、わたしをひとり置きざりになさることはない」と言われた（ヨハネ八ノ二八、二九）。

神の臨在がキリストを囲んでいたため、この世の祝福のために無限の愛によって許されたこと以外には、どんなこともキリストには起らなかった。ここにキリストの慰めの源があり、それがまた、わたしたちの慰めである。キリストの霊で満たされている者は、キリストのうちに宿る者であり、その人に起ることはすべて、その臨在をもって彼をかこむ救い主から来るのである。主の許可なしには何もかも彼に触れることはできない。すべての苦難、悲哀、誘惑、試練、あらゆる悲しみ、不幸、また迫害、貧困、いわばいっさいのものが、わたしたちの益となって共に働くのである。あらゆる体験や境遇がわたしたちを益するために用いられる神の働き人である。

悪を語らぬこと

わたしたちに対する神の深い忍耐がわかれば、他人をさばいたり、非難することはない。キリストがまだ地上にあられた時に、キリストを知ってから、一言でも非難の声や、悪口、短気な言葉をキリストの口から聞いたとすれば、どんなに驚いたことであつたろう。キリストを愛する人はその品性によって彼を代表しなければならぬことを決して忘れないようにしよう。

「兄弟の愛をもって互にいつくしみ、進んで互に尊敬し合いなさい」(ローマー二ノ一〇)。「悪をもって悪に報いず、悪口をもって悪口に報いず、かえって、祝福をもって報いなさい。あなたがたが召されたのは、祝福を受け継ぐためなのである」(ペテロ第一・三ノ九)。

礼儀

主イエスは、わたしたちが各自の権利を認めるように要求なさっている。人間の社会的権利やクリスチャンとしての権利を考え、神のむすこ娘として、礼儀と思いやりをもってすべての人を取り扱うべきである。

キリスト教は人間を紳士にする。キリストは迫害者に対してさえ礼儀正しくされた。そして彼の真の弟子たちもそれと同じ精神を表わすのである。統治者の前に連れ出されたときのパウロを見るがよい。アグリッパの前で語った彼の言葉は人を納得させる雄弁の良い例であると同時に、真の礼儀の模範である。福音は、世にならう形式的な

礼儀をすすめはしないが、真に親切な、心からわきあふれる礼儀を奨励する。

外見的な礼儀作法をどんなに用意周到に習得しても、それらは、焦燥、荒々しい批評、聞き苦しい言葉などをすべてなくすのに十分ではない。自我が最高の地位を占めている間は真の礼儀は決してあらわれない。真の愛が心に宿らなければならない。純粋なクリスチャンは主に対する深い愛に基いて行動する。キリストに対する愛の根源から、兄弟に対する無我の関心が芽生える。愛はその所有者に優雅、礼節を与え、態度を美しくする。また顔を輝かせ、声を和らげ、その人全体を上品、高尚にする。

小事の重要性

人生は、大きな犠牲やりっぱな功績によってではなく、おもに小さいことから成り立っている。全く注目する価値がないように見える小さいことによって、わたしたちの生涯に大きな利害が及ぼされることがきわめて多い。ちよとした小さな事に試みをうけ、その試練に負けたため、習慣が形成され、品性がゆがめられ、さらに大きな試練がきたとき、それに対する準備ができていない。日常生活における試練の中で原則を実行しなければ、最も危険で困難な立場に立ったとき、堅く忠実に立つ力を自分のものとすることができない。

自己訓練

わたしたちは決してひとりではない。イエスを選ぼうと選ぶまいと同伴者がある。どこにいても、何をしていて

も、神はそこにおられることを自覚なさい。言うこと、なすこと、何一つとして神の目をのがれることはできない。あなたの一つ一つの言葉や行動に対する証人、すなわち、聖にして、罪を憎まれる神がおられるのである。語る前、行動する前にいつもこのことを考えなさい。あなたはクリスチャンとして王の家族の一員であり、天の王の子供である。「あなたがたに対して唱えられた尊い名」をけがすような言葉を発したり、行いをしたりしてはならない（ヤコブ二ノ七）。

人性と神性を兼ねそなえておられるキリストの品性をよく学び、「もしキリストがわたしの立場におられたらどうなさるか」と、つねに尋ねなさい。これがわたしたちの仕事を量る基準でなければならない。正しいことをしようとする決意を謀略によって弱めたり、良心を汚したりする人との交わりに必要にはいつてはならない。少しでも悪く見えることは道路上であれ、家庭であれ、他人にしてはならない。キリストがご自分の血潮をもってあがなわれた生命を向上させ、美化し、高尚にするために、毎日何かなさい。

つねに原則によって行動し、決して衝動にかられてふるまってはならない。生来持っている性急な性質を柔和と謙そんをもって和らげ、軽薄な、くだらない事にふけてはならない。低級な「しゃれ」など、一言も口から飛ばすべきでなく、思想も放縦に流れるままに放任してはならない。それは制御し、とりこにしてキリストに従わせなければならぬ。聖なることを思いなさい。そうすれば、キリストの恵みによって純潔となり、真実なものとなる。

わたしたちは純潔な思想がもたらす高尚な力を絶えず念頭におかなければならない。どんな人でも安全な道はただ一つ、正しく考えることである。「その心に思うごとく、その人となりもまたしかればなり」（箴言二三ノ七・

文語訳。自制力は働かせることによって強くなり、最初は必ずかしく思われても、絶えずくり返しているうちに容易となり、ついに正しい思考や行動が習慣となる。意志さえあれば、つまらぬ劣等なものはすべて避け、高い標準に達し、人に尊敬され神に愛されることができる。

称 賛 と 奨 励

人のことをよく言う習慣を養成しなさい。交わっている友人のよい特質に留意し、その過失や欠点はできるかぎり見ないようにし、だれかの言行を悪く言いたくなったら、その人の生活や品性のどこかをほめなさい。感謝の心を養い、わたしたちのためにキリストを与え、死にわたされた神の驚くばかりの愛について神を賛美なさい。人に対する不平について考えても決して得るところはない。神は、わたしたちが賛美によって鼓舞されるように、神の恵みと比類のない愛について考えよとすすめておられる。

熱心な働き人は他人の欠陥に留意する余裕がない。わたしたちは他人のあやまちや短所のような**かす**を食べて生きていくわけにはいかない。悪口には二重の災があつて、聞く者よりも語る者に害を及ぼすことが大きい。不和や争いの種をまき散らす人は自分の心にその恐ろしい実を刈りとる。他人の中に悪をさがす行為そのものが、そうする人の中に悪を育てあげる。他人の短所に心をとめることによって、それと同じ姿に変化していく。しかし、イエスをながめ、その愛と完全な品性について語るとき、わたしたちもそのみ形に変わり、イエスがわたしたちの前に示された高い理想を思い、考えることによって純潔な聖なるふんいきにまで向上し、神のみに至ることができる。

こうした境地に住むとき、わたしたちから光がでて、接するあらゆる人に反映して行くのである。

他人を非難し、とがめるかわりにこう言いなさい。「わたしは自分の救いを全うしなければなりません。わたしの魂を救おうと望んでおられる神と協力するのであれば、一所懸命に自分を見守らなければなりません。わたしの生活からすべての悪を捨て、すべての欠陥に勝たなければなりません。キリストのうちにある新しい人間にならなければなりません。そうすれば悪と戦っている人を弱めることをせず、励ましの言葉をかけて彼らを強くすることができます」わたしたちはお互いにあまりに冷淡すぎる。共労者が助けと励ましを要していることをよく忘れる。その人に対して関心を持ち、同情を寄せていることを確信させるように注意を払い、祈りによって助け、祈っていることを知らせなさい。

まちがう人に対する忍耐

キリストのために働く者であると称している人が、全部、真の弟子であるとはかぎらない。キリストの名を名のる者、キリストの働き人とされている人の中にさえも、品性がキリストを代表していない人がいる。彼らはキリストの道義によって支配されず、クリスチャン的経験の浅い同労者を困らせ、失望させることがよくある。しかし、だれも迷わされる必要はない。キリストは完全な模範をお示しになり、ご自分に従うように命じておられる。

最後まで、よい麦の間には毒麦がまじっているのである。その家のしもべが主人の名譽を熱心に思うあまり、毒麦を抜きとる許可を求めたとき、主人は「いや、毒麦を集めようとして、麦も一しよに抜くかも知れない。収穫ま

で、両方とも育つままにしておけ」と言った（マタイ一三ノ二九、三〇）。

神は、あわれみと忍耐に富んでおられるから、強情な人、不真実な者をも忍耐強く忍ばれる。選ばれたキリストの使徒の中には裏切り者のユダがいた。今日、働きの中に偽り者がいても、それに驚き、失望すべきではない。人の心を読まれるキリストが、彼が当然裏切り者になることがわかっていてさえ、耐えられたのであれば、わたしたちはどれほどの忍耐をもってまちがっている人々を忍ぶべきであろうか。

また最も欠点が多いように見える人でも全部がユダのようではなく、性急な、あわて者で、自信の強かったペテロは、ユダよりどれほど悪く思われたか知らないし、救い主に譴責された数も、はるかに多いくらいであった。しかしペテロの生涯はなんと言う奉仕と犠牲の生涯であつたろう。彼は神の恵みの力について、なんと語りつぱなあかしをたてたことであろう。わたしたちもできるかぎり、地上においてイエスが弟子たちと共に歩み、共に語られていたとき、彼らに対してなさったように、他の人々にしなければならぬ。

まず第一に、共労者の中で自分を伝道者と考えなさい。ひとりの魂をキリストに導くには非常に多くの時間と働きがいることがよくある。人間の魂が罪から正義にたち帰ったとき、み使の前には大きな喜びがある。こつした魂を見守っている奉仕の霊が、クリスチャンと称する一部の人々によって、その魂が冷淡に取り扱われるのを見て喜ぶとあなたは思われるであろうか。人間同志がよくやるような相手の取り扱い方を、キリストがわたしたちになさったのであれば、わたしたちのうちの、いったい何人が救われたであろう。

人間は人の心の中を読みとることができない者であることを記憶しなさい。あなたにはまちがっているように見

える行動もその動機はわからないのである。正しい教育を受けなかった者も多くおり、品性はゆがみ、頑固でひねくれていてどうみても曲っているようにみえるが、キリストの恵みは彼らを変化させることができる。「わたしはあなたに失望した。わたしはあなたを助けようと努力はしません」と言って、ふり捨てたり、追いやって失望させ、絶望に落し入れてはならない。おこつて軽率に口に出すちよつとした言葉、わたしたちにはそう言うのももつともだと思えるような言葉が、その人たちの心をわたしたちに結びつけたはずの感化のきずなを断ち切るかもわからない。

矛盾のない生活、忍耐強さ、挑発されても腹を立てない精神はいつも明確なあかしであり、最も厳粛に人々に呼びかける声である。他人に与えられなかった機会や特権があたえられていたならば、そのことを考慮してつねに賢明な、注意深い、そして優しい教師となりなさい。

封蝋の上に明りような、強い印を押すためには、決して乱暴に大急ぎで押さず、注意深く印を蝋の上に置き、固まるまで静かに動かぬように押しつける。人間の心を取り扱うのもこれと同じ方法である。キリスト者の感化を継続することはその力の秘訣であり、それは、キリストの品性を不断にあらわすかどうかによるものである。まちがっている人には自分の体験を語って助け、自分がひどく失敗したとき、共労者の忍耐親切、また助力が、どれほど自分に勇氣と希望を与えたかを示しなさい。

矛盾した不合理、無価値なものに対してとつた親切な思慮深い行為が、どんな感化を及ぼしたかは、さばきの日までわからない。わたしたちが恩知らずや聖なる信頼を裏切る者にあつと軽蔑した気持や義憤をあらわしたくなる。

そうした人は、それを待ちかまえていてそれに対抗する準備をしている。しかし思いやりのある忍耐をもって接するとき、彼らを驚かせ往々彼らの心の中の良い精神を呼び起し、さらに高尚な生活への希望を起させることがある。

「兄弟たちよ。もしもある人が罪過に陥っていることがわかったなら、霊の人であるあなたがたは、柔和な心をもって、その人を正しなさい。それと同時に、もしか自分自身も誘惑に陥ることがありはしないかと、反省しなさい。互に重荷を負い合いなさい。そうすれば、あなたがたはキリストの律法を全うするであろう」(ガラテヤ六ノ一、二)。

神の子と自称している者はすべて、伝道者としていろいろな精神をもつ人たちとも交わるのであるということを考えておく必要がある。高尚な人、粗野な人、謙そんな人、高慢な人、宗教的な人、懐疑的な人、教育がある人、無知な人、金持、貧しい人がいる。こうした種々雑多な人を一様に取り扱うことはできない。しかしすべての者が親切と同情を必要としている。相互に交わることによってわたしたちの頭脳はみがかれ、高尚にならなければならぬ。人間は相互に依存しているものであり、人類家族のきずなによって密接に結び合わされている。

主人、しもべ、友だちの区別なく、たより合うのは神の定めである。

ひとりの弱さを補ってみなが強くなるまで互に助けを求めよと、神は命じておられる。

キリスト教が世界と接するのは社交的関係を通じてである。神の光を受けたすべての男女は、よりよい道を知らない人が歩んでいる暗い道に光を放たなければならない。キリストのみたまによってきよめられた社交の力は、救い主に人を導くのに利用されなければならない。キリストは、きよい、美しい、たいせつな宝として、ひとりで楽

しむために心の中に秘めておくべきものではない。キリストを心のうちに宿し、泉のように永遠の生命にまでそれを、ふきあふれさせ、接するすべての人を生きかえらすようではない。

第四章 成長と奉仕

クリスチャン生活は多くの人が考えている以上のものであって、ただ優しく、忍耐強く、柔和で、親切なだけではない。こうした美德はたいせつであるが、勇気、力、元氣、不屈の精神も必要である。キリストがさし示された道は、狭い、克己の道であり、その道にはいり、困難や失望をおしきって進むには、弱虫であってはできない。

性 格 の 力

しっかりした力のある人間が必要とされている。障害物がすべて取り除かれ、前途が平坦になるまで待っていない人、落胆した働き人を発らつとした元氣をもつて鼓舞する人、その心はクリスチャンの愛であたたかく、主の働きをするにふさわしいじょうぶな手の持ち主、こう言うたぐいの人を要するわけである。

伝道に従事している人の中には弱い、無氣力な、勇氣のない、失望しやすい人がいて、奮発心がなく、なんでもやろうという熱意を起す精神と力に欠けて、積極的な性格がない。成功したいと思う者は勇敢で希望にみちていなければならぬ。消極的な長所ではなく、積極的な長所も養わなければならぬ。怒りをそらす柔らかい答を

与えると同時に悪に抵抗する英雄的勇氣も持っていなければならない。万事に耐える愛を持つとともに、その感化を決定的な力とする強い性格が必要である。

しっかりした性格がない人がいる。その人は、計画も目的も、いつこつ、はつきりせず充実していない。そういう人は社会においては実際の役にほとんどたえない。この柔弱、優柔不断、無能力に勝利しなければならない。真のクリスチャン的性格には、逆境におかれても変ったり、負けたりすることのない不撓不屈なものがある。わたしたちの精神には背骨がなくてはならない、すなわち、おせじ、わいろ、脅迫などをもってすることのできぬ高潔さが必要である。

知能の発育

神はわたしたちがあらゆる機会を利用し、神のご用の準備をし、その完成に力を集中し、任務の神聖さと重大な責任を絶えずはつきりと認識するよつに希望しておられ、また、期待をかけておられる。

すぐれた働きができる資格を持っている人の中に努力が足りないため、わずかの働きしか完成しない人が多い。何万人という人が、生きるための大目的も、到達すべき高い標準もないかのように生涯を送っている。その一つの理由は自分を過少評価しているからである。キリストはわたしたちのために無限の値をお払いになったが、わたしたちがその払われた値にしたがって自分を評価するように望まれている。

低い標準に到達することで満足してはならない。わたしたちが到達できるところまでだれも進んでいないし、ま

た神が望まれている程度になっていない。神はわたしたちに思考力をお与えになったが、それは用いずに残しておくものではなく、また世俗的な欲望のために誤用すべきものでもなく、最高度に発育させ、りっぱな、きよめられた、高尚なものとし、神の王国の発展のために用いるべきものである。

だれでも他人の心によって支配される、単なる機械であることに甘んじてはならない。神はわたしたちに考え、行動する力を与えられたが、神に知恵を求めながら注意深く行動することによって責任に耐える者となる。神から与えられた個性をもって立ちあがり、他人の影であってはならない。神は自分のうちに働き、自分のかたわらに働き、自分を通して働かれることを期待しなさい。

十分に学んだから、そう努力しなくてもよいと考えてはならない。教育された頭脳は人間の尺度であり、教育は一生継続すべきもののだから、毎日学び、そこに得た知識を実際に応用すべきである。

どんな地位に立とうと、奉仕の中に心の動機をあらわし、品性を発育させていることを覚え、その働きがなんであっても、正確と勤勉をもって行い、やさしい仕事を求めようとする傾向にうち勝つがよい。

日常の働きにうち込んでいるのと同じ精神、同一主義がその人の全生涯に及ぶのである。きまつただけの仕事をし、きまつた報酬を望み、なんとかその働きに向く者であることがわかってもらえるなら、努力したり、訓練を受けるめんどろを別段しなくてもいいなどと言う人は、神のご用の働きに召された人ではない。体力、知力、精神力をどうしたら最小限にしか使わないですむかを研究している人は、神が豊かな祝福をお注ぎになることのできない働き人である。またこうした手本は他人に伝染する。その人を支配している動機は利己心であって、監視を必要と

する人、一つ一つの義務を定めなければ働かない人は善かつ忠なるしもべとは言えない。元氣、高潔、勤勉で、必要なことを何でも喜んで、そういう働き人が必要としているのである。

多くの人は失敗を恐れるため、責任を回避し、無能力になる。そして体験を通して学ぶ教育を受け損じるのである。これは読書や勉強やその他あらゆる特典にあずかっても得られない教育である。

人間は環境をつくり出すことができる。しかし境遇に人間をつくらせてはならない。境遇をとらえ、働くための道具とすべきである。それは征服すべきもので、征服されてはならないものである。

力がある人間とは、反対をうけ、計画が破られ、妨害された人である。こつした人は力を働かせることによって、ぶつかった障害物も実際には祝福とする。そして自信を持つようになる。衝突や困惑は神に対する信頼と力を大きくする確固としたものを要求する。

奉仕の動機

キリストは、ほね惜しみをされなかった。時間で仕事を計算されなかった。時間も霊も力も人類を益する働きにささげられたのである。一日中、ほねをおって働き、さらに大きい仕事ができるように夜どおし、恵みと耐久力を求めて祈られた。キリストの人性が強められ、狡猾な敵のあらゆる欺瞞的な働きに対処できる身がまえができ、人類向上の使命を果す力を強くするために、イエスは強い叫びと涙をもって天に祈りをささげられた。キリストは働き人に向かって「わたしがあなたがたにしたとおり、あなたがたもするように、わたしは手本を示したのだ」と

言われている（ヨハネ一三ノ一五）。

「キリストの愛がわたしたちに強く迫っているからである」とパウロは言ったが、これが彼の行動を支配していた源泉であり、原動力であつた（コリント第二・五ノ一四）。働いている途中で一瞬でも熱意がゆるむことがあると、もう一度十字架を見あげることによって、再び心の腰に新しく帯をし、克己の道へ前進したのであつた。パウロは、キリストの犠牲にあらわれている無限の愛と人の心を和らげ、人を動かす力に大いにたよって、兄弟のために働いたのであつた。

その訴えはなんと熱意がこもり、感銘的であらう。「あなたがたは、わたしたちの主イエス・キリストの恵みを知っている。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが彼の貧しさによって富む者になるためである」（コリント第二・八ノ九）。キリストがどんな高い所からおりて身を低くされたか、どれほど深い屈辱の中にあくだりになったかをわたしたちは知っている。キリストは自ら犠牲の道を歩まれたが、自分の生命をお捨てになるまで、その道を変えられなかった。天のみくろを出て、十字架につかれるまで、彼には安息がなかった。人類に対する愛のため、あらゆる侮蔑を喜んで受け、どんな虐待にも耐えられたのであつた。

パウロは「おのおの、自分のことばかりでなく、他人のことも考えなさい」と勧めている（ピリピ二ノ四）。彼は「キリスト・イエスの心を心と」するように命じている。「彼は、神のかたちにていたまいしが、神と等しくあることを固く保たんとは思わず、かえつておのれをむなしうして、しもべのかたちをとりて人のごとくなれり。すで

に人のさまにて現われ、おのれを卑うして死に至るまで、十字架の死に至るまで従いたまえり」(ピリピ書二ノ五―八・文語訳)。

キリストの屈辱を思い、それを認識すべき点についてパウロは深く意を留めた。天の王によって払われた驚くべき犠牲を考えるように人間が導かれることができたなら、その人の心からは利己心が消滅すると信じた。罪人のためになされた救い主の驚くばかりの謙遜を、わたしたちが幾分でも理解するようにと使徒はその要点要点を長く説明している。彼はまず、天においてキリストが占めておられた地位、すなわち、父のふところにおられたことに言及し、次にその栄光をすて、自ら進んで人間性という卑しい状態をうけ、しもべの責任を負い、死に至るまで従われたキリスト、最も不名誉な、謙遜すべき、一番苦しい十字架の死をつけられたキリストを示している。わたしたちは、感謝と愛と、また自分たちは自分のものではないという事実を深く感ずることなしに、この驚くべき神の愛の表現を考えることができようか。こういう主に対していやいやながら、あるいは利己的な動機から仕えるべきではない。

ペテロは「あなたがたが…あがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく」と言っている(ペテロ第一・一ノ一八)。だが、こうしたもので人間の救いが得られるものなら、「銀はわたしのもの、金もわたしのものである」と言われる神にはどんなに容易に行われたことであろう(ハガイ書二ノ八)。しかし、罪人は神の尊い血潮によらなければ救われることはできなかった。この驚くべき犠牲を感謝もせず、キリストの働きにも参加しない者はその利己主義のままに滅びるのである。

一 心 不 乱

キリストの生涯においては、万事が彼の働き、すなわちキリストが遂行しようとした贖罪の大事業に従属したものであった。それと同じ信仰、克己、犠牲、神のみ言葉に対する服従がキリストの弟子によっても示されなければならない。

キリストを自分の救い主として受け入れた者はみな、神に仕える特権を切望する。天が自分一個人のためにしてくださったことを考え、その心は無限の愛と、神を崇拜する感謝の念に動かされる。こういう人は、自分の力を神の働きにささげ、心から感謝の念を表わそうとし、キリストとキリストがあがなわれた者に愛をささげようと切望する。そして、難事、苦労、犠牲を喜んで受けるのである。

神の真の働き人は自分の最善を尽すが、それによって主の栄光をあらわすことができるからである。彼はまた神の要求を尊び、正義を行い、自分のあらゆる才能の向上のために努力する。どんな仕事でも神に対してなすように遂行する。唯一の希望はキリストに誉と完全な奉仕をささげることである。

一匹の牛が鋤と祭壇の間に立って、「どちらにも用意ができている」すなわち畑で働くためにも、あるいは燔祭の壇にささげられるためにも用意ができているという言葉が書いてある絵がある。これが真の神の子の態度であって、自ら進んで義務の要求するところに行き、おのれを捨ててあがない主のご用のために喜んで犠牲をささげるのである。

第四章 さらに高度な体験

わたしたちはたえずキリストの新たな黙示と、その教えに一致した日常の経験とを必要とする。高尚な、神聖な域に到達することは可能であって、絶えず知識と美徳が向上していくことは、わたしたちに対する神のみ旨である。神の律法とは神がすべての人を招いて、「もっと高く上がってきなさい。もっともっと、きよくなりなさい」と言われるみ声の反響である。このゆえにわたしたちは日々、クリスチャン的品性の完成に進むことができるのである。

主の働きに携わっている人は、多くの者が考えたこともないほど高く、深く、広い経験を必要とする。すでに神の大家族の一員となった人で、主の栄光を見あげ、栄光より栄光に化していく事とはどんなことであるかを、ほとんど知らない人が大ぜいいる。ただキリストのすべれた姿をおぼるげに悟って、喜びに心をふるわせている人が多い。彼らは救い主の愛をもっと完全に深く感じたいと思っている。こうした人は神を求める魂の欲望を一つ一つ育てるがよい。聖霊に働いていただきたい者と共に聖霊は働き、聖霊によって形づくられたい人を形づくるのである。霊的な思想を養い、神聖な交わりをするために努力しなさい。あなたはキリストの栄光の最初の光線しか見ていない。引き続き主をよく知るために進んで行くなれば、「正しい者の道は、夜明けの光のようだ、いよいよ輝きを

増して真昼となる」ことがわかるのである（箴言四ノ一八）。

「わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにも宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである」と、キリストは言われた（ヨハネ一五ノ一一）。

キリストはつねにその使命の結果をご自分の前に見ておられた。キリストの地上における生活は、実に苦勞と自己犠牲に満ちたものであったが、こうした苦しみはすべておだではないという思いに元氣をとり戻されていた。人間の生命のためにご自分の生命を与えることによって人間の中に神の姿を回復しようとなさった。彼はわたしたちを土のちりからつくり、ご自分の品性のかたちに似せて、わたしたちの品性をつくりなおし、その栄光をもって美しくしようと思われたのであった。

キリストは自分の魂の産みの苦しみを見て満足された。彼は広大な永遠の果てをながめ、自分の屈辱によって、ゆるしと永遠の生命を受ける人々の幸福をもらいになった。キリストはその人々のとがのために傷つけられ、彼らの不義のために砕かれたのだ。彼は自らこらしめを受けて、彼らに平安を与え、その打たれた傷によって、彼らはいやされた。彼はあがなわれた者の凱歌をきかれた。キリストはあがなわれた者がモーセと小羊の歌をつたうのを聞かれた。彼はまず、血のバプテスマを受けなければならず、世の罪が罪のない彼の魂の上に重くおおいかわかり、言い知れぬ苦悩のかげがさしてはいたが、その前におかれた喜びのために、自ら進んで十字架に耐え、恥もおおいににならなかった。

キリストのしもべたちはこの喜びにあずかることになっている。その後に来る報いがいかに偉大で、りっぱであ

っても、わたしたちの報いは最後の救いの時まで全部保留されるべきものではなく、信仰によってこの地上においても救い主の喜びにあずかるのである。モーセのようにわたしたちも目に見えぬ御方を見るのに耐えられなければならない。

今日、教会は軍隊であって、わたしたちは暗黒の世界、ほとんど全部が偶像礼拝に身をささげている社会に当面している。しかし、戦いが終り、勝利を勝ち得る日がきている。神のみこころが天に行われるとあり、地にも行われなければならない。救われた民は天の律法のほかに、どんな律法も守ることはなく、すべての人が幸福な、一つに結ばれた家族となり、感謝と賛美の衣、すなわちキリストの義の衣をまとい、自然はすべて、そのすばらしい美の中に神を賛美し、礼拝するのである。世界は天の光をあび、月の光は日ようになり、日の光は今の七倍の光を放つにいたる。喜びのうちに年は進み、その光景を見て、あけの明星はともに歌い、神の子は喜びの声をあげるのである。そして、神とキリストが声を合わせて、「もはや罪もなく、死もない」と宣言されるのである。

将来のこの輝かしい幻、神の手で描かれた光景は、神の子にとってたいせつなものでなければならぬ。

永遠への門口に立ち、恵み深い招待の声を聞きなさい。それはこの地上でキリストのために苦しむことを特権とし、名誉と思い、キリストと協力した人に与えられる恩恵の招待である。彼らはみ使と共にあがない主の足もとに自分の冠を投げ出し、「ほふられた小羊こそは、力と、富と、知恵と、勢いと、ほまれと、栄光と、さんびとを受けるにふさわしい。」「み座にいますかたと小羊とに、さんびと、ほまれと、栄光と、権力とが、世々限りなくあるように」と叫ぶのである（黙示録五ノ一二、一三）。

ここにおいてあがなわれた人たちは十字架にかけられた救い主に自分らを導いてくれた人と対面し、彼らは一つとなって、人間が神の生命と同じ生命を持つことができるために死なれた救い主を賛美する。戦いは終結し、すべての災も争いも終りを告げ、あがなわれた者が神のみくらのまわりに立つ時、勝利の歌は全天に満ちあふれ、「ほふられた小羊こそは」「われらを神にあがなってください」「小羊こそは、…栄光と、さんびとを受けるにふさわしい」と喜びの曲を歌うのである。

「わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、数えきれないほどの大ぜいの群衆が白い衣を身にまとい、しゅろの枝を手にとって、み座と小羊との前に立ち、大声で叫んで言った、『救いはみ座にいますわれらの神と小羊からきたる』（黙示録七ノ九、一〇）。

「彼らは大きな患難をとあつてきた人たちであって、その衣を小羊の血で洗い、それを白くしたのである。それだから彼らは、神のみ座の前におり、昼も夜もその聖所で神に仕えているのである。み座にいますかたは、彼らの上に幕屋を張って共に住まわれるであろう。彼らは、もはや飢えることがなく、かわくこともない。太陽も炎暑も、彼らを侵すことはない。み座の正面にいます小羊は彼らの牧者となって、いのちの水の泉に導いてくださるであろう。また神は、彼らの目から涙をことごとくぬぐいとってくださいるであろう」（黙示録七ノ一四―一七）。

わたしたちは、まだ見ていないこの光景を、つねに心にとめておく必要がある。こうすることによって永遠の事物と、時に関する問題に正しい価値判断ができ、他の人々を高い生活へ感化していく力が与えられる。

神と共に山において

「山に登り、わたしの所にき」なさいと、神はわたしたちに命じておられる。モーセがイスラエルを救い出す神の器となることができる前に、寂しい山中で四十年間、神と交わるように定められた。神の言葉をパロに伝える前に燃えるしばの中にいた天使と語った。また神の民の代表者として神の律法を受ける前に山に召され、神の栄光を見たのである。偶像礼拝者をさばくに先だち、神はモーセを岩の裂け目にかくし、「主の名をあなたの前にのべるであろう。」「あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まことの豊かなる…罰すべき者をば決してゆるさず」と言われた（出エジプト記三三ノ一九、三四ノ六）。モーセが重い責任を果し、生命を召される前、神はピスガの山上に彼を召して、りっぱな約束の地をその眼前に展開された。

弟子たちが伝道に出かける前にも、イエスと共に山に召された。またペンテコステの力と栄光を受ける前にも、一夜、救い主と交わっているものであり、ガリラヤの山における集り、オリブ山での別れ、天使の約束、そして二階座敷における幾日間にも及ぶ祈りと交わりがあった。

イエスは大きな試練や重要な働きの準備をされるとき、人の居ない山に登り、天の父に祈りをささげてその夜を過ごされた。使徒の按手、山上の垂訓、変貌、法廷と十字架の苦難、栄光の復活などの前には徹夜の祈りがなされたのである。

祈りの特権

わたしたちもまた瞑想と祈りと精神の回復のために時間を決めておかなければならない。わたしたちは祈りの力と効果を正當に判断してはいない。祈りと信仰はこの世のどんな力もできないことをする。わたしたちはあらゆる点で同じ事情に二度と立つことはめつたにない。過去の経験をどれほど持っていて、それがよい案内にはなってくれない新しい場面や試練を絶えず通過しなければならぬ。であるから、神から来る光をつねに受けていなければならぬ。

キリストの聲に耳を傾ける人にキリストはいつも言葉を送っておられる。ゲッセマネの苦難の夜、眠っていた弟子たちはイエスの聲が耳にはいらなかった。彼らは天使の存在をおぼろげに感じていたが、その光景の力や輝きを受け損じた。眠気に襲われ、ぼんやりしていたので眼前に起った恐ろしい事件に対して彼らの心を強めたと思われる証拠を受け損じたのである。そのように今日も神の教えを最も必要とする人間が天と交わらないため、それを受けることができずにいる。

わたしたちは日々誘惑にさらされているため、祈りが必要である。あらゆるところに危険が存在する。他人を罪悪と墮落から救済しようと努力している者は、とくに誘惑にさらされている。つねに罪惡に接しているため、自身墮落しないように神にしっかりとつかまっていなければならない。人間を高い、きよい所から低い所へ引きおろす道は短く、また決定的である。その人の状態を永久に定める決定が一瞬のうちになされることがある。一度敗

北することはその魂を無防御状態にし、断固たる抵抗がなされないなら、一つの悪習慣さえ鉄の鎖のように強くなつてその人全体をしばつてしまふ。

多くの人が誘惑の中に放置されているのは、エホバをつねに自分の前に置かないからである。わたしたちが神との交わりを断つときに、わたしたちの防御もなくなる。どんなに良い決心も意志も悪に抵抗する力とはならない。わたしたちは祈りの人でなければならないし、それが弱い祈りやときどきしか行わないようなきまぐれな祈りではなく、熱心で忍耐強い不断の祈りでなければならない。祈るのには、必ずしもひざまずかなくてもよいのである。ひとりて居るときも道を歩くときも、毎日の仕事に忙しいときも、救い主と語る習慣をつけなさい。助け、光、力、知識を求めて絶えず心を沈黙のうちに天に向けなさい。そして一つ一つの呼吸が、すべて祈りとなるべきである。

わたしたちは神の働き人として暗黒に囲まれ、悪に沈み、墮落に染まった人の立場に立つてその人の心に触れなければならない。しかしわたしたちの太陽であり、盾であるキリストをつねに心に思うならば、周囲の悪はわたしたちの衣に一つの汚点もつけない。滅びようとしている人を救うために働くとき、神に信頼するならば、恥を負うことはない。心にキリストを宿し、その生活の中にキリストが存在なさっていることがわたしたちにとって安全なわけである。キリストの臨在のふんいきがすべての悪を嫌悪する気持を心に満たし、わたしたちの精神はキリストの精神と同じようになり、考えや、計画することいっさいが、彼と一致するにいたる。

ヤコブが弱い、罪深い人間から神に勝つ人となったのは信仰と祈りによつたものである。わたしたちもまた、それによつて崇高な目的を持ち、りっぱな生涯を送り、どんなことがあるとも、真理、公正、正義から動かされな

い男女となることができる。だれでも緊急な心配、重荷、義務に追われているが、立場が困難であればあるだけ、責任が重ければ重いだけ、その人はイエスを必要とする。

公の礼拝を怠ることは重大な誤りである。聖なる集りの特権を軽視してはならない。病人を看護する者はこの特権が得られないことが多いが、不必要に礼拝堂に欠席しないように注意しなければならない。

他のどんな一般世俗の仕事よりも、病人の看護をするときの方が献身と自己犠牲の精神の有無が仕事の成功を左右する。責任がある人は、神の霊に深く感動させられる状態に自らをおく必要がある。その責任の地位が他人より重ければ重いだけ、聖霊の助けと神の知識を求める気持も熱心でなければならない。

わたしたちの働きにおいては、神との交わりの実際的結果よりもさらに必要なことはない。わたしたちは救い主による平安と安息を有していることを日常生活の上に表わさなければならない。心のうちにあるキリストの平安は顔に輝き出て、その言葉には人を信じさせる力を与えるものである。神との交わりは品性と生活を高尚にする。そして、初代の弟子たちのように、わたしたちもイエスと共に居ることを人々は認めるのである。それは他のどんなものも与えることができない力を働き人に与える。働き人はこの力を失ってはならない。

わたしたちは二重の生活をしなければならない。すなわち、思想と行動の生活、黙祷と熱心な働きの生活である。神と交わることによって得られる力が思慮深く、注意深くなるために頭脳を訓練する力と一つになるとき、その人は日常の義務が果せるようになり、どんなにつらくても、どんな境遇にあっても、心に平安を保つことができるのである。

天来の相談相手

困難にあうと多くの人は、だれかこの世の友人に訴え、自分の苦難を告げ、助けを求めなければならないかのよ
うに考える。つらい事情のもとにおかれると、不信仰が心に満ち、道が暗く見える。しかし彼らのそばには各時代
を通じて変らぬ、力強い相談相手がいつもおられて、信頼するように彼らを招かれている。大きな重荷のにない手
であるイエスは、「わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」と言われている。彼から離れてわ
たしたちは、自分たち同様に神にたよらねばならない不確実な人間にたよるべきであろうか。

仕事の大きさに比較して自分の品性の欠陥や能力の足りないことを感じるかもしれない。しかし、人間に与えら
れる最高の知識があつたとしても、わたしたちの仕事をするのに、十分ではない。「わたしから離れては、あなた
がたは何一つできないからである」と、救い主であるわれらの主は仰せられている（ヨハネ一五ノ五）。わたしたち
が行うすべての結果は神の手中にある。どんなことが生じても、ぐらつかないで忍耐強い信頼をもって彼につかま
っていなければならない。

仕事のとき、また余暇をみて人と交際をなすとき、あるいは、一生の縁組を決定するときには、熱心な、また謙
そんな祈りをもって交際を始める習慣をつけるがよい。それによってあなたは神を尊ぶことを示し、神もあなたを
尊ばれるのである。気持が弱ったときには祈りなさい。失望におちいったときは、かたく口を閉じて、人に語らず、
他人の道に暗影を投げてはならない。ただすべてをイエスに告げ、助けを求めて手をのびし、自分の弱さを知って

無限の力につかまるようになさい。神の光の中に光を見、その愛を楽しむため、謙そんと知恵と勇気を求め、信仰が増し加えられるように祈りなさい。

献身・信頼

わたしたちが謙そんになるときに、神がわたしたちに向かって、ご自分をおあらわしになることができ、また、おあらわしになる域にまで進むのである。過去に、あわれみと祝福を賜ったから、今度は、もっと大きい祝福を与えたまえと祈るとき、神は非常にお喜びになる。神に全く信頼する人の期待は十二分に報いられるのである。主イエスは彼の子が何を必要とし、人類祝福のためにどれだけ神の力を用いるかを知っておられ、わたしたちが他人を祝福し、自分自身の魂を向上させるために用いるものは、すべてお授けになるのである。

わたしたちは自分でできることに對する信頼を少なくし、わたしたちのために、また、わたしたちを通して、神のなさりうることに對する信頼をもっと深くしなければならぬ。あなたは自分の働きに携わっているのではなく、神の働きをしているのである。であるから、あますところなく自分の意志も手段も神にゆだね、少しも自分と妥協せず、キリストにある自由を味わい知るべきである。

聖書の真理を個人的な体験としなければ、安息日ごとに説教をきき、聖書を幾度も通読し、あるいはその一節一節を説明しても、それはわたしたちの益とならないばかりか、きく人にも益とはならない。理解力も意志も愛情も神のみ言葉の支配に服従させなければならぬ。そうするとき、聖霊が働いて、神のみ言葉の教えるところが生活

の原則となるのである。

主に助けを願うとき、その祝福を必ず受けると信じて救い主をあがめなさい。そのとき、あらゆる力、知恵はわたしたちの求めに応じて自由に与えられるのである。わたしたちはただ求めればよい。

たえず神の光の中を歩みなさい。昼夜をとわず、神の品性に思いをはせなさい。そのとき、神の美を見、その恵みを喜ぶ者となる。心は神の愛を感じて燃えあがり、ちょうど永遠の腕でささえられたかのように高くあげられ、神の与えられる力と光によって、いつそう理解を増し、今まで考えていた以上のことができるようになる。

わたしにつながっていないさい

キリストはわたしたちにこうお命じになっている。「わたしにつながっていないさい。そうすれば、わたしはあなたとつながっていないよう。枝がぶどうの木につながっていないければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながっていないければ実を結ぶことができない。…もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである。…あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたにとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。あなたがたが実を豊かに結び、そしてわたしの弟子となるならば、それによって、わたしの父は栄光をお受けになるであろう。」

「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛したのである。わたしの愛のうちにいなさい…。」

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである。そしてあなたがたを立てた。それは、あなたがたが行って実をむすび、その実がいつまでも残るためである。また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えてくださるためである」(ヨハネ一五ノ四―一六)。

「見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしはその中にはいつて彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう」(黙示録三ノ二〇)。

「勝利を得る者には、かくされているマナを与えよう。また白い石を与えよう。この石の上には、これを受ける者のほかだれも知らない新しい名が書いてある」(同二ノ一七)。

「勝利を得る者…には、…わたしはまた、彼に明けの明星を与える」(同二ノ二六―二八)。「そして彼の上に、わたしの神のみ名と、わたしの神の都…の名と、わたしの新しい名とを書きつけよう」(同三ノ一二)。

ただこの一事を務めている

神に信頼をおく人はパウロと共に「わたしを強くしてくださる方によって、何事でもすることができると言うことができる。過去にどんな過失や失敗があろうと、神の助けによってこれに勝利することを得、使徒と共に次のように言えるのである。「ただこの一事を務めている。すなわち、後のものを忘れ、前のものに向かってからだを伸ばしつつ、目標を目ざして走り、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の賞与を得ようと努めているのである」(エペソ三ノ一三、一四)。

ミニストーリー・オブ・ヒーリング

一九五七年十月一日 初版発行

著者 イー・ジー・ホワイト

横浜市保土ヶ谷区上川井町一九六六
発行人 国谷和義

横浜市保土ヶ谷区上川井町一九六六
印刷者 加藤武夫

横浜市保土ヶ谷区上川井町一九六六
印刷所 福音社

版權所有
転載複製を禁ず

横浜市保土ヶ谷区上川井町一九六六
発行所 福音社

振替口座横浜五九九番
電話川井局三九番ノ甲

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします

PRINTED IN JAPAN